

少女異世界旅行

破壊神クルル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

終末世界でふたりぼっちになってしまったチトとユーリは、愛車のケツテンクラートに乗って延々と広がる廃墟をあてもなくさまよう。しかし、その最中、愛車のケツテンクラートは壊れ、食糧は減り続け、死と絶望の色が濃くなってきた。

そんな時、一枚の扉が二人の目の前に現れる。

扉を潜るとそこは異世界の食堂：異世界食堂だった。

ありそうでなかったクロスなので、思い切って書いてみました。

目次

前編	1	腹ペコ王の異世界見聞 後編	235
後編	1	二つの異世界飲食店	273
ちーちゃんの日記	59	賢狼が求めし黄金の果実	304
少女異世界旅行 ユーリの助っ人活動	83	わたしたちののんのんな夏休み	340
ご注文は異世界少女ですか? 前編	118	わたしたちののんのんな夏休み	2
ご注文は異世界少女ですか? 中編	145	わたしたちののんのんな夏休み	369
ご注文は異世界少女ですか? 後編	176	わたしたちののんのんな夏休み	398
腹ペコ王の異世界見聞 前編	210	肉まんおぼけとの遭遇	434
			463
			488

前編

くちトSide)

繁栄と栄華を極めた人間達の文明が崩壊してから長い年月が過ぎた。

生き物のほとんどが死に絶え、全てが終わってしまった世界。

残されたのは廃墟となった巨大都市と朽ち果てた機械だけ……。

いつ世界は終わってしまったのか？

なぜ世界は終わってしまったのか？

そんなことを疑問にさえ思わなくなった私達は、雪が降りしきる終わりの世界を——
延々と続く廃墟の中をあてもなく今日もただ彷徨う。

空に近い上層部の街を目指して……

此処まで私達を運んでくれたケツテンクラートはもう無い。

私達は必要最低限の荷物だけを持って上を目指して歩いている。

此処まで一緒に旅をして来たユーも銃を捨てた。

最近は何も眠ってもまったく夢を見ない。

多分身体が疲れ果てて夢を見る暇さえもないのだろう。

一日中歩いて疲れているからすぐ眠り、次の瞬間、寒さで目が覚める毎日をここ最近
は送っている。

意識が無い間、私達は本当に生きているんだろうか？

一瞬、死んだりしているんじゃないだろうか？

そんな事を考えると、生と死の境がぼんやりして行くようで……

少し怖い……

車両も銃も既になく、遂には此処まで大事にしていた本も今は私達の暖を取る為の燃
料になっている。

そして、これまで私が書いてきた日記も……

今の私達に必要なのは本の中身よりもそれを燃やして温めたお湯。

そして寒さを少しでも和らげてくれる火だ。

多分、私は忘れるのが怖かったのだろう。

まるで夢の無い深い眠りみたい……

自分の記憶にぼっかり穴が開いてしまうのが……

だけ大丈夫……

毎日ちゃんと目は覚めるから……

私達はまだ生きている……

でも、それはあとどれくらいだろうか？

燃やす為の本も食べ物も残り少ない。

本と食べ物 that 尽きる前に上層へ辿り着けるだろうか？

例え上層に辿り着いたとしてもそこに食べ物はあるだろうか？

そんな不安が常につき纏うが私は決してそれを口にしない。

したら、ユーも不安がるだろうし、私自身、理性が持つか分からないからだ。

下層を旅した時、数多くの建物や壊れたり止まった機械を見てきた。

それを見る限り沢山の人が居た形跡があった。

でも、その数多くいた人達はどこかへと消えた。

その人達は今は上層にいるのだろうか？

でも、居るとしたらどうして下層に人が残っているのかを確かめないのだろうか？

助けに来ない、確かめに来ないという事は上層でも人は……

ヌコは、

『この都市での活動は殆ど終えた。やがて都市はゆっくりと停止していくだろう』

と言っていた。

つまり、下層の都市は既にその役割を終え、死のうとしている。

そして、ユーはヌコに下層の都市にはもう人が居ないかと言う質問をした。

その質問に対してヌコは、

『最上層以外の殆どの場所を観測しているが、現在生きている人間は君達二人しか知らない』

と、言っていた。

私達二人だけ……

と言う事は、カナザワもイシイも私達と別れた後……

いずれは私達も……

魚を育てていたあの機械も何時かは『死ぬ』と言っていた……

いつか終わりが来るのは分かっている。

もし、上層に人がおらず、この地球で生きている人間が私達だけだったら……

死を迎える時、あの墓地で自分が生きていた証を残せた人と違って私達は生きた証を

残せるだろうか？

私達が生きてきた証である日記帳は私達を生かす為の燃料になっている……

でも、それもこれが最後だ。

「どう？最後の日記を燃やして飲むコーヒーの味は？」

「おこしこよ」

「……」

私は火の中で燃えている日記帳だったものをジッと見る。

「きつと大丈夫だよ。ちーちゃんは記憶力がいいから」

「そうだね」

私達が生きていた事を証明する証はこうして火の中へと消えた。

もう、私達が生きていた事を証明するものは何も無い……。

私達は誰にも知られずただ寂しく死んでいくしかないのだろうか？

この日は螺旋階段のある建物の中で過ごした。

建物の中と言う事で少しは寒さを凌げる為、外よりはマシだった。

「ん？」

その時、ユーが何かを見つけたのか、急に立ち上がり床に落ちている何かを拾った。

「ねえ、ちーちゃん。見てみて!!」

「なんだ？」

「これ、キラキラ光る何かを見つけた」

ユーの手には金色で円形の金属質のモノがあった。

「それは多分、金貨だ」

「きんか？」

「そう：昔の人はそれを引き換えに食べ物や生きていく中で必要な物を交換していたっ

て本に書いてあった」

「ふうん……これが食べ物にねえ……」

ユーは金貨を見ながら呟く。

「……尤も今となつちや、何の価値もないゴミ同然だよ」

「でも、何か綺麗じゃない？丸くてキラキラしてまるで月みたいだよ」

ランタンの光を浴びてキラキラと輝く金貨を見つめるユー。

「ユー……もう、寝よう」

いつまでも起きていて無駄に体力を消耗するわけにはいかない。

私はユーに寝るように促し、寝袋を広げて横になる。

ユーも駆け寄って来て寝袋の中に飛び込む。

横になっていると、普段ならすぐに眠ってしまう筈なのに、今日に限って中々寝付けない。

「ねえ、ちーちゃんは死ぬのは怖い……？」

ユーが突然そんな質問をしてきた。

私の答えは勿論、

「……怖いよ」

「私も」

「……」

ランタンの燃料があとどれくらい持つかわからないから明かりは消している。

火もなく、建物の中と言う事で寒さは凌げるけど、電気が通っていないから辺りは真つ暗闇……

そんな時、死について語るなよ……縁起でもない……

でも、こんな状況だからこそ、そう思ってしまうのかもしれない。

普段は能天気で食べ物にしか興味が無いユーもヒタヒタと自分達に近づいている『死』を薄々予感しているのかもしれない。

「……私……暗い所って苦手……」

またユーが突然口を開いた。

「そんなの初めて聞いたぞ」

前にユーが「この穴に入ってみよう」と言って何日も暗い工場のような所を彷徨ったことがある。

暗いのは苦手ならば何故、入ろうと言ったのだろうか？

でも、その時も、魚を育てている機械と出会った工場の時もユーは「くらい、くらい」と言って必死にそれを誤魔化そうとしていた……そしてランタンを点けようとしていた……あの時は「うるせえ」と言って黙らせたが、ユーにそんな弱点があったなんて知ら

なかった。

もし、知っていたら、もう少し違う態度を取っていただろうか？

いや、無理だな。

そう言えば、寺院に居た時もユーの声は少し震えていたような気がする。

「あれ？言っていないかったっけ？」

「ああ」

「ずつと、昔……どこか暗くて狭い場所に一人でいて……それがすごく怖かった気がする」

「昔？」

「ずーっと昔……まだ生まれてすぐの頃……いや、生まれる前かも……」

「……そんな昔の事覚えていないだろう？」

「覚えていないよ……気がするだけ」

「ふうん……」

「ねえ、ちーちゃん」

「なんだ？」

「今日は手繋いで寝よう」

「……しようがないな」

私はユーの手を握る。

光もなく、どこまでも続く暗闇の世界……

暗闇から来て暗闇へと還つて逝く……

これが生きるということなんだろうか？

握っているユーの手が時々震えるのが分かる。

少し強めに握り返すと、また握り返してくる。

大丈夫……私達はまだ生きている。

生きているから……

私は：いや、私達は明日の朝も再び目を覚ます事が出来るようにと祈りながら瞼を閉じた……

二人が眠りにつき、それから一体何時間が経つただろうか？

建物の中は窓が一切無い為、外が朝なのかまだ夜なのか判断がつかない中、何処からともなくいい匂いがしてきた。

その匂いはユーリの鼻腔を優しく刺激する。

「ん〜？」

匂いに釣られてユーリは身体をよじりながら起き上がる。

「ちーちゃん、ちーちゃん、起きて!!起きて!!ちーちゃん!!」

隣で眠っていたチトの身体を揺すって起こす。

「なんだよ?ユー」

チトは目を擦りながら、起きる。

そして、心の中で目を覚ます事が出来た事を喜んでいた。

(良かった…今日も無事に目を覚ます事が出来た…)

(それにユーも生きていた…)

それと同時に相方が生きている事にもホッとしていた。

「ねえ、ちーちゃん。何かいい匂いがしない?」

「匂い?」

「うん」

ユーリに促されてチトは鼻をひくひくさせて辺りの匂いを嗅ぐ。

すると確かにユーリの言うように何かいい匂いがする。

チトが辺りを確かめる為にランタンを点けると、そこには昨日、寝る前まではなかった扉が出現していた。

「あれ?あんな扉あったっけ?」

「いや、無かつたと思う……」

二人はランタンの明かりを頼りに扉へと近づいた。

扉には二人が見た事のない奇妙な生き物を模した看板と、これまた二人には見慣れない文字が書かれていた。

「ちーちゃん、これなんて書いてあるの?」

ユーリがチトに扉に書かれている文字について尋ねる。

「な、なんだろう?」

これまで沢山の本を読んできたチトにも扉に書かれている文字が分からない。

「……入ってみようか?」

ユーリは扉を開けてみようかと言う。

「危険じゃないか? 何があるか分からないんだぞ」

既に身を守るための銃は捨てている。

扉の向こう側にはどんなモノがあるのか分からない。

「でも、この扉からいい匂いがするし、もしかしたら食べ物があるかもよ」

「で、でも……」

ユーリは扉の向こう側へ行く気満々であるが、チトは決断をなかなか下せない。

確かにユーリの言うようにこの扉からいい匂いがしており、この扉の向こう側には食

べ物があるかもしれない。

それでも危険が無いとは言い切れない。

ここ最近の状況で死について考えるあまりに慎重・と言うより臆病になっているチト。

「いいから行くよ」

「ちよつ、ユー!!」

ユーリはチトの手を握り、もう片方の手で扉のノブに手をやり、扉を開ける。

すると、扉についていたベルがチリン、チリンと鳴る。

それに合わせ「いらつしやいませ!」と叫ぶ元気な声。

目の前の空間にユーリとチトは啞然とした。

扉の向こう側は温かく、そして電気が通っており明るい。

そして、二人の目の前には山羊の様な角を頭に生やした少女と黒髪で耳の長い少女が居た。

(いらつしやいませ)

「っ!?!」

突如、二人の頭の中に声がした。

その声を聞いてびっくりしながら二人は辺りを見回す。

やがて、奥の方から、

「らっしやい」

と白い服に白い帽子を被った男の人が出てきた。

(カナザワと同じ男の人……)

(又コはもう、この都市には私達以外の人間は居ないって言っていたけど、まだ人が居たんだ……)

二人は白い服を着た男の人をジッと見つめる。

「えっと……」

男の人は何だか気まずそうな感じだ。

「すみません……あの……ここは……一体何なんですか？」

チトが恐る恐る男の人に此処が何なのかを尋ねる。

「ここは『ねこや』っていう洋食……いや、料理屋ですよ」

すると、チトの質問に男の人は此処がどんな場所なのかを教える。

「料理!?!」

料理と言う言葉に反応したのはユーリだった。

「料理ってことは食べ物を食べられるの!?!」

ユーリは男の人に詰め寄るかのように近寄って顔を近づけて質問する。

「あ、ああ……お客さんそう言えば初めて見るけど、何処から来たんだ？」

「私達は……」

チトは男の人に自分達がどんな世界から来たのかを話した。

「世界が終わった世界……」

「そんな世界があるなんてな……でも、同じ地球って……あついや、でも、今日、この日にこの扉から来たって事は……」

山羊の角を生やした少女は信じられないと言う様子で男の人は何かブツブツと呟いている。

黒髪に長い耳の少女はジツと様子を窺っている。

でも、何か思う事があるのか、複雑そうな顔をしていた。

「お嬢ちゃん、この店も地球にあるんだ」

「えっ？」

「地球に？」

「ああ：地球の日本って国にあるんだが……」

「にほん？」

「そんな名前の国聞いたことが……あつ、でも海の向こう側の国かも……」

「でも、それ以前にここは、異世界食堂だ」

「いせかいしよくどう?」

「ああ、ここは七日に一度、不特定に空間にひずみが生じ、異世界と繋がるといふ不思議な店なんだ。だから、この世界の地球とお嬢ちゃん達の世界の地球とはきつと別物の地球なんだろうな」

「そんな事が……」

チトには目の前の現実が信じられなかったが、

ぐうく

今はこの空腹を満たしたかった。

「ねえ、食べ物があるなら私達も食べていいの?」

ユーリはすつかり、この変な状況なんて関係なく、今すぐ食べ物を食べたい様子だ。

「ああ、いいぞ」

「わーい!! やった!!」

「ちよつ、ユー!!」

「なにさ、ちーちゃん」

「お前、何を言っているんだよ? こんな訳も分からない所で……それに、食べ物を食べるにしたつて、多分、何かと交換しないといけないんだぞ」

今までは人のいない所で食べ物や生きていくのに必要な物を調達してきたが、こうし

て人と人とのやり取りの場合、等価交換が原則である。

しかし、今の自分達に交換できるようなものは何も無い。

すると、ユーリは、

「ああ、それなら〜」

ゴソゴソとコートのポケットの中を探ると、昨夜見つけた金貨を取り出す。

「ねえ、これと食べ物と交換できる?」

ユーリは男の人に金貨を見せて、食べ物と交換できるかを問う。

「ああ、大丈夫だ」

男の人はユーリの金貨と食べ物を交換できると言う。

「ほら、ちーちゃん。交換できるって、折角だから食べて行こうよ」

「お前なあ〜」

ユーリの言動に呆れつつもチトは心の中ではユーリに感謝していた。

「では、お席の方に〜案内いたします」

山羊の角を持つ少女がユーリとチトの二人を席に案内する。

二人はリュックを下ろし、頭にかぶっていたヘルメット、コート、手袋を脱いで席に

着く。

「メニューですけど、お客さん…東大陸語はわかりますか?」

「ひがしたいりく？」

山羊の角を持つ少女が言う『東大陸語』と言う言葉に首を傾げる二人。

「あつ、マスターと同じ地球の出身でしたら、普段のメニューの方が良いですか？」

「あつ、うん」

「分かりました」

そして山羊の角を持つ少女は平日、ねこ屋が使用しているメニューとお水、おしぼりを持って二人の下へとやって来て、

「ご注文が決まりましたら、お声かけください」

そう言つてテーブルから離れる。

「ねえ、ちーちゃん」

「なんだ？」

「あの人、なんで頭にあんなものを着けているんだらう？」

ユーリはあの山羊の角が気になっている様子。

「さあ：趣味：じゃないか？」

「ふうん：じゃあ、あの人：なんか耳が尖っていない？」

次にユーリは黒髪の少女の耳が普通の人と違っている事を指摘する。

「お前だつて金色の髪に青い目をしているじゃないか：そう言う生まれをしたんだろ

う」

「そっか……」

何かうやむやにされた様な感じであるが、一応納得した様子のユーリ。すると、また扉が開き、ベルがチリン、チリンと鳴る。

新しいお客が来た様だ。

「かつ丼大盛り!!」

「……」

入ってきたのはどう見ても人間ではなかった。

「ちーちゃん、あの人なんなの?」

「わ、分からない……顔を見ると、ライオンって動物に似ているけど……」

すると、また扉が開き、ベルがチリン、チリンと鳴る。

入ってきたのは、

「オムライスオオモリ、オムレツサンコモチカエリ」

「……」

またもや人には見えないお客が入ってきた。

「ちーちゃん。アレは?」

「……トカゲ?」

三度目に扉が開くと、人の姿には見えるのだが大きさが物凄く小さく、背中に虫の羽根を生やした人達が入ってきた。

「ちーちゃん、アレはなに？」

「以前、本で見た妖精って種族に見えるけど……」

そして、四度目に入ってきた客は、

「こんにちは」

人の姿に似ているのだが、背中には白い鳥の様な翼があり足はそのまま鳥の様な足をした男女が入ってきた。

「ちーちゃん、アレは？」

「な、なんだろう？背中に翼があるって事は天使？でも、頭の上に輪っかがないし、足の形が少し変だし……」

五度目に入ってきた二人の男の人はこれまでの客と違いちゃんと人の姿をしており、長いひげを生やしていたのだが、自分らとあまり変わらない身長の男達だった。

「……なんか、あの人達少し背が小さくない？」

「あまり人の身長について触れてやるな、本人は物凄く気にしているかもしれないだろう」

チトはユーリに男達の身長には触れてやるなど注意した。

だが、これまで入ってきたお客はチトがこれまで本で知り得てきた知識には計り知れないお客ばかりだ。

そんなお客たちを恐れる事無く、接客している山羊の角を持つ少女と黒い髪の少女。そして、そんなお客たちが注文する料理を作る男の人。

男の人が作る料理はどれも見た事の無い料理だが、見た目は物凄く美味しそうで、しかもいい匂いがする。

料理を食べている人達は皆笑顔で活力が満ちている。

扉から匂ってきた良い匂いはこの男の人が作った料理なのだと思つたチト。

「ちーちゃん、私は今、お腹が滅茶苦茶空いた……私達も何か頼もうよ」

「そうだな」

周りのお客に唾然としたが、それも慣れてくると二人は今まで忘れていた空腹が押し寄せてきたので、自分達も料理を食べることにした。

しかし、いぎメニュー表を見ると、

「ちーちゃん・なんて書いてあるか分かる?」

「……わ、分からん」

メニューに書いてある文字が読めなかった。

チトがメニュー表とにらめっこしていると、

「お待たせしました。ビール大ジョッキとシーフードフライです」

山羊の角を持つ少女が身長の小さな男達に金色の泡立つ飲み物が入ったガラスのコップと料理が乗ったお皿をテーブルに置く。

「ちーちゃん、アレ見て、アレ」

「ん？アレは……」

「ねえ、アレ、『びう』じゃない？」

「この世界にもあったんだ……」

何度か飲んだ事のあるシユワシユワの金色の水……びう……それが、この扉の向こう側である異世界食堂にも存在していた。

「すみませーん」

ユーリが山羊の角を持つ少女に声をかける。

「はい。ご注文は決まりましたか？」

「あの、びうをください」

ユーリは小柄な男達が飲んでいる大ジョッキを指さしながら早速、びう（ビール）を注文する。

すると、山羊の角を持つ少女は気まずそうな顔をして、

「あの……すみませんが、お客様は二十歳を過ぎていますか？」

山羊の角を持つ少女・アレツタはこの異世界食堂で働く前の研修で店の店主からビールなどのお酒を出すのは二十歳を過ぎているお客様だけと言われていた。

その為、見た目が二十歳未満っぽい姿のお客様がお酒を注文した場合、念の為年齢を聞くように言われていた。

「はたち?」

アレツタの言う『二十歳』の意味が分からず首を傾げるユーリ。

「ああ、二十歳って言うのは、生まれてから二十年経ったかという意味なんですけど……」

「ちーちゃん、私達って生まれてから二十年経った?」

「いや、多分経っていないだろう」

ユーリがチトに自分らが二十歳なのかを尋ねると、チトはまだ二十歳未満だと言う。

「あの…二十歳未満のお客様にはお酒を提供できない決まりになっておりまして……」

アレツタは申し訳なきように二人にびう（ビール）は提供できないと言う。

「ええっー!!そんなあくあのシユワシユワが目目の前にあるのに飲めないなんてえ〜」

ユーリはびう（ビール）が飲めない事に物凄く残念がっている。

「諦めろ、ユー。規則なら仕方がないだろう」

「規則とは破る為にあるんじゃないのか?」

「あまり店の人に迷惑をかけるな」

「あの：シユワシユワのある飲み物でしたら、ビール以外にもありますから、代わりにそちらはいかがでしょうか？」

アレツタは、ビールは出せない代わりに炭酸飲料を二人に勧める。

「他にもシユワシユワの飲み物があるの!？」

ユーリはびう（ビール）の他にシユワシユワな飲み物が飲めると言う事でさっきのがっかりから一転し、目を輝かせている。

「はい。えっと……」

アレツタはメニューのページをめくり、ソフトドリンクのページを開き、

「このページにあるクリームソーダ、コーラフロート、レモンスカッシュがお客様の言うシユワシユワのある飲み物です」

「おおーちーちゃん、見てみて、緑色の水に茶色い水、少し白い水だよ」

「そうだな」

「ねえ、ちーちゃんはどれを飲む？」

ユーリはチトにソフトドリンクのページを見せ、彼女にどのジュースを飲むかを尋ねる。

「……」

ユーリに訊ねられ、チトはチラツとページを見る。

(緑色の水と白い水は何か、洗剤を思わせる色だな……茶色い水はコーヒーマイだけど……それに一番上に乗っかっている白いヤツ……これは雪かな?)

緑色の水と茶色い水の一歩には白い雪の様なモノが乗っかっている。

多分、飲み物を冷やす為に乗せているのだろうと判断するチト。

「じゃあ、このコーラフロートってヤツを……」

「私はこのクリームソーダ」

「はい。その他にご注文はありませんか?」

アレツタが追加の注文を尋ねる。

すると、

「ああ、そうだ。私達、此処に書かれている言葉が分からなくて……」

「えっ?……この文字が……ですか?」

チトとユーリは店主と同じ地球人なので、普段地球で出しているメニューは読めるモノだと思っていたが、意外にも二人は地球の文字で書かれているメニューが読めないと言おう。

その為、アレツタは少し困惑する。

「うん。だから、どんな料理があるのか説明してくれる?」

ユーリはアレッタにこの店にはどんな料理があるのか口で説明してくれと言う。

「は、はい。では、お客様は何か食べたい食材はありますか？」

アレッタはまず、肉、魚、野菜の料理でどんな食材を使用した料理を食べたいかを尋ねる。

「魚!!」

ユーリは即答で魚料理を食べたいと言う。

「魚料理ですと、おすすめはあちらのお客様が食べているシーフードフライか……」

アレッタは小柄な男達・ドアーフ達が食べているシーフードフライか

「あちらのお客様が食べているカルパッチョがおすすめです」

背中に翼を生やしている男女・セイレーンが食べているカルパッチョを勧める。

「ふらい? かるぱちよ?」

聞いた事の無い料理の名前に首を傾げるユーリ。

アレッタがユーリにフライとカルパッチョについてどんな料理なのかを説明する。

これまで聞いた事の無い料理の内容を聞くだけでユーリの口の中には涎が溜まる。

元々食べ物に対する執着が強いユーリが頼んだのは、

「じゃあ、両方」

ユーリはシーフードフライとカルパッチョの二つを注文した。

「ちーちゃんは？」

ユーリは一先ず注文を終えたので、次にチトに何を食べたいかを尋ねる。

「私か？ 私は……」

チトは読めないながらもメニューと再びにらめっこをしていると、ふと、これまでの旅の中で気になった食べ物の名前が出てきた。

「あの……」

「はい」

「チーズを使った料理はありますか？」

「チーズですか？」

「うん：それとチョコレート」

「チョコレートですと、こちらのチョコレートパフェか」

アレッタはデザートページのページに載っているチョコレートパフェと

「あちらのお客様が食べているチョコバナナクレープがおすすすめです」

妖精たちが食べているチョコバナナクレープを勧める。

「どちらもデザートなので、お食事後に食べた方が美味しくいただけますよ」

「わかった。じゃあ、まずはチーズを使った料理を……」

「チーズを使ったお料理ですと：こちらのチーズチキンカツがおすすすめです」

「チーズ・チキン・カツ……じゃあ、それで……」

本で得た知識でもチーズチキンカツと言う料理をチトは知らなかった。

チーズチキンカツ：一体どんな料理なのだろうか？

それに今まで気になったチーズをレーションではない料理として食べる事が出来る。

それにその後はもう一つ気になった食べ物：チョコレートも食べられる。

先程見たチョコバナナクレープも美味しそうだったが、チョコレートパフェも絵で見
る限り美味しそうだった。

「お客様は、鶏肉は大丈夫ですか？」

アレツタはチトに鶏肉は食べても大丈夫かと尋ねる。

種族や宗教によって同じ肉でも食べていいモノと食べてはいけないモノがある。

「とりにく〜？」

魚でも芋でもレーションでもない食べ物：肉……

これまでの旅の中で、食べられるものはすべて食べてきた。

そんな生活をして来た自分に食べられない食べ物なんてない。

「大丈夫」

チトはアレツタに鶏肉を食べても大丈夫だと言う。

「分かりました。では、ご注文を確認させていただきますね。クリームソーダ、コーラフ

ロート、シーフードフライにカルパッチョ、チーズチキンカツですね？」

「うん。チヨコレートのデザートは食べ終わった後にまた頼む」

「はい。分かりました。付け合わせはパンとライスがございしますが、どちらになさいますか？」

チトとユーリにとってパンは聞き慣れて尚且つ以前に食べた事のある食べ物であったが、ライスは：お米は未知の食べ物だった。

注文した料理も二人にとっては未知の料理であったが、二人は無難にパンを選んだ。

注文を聞いたアレツタは厨房の奥へと姿を消し、

「マスター、オーダーです。クリームソーダ、コーラフロート、シーフードフライにカルパッチョ、チーズチキンカツを一人前ずつ」

店の店主にオーダーを伝える。

「あいよ」

アレツタからオーダーを聞いた店主は早速注文の品の料理を作り始めた。

チトとユーリは胸を躍らせながら注文した料理が来るのを待った。

後編

くクロSide)

私が異世界の日本にあると言うこの異世界食堂で七日に一度の割合で働いていると、チリン、チリン

何時ものように扉のベルが鳴り、来客を知らせる。

でも、今日この日、異世界食堂に一番に来たお客さんの姿を見て私は驚いた。

今日の最初のお客さんは今まで見た事の無いお客さん：新しいお客さんだった。

新しいお客さんは二人：緑の長い服に鉄で出来た帽子を被ったアレツタと同じ位の年頃の人間のお客さんだった。

この扉はいろんな世界のいろんな場所に突然現れる。

私の時もそうだった。

きつとまた何処かの世界に新しい扉が現れたのだろう。

それ自体に驚くことはない。

私が驚いたのはこの二人のお客さんが今まで来たどのお客さんよりも『死』に近い存在だったからだ。

この異世界食堂に来るお客さんは大抵空腹状態でやって来て、店主の料理を食べ、生きる力と空腹を満たして帰って行く。

でも、このお客さんが纏っている気配は尋常ではない。

極度の空腹：：孤独：：絶望：：不安：：そして、確実に『死』に近づいている臭い
：：：

それがあまりにも強い。

此処で働いてもう100日以上経っているが、こんなお客さんは初めてだ。

三万年前、共に戦い、この異世界食堂の常連であり、異世界さえも自らの縄張りにしてしまう実力者である『赤』は地上の生命も少なからず成長し、店主の作る食事で生命力がみなぎっているから、私から漏れる『死』の気配ぐらいではそう簡単には死なないと言っていた。

確かに私が地上から月へと渡り住んでから長い時間：長い年月が経った。

その間に地上の生き物達は『赤』の言うように、私の知らない間に強くなった。
でも、この二人は例外だ。

店主の作った食事を食べれば、生命力が戻るかもしれないが、それまではあまりこの二人には近づかないようにしなければ：：

でない：：でない、私から漏れる『死』の気配で死んでしまうかもしれないから

...

(アレツタ……)

私は仕事の同僚であるアレツタに声をかける。

「はい？何ですか？クロさん」

(あの二人の接客を任せてもいい？他のお客さんのオーダーは私がやるから)

「はあくいいですけど……」

アレツタは首を傾げながらも了承してくれた。

良かった…。

『赤』に言われ、この店を守護する様に言われた私が店に来た無害なお客さんを殺すわけにはいかないから……

私はチラツとあの二人のお客さんの様子を覗いながら、今日も七日に一度のチキンカレーの為、人間の言う仕事と言うモノに勤しんだ。

チトとユーリがアレツタに注文をしてから少しして、

「お待たせしました。ご注文のクリームソーダとコーラフロートです」

まず、最初にクリームソーダとコーラフロートが届いた。

「おおおー」

「……」

ガラスの器の中に満たされている緑色の水と茶色い水。

その一番上には雪の様な白いモノが乗っかっている。

びうと違い、色と雲の様な泡がたつていないが、それ以外はガラスの器の中にはびうと同じく下から上に向かって小さな泡が昇っている。

当初は上に乗っかっている白いモノがこの飲み物を冷やす役割があるのかと思つたが、ガラスの器を手についた瞬間、このガラスの器は既に冷たかつた。

では、この上に乗っかっている白いモノは何のために乗っかっているのだろうか？

このガラスの器に入っているという事はこの白いモノも食べられる筈。

チトとユーリはガラスの器と共にアレッタが持つて来た長いスプーンを使い、上に乗っている白いモノを一掬いして口へと運ぶ。

「冷たっ!!」

「うん……」

白いモノはその見た目同様、雪の様に冷たかつた。

でも……

「ん？でも、何か甘いね」

「うん・甘い……」

何の味もしない雪とは違い、この白いモノは冷たいが甘かった。

「この雪みたいなのは雪と同じ白くて冷たいのにどうして甘いんだろう？」

「さあ……？」

「……雪に砂糖をかけて食べたならコレと同じ味になるかな？」

「いや、無理だろう」

ユーリの疑問をチトはあっさりと否定する。

確かに色と冷たいと言う点ではこの白いモノと雪は同じだが、以前イシイに教えてもらった食糧生産施設で舐めた砂糖とこの白いモノの甘さは別モノだった。

だから、ユーリの言うように雪に砂糖をかけてもこの白いモノと同じ味になるとは思えなかった。

その後、二人は無言のまま白く冷たいモノ：アイスクリームを食べる。

上に乗っているアイスを粗方食べた後、ユーリはソーダを・チトはコーラを口にす
る。

口に広がるのはびうと同じシユワシユワとする爽快感。

ソレと共にびうとは異なる刺激的な甘み。

「おおおーこれは間違いなくシユワシユワだ」

ソーダを一口飲んだユーリはその感想を述べる。

「うん・たしかにシユワシユワだ・・でも、こっちはびうと違って甘い味がする」

びうは苦みがあるシユワシユワであるが、クリームソーダ、コーラフロートは甘みのあるシユワシユワ。

二人にとってこれも初めての経験であったが、決して飲めないモノではなく、むしろ今まで甘い物と無縁だった二人にとっては好感が持てる甘さだった。

「そうだね。でも、これはこれで美味しいね」

「・・そうだな」

「むう〜」

すると、ユーリはガラスの器の中のクリームソーダをジツと見つめる。

「どうした?」

「この白いヤツとこの緑色の水のシユワシユワの水・一緒に飲んだらどんな味がするだろうか?」

ユーリはアイスクリームをスプーンに一匙掬い、そこにソーダを浸して口へと運ぶ。

アイスクリームを冷たい甘さとソーダの刺激的な甘さがミックスされ、一つの調和を生み出す。

「おおおー!!中々刺激的な味・・ちーちゃんもやってみなよ」

「いや、別にそんな理屈っぽい食べ方をしなくてもこのままでも十分に美味しいだろう？」

「もう、ちーちゃんはロマンがないなあ〜美味しいものを食べてこそその人生だよ」

「うるさい」

チトは不貞腐れるような感じでコーラフロートを飲み干した。

二人がフロートなる飲み物を飲み干した時、

「お待たせしました。マグロのカルパッチョです。此方は付け合わせのパンとスープです。残りのご注文の品も出来次第お持ちいたします。パンとスープはおかわり自由ですので、お申し付けください」

ユーリが頼んだカルパッチョなる料理と付け合わせのパンとスープが運ばれて来た。

お皿の上には赤い長方形のモノが置かれており、自分の知る魚の姿ではなく、どちらかと言うとレーションを赤くして潰した感じだ。

その上に白い三日月の様なモノが乗っかっている。

アレッタの話ではこれは生魚を切った料理らしい。

「これが魚……」

「生で食べると聞いていたが……」

初めて生魚の切り身を見た二人はジッと観察するかのようにカルパッチョを見る。

「と、とにかく食べてみよう」

パンとスープも気になったが、ユーリとチノはまずこの見慣れないカルパッチョなる未知の料理の方が気になった。

ユーリがフォークを使い、魚の切り身を突き刺して持ち上げる。

「むう……」

「……」

最初に食べた魚は死んでいたので焼いて食べた。

その次に見た魚は生きていたが、食べる事は出来なかった。

その後、魚を食べる機会があったが、全て缶詰として調理加工されていたものばかりで、ユーリが生魚を食べるのはこれが初めてであった。

「あーむ……もぐもぐもぐ……」

「どうっ？」

チトは心配そうにユーリにカルパッチョの味を尋ねる。

「ムグムグ……」

ユーリが食べたカルパッチョなる生魚の料理は旨みが凝縮されていた。

噛み締めるたびに、旨みがあふれ出す。

この料理の味付けに使われている汁の独特の塩気と上に乗っていた白い三日月の様

なモノ：オニオンスライスから出る辛味と混ざり合い、それが生魚と調和する。

少し酸っぱくて、しゃきしゃきとして辛くそれらをすべて包み込むこの魚独特汚の旨みが口の中に広がる。

「・・・美味しい」

「えっ?」

ユーリが口の中のカルパッチョを喉の奥底に流し込むと、ボソツと呟いた。

「とつても美味しいよ!!ちーちゃん!!」

すると、ユーリは目を輝かせながらカルパッチョが美味しい事を伝える。

「ちーちゃんも食べてみなよ!!」

そしてチトにもカルパッチョを勧める。

「じゃ、じゃあ・・・」

ユーリに勧められてチトは恐る恐るカルパッチョを口へと運ぶ。

すると、チトの口にも生魚独特の歯ごたえと旨味とオニオンスライの辛味、生魚の上にかけられているバジルオイルの独特な酸味が広がる。

ユーリ同様、今回初めて生魚を食べたチトもこのカルパッチョの味には思わず舌鼓をうつ。

「うん、確かにこれは美味しいな・・・」

「でしよう?」

二人はまるで機械のようにフォークを動かしてカルパッチョを食べた。

その間、二人の中で会話など無く、会話する暇さえも惜しかった程、料理に夢中になったのだ。

なお、最後の一切れはユーリが食べた。

元々、ユーリが頼んだ料理だったのでチトは文句は言わなかった。

「ふう〜美味しかった〜」

「ああ・まさか、生の魚があんなに美味しいモノだったなんてな……」

「あそこの魚もこんな味だったのかな?」

ユーリはかつて、あの地下工場で機械が管理・飼育していたあの魚も生で食べればコレと同じ味がするのだろうかと思いを馳せる。

「多分・違うんじゃないか?料理をするにしても色んな調味料が必要だろう。あそこには調味料なんてなかっただろう?」

「む〜そうか……」

カルパッチョを完食した二人は口直しの為にパンとスープを食べる。

「このパン、とつても柔らかい……」

「普段食べているレーションとは大違いだね」

ほんのりと焼かれたバターロールはこれまで食べてきた乾パン状のレーシオンとは比べられない程、柔らかい。

「昔、おじいさんの所で作ったパンとも違うね」

「使用している原料が違うんだろうな」

レーシオンはもとより、以前一緒に暮らしていたおじいさんと共に作ったパンとも異なる味がした。

そして次はスープを飲む二人。

ある地下工場から外へ出た時、出られた記念に飲んだ缶詰のコンソメスープも美味しかったが、このスープも格別に美味しかった。

鶏肉と玉ねぎをベースに長時間煮込んだその透明な琥珀色のスープは香りも良く、玉ねぎと肉から出たエキスとコンソメが口の中で踊り出す。

そして豊かな琥珀色のスープはあの時、見た夜空に広がる星空を思い出させる。

「はあ〜おいし〜」

「はあ〜」

この食堂と言う所も暖かいが、口の中から胃の中へ流し込まれるスープは身体の中から二人の身体を温める。

「そういえば、パンとスープはおかわり自由ってあの角の人が言っていたよね？」

「そうだな」

「すみませーん!!」

「はい、何でしょう?」

「パンとスープ、おかわりください」

「はい、ただいま」

ユーリは追加のパンとスープをアレツタに注文する。

「あつ、すみません。私にも……」

チトはおかわりするのが少し気まずいのか小声でアレツタに追加のパンとスープを頼む。

「別におかわり自由なんだし、堂々と言えばいいのに……」

「いや、でも……」

ユーリはそんなチトの態度に何故、そんな小声で頼むのか理解できなかった。

そして、おかわりのパンとスープが来たのと同時に、メインであるシーフードフライとチーズチキンカツがやって来た。

「お待たせしました。ご注文のシーフードフライとチーズチキンカツです」

「「おおおー」」

チトとユーリの二人はの前にそつと置かれた料理をしげしげと眺める。

まず、ユーリが頼んだシーフードフライ。

白い皿の上に盛られたのは、淡い緑の葉野菜の上に乗せられた三種類の揚げ物。

木の葉のような形をした大きめのものと、丸いわつかのようなのが3つ、そして川原の石の様に小さな丸いのが3つ。

「これが魚？」

「さっきのカルパッチョや今まで食べてきた魚のレーション（缶詰め）とは大違いだね」
次にチトが注文したチーズチキンカツ。

串切りにされた黄色い果実に、細く切られた緑色の葉野菜、赤い果実で彩られた白い皿の中心にドンと置かれた大きく茶色い肉料理。

自分達の手のひらよりも大きい一枚肉をそれは十分な熱気をはらみ、プツプツとまるで機械みたいにかすかな音を立てていた。

「チーズってどれなの？」

「この中に入っているみたいだ」

「見えないね」

「食べれば分かる」

「どんな味なのかな？」

「おい、ユー：ヨダレ：：私のチーズの上に落すなよ」

「わ、分かつているよ」

チトのチーズチキンカツを覗き込むユーリの口元にはヨダレが垂れ下がって居り、チトは自分の料理の上に垂らすなど注意する。

「チーズチキンカツの味付けにはそちらの青い瓶に入ったソースをお使いください。それと、そちらの黄色いレモンは絞って汁をかけて食べると美味しいですよ。シーフードフライには此方のタルタルソースをお使いください。それでは、ごゆっくりどうぞ」

アレツタがおすすめの食べ方を説明して厨房へと戻って行く。

シーフードフライ、チーズチキンカツ：共にパンくずで作った衣を纏わせ、油で揚げた料理らしい。

シーフードフライは葉っぱみたいな形をしたのが魚で、金貨のように丸いモノがホタテと呼ばれる貝で、真ん中に穴が開いているのがイカと呼ばれる生物のフライだと言う。

「じゃあ……」

「ああ……」

「いただきます」

二人は互いの料理にフォークを刺して口へと運ぶ。

「あーむ……」

魚のフライを口にしたユーリの口に広がるのは揚げに使われた衣。

油で揚げられたパン粉：それが胃袋を刺激する匂いと一緒に軽やかに弾けた。

弾けた衣の奥からやってくる魚とは信じられぬような魚の味。

薄く下味をつけられた、魚は熱い熱気と共に口の中に魚の旨みをばらまきながらほつこりと口の中で崩れる。

淡泊だがしつかりとした魚の味。

先程食べたカルパッチョとは異なり、生臭さも無ければ度を越した様なしよっぱさも無い。

それが揚げられた、軽い衣の味と混ざりあう。

最初のフライはそのまま食べたが、次にユーリはアレツタの言ったタルタルソースと呼ばれる調味料をフライにかけて食べてみた。

タルタルソースは茹でた卵がたっぷり入り、それでいてちよつと酸味があるソースらしい……

それが揚げたて熱々の魚フライと絡み合い口の中で絶妙なハーモニーを奏でる。

その他に青い小瓶に入ったソースと呼ばれる調味料……こちらもフライには合うと言
う。

勿論、ユーリはそのソースを使ってフライを食した。

タルタルソースとはまた異なる味であるが、それでも美味しい事に変わりはなかった。

魚のフライを食い尽くしたユーリは次のフライへと手を伸ばす。

丸いわつかの形に揚げられた、イカとか言うもののフライ。

魚のフライには無かった弾力のある硬さを持つイカのフライ。

噛む度に広がるイカの味：：。

ユーリは、彼女にしては珍しくゆつくりと味を楽しむかのように咀嚼しながらイカのフライを食べる。

そして、最後に残ったホタテと呼ばれる貝のフライ。

これも絶品だった。

衣の下から現れた貝の味は、他の二つのフライよりも格段に濃い。

それが噛み締めた瞬間、バラバラとヒモのような形にほぐれ、口の中で崩れていく。

その感触と味と共にこれが一口と比べても小さく終わってしまうことが非常に残念に思える味だった。

一方、チーズチキンカツを注文したチトの方は：：：

さくりと、軽やかな音を立てて口の中で砕け、良質の油とパンの風味を感じさせる衣。主役たる鶏肉は念入りに柔らかくし、香辛料と塩で味付けされていて、その身に宿し

た肉汁が嘔むはしから溢れ出す。

そして、淡白な鶏肉に素晴らしい風味を加えているのが肉の間に挟まれたチーズと呼ばれる獣の乳を発酵させた食べ物……

肉とよく合う質のチーズを特に選んで入れたと思いきそのチーズは肉の熱に溶かされて熱くとろけ、肉の間からこぼれトロリと零れ落ちてくる。

そのチーズの、どちらかといえば強い風味が脂に乏しく淡白な胸肉と組み合わせるところでお互いに補いあい、高めあっている。

それはまるで自分と相方のユーリの様に……

写真を撮る際の合図でもあり、レーションの味の一つでもあったチーズ……

だが、今チトは本物のチーズをこうして食している。

(これがチーズの味……)

口の中のチーズチキンカツを嘔みしめながらチトはチーズの味をゆっくりと味わう。

「はあく美味しかった」

「はあく」

皿の上の料理はあつという間に平らげたチトとユーリ……

天井を見上げながらしみじみと感傷に浸る。

そして、チトは思い出したかのようにメニューを手取る。

もう一つの気になる食べ物、チョコレートを頼む為だ。

字は読めないけど、料理を注文する時、アレツタからチョコレートを使った食べ物が乗っているページを聞いていたので、チトはメニューに載っている絵で判断した。

(あの角の人が言うチョコレートを使った食べ物のおすすめはこのチョコレートパフェと妖精たちが食べていたチョコバナナクレープか……)

(よしっ!!)

チトはチョコレートパフェかチョコバナナクレープのどちらを注文するか決断を下した。

「すみません」

「はい」

声をかけると、アレツタがパタパタとチト達の座るテーブルへとやって来る。

「このチョコレートパフェを下さい」

「はい」

「ユー、お前は どうする?」

チトはユーりにチョコレートパフェを食べるかを尋ねる。

「勿論もうぜ」

「じゃあ、チョコレートパフェを二つ下さい」

「はい。マスター!!オーダーです!!チョコレートパフェを二つ!!」
「あいよ」

アレツタからオーダーを聞いた店主は厨房から返答する。
それから暫くして、

「お待たせしました。ご注文のチョコレートパフェです」

二人の前にガラスの器に入ったチョコレートパフェが置かれた。

「それでは、ごゆっくり」

ユーリはさっそく、スプーンを手にし、チョコレートパフェを食べ始める。

反対にチトはまだスプーンを置いたままチョコレートパフェをジツと見つめる。

(す、すごい……これが食べ物……なのか?)

チトの目にはチョコレートパフェは食べ物ではなく、寺院で見た細工物のように見え
た。

「ん?どうしたの?ちーちゃん。食べないの?」

「あつ、いや、食べるぞ」

ユーリに声をかけられて慌ててスプーンを握るチト。

まず食べるのは、山の頂……黒いものがたつぷりとかかった白い山。

コーラフロートの中にあつたアイスクリームとはちよつと違う白いモノ……

そこに恐る恐るスプーンを潜り込ませる。

スプーンが入れられたパフェは、まるで雲のように抵抗なくすつと切れる。

たつぷりとした黒いものに覆われた白いソレをそつと口に運ぶ。

(むっ!!これはっ!!)

コーラフロートの中にあつたアイスクリームとは別の甘さがチトの口の中に広がる。

かすかにほろ苦くて甘いものがすつと口の中で溶けて消える。

次に来たのは一口大にカットされた緑の円形のモノと赤い三角形の形をしたモノ。

色味が美しいこの二つの食べ物、甘味はあるが、しっかりと酸味も含んでいた。

それが甘味に慣れた舌を休ませて、更に白と黒の雲の甘さ、美味しさを引き立てる。

白く甘い雲の様なモノに突き刺さっているレーシヨンの様なモノは流星にスプーンでは掬えないので、普段食べているレーシヨンの様に手で食べた。

白いものがついた黒と小麦色に染まったレーシヨンの様なモノはやはり甘さが抑えられていて、パリツと碎ける香ばしきがある。

(ふむ、歯ごたえはレーシヨンに似ているけど、これもちよつと普段食べているレーシヨンとはちよつと違うな……)

食べていくと下層にはコーラフロートの中にあつたアイスもあり、そして一番下にチョコレート菓子があつた。

それをスツとスプーンで掬い口へと運ぶ。

アレツタが言うにはこのチョコレートパフェの黒い食べ物がチョコレートなのだと言う。

一番上にあつた白いモノにかかつていた黒いヤツもチョコレートソースだと言うが、今度のモノはチョコレートそのもの……

チトはまず、スプーンの上にあるチョコレートをジツと見つめ、そして口へと運ぶ。口の中で甘くほろ苦い味が広がる。

(これがチョコレート……あの時食べたレーシヨンのチョコ味とは全くの別物だな)

と、以前、雪の中に放置された飛行機の中から手に入れたチョコ味のレーシヨンの事を思い出す。

あの時、ユーリは最後の一本を自分に銃を突きつけ奪い、そして本当に食いやがった。チトとしてはユーリの悪ふざけかと思つていたから、本当にレーシヨンを食べたユーリに思わず怒りが湧いて、そのままユーリをボコボコにした。

今となつては懐かしい思い出だ。

「ねえ、ちーちゃん」

「なんだ？」

「この食べ物、幾つもの層になっていてまるで私達の世界みたいだね」

「……そう……だな……」

ユーリに自分達の世界の事を言われ、チトはふと自分達の世界の事を思った。パフェを食べて口の中が甘くなったので、チトはコーヒーを注文した。

ユーリは他のデザートを注文するみたいでアレッタとメニュー表を見ながら話している。

(私達の世界……)

この異世界食堂には沢山のお客さんが来た。

でも、自分達の世界にはもう人は殆ど：いや、人以外の生き物はあの機械が飼育・管理していた魚とあの謎の生物？のヌコぐらいだ。

いや、そもそも自分達以外の人間がいるのかも怪しい。

気になったチトはコーヒーを飲みながら、扉へと視線を向ける。

此処に来た当初はやってきたお客さんのインパクトが強すぎて、このお客さん達が何処から来たのかそれを知る手立てを見逃していたが、この異世界食堂に来るお客さんが何処から来るのか？

そして何処へ帰って行くのかを見極めようとした。

「……」

そして、扉を見て分かった事が有る。

お客によつて扉の向こう側の風景がお客さんによつて違ふのだ。

その現象こそが、此処が異世界食堂と呼ばれる由縁なのだろう。

ならば、自分達が再びあの扉を開けると目の前にはあの終末の世界が広がっているの
だろう。

「……」

チトはそれを考えていると……

此処にいたお客さん達も店主の料理を食べ終わり、次々と自分達の世界へと帰つて行く。

何の戸惑いもなく……

でも、それは自分達の世界がまだ希望があり、大勢の人間が生きており、普通に食べ物が存在しているからだろう。

自分達の世界は人も食べ物もない、孤独と絶望が支配する終末の世界……

そして……

「さて、ちーちゃん。私達も行くのか？」

食事を終えたので、ユーリがチトにあの世界へ戻ろうと言う。

（あの世界に戻る？）

（あの何も無い世界に……？）

(あの絶望しかない世界に?)

(嫌だ……嫌だ……嫌だ……そんなの嫌だ……)

「行く?」

「うん、そうだよ」

「何処へ? それにどうして?」

「『どうして?』って……」

ユーリはチトに何か違和感を覚える。

チトの目は何だか虚ろに見えるからだ。

異世界食堂の料理を食べ、暖かい環境、人が沢山いる状況下でチトに変化が生じた。

潜水艦の中では、人が沢山いる映像は見たが、此処では違う。

映像や写真ではなく、生きた人が目の前で呼吸をして、料理を食べて、会話をしている。
る。

手で触れれば触る事だって出来る。

そんな所に来たのに、また誰も居ない世界に戻る。

チトにとってそれは悪夢以外の何物でもなかった。

そりゃ、当初は上層部の都市を目指した。

でも、あの頃とは状況が何もかも異なる。

愛車だったケツテンクラートを失い、大切にしていた本も日記も失ったチトにとってこの異世界食堂の環境は暖かすぎた。

「ユー……お前はまたあの世界に戻りたいのか?」

「えっ?」

「何も無い……あの世界に……?」

「ちーちゃん?」

「イヤだ!!私はいやだ!!」

チトは俯きながら声を荒げ、あの世界には戻りたくないと言う。

「ちーちゃん。ちよつと落ち着いて……そりやまあ、確かに下層には何もなかったけど、上に行けば……」

「人は絶対に居るのか!?食べ物も絶対にあるのか!?」

「え、えつと……多分……」

チトは俯いていた顔を上げて、鬼気迫るような顔でユーリに上層の状況を尋ねる。

そんなチトに対してユーリは視線を泳がせながら答える。

「多分?そんな曖昧な事で済まされることなのか!?私達にはもう、食べ物もない、暖を取る為の本も燃料もない、車両も……銃も……ない……」

「……」

「そんな状況でこれ以上、上を目指すのか？それで上に着けなかったら？上に行けたとしても其処に人が居なかったら？食べ物が無かったら？」

「……」

チトはこれまでの絶望的な状況からあの世界に戻っても希望がない事、

そして、溜まるに溜まった不安と確実に迫っている死への恐怖を全部吐きだす。

「お前だつて薄々分かつているんじゃないか!?!あの世界にはもう、絶望しかないって事が……」

「そ、それは……」

ユーリはチトから視線を逸らす。

チトが言うようにユーリも分かっていた。

でも、自分達はあの世界に戻るしか選択肢はない。

それ以外の選択肢などないじゃないか。

「……」

チトとユーリの間気まずい空気が流れる。

チトはユーリを睨みつけるように見て、ユーリは気まずそうにチトから目を逸らす。

その様子を見ていたクロが、

(マスター……)

厨房の奥に居る店主に声をかける。

「ん？どうした？クロ」

（実は……）

クロは店主にチトとユーリの事情を話す。

店主もあの二人が終末した世界から来ているのは知っていたから気になると言えば気になっていた。

それでも異世界の住人の事情に深くは踏み込めなかった。

アレッタの時は、自分が魔族でありながらも彼女は希望をまだ自分の世界に抱いていた。

最近ではこの異世界食堂のウェイトレスの仕事以外にメンチカツ二世こと、サラ・ゴールドの家の家政婦と言う向こうの世界でもちゃんとした仕事を見つけている。

でも、今回は状況が異なる。

あの二人の世界は既に何もかもが終わっている世界……

希望もなく、あるのは絶望と死のみ……

ならば、年長者として出来る事は……

「お嬢ちゃん達……」

気まずい空気の中、店主がチトとユーリの二人に声をかける。

二人は店主に声をかけられて身体をビクツと震わせる。

大声をだしたせいで怒られるのかと思ったのだ。

「その……二人の事は粗方聞いた……もし、自分達の世界に戻りたくないのであれば、その……此処に住むか？」

「えっ？」

なんと店主はチトとユーリの二人にこの世界に残らないかと提案してきた。

「いいんですか？」

チトが店主に恐る恐る尋ねる。

「ああ……お嬢ちゃん達の世界には誰も居ないんだらう？なら、こっちに残って新しい事を見つけて始めたりした方がいいんじゃないか？それが見つかるまで、ウチに居てこの世界の事を知って自分の目標を立てるのはどうだ？」

店主の提案にチトは真っ先に乗る。

ユーリは現状についていけず、あたふたしている。

「ユー、お前は どうするんだ？」

「どうって……」

「あの何も無い世界に残るのか？それとも別の世界でやりたい事を見つけるか？」

「……」

チトの言葉にユーリも決断を下す。

「私も此処に……ちーちゃんと一緒に居る!!」

二人はこのままこの異世界：日本に残ることにした。

戸籍等の問題に関しては、店主の祖母も元は異世界人であり、太平洋戦争の終わり：終戦の混乱期に培った裏世界とのコネクションはまだ生きており、そこからチトとユーリは日本戸籍を手に入れる事が出来た。

そして、七日に一度：ねこやが異世界食堂となった時、異世界の住人らがねこやを訪れると、

「「いらつしやいませ」」

(いらつしやいませ)

「らつしやい」

異世界食堂には紺色のメイド服風のウエイトレス服を纏ったアレツタ、同じデザインで漆黒のウエイトレス服を着たクロ。

そして……二人と同じデザインで深緑色のウエイトレス服を着たチトとワインレッドのウエイトレス服を着たユーリの姿がそこにあつた。

その後の二人は……

チトは自分達を絶望から救ってくれた異世界食堂の料理と店主に憧れ、調理師の専門学校へと進学し卒業後は、店主と共に今日もねこやを訪れるお客さんや異世界の住人達の舌を唸らせ、そしてお客さんに希望と元気を与える料理を作るコックとなった。

ユーリはこの世界に住んだ当初は文字の読み書きに悪戦苦闘したが、そんな中、彼女は音楽の才能を伸ばした。

文字もこの世界にあふれる歌の歌詞で覚えたぐらいだ。

彼女は今日も音楽を通じて人々に元気と癒しを今でも与えている。

ただ音楽活動が忙しくても七日に一度はねこやでウエイトレスをしている。

そして、今日も七日に一度、異世界へ通ずる扉が開かれる。

「「「いらっしやいませ。ようこそ、異世界食堂へ!!」」」

ちーちゃんの日記

くちトSide)

私達が、世界が終わった世界からこの異世界、日本に来て幾日が経った

料理屋のねこやの店主さんからの好意で私達は食べ物にも寒さにも困らない生活を送っている。

この世界は沢山のモノに溢れている。

私達がこの世界に住むと決めた次の日、店主さんと一緒にショッピングモールと呼ばれる大きな施設に買い物へ出かけた。

あの世界にあつた訳の分からないモノ、使い方が分からなかったモノもあり、この世界に来て初めて使い方が分かったり、何の為に存在していたのか分かったモノも沢山あった。

人も……食べ物も……物も溢れているこの世界は私達にとっては楽園の様な世界だった。

楽園の様な新しい世界……私は、この世界に来てから再び日記を書くようにした。

前の世界では背後にまで迫っていた死の足音から逃れるために、生きてきた証を火の

中にくべてでも生き残ることを優先したがこの世界ではもうそれをやる必要もないので、改めて私は自分がこうして生きている証を残すことにしたのだ。

でも、この世界に来た当初、私は眠ることが怖かった。

人や物が溢れ、食べ物にも寒さにも困らないこの世界に住んでいる事が実は夢なのではないか？

目が覚めた時、自分の目の前に広がるのは死を迎えようとしている世界……

食べ物もなく、誰も居ない、雪だけのあの寂しい世界……

ユーも同じことを考えているのか、一緒に寝る時、手を繋いで眠る事が多かった。

それでも朝、ちゃんと目が覚めて、ねこやでお世話になっている部屋の天井を見て、安堵する自分が居た。

私達がお世話になっているこのねこやはどういうわけか七日に一度、このお店がある地球とは異なる世界に扉が現れ、その世界の人間がお客として料理を食べにやって来る。

店主さんは、私達にこの異世界へ繋がる正面口は、決して使わず、お店の外へ出る場合は裏の勝手口から出るようにと言った。

確かに店主さんの言う通り、異世界人である私とユーが誤って正面の入り口の扉を開けてしまうと、あの世界へ続いてしまう可能性が高い。

私もユーもあの終わった世界へ戻るつもりなどサラサラなく、物覚えが悪いユーでさえ、あの正面口には決して近づかなかった。

そして、私達はただ何もせずにお世話になつていゝのも悪いので、平日、そして平日よりも混む、土曜の日にはお店のお手伝いをしていゝ。

この世界に來た当初は、まずこの世界の文字を覚えようとしてかなり苦労した。

私達の暮らすねこやがある日本という国の言葉：日本語には漢字、ひらがな、カタカナの三種類の文字があつた。

中にはあの世界にあつた文字に似ていゝ言葉や文字もあつたが、どれもこれも私達には未知の言語だったので、覚えるのには苦労した。

私よりも物覚えが悪いユーなんて覚えられるのかと思つたのだが、ユーは食べ物と自分が興味を抱いたモノに関してでは覚えるのが早く、お店のメニューに載つていゝ文字：そしてこの世界にあふれていゝ音楽の歌詞でこの国の言葉を覚えていゝた。

ユーが食べ物以外に：音楽に物凄く興味を持つたのは私としては意外に感じた。

ラジオ、そしてテレビと言う機械から流れてくる音楽にユーは目を輝かせながらその音楽を聴き、お店にあるピアノと言う楽器を弾きながら歌を歌つたりしていゝ。

今ではお客さんに頼まれて歌を歌つたり、ピアノを演奏していゝ。

射撃と食ふこと以外にユーにこんな特技があるなんて知らなかつた。

そして、食べ物……この世界では本当に食べ物に困らず、沢山の食べ物に溢れていた。季節と呼ばれる気温が異なる時期によって食べ頃になる沢山の食べ物……

そして、季節ごとに行われる様々な行事……

私達の世界でも大昔は行われていた行事なのかもしれないが、もしそうであるなら、人が減っていく中でその行事を継承することも出来なくなり、資料ともども消失してしまつたのだろうか……

クリスマスと呼ばれる行事の際は店主さんやユー、土曜の日に一緒に働くアレッタやクロと共にケーキと呼ばれるお菓子を食べた。

パンのようにふつくらとした生地の上にたつぷりと乗せる、チョコレートパフェに使用される白くて甘いモノ：生クリームと呼ばれる乳を原料とする甘味が合わさり、口中で溶け、広がる甘みはまさに、極上の味……究極のお菓子である。

ケーキを前にアレッタとユーが先を争うように食べていた……

あの時、ユーの手に銃が無くて本当に良かったと思う。

かつて私からチョコ味のレーションを奪ったときのように私達に銃を突き付ける様が容易く想像できたからだ。

それにこの国では銃を不当に持っていると言われ罰せられるらしい。

そして、骨付きのチキン……

鶏肉：これはまさに私にとって奇跡の出会いだった。

魚でもレーションでもない食材、肉：・私達『人』とは異なる生物を糧とする食材：・肉を食するということは、食事が他の生命の魂を食べるという行為であることを何より強く実感させるものなのだ、私は思う。

そんな数ある肉の中で鶏肉は一番の好物だ：・

現に鶏肉を使用した料理は数多くのレパートリーが存在する。

私が食べたチーズチキンカツの他に焼き鳥、唐揚げ、チキン南蛮、照り焼きチキン：・ホクホクに炊いた白いライスと呼ばれる食べ物と一緒に食べると、ライスが何杯でも食べられる気がする。

特に油で揚げるカツや唐揚げの揚げ物料理は口の中に入れて噛んだとき、ジュワッと広がる肉汁と油であげたサクサクの衣の奏でるハーモニーが最高だ。

それに鶏肉はライスだけでなく、パンにも合う。

チキンカツサンドにテリヤキサンド：・まさに鶏肉は肉の万能食材であると私は思う。

クロだって鶏肉を使ったチキンカレーが好物だし、ねこやの常連の一人：照り焼きこくとタツゴロウも毎週、ねこやに来るとテリヤキ定食を頼んでいる。

でも、それより凄いのがこうした数多くの食材を活かして料理という名の作品に仕上

げることが出来る店主さんであると思う。

絶望と死を受け入れつつあった私達に生きることの思い出させてくれたのは紛れもなく店主さんの料理だ。

そして、このお店に来るお客さんも皆、店主さんの料理を食べて生きる希望を見出しているように見える。

そんな異世界の住人の中で、エルフと呼ばれる種族達はまさに究極の菜食主義者達だ。

彼らは肉、魚、卵、乳（同族の母乳は除く）を一切取らない種族でその上、鼻も味覚も人間より鋭い。

ユーは店主さんからその話を聞いたとき、「魚を食べられないなんて可哀想な人達だ」と言っていた。

私自身も鶏肉を食べることの出来ない彼らが可哀想に思えた。

そんなエルフ達でさえも満足させてしまう店主さんの料理は凄いと思う。

ちなみに、外見はエルフそっくりのハーフエルフは食べ物に関して制約はない。

長い血筋の中に純血のエルフ、ハーフエルフが居ると、身体からエルフの特徴が完全に消えるほど遠い子孫：つまり人と人との間の子であっても、隔世遺伝を起こしてハ-

フエルフとして生まれることがあるらしい。

ねこやの常連の一人、ヴィクトリアもそんな隔世遺伝をしたハーフエルフだけど、現に彼女は卵や乳をふんだんに使用して作られたプリンアラモードが好物だ。

プリン：これはケーキよりも手軽に食べられるデザートだ。

黄色いプルンつと甘くとろけるような触感……底にある黒いカラメルソースと一緒に食べると甘苦く香ばしい味がする。

私もユーもこのプリンは共に大好きなデザートの一つだ。

ハーフエルフと言えば、一緒に働いているクロだ。あの耳の形からしてエルフであるのはまず間違いなく、そのうえでチキンカレーを好物としていることから恐らくクロもハーフエルフなのだろうけど、本当にハーフエルフなのかと疑問に思うことがある。

なんとなく。雰囲気常連客の一人の『赤』となんとなくだが、似ているような気がするのだ。

沢山の美味しい料理を食べ、店主さんの作る料理を食べている人を見てきて、最近では、どうやったらそんな料理が出来るのか気になって店主さんの動きをジッと見てしまおう自分が居る。

ユーが音楽に興味を示したように私は料理に興味を持ったのかもしれない。

だからこそ、私は店主さんから料理を習っている。

朝ご飯とお昼の賄い料理：そして晩御飯……

そりや、最初の内は焦がしてしまったり、逆に火の通しが甘くて半生になったり、調味料の量を間違えたりするミスを犯したけど、最近ではうまく作れている。

店主さんほどの腕前ではないけれど、店主さんやアレツタ、クロやユーからも「おいしい」と言われるぐらいの腕には成長した。

そんなある日、近所のスーパーへ出かけた時だった。

その日はお店が定休日だったので、料理の研究の為、食材を調達しに来ていたのだ。お店の食材はお客さんに提供するモノだし、そんなに多くの食材を使う訳ではなかったからだ。

店主さんとユーは休日を利用して、店主さんの友達と一緒に魚釣りへ出かけていた。取りたての魚を新鮮な状態で食べることが出来るということなのでユーは喜んでついていた。

私は鶏肉が大好きであるが、ユーは肉よりも魚の方が好きなのだ。

そんな中、野菜売り場でなにか揉めている様子の四人組の女の子達が居た。年頃や身長は私と同じぐらいみたいだ。

彼女らの会話の中で「カレー」と言う単語が出ている。

カレー……クロ、そして異世界食堂の常連の一人、アルフォンスの大好物な料理だ。

私も食べられるけれど、あまり辛いのは苦手だ。

でも、カレーか……

一口にカレーと言っても何種類もある。

実際にねこやでも普通のビーフカレーの他にクロの大好きなチキンカレーも提供している。

今日の料理研究のテーマにしてみても良いかな？

カレーなら、それなりの量になるから今日の晩御飯にもなるし……

そう思いながら私はあの子らがいる野菜コーナーへと向かった。

四人組の女の子らが揉めているのを尻目に、私は黙々と野菜を選ぶ。

店主さんから聞いた食材を選ぶときの注意点とかを念頭に食材を選んでいると、まだ揉めている。

カレーを作るのに食材選びで揉めているようだ。

カレーを作るのにそんなに揉めるモノなのか？

カレーの食材なんて割とシンプルだと思うのだが……

私はチラッとその揉めている女の子らを見る。

同い年の子か……

私の身近に居る同い年の子はユーとアレツタぐらいだ。

でも、アレツタとは七日に一度しか会えない。

普段、私達ぐらいの子は高校という所に行っているらしいが、今の私達の学力でいけるのかちよつと微妙な所だ。

でも、友達……か……

私は勇気を出して声をかけてみた。

「あ、あの……」

私が声をかけると、揉めていた子らはピタツとおさまり、一斉に私を見てきた。

うっ……ちよつと気まずい……

「ほら、暁が騒ぐから他のお客さんが迷惑していたじゃない」

「あ、暁のせいだっていうの!?!」

「最初から私に任せていれば良かったのよ」

「何ですって!?!カレー大会に出るって決めたのは暁よ」

「ふ、二人とも落ち着くのです」

「大体雷は何時も出しやばりなのよ!!暁の方がお姉さんなのに!!」

「そのお姉ちゃんが頼りないから私が頑張っているんじゃない」

「むう〜」

「むう〜」

「……ふんすか」

私を見て静かになったと思つたらまた揉めだした。

青黒い髪の子と茶髪の子が睨み合い、栗毛色の子は涙目になりながら止めようとして
いるが、効果がない。

場がなんか更に滅茶苦茶になり始めていると、

「ていつ」

「あう」

「はう」

「へにゃ」

銀髪の子が三人の頭を叩く。

私もよく悪戯をしたユーの頭を叩いたっけな……

「少し落ち着こうか?」

「「響」」

「姉や妹が失礼した。それで、何かな?」

銀髪の子が改めて私に声をかけてきた。

私は声をかけた理由を話す。

「あつ、うん……その……カレーについて揉めていたみたいだけど、何かあつたの?」

私が尋ねると響と言われた銀髪の子が言うには、今度カレー大会に参加するので、カレーの練習の為、食材を買いに来たのだが、そこで自分らがカレーの作り方を知らなかったことに気づいて、揉めだしたとのこと。

(何だ？其れは!?)

正直ちよつと呆れたが、気を取り直して、

「そ、それなら私が皆にカレーの作り方を教えようか？」

「「「えっ?」」」

「その・・・私が今住んでいる所が料理屋で・・・私もよく料理をするから・・・」

「えっ? いいの?」

「う、うん・・・貴女達の話聞いてカレーを作ろうかと思つていたし・・・」

「では、お願いしますのです」

「あつ、うん・・・えつと・・・」

私はこの子らの名前を聞こうとした。

暁、雷、響と名前らしきモノは呟いていたのは聞こえたけど、それが名前だとは限らないから念の為、聞いておくに越したことはない。

「あつ、私は暁よ」

「響・・・」

「雷（いかづち）よ。決してカミナリじゃないからね」

「電なのです」

彼女らは四つ子の姉妹で、上から暁、響、雷、電の四姉妹なのだと言う。

「私はチト」

私達は自己紹介をすませ、カレーの食材選びをした。

店主さんから食材選びの知識を得ていてよかった……

食材を買い、暁達と共にねこやに戻る。

初めて料理屋の厨房に入った暁達は物珍しそうに辺りを見ていた。

「えっと……エプロンは……」

私はウエイトレス服の入ったタンスから人数分のエプロンを取り出し、暁達に手渡

す。

私自身もエプロンを身に着け、手を洗い調理台の上にカレーの食材を並べる。

私は調理台の上に置かれたカレーの食材を見て、店主さんが言っていたことを思い出

す。

えっと……カレーのレシピの基本は粉とスープと素材……カレー粉は微妙にブレ

ドをしたモノを使って……ブイヨンスープは作り置きをちよつと使おう……

香りは確か……

私は普段、ねこやで出しているカレーを思い浮かべる。

お店のカレーは食欲をそそる香りが立っていた……作り置きのカレー粉にガラムマサラをいれて香りを立たせていた筈だ。

肉に関しては……確かねこやのカレーは……

私は店主さんが言っていたカレーの作り方……肉について思い出す。

いいか、チト。

ビーフカレーにはビーフそのものを味合わせる為に肉汁をビーフの中に閉じ込めるものがある。

でも、ウチ（ねこや）のカレーは芳醇な味にする為、敢えて肉汁を閉じ込めずにカレースープの中に溶かし込むタイプだ。

確かそう言っていた筈……ならば、肉の下拵えも重要だ。

さあ、始めよう……

カレーの作り方を頭の中で回想し、いよいよ調理を始める。

暁、雷、電に野菜の皮むきとそれらを一口大に切るように頼み、響には肉を頼む。

私は完成後の試食の為、ライスの準備だ。

暁と雷は包丁で丁寧に皮を剥けたのだが、電はジャガイモの皮を身ごとごとそりとけずり、皮がむけたときにはもはや一口大の身しか残っていなかった。

確かにあとでスライスして一口大の大きさにするけど、それだとちよつと野菜の量が少なくなる。

「い、電・包丁で剥きにくいなら、ピーラーを使って」

「は、はいなのです」

電にピーラーを渡し、皮を剥いて貰う。

響が肉をスライスしていると、

「いっつ……」

響が包丁で指を切った。

「ちよつと響、血が!!」

「響、大丈夫なの!?!」

「響ちゃん、死んじやいやなのです!!」

指を切った本人よりも他の姉妹達の慌て様が凄かった。

私も料理を習いたての頃はよく包丁で自分の指を切った。

「響は切った指を水で洗って……確か救急箱は……」

私は手早く響に応急処置をする。

そして、肉を一口大にスライスしたあと、その肉をまな板からトレイに移す。

「それで、肉を炒めるのかい?」

下拵えした野菜をボールへと入れていく。

その間に私は肉のマリネを作る。

油を引いたフライパンの上に肉を乗せ、赤ワインでフランベをする。

フランベをした瞬間、暁達がびっくりしていた。

肉をフライパンから取り出し休める。

「刻んだニンジンとジャガイモをその大鍋で茹でて……その大鍋に素材を一つにするから」

「はいなのです」

次に刻んだ玉ねぎを炒める。

「玉ねぎを炒める際は火加減に注意してね」

私はコンロの火を強める。

「いい？玉ねぎはまず、強火で炒める。焦がさないように休まず、炒める……」

木のヘラでフライパンの上の玉ねぎを炒めている私の隣から暁達が見学する。

「玉ねぎがしんなりとしてきたら、弱火にする……餡色になるまでじっくり丁寧……」

弱火でトロトロと……」

玉ねぎを炒め、次はカレー粉を作る。

フライパンに背油を梳かして、小麦粉を入れ、焦がさないように伸ばす感じで炒め、ほ

んのりと焦げ目がついてきたら粉末状のカレー粉を入れ、香りを引き立てるガラムマサラを入れる。

「さて、次は各素材を一つにする……」

ニンジンとジャガイモが泳いでいる大鍋にカレー粉を入れ、ひと煮立ちさせ、鶏肉と野菜を長時間煮込んで作ったブイヨンスープを入れる。

トマトを入れて、一度鍋をかき混ぜる。

次に玉ねぎを入れて、再び鍋をかき混ぜる。

そして最後に肉のマリネを入れてかき混ぜ、ある程度煮込む。

鍋からはグツグツと言う音とカレーの良い匂いが漂う。

この匂いだけでもお腹が空いてくる。

「出来たのかしら?」

暁が尋ねてきたので、私は小皿にカレーを分けて、暁達に手渡す。

「味見をしてみて」

「「……」」

手渡された小皿に乗ったカレーを暁達は味見する。

「美味しい」

「ハラショー」

「うん」

「美味しいのです」

暁達は美味しいと言うが、

「実はこのカレー……まだ、完成していないんだ」

私はこのカレーがまだ完成していないことを伝える。

「「えっ？」」

私の言葉に暁達は驚く。

「このカレー……コクがないんだ」

「それじゃあ、どうやってそのコクを出すの？」

暁がコクを出す方法を尋ねる。

「コクを出す方法はコレ……」

私はそう言つて冷蔵庫からリングゴを取り出す。

「「リングゴ？」」

私はリングゴを擦り下ろし、鍋の中に入れ、かき混ぜる。

「このリングゴがコクを出す隠し味なんだ」

リングゴの甘みがカレーの辛さをより引き立てる。

隠し味であるリングゴを加えた後、暁達に改めて味見をして貰う。

「どう?」

「そう言われると……」

「なんか、さつきよりも……」

「味が深くなつた気がするわ」

「なのです」

そして、カレーが出来上がったので、早速皆で試食することにした。

白いカレー皿の上に炊き立てのホカホカの白いライス

その上に出来たてのカレーをかける。

「さつ、完成だ……それじゃあ……」

「……いただきます!!」

スプーンにカレーを掬い、口へと運ぶ。

アルフォンスが言う通り、カレーはやはり、ライスがあると美味しさがより引き立つ。

「うん、美味しいわ」

「ほどよいコクとスパイスの味は口の中に広がるわね」

「お肉がとっても柔らかいわ」

「しかもルーにもほのかにお肉の味がするのです」

曉達にもこのカレーは好評で皆はおかわりをした。

暁達と後片付けをした後、いよいよ暁達とお別れの時間が来た。

「これが今日作ったカレーのレシピと使用したブイヨンスープのレシピ」

私はカレーとブイヨンスープのレシピを暁達に渡す。

「ありがとう、チト」

「カレー大会頑張つてね」

「ありがとう、チト」

「頑張るのです」

「Удачи тебе, до свидания. (ウダチ チービア、ダスビ

ダーニャ。)」

「すまねえ、ロシア語はさっぱりなんだ」

普段は店主さんから料理を教えてもらう側だけど、こうして教えるのもなかなか楽しかった。

それに同い年の子とこうして一緒に何かをすると、言う事が私にとってとても新鮮に思えた。

「それじゃあ、チト」

「今日はありがとう」

「また、一緒にカレーを作らしましょうね」

「バイバイなのです」

「……うん……またね」

暁達はそう言って帰って行った。

またね……か……

あの世界では考えられない言葉だな。

夕方になり、ユーと店主さんが帰ってきた。

「おかえり」

「ただいま!!」

「戻ったぞ」

「それで、成果はどうだった？」

「いや〜もう、大量大量」

「そう……あつ、今日の夕食はカレーでいいかな？昼間に作ったんだ」

「うんいいよ」

夕食の席、私と暁達を作ったカレーを食べながらユーは今日行った釣りについて嬉しそうに語る。

海がどんなところだったのか、釣った魚について、そして、お昼に食べた釣りたての魚を使った『カイセン丼』と言う料理について……

元々明るくムードメーカーの様な奴だったが、あの世界にいた頃と違い、今のユーは本当に嬉しそうだ。

あの世界にいた頃のユーは絶望と恐怖：そして『死』に飲み込まれないように無理して明るくお気楽な態度をとっていたのだと今になって分かった。

寝る前、私は今日あった事を日記に記す。

暁達と出会った事、

その暁達と一緒にカレーを作った事、

そして、それについて私自身が思ったこと、

「ふう〜」

私はペンを置き、日記帳を閉じる。

ふと、ユーを見ると、ユーは既に眠っていた。

「私も寝るか……」

机の上の電気を消し、私も布団の中に入り、目を閉じる。

この世界は本当に毎日が面白い……

日々変わる何もかもがあの世界とは大違いだ。

さて、明日は一体どんなことが待っているのだろうか？

私は明日、どんなことがあるのか？

どんな出合いがあるのか？

それに胸をときめかせ、眠りについた。

それから一週間後、暁達から一通の手紙が届いた。

早速封筒を開けてみると、中にはお礼の手紙の他に写真が入っていた。

同封されていたその写真にはカレー大会で優勝し、優勝トロフィーとよばれる金色の置物を掲げ、優勝メダルを首にさげて嬉しそうに笑みを浮かべた暁達の姿があった。

少女異世界旅行 ユーリの助っ人活動

ユーリ side

ちーちゃんと一緒にこの二ホンと呼ばれる別の世界に来てから何日かが経った。

この世界には本当にいろんなモノがある。

人も一杯、人以外の生き物も一杯、そして食べ物も一杯ある。

クリスマスという日に食べたケーキとチキン……

年越しと呼ばれる日に食べたソバ。

そして、お正月に食べたお餅……あれは、手触りがモチモチしていて色もヌコと同じ

真っ白な色だった。

食べ方もたくさんあったけど、どれも美味しかった。

もしや、ヌコも食べたらあんな味だったのではないだろうか？

ちーちゃんは火薬とオイルの味しかなかったのではないだろうか……

あつ、火薬と言えばライスを使った料理で『カヤクゴハン』と言うものがあつた。

初めて名前を聞いたとき、ちーちゃんは「本当に火薬を食べるのか!？」と驚いていた。

私も驚いた。

でも、カヤクと言っても私達の知る火薬ではなかったことで、ちーちゃんは顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

勿論、そのカヤクゴハンも美味しかった。

そして、モノが溢れていると言っても魚が居た所に居たあのデカイヤツや魚を飼っていた小さいヤツ、又コみたいな生き物はいなかった。

あのビームやロケットを出す人型の凄いヤツも……

でも、食べ物が増山あるので、私としてはそれでいい。

しかも毎日、お風呂が入れる。

本当にあの世界とは大違いだ……

食べ物を求め、寒い世界をちーちゃんと一緒に彷徨い、ただひたすら上を目指す……

あの世界では毎日やる事がなかった。

あの日、ちーちゃんと一緒にねこやに来た時、ちーちゃんが言っていた事が間違いない事にも気づいていた。

確かにちーちゃんよりも頭の悪い私でも自分達が置かれていた状況は分かっていた。

上に行っても人が居るのか？

そこに食べ物があるのか？

ちーちゃんが抱いていた疑問は私にも分かっていた。

ていたから安心して眠れた。

ただ、その後殴られて強制的に起こされたけどね……

でも、あの後で飲んだスープは美味しかった。

勿論この世界のスープも美味しいけど……

そして雪解けの季節：私はある運命的出会いをした。

雪解け水の中に一匹の生き物を見つけた。

と言つてもソイツは死んでいたけどね……

ちーちゃんが言うにはソイツは魚と言う生き物だった。

その時は火で焼いて食べたけど、ソイツの味はこれまで食べてきたレーションとは全

然違う味だった。

焼いた事でパリパリとした表面とふんわりとした肉質……

あの時は、こんなにも美味しい生き物がこの世界に居たのかと感じた。

ちーちゃんと一緒に食べたのであつという間になくなつてしまつたけど……

魚の味が忘れられない中、もう地球には人間以外の生き物が居ないと思つて居た時、

水槽の中で生きた魚が居た。

生きた魚を見た時、あの時食べた魚の味を思い出して食べたかったが、結局食べる事

は出来なかつた。

あの時、私は水槽の中の魚と小さいヤツを助ける為、デカイヤツを殺した。

以前、武器が沢山捨てられていた所で見つけた飛行機の中でちーちゃんと戦争について話した。

その後でレーションを巡って私とちーちゃん戦争をした。

結果は、レーションは私がもらったけど、その後でちーちゃんにボコボコにされた。

あの時と同じように生き残る為：魚と小さい奴を助ける為にはデカイヤツを殺さなければならなかった。

その後、缶詰だけど、魚を食べる機会が増えた。

魚の缶詰があったり、カナザワやイシイと出会ったことで行けば人や食べ物があ
るかもしれないと言う希望はこの時にはまだあった。

でも、ヌコの話聞いてその希望が少し薄れた。

そして、私達を乗せていたあの乗り物（ケツテンクラート）が壊れた時、ちーちゃん
は声を上げて泣いた。

あんな姿のちーちゃんは初めて見た。

イシイと会った時は、近くに修理できる部品やイシイが居たから直ったけど、あの時
は近くにあったのは雪と石と使えそうにない鉄屑……

人も私とちーちゃんしかいなかった。

あの乗り物（ケツテンクラート）について全然分からなかった私にはただ見ているだけしか出来なかった。

何かできる事はないかと思いちーちゃんのやる気を出そうと思つて歌と言うヤツを歌つたが、ちーちゃんから、

「歌つてんじゃねえ!!」

と怒られスパナを投げつけられた。

それ以外に何かできる事はないかと思つて近くのガラクタから明かりを持つて来た。

でも、あの乗り物（ケツテンクラート）は直らなかつた。

ちーちゃんは寿命だと言つた。

寿命：つまり、あの乗り物（ケツテンクラート）も死んだと言う事だつた。

それから私達は歩いて上を目指した。

持てるモノは必要最低限のモノと言つて上を目指す途中、私は今まで一緒に旅を共にしてきた銃を捨てた。

ちーちゃんだつて、大切なモノ：あの乗り物（ケツテンクラート）を無くしたんだ：

私だつて：

その場に置いていたらつい拾いたくなる。

だから私はあの銃を投げ捨てた。

拾いに戻りたくならないように……

ちーちゃんはその後大事な本や日記を火の中に入れて私とちーちゃん自身を生き長らえるようにした。

日記や本を火の中に入れておけるちーちゃんはなんだか自分の身体の一部を切り捨てているように見えた。

そんな日が続けていき、ちーちゃんの本や日記はどんどん減り、ついでに食べ物も減っていき、日が経つにつれ口に出る食べ物の量も減っていった。

ちーちゃんは口数が減り、私自身も減った。

あまり体力を使わず、空腹を抑える為だと本能が無意識の内にそうさせた。

そんな中、螺旋階段のある建物の中であのお月様のようなものを見つけた。

びうを初めて飲んだ時に、ちーちゃんと一緒に見たお月様はとても綺麗だった。

あの時は、一緒にお月様へ行こうと言ったり、びうで性格がかわったちーちゃんが意外にも可愛かった。

この金色で丸い金属を見てるとあの日を思い出す。

ちーちゃんが言うには昔の人はこれで食べ物や生活に必要な物を交換していたらしい。

でも、今ではゴミ同然だと言う。

それでも、私はこのお月様の様な金属を捨てたくはなかった。

あの日の楽しい思い出を忘れたくはなかったから……

そして、一緒に寝た時、私はちーちゃんに暗い所が苦手だと言う事実を話した。

ちーちゃんは私が暗い所が苦手だと言う事を初めて聞いたと言う。

あれ？ちーちゃんに話していなかったっけ？

その日はちーちゃんと手を繋いで眠った。

こうして手を繋いでいれば互いに生きている事が分かる気がしたからだ。

そのからどのぐらい寝たのか分からなかったけど、何処からかい匂いがしてきた。

ちーちゃんを起こして、ランタンの明かりを点けると、寝る前には無かった扉がそこにあつた。

近づいてみるとそこらいい匂いがする。

もしかしてこの扉の向こう側には食べ物があるのかもしれない。

でも、ちーちゃんは何だか怖がっている様子だ。

それでも、私達にはもう、食べ物がない……ちーちゃんの言う通り、危険があるかもしれないけど、このまま何もしなければ、何も食べられない。

何もしないで死ぬよりは何かをして死ぬ。

そっちの方がマシだった。

思えば、この決断が私達の未来を変える最初の分岐点だったのかもしれない。扉を開けると其処は料理屋さんだった。

其処には、カナザワと同じ男の人、頭に角を着けた人、耳の長い人が居た。

ヌコはもう、この下層には私達以外の人は居ないと言っていたけど、こうして私達の目の前に人が居る事にちよつと驚いた。

そして、昨日拾った金貨で食べ物を交換できるつて事で私とちーちゃんはそこで今まで食べた事の無い料理を食べた。

生の魚の料理を食べる事も出来た。

レーシヨンも美味しいけど、やっぱり魚が一番美味しいと思う。

びうは飲めなかつたけど、びうと違ったシユワシユワする水も飲んだ。

以前、飛行機の中で見つけて、ちーちゃんとの戦争の上で勝ち取ったチョコレートを使ったデザートも食べた。

久しぶりにお腹一杯食べる事が出来た気がする。

御飯が終わり、ちーちゃんに戻ろうと言うと、ちーちゃんの様子が変だった。

ちーちゃんは『帰りたくない』と言う。

怒っているのか悲しんでいるのか分からない顔で私を見てきた。

これまで、ちーちゃんが怒った事やあの乗り物（ケツテンクラート）が壊れて大泣き

した所は見たことがあるけど、こんなちーちゃんは初めて見た。

帰りたくないと言っても私達にはそれ以外の選択肢はないじゃないか。

私自身も帰りたくない。

でも、それ以外どこに行けばいいのか？

ちーちゃんとそんなやり取りをしていると、料理屋の人が此処に住まないか？と言つて、ちーちゃんは即決した。

私はあの世界の上がどうなっているのかちよつと気にはなつたが、一人であの世界に戻りたくはないので、ちーちゃんと同じく、この世界に残る事を決めた。

そして、このお店でアレツタやククロのようにお店の人としてちーちゃんと一緒に働いている。

お店で働き始めた頃、ちーちゃんが私に、

「いいか、ユー。絶対にお客さんに出す料理を食べるなよ」

と、言ってきた。

失礼だな。

流石に私だってそこまで食い意地は張っていない。

私がそう言うと、ちーちゃんは……

「お前は最後の一本のレーションを横からかつさらつただろう。それに水槽の魚をしつ

こく狙っていたし、ヌコだって初めは焼いて食おうとしたじゃないか」と、言ってきた。

ちーちゃんって結構根に持つ性格だった。

でも、魚やヌコに関しては折角の食べ物があつたのだから、食べないと損じゃないかと思っていた。

二ホンに住んでから食べ物に困らなくなつてからはそんな事はしないのになあ……食べ物よりも私はこの世界の文字を覚えるのに苦労した。

あの世界の文字さえもまともに覚えていないのだから、覚えられるのかという不安はあつた。

でも、このお店のメニューを見ている内に自然と覚えてきた。

そして、この世界には音楽が溢れている。

人が居るから当然なのだろうけど、色んな国、色んな楽器、そして、沢山の人が歌う音楽は私には新鮮でたまらなかつた。

自分もこんな歌を歌いたいと思う一心からお店のメニュー同様、歌詞と呼ばれる歌の文字の羅列も自然に頭の中に入ってきた。

そして、楽譜……楽器で音楽を奏でる時に必要な記号……

始めは何かの暗号か？と思う程、分からなかつたが、今ではある程度は読める。

お店にあるピアノと呼ばれる楽器を弾きながら、歌を歌うと、テンチョーやアレツタは褒めてくれる。

その他にもハーモニカと呼ばれる楽器も最近やり始めた。

お店に来るあの鳥の様な人も一緒に歌おうとすると、何故かクロに取り押さえられている。

あの人(?)らも歌を歌いたいように見えるのに何故、歌えないのか不思議に思った。ある日、テンチョーがテンチョーの友達と魚釣りに行くと言うので、私もついていった。

ちーちゃんは料理の研究をしたかったので、残ると言った。

魚を釣る場所：海と言う場所へ初めて来た私の海の印象は、物凄く大きな水溜まりだった。

こんなに広い水溜まりは初めて見た。

でも、なんか変な臭いも漂っていた。

テンチョーが言うにはこの臭いは潮の匂いらしい。

調味料で使うあの塩は海から取れるモノらしい。

海へ釣りに行くには船と言う乗り物に乗って海の上を走るらしい。

テンチョーが、

「揺れるけど大丈夫か？」

と、聞いてきた。

この世界に来る前はちーちゃんが運転するあの乗り物（ケツテンクラート）に乗って移動・生活をしていたので、揺れる事には慣れていたので平気だった。

釣り針と言う針の先にエサをつけ、それを海に垂らし、魚が食いつくのを待つのだと言う。

あまり、待つのは好きじゃないんだけどな……

そう思っていたけど、釣り糸を海へ放り投げたら、意外と魚は直ぐに食いついてきた。その後も面白い程に魚が釣れた。

釣れた魚をテンチョーの友達のお店で捌いて料理する。

魚は煮ても焼いても美味しい食べ物だったが、テンチョーのお店：ねこやで初めて食べた生の魚の料理：カルパッチョ。

あれは衝撃的な味だった。

昔は生で食べていた魚をこうして生で食べられたのだから……

その後も刺身と呼ばれるただ、魚を切っただけのシンプルな料理を食べた時はまさに命の味がした。

そんな刺身を今回は白いライスの上のせて食べる、『カイセン丼』と呼ばれる方法で

食べた。

大きなお茶碗・丼に盛られる刺身にキラキラと赤く光るイクラと言われる魚の卵……カイセン丼：それはまるで食べ物というよりも丼に盛られた宝石の様だった。

味は勿論……滅茶苦茶うまかった!!

今度はちーちゃんも連れて海へ行きたいな。

そして、食べきれなかった魚は持ち帰った。

この世界には食べ物物を保存できる冷蔵庫と呼ばれる大きな銀色の箱があるので、其処に入れて様々な料理にして食べることにした。

ちーちゃんの待つねこやに戻ると、

厨房からカレーの匂いがした。

「おかえり」

「ただいま!!」

「戻ったぞ」

「それで、成果はどうだった？」

「いや、もう、大漁大漁」

「そう……あつ、今日の夕食はカレーでいいかな？ 昼間に作ったんだ」

「うん、いいよ」

ちーちゃんは昼間にカレーを作ったみたいだ。

夕食前に今日釣ってきた魚を冷蔵庫に入れる為、ちーちゃんはテンチョーに教えられながら包丁で切っている。

この世界に来てちーちゃんは変わった。

あの世界では本しか興味がなかったちーちゃんがこうして料理をしているのだから……

テンチョーの言う、この世界で新しくやりたい事がちーちゃんにとって料理なのだろう。

ちーちゃんはこの世界で新しくやりたい事を見つけた。

私にはやりたい事が見つかるのかな？

夕食にちーちゃんが作ったカレーを食べ、お風呂に入りながら私はこの世界に来てなにかやりたい事が見つかったのかと自分に尋ねる。

お風呂から出た後、日記を書いているちーちゃんを見つつ、私は未だにお風呂で思った自分への質問に答えが出ないまま布団の中に入り、目を閉じた。

ねこやがお休みのある日、ちーちゃんは図書館に出かけた。

新しく料理に興味があるちーちゃんもやはり本だけは未だに興味の対象みたいだ。

私は以前、テンチョーと一緒に買い物に行ったショッピンングモールへと出かけた。

此処にはCDと言う音楽を聴ける丸いヤツが沢山売っているお店がある。

音楽を聴いていると不思議に元気になったりする。

楽器を弾いたり、歌を歌っていると、何だか気持ち良くなる。

それはまるで月の光を浴びている時のように……

お店の壁に『スクールアイドル』と呼ばれるアイドル達の絵が沢山あった。

テレビでもよくスクールアイドルの事を話しているのを聞いた事が有る。

学生と呼ばれる勉強をしながら、歌ったり踊ったりしている人達だ。

勉強をしながら、歌ったり踊ったりなんて大変だと思う。

その中で、石鹸と同じ名前の人達の中に居る小泉花陽：あの子はなんだか私と声が似ている。

最初は私も気が付かなかったが、テレビで、sの人達が歌っている時、ちーちゃん
が、

「この子（小泉花陽）の声、なんかユーの声に似ていない？」

と言ってきた。

最初私は、

「まさか、そんな事ある訳ないじゃん」

と言つて信じなかったが、その子の声を意識して聞いてみると、確かにちーちゃんと言ふ通り、この子（小泉花陽）の声は私に似ていた。

今度機会があれば、会いに行きたいな。

そう思いつつ私は発売したばかりの音楽を視聴する為、視聴用のCDプレイヤーのヘッドホンを耳に着けた。

とある高校のけいおん部に所属する女子高生達 *side*

今日、このショッピングモールで行われる音楽イベントの為にやって来たけいおん部に所属する女子部員達。

しかし……

「唯の奴、おっせえなあ〜」

「まあ、唯先輩の遅刻は何時もの事ですから」

「まったく、アイツは成長と言ふ事を知らないのか？」

どうやらメンバーの一人が遅刻をしている様で、他のメンバーは愚痴りながら遅刻しているメンバーを待っている。

すると、

「みんなー!!」

遅刻しているメンバーがやって来た様だ。

「来た・おせえぞ!!唯!!」

「ごめん、ごめん」

唯と呼ばれたギターケースを背負った栗毛色の少女が後頭部を搔きながら、他のメンバーに謝る。

「これでみんな揃ったか?」

黒い髪をストレートにした子がメンバー全員揃ったかを確認する。

すると、

「あれ?ムギ先輩もいませんよ」

黒髪でツインテールの子が唯の他にまだもう一人、メンバーが来ていない事を指摘する。

「そう言えばそうだな・:・どうしたんだ?ムギの奴。道にでも迷っているのかな?」

頭にカチューシャをつけ、おでこが特徴的な子がポケットから携帯を取り出し、唯の他にまだ来ていないメンバーと連絡を取ろうとする。

そして、携帯にメールが着ている事に気づき、早速メールボックスを開く。

「おつ、ムギからメールが着ていた」

メールはまだ来ていないメンバーからのメールだった。

おでこが特徴的な子がメールを開くと、

「っ!？」

彼女はメールを見て、顔を青くする。

「ん? どうした? 律」

「メール、ムギ先輩からなんですよね?」

「ムギちゃん、なんて言ってきたの?」

「……」

おでこが特徴的な子が無言のまま他のメンバーに分かる様に携帯の画面を皆に見せる。

「「っ!？」」

すると、他のメンバーも携帯の画面を見て思わず目を見開く。

そこには、今日高熱を出してしまった為、音楽イベントに行けない旨を書いた内容のメール文章があった。

ドラムやキーボードは既に会場に搬入されているが、肝心の弾く人が来れない。

待合わせ場所をこのショッピングモールの現地にした事、

ムギと呼ばれるメンバーが電話ではなくメールで突然の体調不良を知らせた事、

そして、他のメンバーが今の今まで誰も携帯をチェックしなかった事、

「この奇跡の様な不運が重なって今の状況となった。」

「ムギちゃんが熱!?!」

「ど、どうします!?!」

「この後のイベントはどうするんだ!?! キーボードのムギ無しで出来るのか!?!」

突然メンバーが欠けた事で動揺が広がる。

「誰かキーボードが出来る奴に心当たりは無いか?」

おでこが特徴的な子：律が他にメンバーの知り合いでキーボードが出来る奴がいな
いかを問う。

「そうだ、唯、憂ちゃんを急いで呼んで、キーボードをやってもらおう」

黒髪ストレートの子が唯にキーボードが出来そうな人物：憂を呼んでくれと言う。

しかし、

「それが、今日は憂、中学時代の友達と映画に行っていて……」

「どうやら、その憂と言う子は出かけており、今から此処へ来る事が出来ない様だ。」

「それなら、さわちゃん先生はどうですか? 一応、音楽の先生でピアノが弾けましたし
……」

黒髪ツインテールの子が新たに提案するが、

「さわちゃん、確か今日は休日出勤で、学校で仕事をしている筈だよ。昨日、愚痴ってい

たし……」

唯はそのさわちゃん先生も今日は仕事あり、その先生も今日は此処には来れない事を教える。

「くつ、さわちゃん、肝心な時に使えねえ……」

律はさりげなく、そのさわちゃん先生とやらの毒を吐く。

「どうする？今から運営さんに言つてキャンセルするか？」

黒髪ストレートの子が今日のイベントをキャンセルするかと提案するが、

「いや、ドタキャンなんてしたら放課後ティータイムの名が廢るぜ」

律はドタキャン何てしたくは無いと言う。

「じゃあ、どうするんだ？」

「こうなりや、キーボードが出来そうな奴を今ここで探す!!」

「「えええーっ!!」」

律の提案に思わず声を上げる他のメンバー。

「それで、見つからなかったらどうするんだよ!? 律!!」

「その時はその時だ!! 兎に角、探すぞ!!」

そう言つてけいおん部の子らはキーボードが出来そうな人を探しにシヨッピングモール内を散策し始めた。

くユーリsideく

幾つかのCDを視聴し、気に入ったCDを買った後、私は次に楽器店へと入った。

今はピアノとハーモニカだけど、いずれは色々な楽器を弾いてみたいな。

テレビで見たけど、ギターは何かカッコイイし、ヴァイオリンは何となくだが弾いている人のフォルムが綺麗だ。

そんな私の目の前にある楽器が置いてあった。

おつ、これは：：エレクトーンってヤツだ：：

一見ピアノっぽい形だけど、設定次第では色々な楽器の音を出せるらしい。

「すみませーん」

「はい?」

「このエレクトーン、試し弾きしてもいいですか?」

「いいですよ」

お店の人の許可をもらったので、早速エレクトーンを弾いてみる。

ピアノと同じようでやっぱり違う。

でも、鍵盤のある楽器には変わらないので、違和感なく弾ける。

エレクトーンを弾いていると、

「なんだ？ムギ、やつぱりきていたんじやないか」

「ムギちゃん!!」

と声をかけられて肩を叩かれる。

振り向くとそこには見知らぬ人らが居て、私の顔を見てなんか固まっていた。

そもそも私の名前はユーリであって、ムギではない。

この人達は私と誰かを間違えたのだろうか？

とある高校のけいおん部に所属する女子高生達 side

ムギの突然の体調不良により、律の提案でこのシヨツピングモールにいる人の中からキーボードが出来そうな人を探す事になったけいおん部のメンバー。

確かにシヨツピングモールの中には人が溢れているので、一人くらいキーボードが出来そうな人が居ても可笑しくはないかもしれないが、大勢いる人達一人一人、「あなた、キーボードが出来ますか？」と聞いている時間もない。

本番前にリハーサルはしておかなければならないからだ。

「ねえ、りつちゃん、本当に見つかるのかな？」

唯が心配そうな声で律に尋ねる。

「こんだけ、人が沢山いるんだ、一人くらいいるだろう」

「でも、どうやってその沢山の人の中から見つけるんだ？」

「てっとり早く放送でも流してみるか？」

「放送？」

「そう、飛行機とかよくあるじゃん、『お客様の中でお医者様はいらっしゃいませんか？』って」

「そんな放送で見つかるとは思えませんけど……」

「じゃあ、梓はなにか方法はないのか？」

律は梓と読んだ黒髪ツインテールの子に何かキーボードを弾ける人を見つける方法はあるのかと問う。

「うっ、そ、それは……」

梓は目を泳がせる。

すると、唯が、

「ねえねえ、此処に楽器屋さんがあるよ。楽器屋さんならキーボードが出来る人がいるかもしれないよ」

シヨップिंगモールの案内板を指さしながらそう言ってきた。

藁にも縋る思いでけいおん部のメンバーは楽器屋さんへと向かった。

すると、楽器屋さんの中で誰かがエレクトーンを試し弾きしていた。

その後ろ姿は自分達が知っているメンバーの後ろ姿そっくりだった。

「なんだ？ムギ、やっぱりきていたんじゃないか」

「ムギ先輩、たまに変なドッキリをしますからね」

「まったく人騒がせな」

「ムギちゃん!!」

けいおん部のメンバーはエレクトーンを引いているムギと思われる人物に声をかけ、唯がその人の肩をトントンと叩く。

しかし、振り返った人の顔を見て、一同は固まった。

エレクトーンを引いていたのは別人だった。

（（人違いだった!!））

（外国人か!）

（日本語通じるでしょうか?）

（此処はやっぱり英語で謝った方がいいのかな?）

けいおん部のメンバーが小声で話していると、

「だれ?」

唯は思わず声に出した。

ユーリside

「だれ？」

突然、声をかけられ、いきなり「誰？」と質問された。

私の方こそ、『あんた達こそ誰だよ？』と聞きたかった。

「え、えつと……す、すみません。その後ろ姿が友達に似ていたので……」

おでこが大きな子が私と友達を間違えた事を言ってきた。

なるほど、人違いか……

「ねえねえ、それよりもエレクトーン弾くの上手いねえ」

茶髪の子がなんか知らないが絡んできた。

私が言うのもなんだけど、ちよつと馴れ馴れしいな……この子……

「ゆ、唯先輩失礼ですよ」

黒い髪を二つにしている子が私から茶髪の子を引きはがす。

この子、髪の色や形・身長から少しちーちゃんに似ているな。

「ど、どうも……色々迷惑をかけました」

長い黒髪で・顔はクロに似ているけど、声はあのエルフのお客さんに似ている子が頭を下げてきた。

「大丈夫・気にしなくてもいいよ」

とりあえず何かされたわけではないからそう言っておいた。
すると、この人達が意外そうな顔をする。

どうしたんだろう？

「あつ、日本語喋れたんだ」

茶髪の子は私がこの国の言葉を話せたことが意外だったようだ。

むつ、失礼だな、いくら私でも喋ることぐらいは出来る。

人違いだったし、もう私には用はないだろうと思つて、再びエレクトーンを弾こうとすると、

「あ、あの!？」

おでこが大きな子がまた私に声をかけてきた。

「ん?？」

「実は私達今、キーボードを弾ける人を探しているんですけど、手伝つてくれませんか?？」

「えっ?？」

おでこが大きな子が言うにはこの後、この人達は音楽のイベントに参加する筈だったんだけど、メンバーが一人来れなくなつてしまつて、キーボードを弾ける人を探していたみたいだ。

そんな時、私とそのメンバーを間違えたみたいだ。

私は最初、断ろうかと思っただけ、意外と茶髪の子とおでこが大きな子がしつこかったので、手伝うことにした。

手伝うからには、名前で呼ばないといけないので、名前を教えてもらった。

茶髪の子が唯

おでこが大きな子が律

声がエルフのお客さんに似ている子が滯

ちーちゃんに似ている子が梓

「これが今日演奏する曲の楽譜なんだが、できるか？」

滯が楽譜を渡してきたので、早速目を通す。

「……大丈夫……なんとかできる」

「そうか……その……すまなかったな、私達の我儘に巻き込んでしまって……」

「まあ、私も音楽は好きだから構わないよ」

「それじゃあ、早速リハ、やろうぜ」

本番前の練習をした時、今まで一人で楽器を弾いていた時とは違う何かを私は感じた。

そして、本番……

『では、次の発表は桜が丘高校軽音部、放課後ティータイムの皆さんです』
司会者の言葉でステージに上がる。

これまで私はねこやでピアノ演奏をしたりしてきたので、今回も何ら変わらないと思っていた。

でも、目の前に居る沢山の人達を見て身体が固まってしまう。

手も小さく震えていた。

この時、ユーリは沢山の観客に対して吞まれてしまったのだ。

震える私の手を唯が、

「大丈夫だよ、ユーリ」

「えっ?」

「失敗しても私達がカバーするから」

「唯の言う通り：元々は私達が頼んだ事だ。ユーリは音楽を楽しめ」

滯が音楽を楽しめと言う。

「音楽を……楽しむ?」

「音楽と言う字は、音を楽しむと書きます。楽しみましょう」

梓も滯と同じように音楽を楽しもうと言う。

「では、一曲目!! 『ふわふわ時間(タイム)』!!」

「ワン、ツー、スリー!!」

♪♪♪♪♪

そして、音楽が始める。

皆でこうして音楽を奏でてしていると、何だかまだ知り合って間もない皆と一体になった感じがした。

最後の方では私達の演奏を見ている大勢の人とも一体になれた気がした。

私自身も気分が身体の内から燃えるような気分になった。

それはあの時、月の光を浴びた時のような気分だった。

アイドルやスクールアイドルの人達がなんで輝いて見えるのが少し分かった気がした。

「いやあく一時はどうなるかと思ったけど、ユーリが居て安心したぜ」

音楽イベントが終わり、律が私の肩に手を回してきて今日のイベントを乗り切ったことに安堵する。

「はあく演奏したらお腹すいちゃったあ」

唯がギターを杖の様にしてしがみついている。

「そういえばそうですね」

梓も演奏してお腹が空いているみたいだ。

(ふむ、それなら……)

「ねえ、律」

「ん？なんだ？」

「ちよつと携帯貸して」

「えっ？」

私は律から携帯を借りて、ねこやに電話する。

今日はねこやは休みだけど、テンチョーはお店に居たはずだ。

事情を話すとテンチョーはねこやを開けてくれるという。

そこで、私は律達をねこやに案内した。

「凄い!!店一軒貸し切りだ!!」

「おおー今日は飲むぞー!!」

「こ、こら、律、唯!!」

「やれやれです」

律と唯はテンションが物凄く高い。

「今日は、ウチのユーリが世話になったな、さつ、遠慮なく、食ってくれ」

「は、はあ〜」

「恐縮です」

テンチョーも私に知り合いが出来て嬉しそうだった。
宴会が進んで行くと、

「チトちゃん、ちっちゃくて可愛いねえ〜」

予想していた通り、ちーちゃんは唯に絡まれていた。

「お、お客さん、困ります」

唯達はお客さんなので、あまり強気な態度をとれないちーちゃん。

そんなちーちゃんと唯の姿を複雑そうな顔で見ている梓が居た。

「そう言えば、ユーリは鍵盤楽器の他に得意な楽器はあるのか？」

滯が私にピアノ以外に得意な楽器があるのかを尋ねてきた。

そこで、私は、

「ハーモニカ」

と、答えた。

すると、律と滯が私の肩にポンと手を置いて、

「ユーリ、無理をする事は無いぞ」

「強がるなっ」

そんな事を言ってきた。

「いや、マジなのだが……」

「それじゃあ、吹いてみて」

そう言つて律はポケットからハーモニカを取り出す。

何でポケットにハーモニカが入っているのか？

律もハーモニカが得意なのだろうか？

まあ、吹いてくれと言われたので私は律からハーモニカを受け取り、吹いてみた。

実際、ピアノの他にお客さんからリクエストがあればハーモニカも吹いているし……

私はスコットランドと呼ばれる海の向こうにある国の歌……『故郷の空』つて題名の曲を吹いた。

その他に二ホンの曲で『赤とんぼ』と言う曲を吹いた。

吹き終わると、唯達は哑然としていた。

「ほ、本当に吹けたんだな……」

「？」

私は何故、唯達が哑然としているのか分からなかった。

宴会が終わる頃、

「お嬢ちゃん達、今日はありがとうな、またいつでも来てくれ」

テンチョーが唯達にまたの来店をと言う。

「勿論来ます!!」

「うん、此処のメニューどれも美味しかったし!!」

「ああ、それと、コレ……今日来れなかった友達に渡してくれ」

テンチョーは今日体調不良で休んだムギと言うメンバーの為に
お見舞いの品を唯達に手渡した。

「いいんですか?」

澪が恐る恐る尋ねる。

「ああ、今度はその友達と一緒に来てくれ」

「はい」

「絶対にまた来ます」

「それじゃあ」

「チトちゃん、またね」

「……ぬー」

唯達は満足そうな様子で帰って行った。

ただ、ちーちゃんだけは微妙そうな顔をしていた。

後日、唯達から受け取ったねこやのお見舞いの品を食べたムギこと、紬はねこやの料理をいたく気に入り、ねこやには琴吹家が経営する牧場から良質の良い最高級クラスの牛乳、チーズ、バター、ヨーグルトなどの乳製品や肉などが納品される事になり、平日の放課後には、放課後ティータイムのメンバーの姿をねこやで見る事が増え、休日、ユーリは彼女らと共に音楽活動をする事が増えた。

ご注文は異世界少女ですか？ 前編

週に一度の土曜の日：この日はねこやの扉が地球とは異なる世界に扉が現れる。

その扉を潜って異世界の住人達はねこやを訪れ、店主の料理に舌鼓をうつ。

この日は、平日のランチタイムよりも忙しい。

店主は厨房に缶詰め状態となり、そして店のウェイトレス達も店内を忙しそうに駆けまわる。

そんな中、ねこやの常連客の一人である照り焼きチキンこと、タツゴロウがふとある事に気づいた。

「おや？今日は、チトは居らんのか？」

店内を駆け回るウェイトレス達の中にチトの姿がなかったのだ。

今日のフロアに居たウェイトレス達はアレッタ、クロ、ユーリの三人だけだった。「ふむ、何かあったのか？」

同じく常連客の一人、ロースカツこと、アルトリウスもチトの事が気になって店主にチトの事を探ねる。

彼ら年配の男性客にとって、ウェイトレス達の中で一番背が小さいチトは娘か孫のよ

うに思えるのだろう。

まあ、ウエイトレス達の中で背が小さいせいでチトが一番幼く見えるのは常連客共通の認識であつた。

「チトは今日、別の所にヘルプへ回つていましてね、来週には居ますので、ご安心を」

と、店主はアルトリウスとタツゴロウにチトが今日は、ねこやに居ない理由を教えた。

「そうか……」

タツゴロウとアルトリウスは店主の話を聞いて納得した様子。

「しかし、お主もやはり、チトの事をちゃんと思つているようだの」

アルトリウスは店主に声をかける。

「はい?」

「アレツタやユーリから聞いたのだが、お主、チトに料理を教えているようではないか」

「え、ええ……まあ……」

「ならば、チトはいわばお主の弟子じやな」

「チトが弟子……ですか……?」

「うむ、儂もヴィクトリアを弟子に持った手前、物事を教える師として、敢えて他所に出して見聞を広め、視野を広く持つようにしたことがある。今回のチトの件もそれと同じではないかのう?」

「……そう……かもしれないね」

「ふむ、チトが弟子か……ならば、ねこやは当分は安泰よのう」

「……」

タツゴロウが頷きながら言う。

店主はまだ30代半ばと若いだが今のところ交際している異性はいない。

それに店主の両親は事故で他界している。

人生一寸先に何があるのかわからない。

継承できる素晴らしい技術は後世に残すべき財宝だ。

実際に七色の霸王の二柱、異世界の王族さえも虜にしているのだから、ねこやの料理はまさにそれに当てはまる。

それはこの異世界食堂を訪れるお客の願いでもある。

店主に万が一のことがあれば、例え七色の霸王だろうと、賢者であろうと、王族であろうと万金を積んでもねこやの料理を食べることは出来ない。

そんな中、チトは今、必死に店主と同じ道を歩もうとしている。

ならば、店主にできることは、可能な限り、自分が先代である祖父から受け継いだ料理の腕を後世に：チトに教え後世に残すことだ。

アルトリウスの何気ないこの一言で店主はチトを自分の弟子として意識し始めたが、

チトの意志もあるので、チトが帰ってきたら彼女と話をしてみるかと思う店主だった。

その頃、そのチト本人は昨日の夜、店主から木組みの家と石畳の街で喫茶店をしている知り合いから厨房のヘルプが欲しいと言う話を聞いてチトに料理修行の一環としてそのヘルプに行ってみないかと提案された。

料理修行：店主の様な料理人を目指すチトにとって、それは料理人になる為、避けては通れないし、自分にとっていい経験になる。

そう思ったチトは店主の話を了承し、店主の知り合いが経営している喫茶店がある木組みの家と石畳の街へと向かっていた。

目的地である木組みの家と石畳の街へチトはバイクで向かった。

この世界へ来た時、この世界にもあの世界で愛車だったケツテンクラートがかつて存在し、名前も同じケツテンクラートだったことには驚いた。

まあ、同じ地球と言うカテゴリーに当てはめたら当然なのだろうと納得した。

しかし、一つ意外だったのは自分達の世界では当時、現役だったケツテンクラートは国によってはまだ使用されている所もあるが、この世界では、半世紀前の骨董品だったことだ。

自分達の世界では西暦3000年代：：そして、今住んでいるこの世界は西暦2000年代：：自分とユーリは1000年前の過去の地球にいる事になるが、世界中にある

武器とかを見ると、この世界で引退した骨董品が自分達の居たあの世界では現役の兵器だったりした：：：こうして技術の差の歴史の違いから、同じ地球と言ってもこの世界と、あの世界の地球はやはり別のモノ：異世界だったのかもしれない。

流石にこの世界でケツテンクラートは手に入らなかったもので、チトはそれに似たバイクの免許を取得し、こうしてバイクにまたがり、遠出をしている。

形は変わってもハンドルの形はバイクとケツテンクラートは似ている。

こうしてハンドルを握るとケツテンクラートを操縦していたあの頃を思い出す。

あの世界は嫌いだけど、ケツテンクラートは好きだった。

ケツテンクラートを操縦していた頃の懐かしい思い出を回想しながらチトは安全運転で目的地である木組みの家と石畳の街を目指した。

そのチトが目指している木組みの家と石畳の街にある喫茶店では：：

「木組みの家と石畳の街 とある喫茶店 side」

「：：：つと、言う訳で、明日のお祭りの日には、お店の混雑が予想されます。その為、父が知り合いの人に厨房のヘルプを頼んだみたいで、そのヘルプさんは前日入りで今日来る予定となっています」

木組みの家と石畳の街にある喫茶店、ラビットハウス：その店のオーナーの孫で、看板娘の少女である香風智乃が店のバイト兼ウェイトレスの保登心愛と天々座理世の二人に連絡事項として明日のお祭りによる混雑の為、今日からこの店に一時的に厨房に入るヘルプが来る事を伝える。

何故、チノが二人に態々教えているのかと言うと、ココアが初めてこの店に下宿しに来た時、チノがリゼにその日から下宿人が来る事を伝え忘れ、ココアとリゼは更衣室で鉢合わせ：ココアはリゼに拳銃を突きつけられた事があったのだ。

なお、この時リゼは下着姿だった……

今回はその様な事態を防ぐため、こうして事前に厨房のヘルプの人が来る前にそれを二人に伝えたのだ。

「お祭りか……もう、そんな季節か……」

この街の出身であるリゼは懐かしむ様に言う。

「確かに去年は凄い人だったからなあ……」

「へえ、そんなに凄かったんだ……」

「はい。その為、去年の反省を活かして、今年は厨房にヘルプを呼んだみたいです」

チノの父親が何故、知り合いにヘルプを頼んだのかその訳に思い当たる節がある様子のチノとリゼ。

二人の様子では、去年のお祭りの時にはこの店にも沢山の人が来て、てんやわんやだったみたいだ。

しかも当時、ココアはまだこのラビットハウスには居なかったもので、チノとりぜの二人で切り盛りをした。

チノの父親は昼の部の担当ではなく、お店のオーナーであるチノの祖父はこの時、身体を壊して病院に入院中だった……その後、オーナーは回復することなく、この世を去った事になっている。

今年のココアが居るとは言え、料理に専念できる人が居ると居ないとは大きな違いがある。

「厨房のヘルプさんってどんな人なんだろう？」

「チノは何か聞いていないのか？」

ココアとりぜはチノにどんな人がヘルプに来るのかを尋ねる。

「私も父からは知り合いの人に頼んで、厨房のヘルプの人が来るとしか聞いてなかったの、どんな人が来るかまでは……」

しかし、チノも父からどんな人がヘルプに来るのかを聞いていない様だ。

「どんな人なんだろう？……可愛い子だったらいいなあ〜」

ココアはまだ見ぬヘルプの人がチノや自分の友達のように可愛い子だったらいいのに

と思いをときめかせる。

「いや、チノの親父さんの知り合いなら、ヘルプに来る人も同い年ぐらいの男の人だろう？」

リゼがココアの予想に対して現実的なツツコミをする。

「えええー!!そんなあ〜」

リゼの現実的なツツコミを受けて、ココアはがっかりした様子。

「普通はそうだと思います」

チノもリゼと同じ意見の様だ。

「はあく折角可愛い子と一緒に働けるかと思つたのになあ〜」

「そこまでがっかりする事なのか!?!」

リゼはココアのあまりにもオーバーなリアクションにちよつと引いた。

木組みの家と石畳の街にあるとある喫茶店でその様な会話がなされていたその頃、その店に向かつていたチトは木組みの家と石畳の街へと到着した。

「此処が、木組みの家と石畳の街……」

その街並みは聞いた通り、木組みの家と石畳となっており、此処が本当に二ホンなのかと疑いたくなるような街並みだった。

コンクリートで出来た家だらけの街はあの世界で見慣れていた。

自然がなく、冷たい鉄とコンクリートで出来た街……

人を始めとする生物も自然もなかった為、あの世界の街並みはより一層冷たく感じられた。

だが、この世界は自然があり、人も動物も沢山いる為、温かみを感じられる。

バイクのエンジンをきり、押しながら街並みを見渡す様に歩くチト。

日本離れた街並みの他に、この街にはウサギが沢山住んでいた。

（ユーの奴が居たら、『捕まえて食べよう』とか言い出すかもな……）

街にあふれる野良ウサギ達を見ながら、『今日此処に私の相棒が居なくて助かったなウサギ達』と思いながらバイクを押しながら街を歩くチト。

時々立ち止まり、ポケットからヘルプに入る予定のお店の場所が書かれた地図を見る。

ヘルプに入る予定のお店はねこや同様、店舗と住居が一緒になっているらしい。

今日は其処に一晩泊めてもらい、明日から本格的に厨房に入る。

そのお店には自分とほぼ同い年の子らが居る事も聞いていた。

（暁達の様な子なのかな？）

チトは先日知り合った同世代の子である暁達の姿が脳裏を過ぎった。

そして、ようやく着いた目的地であるラビットハウス。

「此処が……ラビットハウス……」

バイクを止めてヘルメットを脱ぎ、今回の修行先であるラビットハウスを見るチト。

「よ、よしっ」

チトは改めて自分に気合を入れ直して、お店のドアノブに手をかけた。

チノがヘルプについての連絡事項をリゼとココアの二人に伝え終わると、ラビットハウスでは普段通りの時間が流れる。

チノが豆を挽き、コーヒーを淹れ、リゼがラテアートをして、ココアが接客をする。

そんないつものラビットハウスの光景が流れていると、来客を知らせる扉の音がした。

これもいつも通りだ。

ただ、この時来たお客は背中に大きなリュックを背負った小柄な女の子のお客さんだった。

「「いらっしやいませ」」

チノ、ココア、リゼの三人が笑顔で来店の挨拶をする。

しかし、次の瞬間、三人の顔は驚愕したモノへ変わる。

「あの、厨房のヘルプに来たものなのですけど……」

リュックを背負った女の子が来店目的を言ったのだが、

「あれ？チノちゃん、なんで腹話術をしているの？」

ココアが首をかしげながらチノを見て尋ねる。

「い、いえ、私は何も……」

「でも、今、確かにチノの声がしたような？」

リゼもチノの方を見る。

「で、ですけど、私は何も……」

「あの……すみませんが……」

すると、リュックを背負った女の子が近づき、声をかけてくる。

「ほら、また」

ココアはやはり、チノの声がすると言う。

「ですから……」

チノがうんざりしたような様子で自分は何も言っていないと言う。

「じゃあ、いったい誰が……」

「あの……」

痺れを切らしたリュックを背負った女の子がリゼの肩を叩いて自己主張する。

リゼは油の切れたロボットの様に恐る恐るリュックを背負った女の子の方へと顔を向ける。

「あの、すみませんが、厨房のヘルプに来た者なんですけど」

リュックを背負った女の子が改めてココア、チノ、リゼの三人に来店目的を言う。
すると、

「チノちゃんの声だ!!」

「ホント、そっくりです」

「ドツペルゲンガーって奴か!？」

ココア、チノ、リゼの三人は当初、目を点にしていたが、しばしの時間をおいて再起動を果たすと思わず声を上げて驚いた。

「えつと……貴女が厨房のヘルプに来た……」

「チトです」

いつまでも驚いているわけにはいかないので、ココア、チノ、リゼの三人は改めてリュックを背負った女の子、チトと話す。

「名前もチノちゃんそっくり」

ココアはチトがチノとそっくりな声以外に名前もそっくりな点にも驚いていた。

「もしかして、チトちゃんってチノちゃんの生き別れた双子の姉妹？」

「いえ、ちがいます」

ココアの問いにチノとチトはそろって否定する。

「同じ声だから、どっちが言っているのかよく分らん」

リゼもチノとチトの声の区別がつきにくいと言う。

ココア、チノ、リゼの三人もチトの声に驚いていたが、チト自身も驚いていた。

（以前、ユーにそっくりな声をしている人が居たのには驚いたけど、まさか私にも声が似ている人が居るなんてな……）

「あつ、それで、私バイクで来たんですけど、止められる場所：教えてもらえますか？」

チトは店の前に止めてあるバイクはあくまでも仮置きなので、止めてもいい場所を教えてくださいと言う。

「それでは私が案内します」

チノがチトにバイクを止めてもいい場所を案内するため、チトと共に外へ出て行った。

二人が外へ出ていくと、

「いやあくほんとに驚いたねえ〜」

「ああ、まさかあんなにそっくりだとは……しかも名前も一文字違いだから……」

店に残ったココアとリゼがチノとチトの声がそっくりだったことにまだ驚いていた。そして、バイクをラビットハウスのある建物の裏手に止めて戻ってきたチノとチト。

「はじめまして。厨房のヘルプに来たチトです」

チトはココア達に改めて自己紹介をする。

「はじめまして。ラビットハウスで働いているチノです」

「リゼだ。よろしく」

「よろしくね、チトちゃん。私はココアだよ」

「よろしく」

チトがペコッとココア達に一礼すると、

彼女はチノの頭の上の白い毛玉に目が行く。

先程、チノにバイクを止めに行く時も彼女の頭には白い毛玉が乗っかっていた。

（あれは、人形なのか？）

「あ、あの……」

気になったチトはチノの頭の上に乗っている白い毛玉について尋ねた。

「はい？」

「その……頭の上の白いヤツは……」

「ああ、これですか？ これはティップピーです。一応うさぎです」

「……生き物……なんですか？」

「生き物です。なお、非売品です」

「い、いや、いらないけど……」

（生き物……あの白い毛玉が!?この世界にもヌコの様な生物が居たのか……）

チトはウサギには見えないティツピーをこの世界におけるヌコの様な生物なのだと
思った。

チトとチノのやり取りを見ていたりゼは、

（同じ声だから、ややこしい……チノが一人芝居をしているようにしか見えない）

そんな事を思っていた。

一方、ココアはチトを見てから何かうずうずしている様子だったのだが我慢できなく
なったのか、

「チノちゃんとそっくりの声の子が来るなんて、これはもう偶然を通り越して運命だよ
！」

「いきなり運命を感じられた……」

（なんかデジャヴを感じます）

チノは前にもコレと似たような事があつた様な気がした。

チノがデジャヴを感じていると、ココアはチトの手を取って、

「私をお姉ちゃんだと思って何でも言って！」

「あ、あの……」

「だからお姉ちゃんって呼んで!!」

「じゃあ、ココア」

「お姉ちゃんって呼んで!!」

「ココア」

「お姉ちゃんって呼んで!!」

(何か前にも似たようなことがあったぞ……)

チノがチトとココアのやり取りを見てデジャヴを感じていたようにチトも最近、こんな事があった気がしていた。

その間にもココアはしつこく自分の事を「お姉ちゃん」と呼んでくれと叫んでいるので、痺れを切らしたチトは、

「お姉ちゃんって呼んで!!」

「……うるせえ」

「えっ?……お姉ちゃんって……」

「黙れ」

「……」

チトの言葉にココア、チノ、リゼは固まる。

チトは無表情でココアにさらっと毒を吐く。

「ち、チノちゃんが反抗期に入っちゃったよお〜」

「だから、それはチノが言ったんじゃないぞ」

ココアは普段、チノが言わない様な台詞を吐いた事でチノが反抗期に入ったとシヨックを受け、リゼは先程の言葉はチノではなくチトが言ったんだとココアにツツコミを入れた。

「ご、ごめん…その…あまり、こういうのには慣れていなくて…」

シヨックを受けているココアを見て、チトは謝る。

「いえ、ココアさんにはいい薬です」

チノはココアにはいい経験だと言う。

（私もあれぐらい言った方がいいのでしょうか？）

「チトさん、今日泊まるお部屋に案内します」

チノはそう思いつつ、チトを部屋へと案内する。

「あつ、うん」

チトは再びチノの案内の下、お世話になる部屋へと向かう。

「この客室を使って下さい」

「ありがとう」

部屋に着き、チトは背中のリュックを下ろす。

そして、リュックの中身をゴソゴソと漁り、

「あつ、コレ：ウチの店主さんから、このお店の皆さんにとって……」

チトはチノにねこやの店主から持って行くように言われたお土産の品を手渡す。

「あつ、どうも」

（どちらが言っているのか儂にも分からん……）

チノの頭の上のティップーもチノとチトのやり取りは困惑している様子だった。

「今日はとりあえず、私達と同じくフロアスタッフで、明日は厨房に入ってもらっていいですか？」

「はい」

「それじゃあ、制服を持ってきますね」

チノはチトの為、ラビットハウスの制服を取りに行く。

その間にチトは荷物を取り出す。

リュックの中にはチトが毎日書いている日記にねこやの店主がこれまで纏めてきた料理のレシピと自分自身が研究してきた成果が書いてあるレシピノート、筆記道具、そして寝間着や下着、私服などの着替え、そして一つの風呂敷包み。

「……」

チトは風呂敷包みを緊張した面持ちでジツと見つめていた。

「どうぞ・制服です」

そこへ、チノがチトの為に制服を持って来た。

チトが着た制服はチノの制服で大きさはチノと同じサイズだった。

「……」

自分は多分、チノよりは年上なのだろうが、身長も制服の大きさも年下のチノと同じサイズと言う事で、複雑な心境だった。

普段、ねこやでウエイトレスをしているだけあってチトの接客は手慣れていた。

お客の波がある程度引いた頃、

「ねえねえチトちゃん」

「はい？」

ココアが話しかけてきた。

「チトちゃんってラテアートできる？」

「ラテアート……」

「うん、こうやって……」

ココアはチトへの説明も兼ねてチトにラテアートを見せる。

ねこやではコーヒーを出してもラテアートまでは提供していない。

その為、チトにはラテアートが変わったモノに見えた。

「チトちゃんもやってみて」

「じゃ、じゃあ……」

チトはココアがやっていたのと同じようにラテアートを描く。

「出来ました」

チトが描いたラテアートはティップピーを見たせいで、あの世界に居たヌコを強く意識してしまい、描いたのはヌコの絵だった。

「えっと……」

「これは……」

「ヌコ」

「「ヌコ?」」

（チノちゃん、ヌコって何?）

（さ、さあ……）

（確か、インターネットの一部で用いられる猫の別称だった筈……）

ココアとチノはヌコの意味が分からなかったが、リゼにはヌコに思いあたる節があった。

「私とチノちゃん、チトちゃんも仲間、仲間」

ココアは自分とチノとチトの絵心が同レベルだと言う。

「他には何か描けないのか？」

リゼがヌコ以外に何か描けないかと尋ねると、チトは次にあの水槽を管理していた小型の四足ロボットを描いた。

((何コレ?))

やはり、チトが描いた絵はチノ達には理解出来なかつた。

実際にあの世界のモノを見なければ、チトの絵の内容は分からないだろう。

お店の営業時間が終わり、チトはラビットハウスの厨房を見渡していた。

明日はこの厨房に入るのだから、厨房の内部を把握しておく必要がある。

ラビットハウスはあくまで喫茶店なので、メインはコーヒー系のメニューで食べ物に
関しては軽食程度なのだが、明日はお祭りと言う事で、この日だけはメニューも増やす
予定となっている。

「……」

チトは厨房で一人、明日のコミュニケーションをする。

そこへ、チノがやって来る。

「チトさ……」

チノはチトが集中している様子に声がかげづらかった。
(あそこまで集中しているなんて……凄い……)

それから、十五分以上厨房に立っていた。

「あの……チトさん」

流石にずつとこのままでは不味いのでチノは声をかける。

「あつ、ゴメン……明日の事がどうしても気になって……」

チノの声にチトはようやく我に返る。

「……そうですか……あの、お風呂が出来たので……」

「あつ、うん。ありがとう」

チノから風呂を勧められ、チトは風呂へと向かう。

「ふう〜」

湯船に身体を沈め、深々と息を吐く。

今日はねこやからこの木組みの家と石畳の街への移動、そしてラビットハウスでのフロアの手伝いで疲れた。

あの世界とは違い、この世界ではほぼ毎日お風呂に入れる。

入浴は身体の疲労回復に効果がある。

改めてねこやのあの扉、そしてねこやの店主さんには感謝してもしきれない。

「……」

ブクブク……

身体を更に湯船の中に沈めると、

「チトちゃん!!一緒に風呂入ろう〜ココア風呂だよ〜」

「……ぬ〜」

そこへ、ココアが入ってきた。

(ココア風呂!?!なんか、甘ったるくて粘着性がありそうなんだけど……)

香風家の湯船は大きく、二人が入っても全く問題がなかった。

チトはあの世界でもユーリとよくお風呂に入っていたので、誰かと一緒に入る事に關して別に苦ではなかったが相手がココアだと何かされるのではないかと警戒してしま

う。

しかし、予想に反してココアはチトに何もしなかった。

「ねえ、チトちゃん。今日は一緒に寝ない?」

「えっ?」

チトにとってココアからの提案はある意味ありがたかった。

この世界に来てチトとユーリは共に寝ている。

これまでずっと一緒に寝てきたので、一人で眠ると言う行為にやや不安があった。そう思うとユーリは今日明日大丈夫だろうか？とねこやに居るユーリの事が心配になった。

そのねこやでは……

「ねえ、アレツタ」

「はい？」

「今日、泊まっていけない？」

ユーリはアレツタに今日はねこやに泊まっていけないかと言う。

「えっ？でも……」

アレツタはチラツとねこやの店主を見る。

「ん？ああ、別に構わないぞ。今日はチトが居ないからな、ユーリも寂しいんだろう」

店主はアレツタが泊まる事にOKを出す。

来るのは土曜に一度だけど、帰るのは何時でも帰るので問題はなかった。

向こうの世界の仕事先のサラ・ゴールドはトレジャーハンターの仕事で長期出張なので、向こうの世界の仕事も暫くの間は休みとなっているので、その点も問題はなかった。

こうして、ユーリの方も寝る事に関して問題は解消した。

一方、ラビットハウスの方では……

「わ、分かりました」

チトとしても一人で眠る事に不安があった為、彼女はココアの提案を受け入れた。そして、チトとココアがお風呂から出るとチノが夕食の準備をしていた。

「私も手伝おうか？」

チトが夕食の準備の手伝いをするかと言うが、

「いえ、大丈夫です。チトさんは今日、色々あつて疲れているでしょうし……」

「じゃあ、明日の朝ご飯は私が作ろう。本番前の練習になるし」

「分かりました」

明日の朝ご飯はチトが作るところになった。

尚、この時、ココアはこの場には居なかった。

彼女の知らぬ間に密かに事は進んでいた。

そして、夕食となり、

「今日は、チトちゃんと一緒に寝るんだけど、チノちゃんも一緒に寝ない？」

夕食の最中、ココアは今日、この後、チトと一緒に寝る事をチノに伝え、彼女にも一緒に寝ないかと誘う。

チノは当初、迷っていたが、

「まあ、親睦を深める事は大事なので……」

と、チノもココアとチトと一緒に寝る事にした。

理由としてはなんだが自分だけがハブられているように思えたからだ。

それから、時間が経ち、チノがチトの居る客室へと行くと、チトは客室のテーブルにノートを広げてそれを何度も確認するのように見ていた。

「チトさん？」

「ん？ああ、チノか」

「何を見ているんですか？」

「ん？これか？これは、料理のレシピノート。明日は、料理を作るから、今の内に予習をしておこうと思って」

「そ、そこまで思い詰める必要はないと思いますけど……」

「でも、お客さんに出すからには妥協は出来ない。チノも此処で働いて、コーヒーを淹れているならこだわりがあるんじゃないか？」

「え、ええ……まあ……」

「それと同じだよ。ただ、チノはコーヒー、私は料理……その違いだから」

「はあ……」

「でも、そろそろ寝ないと、明日に響くから、今日はこれぐらいにしておこう」

チトはそう言ってレシピノートを閉じると、次に日記帳をだして、日記を書き始める。「それは何ですか？」

「ん？これは日記だよ」

「日記……毎日書いているんですか？」

「そうだよ……この日記が有れば、私が死んでもこの日記が私と言う人間が存在していた事を証明する証になるから」

（チトさん、ココアさん達とほとんど変わらない年齢なのに、どうしてそんな考えに……）

チノにはチトの考えがよく分からなかった。

何故、ココア達と変わらない年齢でそんな考えを持つのだろうか？

彼女は『死』を身近で感じた事があるのだろうか？

チノがそんな事を思っていると、ココアがやって来た。

チノの疑問が解消される前にこの日はチトが泊まる部屋に敷かれた大きな布団に三人はチトを真ん中にして川の字で眠った。

ご注文は異世界少女ですか？ 中編

ラビットハウスは、昼間は喫茶店であるが、夜はバーへと変わる。

バーテンダーはチノの父親のタカヒロが務めており、その横にはチノの頭の上に居たティッピーが居る。

「それにしても今日来たチトとか言う娘には驚いたわい」

「ああ、チノの声に物凄く似ていたな」

「うむ、儂もチノとチト・どちらが話しているのか判断がしにくかったぞ」

タカヒロはグラスを磨きながらティッピーと会話をしている。

彼自身も夕食時にチトと対面して彼女が自分の娘とそっくりな事に驚いていた。

ティッピーはチノとチトの声がそっくりな事を言っているが、実はティッピーの声もねこやの常連の一人、ロースカツこと、アルトリウス、そしてチトとユーリがお世話になっていた『おじいさん』と声が似ていた。

「まさか、あのチトとか言う子……お前さんが余所の女に産ませた子じゃないだろうな？」

ティッピーは、チトはタカヒロが妻以外の女の人……つまり、愛人との間で生まれた

子なのではないか？と勘繰る。

「俺にそんな甲斐性があると思うか？親父？」

「ふむ、そう言われればそうだな」

自分の息子の甲斐性からチトがタカヒロと愛人との子でない事をあつさりとな得するティツピーだった。

「うっ……うーん……」

チトは目を擦り、身体を揺すって目を覚ます。

彼女の朝は大抵早い。

普段は朝食の準備とその日の料理の仕込みの準備の手伝いなどがあるからだ。

この日もその習慣から普段起きている時間に目が覚めた。

ふと、隣を見るとチノがスースーと寝息を立てている。

しかし、もう片方を見ると、其処には何故か昨夜は一緒に寝た筈のココアの姿が無かった。

「……」

「スピー……」

ココアは何故か布団から出て、扉の近くの床で寝ていた。

(な、何であんな所で……?)

チトは何故、ココアが布団から出て床で寝ているのか不思議に思った。

(あの一晩で一体何があったんだろう?)

ココアの状態を不思議に思いつつもチトは今日の朝食と厨房の仕込みの為、チノとココアはまだ寝ているので、二人を起こさないようにそつと布団から出た。

布団から出たチトは洗面と着替えをして厨房へと向かう。

エプロンをつけて頭に三角巾をして冷蔵庫の扉を開く。

そこから昨夜に仕込んでおいたコーンポタージュが入った鍋と卵とベーコンの切れ端、そして料理に使う調味料を取り出し、コーンポタージュが入った鍋と黒光りするフライパンをコンロの上に置き、火にかける。

ベーコンの切れ端を手早く薄切りにしたものをフライパンにかけて、炒め物用の油を出させる。

(卵は……塩、胡椒にミルクとチーズを少し入れてつと……)

ボールに入れた卵を溶きながら、味付けの調味料を入れて卵液を作る。

次にフライパンの上でジュ〜と音を立てているベーコンを取り出し、ベーコンの油が乗っているフライパンへと卵液を流し込む。

手早くかき混ぜて空気を含ませ、半生の状態で火を止めて蓋をしめる。

その間に冷蔵庫の野菜室から野菜を取り出し、慣れた手つきで生野菜を小鉢に盛って、ドレッシングを一振りかける。

そんな調子でチトは黙々と朝食の準備を進めていった。

「……うーん」

チトが起きてから次に目を覚ましたのはココアだった。

流石に床で寝ていれば外気と寝苦しさで目も覚めるだろう。

「あれ？ 私なんでこんな所で……」

ココア自身も何故、自分が布団から出て床に寝ているのか分からなかった。

「あれ？ チトちゃんが居ない……」

ココアが布団の中を見ると、そこにはチノだけでチトの姿は居なかった。

「おトイレかな？……あつ、そうだ!!」

ココアは何かを思いついた様で、チノを起こさないようにそつと部屋を出た。

「朝ご飯を作って、チトちゃんをびっくりさせちゃおう!!」

ココアは朝ご飯を作ってチトをびっくりさせようとしたのだ。

しかし、

ジユッ

トントントントン……

厨房には既にチトがおり、料理を作っていた。

「がはああああああ!!」

「っ!?!」

チトが料理をしていたら、厨房に突如、ココアの絶叫が響いた。

その声を聞いて料理を作っていたチトはビクツと身体を震わせた。

「な、何っ!?!」

「うぐう……奪われる……姉としての威厳も……仕事も……プライドも……」

ココアは厨房の床に orz の姿勢をとり、がつくりと項垂れる。

「ココア……まだ寝ぼけているのか?」

ココアの行動にチトは彼女がまだ寝ぼけているのかと思う。

「そんな事で騒いだのか?」

調理しながら、チトはココアが何故、大声をあげたのかその理由を聞いて呆れた。

ココアは朝食用のパンを焼いている。

「は、ゴメン」

「まあ、今はこうして手伝っているから別にいいじゃないか」

「うん…そうだね…」

チラツとココアを見て、その後はひたすら手元に集中するチト。

「……」

ジユッ

トントントントン……

「……チトちゃん手際がいいね」

「まあ、普段からやっているから」

「ふうくん…ねえ、チトちゃん」

「なに？」

「チトちゃんはコックさんを目指しているの？」

「えっ？」

ココアに言われて、チトは自分の将来についてちよつと考えてみた。

料理にこうして興味を持ったのは、元々あの絶望した世界から自分を救ってくれたねこやの店主とその店主が作った料理がきっかけだった。

そもそも今回のラビットハウスのヘルプも自分の料理の腕を上げる為の一環だった。

それなら自分は料理の腕を高めて何をしたいのか？

チトはそこまで考えた事がなかった。

ただ、自分を絶望から救ってくれたねこやの店主のような料理を作れる人になりた
い。

そう思いながら、これまで自分は店主から料理を教わってきた。

それが、将来コックになりたいと言う自分の夢なのだろうか？

ココアの一言でチトは将来について考えてみたが、頭を振ってあっさりとその考えを
振り切る。

今はそれよりも自分にはやるべき事がある。

将来について考えるのはこの仕事を終えてからだ。

今は集中して料理を作る事だ。

そして、出来上がった朝食を並べて行く。

「さあ、完成だ」

「わあー凄い!!」

「ココアはチノ達を起こしに行つて……その間に配膳をしておくから」

「りよーかい!!」

ココアは一応、パンを焼いただけであるが、ちゃんと朝食作りに貢献できた事が嬉し
かったのか、ルンルン気分で厨房から出てチノ達を起こしに行つた。

タカヒロは夜遅かったので、まだ眠って居り、ココアはチノを連れてリビングへと降りてきた。

「わぁー!! 凄い!! 厨房で見たけど、こうして並べてみるとどれも美味しそう!!」

ココアはテーブルに配膳された朝食の数々に思わず声をあげる。

「ホント… 凄い… です…」

チノもホテルのレストランで出しているような朝食のメニューに思わず声を漏らす。

「あれ？ チノのお父さんは？」

「父は昨日の夜、遅かったみたいでまだ寝ています」

「そうか… それじゃあ、弁当を作っておいて後で食べてもらおう」

チトはタカヒロの為、弁当を作っておくと言う。

「それじゃあ…」

「「いただきます!!」」

「はむっ…」

チトはパンを一口食べる。

パンは柔らかく、かすかに甘い。

口の中一杯に広がる、小麦の香ばしい香り。

(ふむ、流石は実家がパン屋であるだけあって、なかなか美味しい…)

チトはココアが焼いたパンの味を確かめるかのようによくりと味わう。

朝食を作っている時、ココアが「私の家はパン屋なんだ。だから、パンに関しては自信があるんだよ」と言っていた。

その言葉通り、パンは美味しかった。

一方でココアとチノはチトが作ったベーコンと卵を食べる。

ベーコンは程よく油が抜けしつかりと肉の旨みがする。

塩もしつかり効いており、その肉の旨みがまたパンとよくあう。

そして卵の方は、フライパンで炒める時に使用したベーコンの油をたっぷりと含んでいた。

それだけでも十分美味しいのに、さらに味付けに塩と胡椒、その上さらにミルクとチーズまで入れることでそれらが混ざり合い、優しい味を感じさせた。

「このベーコン、すつごく美味しい!!」

「卵も絶品です」

「あつ、うん・ありがとう」

やはり、こうして自分が作った料理を『おいしい』と言って食べてもらえると嬉しいものである。

朝食が終わり、皆で片づけをしている間にチトは手早くタカヒ口の為の弁当を作りそ

れを冷蔵庫へと入れる。

「それじゃあ、チノのお父さんの朝ご飯、冷蔵庫に入れておくから」
「分かりました」

そして、開店時間前にリゼがラビットハウスにやって来た。

更衣室で着替えをしていると、チトはリゼのロッカー中にホルスターの中に入った銃（モデルガン）があるのを見つけた。

「えっ？銃……」

「ああ、これか？」

「リゼは銃が好きなのか？」

「あつ、いや：私は父が軍人で幼い時に護身術とかいろいろ仕込まれているだけで……
でも普通の女子高生だから信じる！」

「なんか、こんなやり取り前にあつたような気が……」

ココアはリゼとチトのやり取りにデジャヴを感じていた。

「で、チトは銃に興味があるのか？」

「いや、私はあまり得意じゃなくて、私の……友達（？）が、銃が結構上手でね。10発
中、8〜9発ぐらいは命中させていた」

チトはユーリの銃の腕前をリゼに教える。

「ほお、それはなかなかの腕前だな」

「私はどうも銃の反動で倒れてしまうから、弾が当たらないんだよね」

「えっ？反動？」

リゼはチトの言う銃はてつきり自分と同じモデルガンだと思っていたのだが、モデルガンは撃つても反動はない。

と言う事は……

「なあ、もしかしてチトの言う銃ってモデルガンじゃないのか……？」

「えっ？銃にモデルなんてあるのか？」

これまでオモチャの銃なんて接した事が無いチトにとって銃に偽物なんてあるのかと疑問に思った。

「「……」」

「チトは何処から来たんだ？」

「本物の銃を撃つてもいい所なんて、海外なの？」

「……誰も居ない世界」

「「えっ？」」

チトの発言におもわず絶句するココア達。

しかし、

「もう、チトちゃんそれ、全然面白くないジョークだね」

「なんだ、ジョークか」

「変なジョーク言わないでください」

ココアはチトの言う誰も居ない世界をギャグだと思っていた。

普通はチトとユーリの二人が、世界が終わった世界から来た異世界人だと分かる筈が無い。

「マジなのだが……まあ、いいか」

チトはボソツと呟くが、その呟きはココア達には聞こえなかった。

「それで、チトちゃんの友達ってどんな人なの？」

ココアはチトにユーリの事を聞いてきた。

「ユーリについてか？うーん……」

「友達ってユーリって言うの？」

「あつ、いや、名前はユーリってヤツで髪の毛は金髪で……」

（（シヤロ《ちゃん》みたいな子なのかな？））

金髪と言われてココア達が真っ先に思い浮かべたのが、知り合いの貧乏娘だった。

「それとかなり食い意地が張っている」

チトの言うユーリのイメージがココア達には湧かない。

「機会があれば、いずれユーを紹介するよ」

ユーリを分かってもらえるには直接ココア達にユーリを会わせる方が手っ取り早い。皆が私服からラビットハウスの制服へ着替えて行く中、チトはリュックの中に入っていた風呂敷包みをジツと見つめる。

「あれ？チトちゃん、着替えないの？」

「あつ、いや……ちよつと、思う所があつて……」

チトは風呂敷包みを更衣室のテーブルの上に置き、風呂敷包みを開く。

その中には店主がチトの為に用意した白いコック帽、白いコック服、茶色いサロンエプロン、赤いスカーフが入っていた。

仮とはいえ、この服を纏った瞬間から自分はウエイトレスからコックへと変わる。

そして料理人の腕次第で店の運命が決まると言っても過言ではない。

此処は自分がお世話になっている店では無いとはいえ、ラビットハウスの今後の運命は自分の肩に……自分の料理の腕にかかっているのだ。

自分の提供した料理のせいでこのラビットハウスの評判を落したり、最悪閉店に追い込んだりしてしまうのではないか？

緊張によって、変に追い詰められすぎて、マイナス思考に陥るチト。

「大丈夫？チトちゃん」

ココアがチトに声をかけるが、チトは小刻みに震えている。

「そ、その……私の料理で、お客さんを満足させることが出来るか不安で……」

「大丈夫だよ!!チトちゃん!!」

「そうですよ。朝ご飯のベーコンも卵もスープもとっても美味しかったですから」

チトの料理を食べたココアとチノは大丈夫だと言うが、不安は拭いきれない。

そこへ、

「大丈夫だ、チト」

リゼがチトの頭に手を乗せる。

「お客が多くなったら、私も厨房のヘルプに回る。それにラビットハウスはチト一人だけではないぞ!私やチノ、ココア、皆が居る」

「そうだよ!!チトちゃん!!私達は皆で一つのチームなんだから!!」

「リゼさんとココアさんの言う通りです。チトさん、一人で悩まないでください」

ココア達から励まされてチトも何だか背負っていたプレッシャーが少し軽くなった気がした。

「う、うん」

チトは着ている私服を脱ぎ、ズボンを履き、白い上着を着て、サロンエプロンを腰に着け、首元に赤いスカーフを巻き、そして最後にコック帽を被り、

デエエエエエエエエエ

コックトが降臨した。

「さあ、行くぞ!! 今日のお店は戦場だ!!」

「「「おおおおおー!!」」」

リゼの掛け声と共にチト達は戦場へと降り立った。

くとある輸入雑貨の貿易商 side

今日は、仕事がオフだが、この街で大きな祭り：骨董市があると言うのでやって来た。木組みの家と石畳の街と言うだけあって、街並みはヨーロッパみたいだ。

此処：：本場に日本なのだろうか：：？

流石、洋風な街並みだけあって、出品されている骨董品も海外製のモノが多い：：目の保養になるし、いい勉強にもなる。

おっ？ちよいといいい店発見。

見学してみよう。

とある輸入雑貨の貿易商は木組みの家と石畳の街の中にある食器屋に入った。

おおおお

何故だか、ホツとしちやう雰囲気……

これ全部：現地に行つて仕入れてきているのか？

結構：本格的じゃないか……

とある輸入雑貨の貿易商は食器屋の商品を十分堪能した後、店を出て木組みの家と石畳の街を歩く。

俺も店を一軒ぐらい開いてみてもいいかと思つて参考に見に来たが……

それにやっぱり、俺には店の主は似合わない。

結婚同様、店なんか下手に持つと、守るモノが増えそうで、人生が重たくなる。

男は基本的に身体一つで居たい……

でも、個人で商売をしていると人間関係のわずらわしきは無いが、その分、仕入れから営業、納品まで全てを一人でやらなければならぬ。

だから毎日、いろんなところに向く必要がある。

そこら辺がネックなんだよなあ

とある輸入雑貨の貿易商がそう思いながら木組みの家と石畳の街を歩いていると、一軒の甘味処を発見する。

ん？お茶の香り……

……

入つて見るか……

とある輸入雑貨の貿易商は甘兎庵と看板に書かれた甘味処へと入る。

たのも〜

「いらつしやいませ〜」

すると、お店の中では長い黒髪に緑の着物、フリルの付いたエプロンを着た女性の店員さんが出迎えた。

……ありがたき幸せ

時間や社会にとらわれず、幸福に空腹を満たすとき、つかのま、彼は自分勝手になり、自由になる。

誰にも邪魔されず、気を遣わずものを食べるといふ孤高の行為。

この行為こそが、現代人に平等に与えられた、最高の癒しと言えるのである。

店員さんの案内で席に着くとある輸入雑貨の貿易商。

ほくら、こんな店を見つけちゃった……

今日は、なんか、いい流れかもしれないぞ。

「すみません、メニューを……」

「はい」

店員さんからメニューを受け取り、開いてみると、其処に書かれていたお品書きは、煌めく三宝珠

ユキ腹の赤宝石

海に映る月と星々

花の都三つ子の宝石

黄金の鯨スペシャル

姫君の宝石箱

フローズン・エバーグリーン

など、中二病がかった名前メニューだった。

なんじゃこりや……

ダメだ、俺の許容範囲を超えている。

よし、此処は正攻法で様子を見よう……

「すみません。クリームあんみつを下さい」

「はい」

無事に注文を終えたとある輸入雑貨の貿易商は、

勝った!!

心の中で喜びガッツポーズをとった。

そして、お茶を一口啜る。

ズズズズズズ……

ほお……ほうじ茶……ほお

ほうじ茶を呑み、リラックスしていると、

「お待たせしました」

注文したクリームあんみつが届く。

その大きさを見て、とある輸入雑貨の貿易商は、

ありやく本当にメガだ……

「どうぞ」

注文したクリームあんみつは井に果物、寒天、あんこ、クリームがもつさり盛付

けられ、『あまうさ』と書かれた旗がいくつも刺さっていた。

ごめんなさい……

【兵どもが夢の跡】……甘兔庵のオリジナルあんみつ。とにかくポリュームがすごい!

すごいことするなあ……

井に盛られたクリームあんみつを見ながら、とある輸入雑貨の貿易商はそのポリュー

ムに驚くが、

まあ、いいか……

と、納得して早速注文したクリームあんみつを食べ始める。

豆と寒天：これが美味しい甘味処は信用できる。

焼肉屋で言えば、キムチの様な、店の試金石だ。

食べ進むにつれて、具が混じって味が変わる。

それが嬉しくてたまらない。

間違いない。

こんな店こそが、近所にほしい店なんだよ。

ああ、美味かった。

「ごちそうさまでした」

甘兎庵のクリームあんみつを堪能したとある輸入雑貨の貿易商は再び木組みの家と石畳の街を散策し始めた。

とある輸入雑貨の貿易商が木組みの家と石畳の街を散策している頃、ラビットハウスでは……

「3番テーブルのふわとろオムレツあがりました!!」

「つづいて4番テーブルのBLTもあがったぞ!!」

「オーダーです。2番テーブル、ホットケーキのセットを一つ」

「りようかい」

「1番テーブルのベーコンエッグ、出来たぞ!!」

「はい」

厨房は文字通り戦場となっており、チト一人では回らなくなり、リゼがチトのアシストに回った。

フロアにはチノとココアがオーダーをとったり、注文の品をテーブルへと運ぶ。

チノの場合、さらにそこからコーヒーも淹れているので、かなりてんでこ舞いだ。

チトも厨房のコンロと調理台、冷蔵庫を行ったり来たりしている。

(緊張していた割にはちゃんとできているじゃないか)

リゼは厨房を忙しそうに駆け回るチトの姿を見て、開店前の緊張していた姿はまるで嘘のように見えた。

多少、荒削りな所はあるが、チトはねこやの主人の様にオーダーされた料理を捌いていた。

厨房から出来た料理をフロアのお客が待つテーブルに運んでいたココアが一人のお客さんから呼び止められ、料理について聞かれた。

「あつ、すみません」

「な、なんでしよう？」

「ラビットハウスに誰か新しい人でも入ったの？」

「い、いえ：：でも、どうしてですか？」

「料理の味が少し、違ったから：：」

「えええーっ!!それってもしかしてお口に合いませんでしたか？」

「ううん、とつても美味しいから気になったの」

「そ、そうですか、よかつた〜実は今日だけ、厨房のヘルプさんが来ていてその子が料理を作っているんです」

「それじゃあ、その子に伝えて、『美味しかった』って：：」

「はい」

やがて、昼時をすぎると、お客の波もひと段落した。

「チトちゃん、お客さん、チトちゃんのお料理『美味しかった』って」

「私も厨房の人に伝えてくれって言われました」

「よかつたね、チトちゃん!!」

「う、うん：：なんだか：：とつても嬉しい：：」

沢山の人から自分の料理を褒めてもらい、思わず嬉し涙が出るチトであった。

チト達が引き続き、ラビットハウスで仕事をしている頃、街中を散策していたとある輸入雑貨の貿易商は……

街中を歩きまわって……

腹が……

減った……

よし、店を探そう!!

とある輸入雑貨の貿易商は自らの胃袋を満足させる為に唸る胃袋を抱えつつ、食事が出来そうな店を探す。

腹が物凄い勢いで絞まっていく……

さっさと飯を食えと俺に催促している。

ん？

そんな店を探しているとある輸入雑貨の貿易商の目の前にウサギをかたどったレリーフのお店が姿を現す。

見た目は喫茶店のようなだが、ラビットハウス……ラビット……ウサギ料理でも出す店なのだろうか？

流石にこの洋風の見た目でウサギ鍋というわけはあるまい。

ウサギの肉の料理と言う事は、フランス料理か何かだろうか？

この見事な木組みの家と石畳の街で昼飯を食うなら、そういうのもアリかもしれない。

よしっ、入ってみるか。

とある輸入雑貨の貿易商はラビットハウスの扉を開けた。

「……いらっしやいませ」

扉をあけたとある輸入雑貨の貿易商を迎えたのは、青髪で小柄な店員の少女だった。

随分と小さな店員さんだなあ……

自分を出迎えた店員にそう思いつつ席に座る輸入雑貨の貿易商。

「こちらがメニューになります」

「どうも」

早速メニューを開いてみると、其処にはウサギを使った料理は書かれていなかった。

「あれ？ウサギが居ない」

（誰かと同じことを言っている気がします。でもこのお客さんの場合、その意味合いが

明らかに違う様な気がします）

なんだ、ウサギ料理はないのか……

いや、もしそうならばどうしてラビットハウスなどという名前なのだろう？

メニューにもないし、見たところ、店内にはウサギの姿も見当たらないし……

一応聞いてみるか。

「あの、すみません」

「はい」

「ウサギは取り扱ってないんですか？」

「ウサギですか？ 一応、この子がうちの看板ウサギですが……」

青髪の小柄な店員は自分の頭の上に鎮座している白い毛玉を指さす。

「それ、ウサギなんですか？」

白い毛玉はどう見てもウサギには見えないが、店員がウサギだと主張しているので、多分、ウサギなのだろう。

「はい」

「あの、一応聞きますけどそれは……」

「非売品です」

青髪の小柄な店員はこのウサギは非売品……つまり売り物ではないと言う。

やっぱり食用ってわけじゃないのか……

さて、そうなるって何を注文すればいいのやら……

ウサギ料理を諦めて、別の料理を注文することにした輸入雑貨の貿易商。

すると、メニューの中にナポリタンがある事を発見する。

ナポリタン……

そうだ、こういう所のナポリタンって、案外良いんだよ……ケチャップで真っ赤で

……

よし、ナポリタンにしよう。

一件落着だ。

良い所に着地したじゃないか。

「すみません」

輸入雑貨の貿易商は声と手を上げて、店員を呼ぶ。

「はい。ご注文はお決まりですか？」

青髪の小柄な店員はトテトテと輸入雑貨の貿易商が座るテーブルへと駆け寄る。

「ホットコーヒーを下さい。それとナポリタンを」

「はい」

注文を終えて、輸入雑貨の貿易商は店内を見渡す。

その間に、青髪の小柄な店員は厨房へと行き、オーダーを伝える。

「オーダーです。5番テーブルのお客さん、ナポリタンです」

「了解」

オーダーを受け、チトは早速ナポリタンを作り始める。

大鍋にパスタを茹でる為の水を入れ、火にかける。

水が沸騰する間、具材を用意する。

玉ねぎ、ピーマンを食べやすい大きさに切り、ウインナーは斜めに切る。

ナポリタンソースはケチャップ、ウスターソース、塩、胡椒を入れて、隠し味として牛乳と砂糖を入れ、それらをよく混ぜる。

フライパンを中火に熱し、バターとオリーブ油を入れて玉ねぎを炒める。

玉ねぎが透き通ってしんなりしたら、ピーマン、ウインナーを加えて更に炒め、軽く塩胡椒をふる。

火が通ったら一度取り出す。

そして、具材を炒めたフライパンにナポリタンソースを入れ、混ぜながら中火で煮立てる。

やがて、ソースが泡立ち、色が赤くやや透明になるまでしっかりと煮立てる。

ソースを焦がさないように休まずにかき混ぜる。

そして、具材とソースを一つにし、軽く混ぜ合わせナポリタンソースの完成。

やがて、鍋のお湯が沸騰したら、お湯に塩とオリーブオイルを少し加え、パスタをいれる。

パスタの麺は通常の1・7mmよりも少し太い麺を使用する。

茹で時間も明記されている時間よりも一分、はやく茹でる。

茹で汁も全部は捨てずに少し残しておく。

パスタが茹つたら、ナポリタンソースと麺、茹で汁を入れて手早く混ぜる。

煮詰めたソースを茹で汁でのばしつつ、全体に絡める。

麺に十分、ナポリタンソースが絡んだら、お皿に盛りつけ、

「5番テーブル、ナポリタンあがりました」

「はい」

チトがオーダー品のナポリタンが出来た事を知らせると、チノがそれを運んだ。

コーヒー豆のいい香りがする中、輸入雑貨の貿易商が注文をした品を待っていると、

「お待たせしました。ご注文のナポリタンです」

輸入雑貨の貿易商の目の前に白い皿に盛られた赤々とした山が運ばれて来た。

白い皿に盛られたそれは、鮮やかな色をしていた。

トマトを使ったソースであるケチャップにより、赤みを帯びた橙色に染め上げられた

麺に、時折混じる鮮やかな緑色をしたピーマン。

ほのかに歯ごたえを残した玉ねぎ。

斜めにスライスされ、油により、橙色の輝きを放つウインナー。

【ナポリタン】……昔ながらのケチャップ味。具も、ピーマン、玉ねぎ、ウインナー・ソーセージの揃い踏み。

「いただきます」

ケチャップが織り成す、胃袋を直撃する香りを胃袋に流し込みながら輸入雑貨の貿易商は早速ナポリタンをフォークに絡め、口へと運ぶ。

まずは一口。

これこれ、懐かしい味だ。

時々無性に食べたくなるケチャップ味だ。

麺が太い……いいじゃないか……

パスタじゃなくてスパゲッティ……いいぞ、これは……

歯ごたえとほのかな苦味を残した、細切りにされたピーマンや、甘みと歯ごたえがある玉ねぎ、ソースと自身の油と肉汁の旨みを持つウインナー。

それらの具材は量が少ない。

だが、たつぷりの麺にほのかに添える程度の具材というバランス。

それこそが正解なのだ。

具材が多すぎでは、麺の味を楽しむには不適である。

よくよく味わって見れば、それらの具材にはもう一つ、麺に対する味付けという役割

がある。

具材は麺と共に口に運ぶときに自身の旨みを麺に分け与える。

それがわずかな味わいの違いとなり、麺に別の風味を与えている。

具材は麺と言う主役を引き立てる脇役かもしれないが、脇役たる役目を十分に果たしている。

麺と言う主役と具材と言う脇役が一体となった舞台料理：それがナポリタンなのだ。

輸入雑貨の貿易商はある程度の量を食べた後、

ちよつと冒険してみるか：

輸入雑貨の貿易商はテーブルに置いてあるタバスコに手を伸ばす。

タバスコソースをナポリタンに振り落とし、味付けを変えて、一口。

舌を襲うのは、激烈な辛味。

先ほどまでのナポリタンには無かった味だが、それがアクセントとなって輸入雑貨の貿易商の胃袋を刺激し、その手に持つフォークを突き進める。

輸入雑貨の貿易商はあつという間にナポリタンを食べきり、気がつけば、皿には橙色の残滓を残すのみとなっていた。

食後にホットコーヒーを飲み、一息ついて、

「い（ち）ち（ぞう）さままでした」

食事を終え、再び店内を見渡す輸入雑貨の貿易商。

店内は昼を過ぎて、お客さんの波が一段落ついているのか、ウエイトレス同士で会話をしている余裕がある。

なんか、自由だよなあ

店はどこも、独立国だ。

此処はこういう国（店）なんだなあ……

心が寒くなったら、そつと尋ねてみよう……

「お勘定、お願いします」

「はこ」

とある輸入雑貨の貿易商は満足そうにお勘定を払ってラビットハウスを後にした。

ご注文は異世界少女ですか？ 後編

『まもなく、一番線に電車が参ります。危ないですから、黄色い線までお下がりください』

木組みの家と石畳の街にある駅のホームに警笛と共に電車が到着し、乗客達が降り降りをする。

その中で、一人の金髪の少女が木組みの家と石畳の街の駅のホームに降り立った。

「ぬーん、此処がちーちゃんが居る木組みの家と石畳の街か……」

金髪の少女、ユーリはチトの様子が気になり、ねこやの店主の許可をもらって木組みの家と石畳の街へとやって来たのだ。

それに今日の朝、ねこやで朝食を食べた後、アレツタが向こうの世界に帰ってしまったのだ。

今日の夜の事もあり、チトの所へ行くには丁度良い理由だった。

「さて、ちーちゃんが居るラビットハウスとやらに行きますか？」

ユーリはとちとの居るラビットハウスを目指した。

「えっと……ラビットハウスは……」

ねこやの店主から貰った地図を見ながらチトがヘルプで居るラビットハウスを目指すユーリ。

するとその途中で街中にあふれる野良ウサギを見つける。

「おっ、ウサギだ……」

ユーリは野良ウサギをジッと見つめる。

ウサギの可愛さに心を奪われたのかと思いきや、

（丸々太って美味そう……これだけ沢山いるんだし、アイツだけでも食べられないかな……ウサギってまだ食べた事ないんだよねえ）

と、初日にチトが野良ウサギを見た時とほぼ同じ様な事を考えていたユーリ。

ユーリのそんな考えを読み取ったのか、野良ウサギは身体をビクツと震わせてその場から逃げていく。

「あつ、待て!!」

ユーリは野良ウサギを追いかけていく。

街中を駆け回りそして、遂に野良ウサギをゲットしたユーリ。

「おお、中々の手触り……柔らけえ」

ゲットした野良ウサギに頬ずりするユーリ。

「ウサギ……好きなんですか?」

「ん?」

ユーリは突如、後ろから声をかけられる。

突然背後から声をかけられた事によりビックリして、その隙にウサギはユーリの腕の中から見事脱出に成功した。

彼女が声をした方を向くと、そこには一人の女性が立っていた。

年齢は二十代前半と思われる女性で、ねこやの常連客の一人、チョコレートパフェごと、アーデルハイドに雰囲気似ている女性だった。

「うーん……好きと言うか、食べてみたい」

「えっ? た、食べ……」

ユーリの回答があまりにも意外な回答だった為、女性は驚いた顔をする。

「な、何故、その様な感覚に……?」

女性はユーリに何故、ウサギを食べてみたいのかを尋ねる。

「うーん……潜在的に食べ物には食欲な部分はまだ私には残されていたみたいだ」

ドヤ顔でユーリはその女性にウサギを食べてみたい理由を答える。

しかし、もしこの場にチトが居たら、「お前は何時でも食べ物に関しては食欲だろうか?」と突っ込んでいたに違いない。

(面白い子……)

女性はユーリに興味を抱いた。

「あ、あの……」

「ん？」

「ちよつと、お話……いいですか？」

「えっ？」

その後、女性とユーリの姿は、街中にあるベンチにあった。

ユーリの手には女性が奢ったクレープが握られていた。

彼女としてはねこやからこの街までの移動でお腹が減っていたので、まさに渡りに船だった。

「それじゃあ、ユーリさんはこの世界の人ではないのですか？」

「うん。私とちーちゃんは世界が終わった世界と一緒に旅していたんだ」

ユーリはこの世界に来る前の出来事を覚えている分だけ、隣に座っている女性：小説家の青山ブルーマウンテンに話す。

「それで、ヌコってヤツが、白くてモチモチしている手触りで美味しそうだったんだ……ちーちゃんは火薬とオイルの味しからないって言うていたけど、この世界でお餅を食べ、もしかしてヌコもお餅みたいな味なのかもって思っていたんだけどね……まあ、少しの間とは言え、私の方が大きなヌコに食べられたんだけど」

「そのヌコ…さんはどんな姿だったんですか？」

青山はユーリにメモ帳とペンを渡し、ヌコがどんな姿だったのかを尋ねる。

ユーリは青山から受け取ったメモ帳にヌコの姿を描いた。

幸い、ヌコの姿は結構簡単な身体つきだったので、ユーリでも描くことが出来た。

「えつとね…こんな感じ…」

「まあ…」

青山はユーリが描いたヌコの絵を見て思わず声を上げる。

（なんとなく、ラビットハウスのあのウサギさんみたいですな…）

その後もユーリの話は続き、最後は車両も銃もなく、食料もなく、火を起こす燃料もなくなり、絶望の中、このまま『死』を迎えるかもしれないと言う中で、異世界食堂の扉を見つけ、その異世界食堂で食事をし、店主の好意からこの世界に居る事を青山に教えた。

そして、異世界人相手をしているねこやでのウェイトレス生活も青山に教えた。

「まあ、私の話を信じるか信じないかは青山次第だけど」

普通ならば、ユーリの話はただの妄想としか思えない内容だが、青山は、

「いえいえ、貴重かつ、面白い話でしたわ」

と、満足した様子だった。

「そう言えば、ユーリさんは何故この街に？やはり、お祭りを見に来たのですか？」
「実は、ラビットハウスってお店にそのちーちゃんさんがヘルプに来ていて、その様子を見に来たのだ」

「まあ、そうなんですか。では、そのちーちゃんさんも今日、貴女が来る事を知っているのですか？」

「いや、知らない筈だよ」

「それならサプライズで変装してこっそり訪れたら面白そうですね」

「おおおお、それいいかも!!」

青山のサプライズにユーリも乗る気になり、手に持っていたクレープを一口で片づけ、

「それじゃあ、私は行くから」

ユーリは青山に手を振り、チトの居るラビットハウスを目指した。

そして、ユーリが青山と別れた後、その場に残った青山は、

「世界が終わった世界を旅する女の子達……異世界へ続く食堂……面白そうな内容になるかもしれませんね……タイトルは……『少女終末旅行』『異世界食堂』つてところでしようか？」

青山はユーリの話を聞いて今度の新作の小説の内容にしようと考えたのだった。

ユーリと青山が分かれ、ユーリがラビットハウスを目指している道中で、ウサギを模したカチューシャにメイド服っぽい制服をきた髪にウエーブがかかった金髪の少女がチラシ配りをしていた。

「折角のお祭りなのにバイトだなんて……でも、そんな日だからこそ、今日のバイト代はいつもよりも多いのよね」

愚痴りつつもチラシを配り続ける金髪の少女：桐間紗路。

「はあく先輩と一緒ににお祭り回リたかつたなあ……あつ、でもラビットハウスの方もきつと混んでいるからやつぱり無理かあ」

シャロは誰かと一緒に今日のお祭りを回リたかつたみたいだ。

「さて、追加のチラシを……」

シャロは追加のチラシを取りに戻ろうとしたら、彼女の傍に野良ウサギが集まって来た。

彼女は昔、ウサギとの間にとある事があり、ウサギがトラウマになっていたことからウサギは彼女にとって恐怖の象徴になっていた。

しかし、何故か彼女はそのウサギに懐かれる体質だった。

「ひっ!?!」

「……」

シャロが一步後退ると野良ウサギ達は一步前に近寄る。

「い、いやああー!!」

野良ウサギ達に恐れをなして思わずシャロはダツシユで逃げる。

しかし、ウサギも動物：目の前で突如、逃げ出した獲物を追いかけるかのようにシャロの後を追ってきた。

「ひい〜!!」

滅茶苦茶に逃げている内に行き止まりに来てしまった。

逃げ場所はまだ無い。

野良ウサギ達はシャロに迫って来る。

「ひい〜こないでえ〜!!」

シャロが幾ら野良ウサギ達に頼んでも野良ウサギ達は歩みを止めず、近付いてくる。

(も、もうダメ〜!!私、きつとこのままウサギにかじられてボロボロにされるんだわ〜!!)

シャロが目を閉じて半ばあきらめかけた時、野良ウサギ達の進撃がピタッと止まる。

恐る恐るシャロが目を開けてみると、其処には自分と同じ金髪の少女が一人立っていた。

野良ウサギ達はその金髪の少女をガン見している。

金髪の少女も野良ウサギ達を見ている。

しかし、金髪の少女の目は虚無感があるような目で野良ウサギ達を見ている。

野良ウサギ達は本能的に察した。

この金髪の少女はこの街に居る人間とは異なる事を……

何よりも彼女の目……

あれは、自分達を愛する目ではなく、狩る目だ!!

あれが狩人と呼ばれる人間の目なのだろう。

あの人間は自分達のことを愛する存在ではなく、食べる存在としてしか見ていない。

金髪の少女が一步近づくと同時に自分達の死が近づいている様な感覚に襲われる。

そして金髪の少女が一步近づくと同時に野良ウサギ達は一步後退る。

やがて、金髪の少女が手を伸ばそうとした瞬間、事態は動き出す。

野良ウサギ達は文字通り、脱兎の如く、逃げていく。

他の仲間がもうどうなろうと知った事ではない。

今は自分の身の安全が優先される。

路地から野良ウサギ達が消え、その場に残ったのは二人の金髪の少女達……

ウサギが消えた事でやって来た方の金髪の少女は興味が失せたのか踵を返す。

「あ、あの……」

シャロは恐る恐る助けてくれた金髪の少女に声をかける。

「ん？」

「あ、あの：：た、助けてくれてありがとうございます。その：：お名前を伺ってもよろしいですか？」

「いえいえ、名乗る程のモノではありませんよお」

金髪の少女はそう言い残し、去って行こうとする。

シャロは去って行く金髪の少女を呆然と見ていた。

しかし、金髪の少女は何かを思い出したかのように突如、踵を返して、シャロに近づき、

「な、なんででしょうか？」

やや怯えながらシャロはまだ何か用があるのかと問う。

「あの：：：此処からラビットハウスって言う喫茶店にはどう行けばいいのかな？」

「はい？」

「いや、駅からラビットハウスまでの地図を書いて貰っていたんだけど、ウサギを追いかけるのに夢中になって地図の範囲外に出ちゃったみたいで：：：」

金髪の少女はシャロに現在絶賛迷子中である事を告白する。

「ラビットハウスでしたら、此処から：：：」

シャロは金髪の少女に現在位置からラビットハウスまでの道のりを教える。

「どうも……あつ!!」

金髪の少女はシャロにお礼を言っ行ってこうとするが、再び踵を返して、

「ねえ……」

「は、はい」

「この近くで変装に使えそうな道具が売っているお店は知らない?」

「はい?」

今度は変装道具が売っているお店を知らないかと尋ねてきた。

流石にスパイや怪盗が使う様な本格的な変装道具を売っているお店はないので、変装に使えそうな小道具が売っているお店をシャロは目の前の金髪の少女に教えた。

「どうも〜それじゃあねえ〜」

ラビットハウスまでの道のりと小道具が売っているお店の場所を聞いて今度こそ、金髪の少女は去って行った。

その後ろ姿を見てシャロは、

「……変わった人」

とポツリと呟いた。

シヤロが野良ウサギ達に襲われ謎の金髪の少女に助けられてから暫く経った頃、ラビットハウスでは、

とある輸入雑貨の貿易商が帰った後もお客の入りは昼時程ではなく、まったりとした時間が流れていた。

その時店の外では、

「此処が・ラビットハウス……ウサギの家……ウサギが居るのかな？それともウサギ料理を食べられるのかな？……兎に角、入ってみよう」

一人の人物がラビットハウスの看板を見て呟いた後、ラビットハウスの扉を開けた。

「「いらつしやい……ませ」」

そのお客はサングラスとマスクをして、店内をキョロキョロと見渡している不審な客だった。

（あれ？ウサギが居ない……それにちーちゃんも居ない……）

ラビットハウスと言う名前のわりに店内にはウサギは居なかった。

（やっぱり、ウサギを使った料理を出すのかな？）

「お、お好きな席にどうぞ」

チノに促されてテーブル席に着く不審なお客さん。

そのお客さんはメニューを見るが、

（あれ？ウサギの料理もない……）

メニュー表の中にもウサギを使った料理もなかった。

「お冷とおしぼりです」

不審なお客さんに小柄で青髪の少女：チノが水とおしぼりを持ってくると、その不審なお客さんはその青髪の少女の頭の上に乗っている白い生き物に興味を示す。

「ん？ヌコ？」

「これですか？これはティツピーです。一応うさぎです」

「ウサギ!？」

（あれ？この人の声、ちーちゃんに似ているな……）

不審なお客は自分の友達と目の前にいる青髪の店員の声似ている事を心の中で感じる。

「えつと、ご注文は？」

「じゃあそのうさぎ！」

「非売品です」

即座に却下するチノ。

「えええ……じゃあ、せめてちよつと触らせて」

「コーヒー一杯で一回です」

「じゃあ、三杯」

「……」

(なんか、前にもこんな事があつた気がします)

この不審なお客さんとのやり取りに関してチノはデジャヴを感じた。

注文を聞いてカウンターへと戻るチノ。

そこで、リゼは、

「あの風貌……もしかして、スパイか？あるいは裏世界の関係者かもしれない」
「他の発想はないんですか？」

リゼの推測にツツコミを入れるチノ。

「でも、あの人ちよつと怪しいよおくもしかして強盗さんかもしれないよおく」

しかし、ココアもやはりあのお客さんは怪しいと言う。

「やはり、悪人か!？」

リゼは強盗と聞いてモデルガンを構える。

「芸能人とか花粉症とかあるじやろう？」

そんな中、ティッピーだけはお客さんを擁護する。

不審なお客さんに不審感を感じつつチノはコーヒーサイフォンで同じモノではなく、

三種類のコーヒーを淹れる。

「でも、なんか、チノちゃんとあのお客さんのやり取り…昔を思い出すなあ〜」
「えっ？」

チノと不審なお客さんとのやり取りを見ていたココアが思わずポツリと呟く。

「ほら、私が初めてラビットハウスに来た時もチノちゃんがコーヒー三杯淹れてくれたじゃん」

「ああ……」

デジャヴを感じていたチノであったが、ココアの呟きで思い出す。

「あの時、私はチノちゃんが淹れてくれたコーヒーの銘柄を全部外したっけ？」

「ええ…しかもウチのオリジナルブレンドをインスタントコーヒーと間違えるぐらいに……」

「あははは……」

自分の家のオリジナルブレンドをインスタントコーヒーと間違えられた事を思い出してちよつとイラツとするチノ。

ココアは気まずそうに乾いた笑みを浮かべて誤魔化す。

「お待たせしました」

コーヒーの入ったカップが三つ、テーブルの上に置かれる。

湯気と共に淹れたてのコーヒーの香りが漂う。

「コーヒー三杯頼んだから、ソイツを三回触る権利を私に手に入れたわけだ」

「いいですけど、冷める前に飲んでください」

「うむ、ではいただきます」

不審なお客さんはマスクを外してコーヒーカップに口をつける。

まずは一杯目……

「ふむ、この芳醇な甘み、やわらかな苦みとコク、豊かなフルーティーさ……酸味も突出せずバランスがよくマイルドなこの味は……コロンビアだね」

コーヒーの銘柄が合っているかを尋ねる不審なお客。

「正解です」

続いて二杯目……

「……酸味と苦味がバランス良く調和し、甘いコクと上品な香り……雑味の無い後味で飲みやすく、自然の恵みを感じるナチュラルテイストなこの味は……これはキリマンジャロだね」

「正解です」

三杯目……

「バランスの取れたまろやかな味わい……そしてなんだかりラックスでできるような安心

する味……そして、あっさりしていて何杯もいけるようなこの味は……ブルーマウンテン……いや……コロンビア……でもない……ブラジル………うーん……これはブレンドだね」

「……正解です」

不審なお客さんは三杯のコーヒー全ての銘柄を言い当てた。

「がはっ!!」

そのお客さんを見ていたココアは物凄く悔しがっていた。

「凄いな、あのお客……やはり、只モノではないな……」

リゼは平然と三杯のコーヒーの銘柄を当てた不審なお客はやはり只モノではないと感ずる。

約束通り、コーヒー三杯を頼み、しかも銘柄までも当てた不審なお客はチノからウサギ（ティッピー）を受け取り、撫でている。

しまいには頬ずりをしている。

「うわあくやわらけえ……おっと、ヨダレが……」

「ノオオ——↓!」

突如、不審なお客さんの腕の中に居るティッピーが叫び声をあげる。

「あれ？今このウサギ叫ばなかった？」

「気のせいです」

「いやあくそれにしても、この感触……ヌコと似ている様で毛皮がある分、フワフワとした弾力があるなあ……：食べたらどんな味がするのかなあ……」

再び不審なお客の口からヨダレが垂れる。

獣の本能として身の危険を感じたティツピーは、

「えええい！早く離せ！この小娘があー！」

再び不審なお客の腕の中で暴れながら叫ぶティツピー。

そこへ、丁度、

「おやつのマフィン焼けたよ」

チトがココア達の為におやつのマフィンを焼いて持つて来た。

すると、チトの目には不審なお客に抱かれているティツピーが、

「えええい！早く離せ！この小娘があー！」

と、叫んだのが聞こえた。

「あれ？今、アルトリウスの声が聞こえなかった？」

(今、おじいさんの声が聞こえた様な気が……)

不審なお客とチトはティツピーの声に聞き覚えがあった。

それよりも今、チトが気になったのは、

「ん？お前もしかしてユーか!？」

チトは一目で不審なお客が誰なのかを見破った。

「おうっ?! 流石ちーちゃん」

正体を見破られ、不審なお客・もとい、ユーリはバツとサングラスを外す。

其処には確かにユーリの姿があった。

「お前、何で此処に!?!」

「いやあくちーちゃんの様子が心配になって見に来ちゃった」

「『ちやつた』って……」

「あつ、勿論テンチョーの許可は貰っているよ」

「そう言う問題じゃ……」

「いやあくそれにしてもちーちゃんのコック姿良く似合っているよお」

「う、うるさい」

チトがユーリの行動に呆れていると、ココア達はチトとユーリのやり取りを呆然と眺めている。

しかし、いつまでも眺めている訳にはいかないのです、

「あ、あの・チトさん、その人は……?」

チノがチトにその不審なお客の事を知っているのかと尋ねる。

「ああ、コイツが朝、話したユーリだ」

「この人が……」

「チトちゃんの友達……」

（あれがチトの友達……確かにあの据わった目は只モノではない）

チトから射撃が上手いと聞いていたリゼはユーリが例え正体を現してもただならぬ
雰囲気纏う人物だと印象を抱いた。

「おおお!!それは、ちーちゃん特製のマフィンではないか!？」

「お前はいつでも食べられるからいいだろう?今回は遠慮しろ」

「えええーっ!!」

ユーリはチトが作ったマフィンが食べられないと言う事でがっかりしている様子。

「いいじゃん、コーヒー三杯飲んで、口の中が苦いんだよぉ」

「なんでそんな事になった?」

「コイツを触らせてもらえるにはコーヒー一杯飲まなきゃならなかったんだよ」

ユーリは自分の腕の中に居るティツピーをチトに見せる。

「ちーちゃんも触ってみなよ。コイツ、ヌコに似ている手触りだよ」

そして、チトにティツピーを差し出す。

「……」

チトとティツピーの目が合う。

「……」

「……」

そして、自然とチトの手がティツピーへと近づく。

ナデナデ……

（ふむ、声はチノに似ていてもやはり手の感触は違うのう……）

チトに撫で慣れながらティツピーは例え声が似ていても撫でる手の感触はチノとチトは違うものだと思認識した。

チトのマフィンについては、ココア達が「ユーリちゃんも一緒に食べよう」と言ったので、ユーリもチトのマフィンにありつくことが出来た。

チトの作ったマフィンは、外はサクサク、中がふわふわでケーキの様な食感で美味しかった。

尚、チトのマフィンが一番多く食べたのはユーリだった。

おやつの時間時になり、ラビットハウスは再びお客の波が押し寄せてきた。

「なんか、お店・混んできたね」

マフィンを食べながら店内の様子をポツリと呟くユーリ。

「おやつの時間：午後のティータイムの時間なんだろう」

「ユー、お店が混んで大変になりそうだ。私は大丈夫だから、もうねこやに戻ったらどう

だ？」

チトはユーリに帰れと言うが、

「それなら、私も手伝おう」

と、帰らず、チト達の仕事手伝うと言う。

「いや、別に……」

チトが断ろうとしたら、

「ええ?! いいの!? それじゃあ、一緒にやろう!!」

と、ココアがユーリと一緒に働く気満々であった。

「えっ? ちよ、ココア……」

チトがココアを止めようとしたら、

「そうだな、人手は一人でも多い方がいいし。制服は私の予備のヤツを使ってくれ」

何故かりげもココアに賛同する。

彼女の場合、朝チトが言っていたユーリの射撃の腕前もこの際、見てみたいと言うの部分があった。

「……チノはいいのか?」

そこで、チトはチノに意見を求めるが、

「ああなってしまったココアさんを止めるのは無理です。それにリゼさんの言う事も尤

もでありますし」

と、半ばあきらめるかのようにつた。

こうしてイレギュラーながらもユーリもラビットハウスで働く事になった。

ユーリもねこやでウエイトレスをしているだけあって、中々様になっていた。

「ユーリさん・コーヒーの銘柄を当てたりできるので、もしかしたらココアさんよりも

優秀かもしれませんね」

「がっ!!」

チノの眩きを聞いたココアはまたもやショックを受ける。

夕方になり、ラビットハウスは一時閉店し、次の開店は夜、バーとなってからになる。

皆で食器など片づけ、店内を清掃している時、ココアが、

「ねえ、これから皆でお祭りに行こうよ」

と皆を祭りに誘う。

この街の祭りは夜も行っており、今から行ってもそれなりに祭りを楽しめる筈だ。

「そうだな、今日はずっと働きっぱなしだったし、最後までいい祭りを楽しむのいいな」

リゼもココアの提案に賛成する。

「チトちゃんもユーリちゃんも折角来たんだから、お祭りに行こうよ」

ココアは続いてチノとユーリも祭りに誘う。

「おお、お祭り：美味しいモノが沢山食べれる事が出来そう」

「お前は食べ物の事しか頭にないのか？」

チトがやや呆れる感じでユーリに言う。

こうして話は決まり、ラビットハウスの皆でお祭りへと行く事になった。

お祭りの会場は洋風のこの街に若干に合わない、屋台が並ぶエリアにチト、ユーリや

ココア達の姿があった。

チト達が屋台を見て回っていると、

「おっ？チノじゃん!!おーい!!」

「チノちゃん!!」

チノに声をかける八重歯が特徴的な子とおっとりとした雰囲気の子がいた。

「マヤさんにメグさん」

「おっ？アイツらも来ていたのか」

チノやリゼの口調からあの二人はどうやら、チノ達の知り合いの様だ。

「やあやあ、妹達〜」

ココアは声をかけた二人を抱きしめる。

自称自分の妹達とのハグを堪能したココアは二人から腕を離す。

すると、二人はココアの行動を啞然として見ていたチトとユーリの存在に気づく。

「あれ？その二人は誰？リゼかココアの知り合い？」

八重歯が特徴的な子がリゼに尋ねる。

「ああ、この二人は今日、ラビットハウスの手伝いに来てくれた人達だ」

リゼが、八重歯が特徴的な子とおっとりとした雰囲気の子にチトとユーリを紹介する。

最も正式なヘルプはチトなのだが、結果的にユーリも手伝ってくれたので、チトと一括りにして紹介したのだ。

「へえ、そうなんだあゝでも、チノも水臭いな、お店が大変なら私達が手伝ったのに」
「いえ、今回のヘルプは厨房の人なので、マヤさん達には無理です」

チノは二人を手伝いに呼べなかった訳を話す。

「はじめまして、チノの友達のマヤです!!」

「メグです。よろしく」

チノの二人の友人はチトとユーリに自己紹介をする。

「私はユーリだよお」

「チト：です」

チトとユーリもメグとマヤに自己紹介をする。

すると、

「すげえ!!この人、チノの声と全く一緒じゃん!!」

「ホント、そっくりです」

やはり、チノとチトの声が似ている事に驚く。

「しかも名前が一字違いだし……はっ、まさかつ!？」

「どうしたの? マヤちゃん」

「チトってチノの生き別れた姉妹なんじゃ……」

「そうなの?」

「いえ、ちがいます」

メグとマヤもココアと同じく、チノとチトが実は双子の姉妹なのではないかと言う疑問を抱くが、当然のようにチノとチトはそれを否定した。

「でも、チトはチノに声も名前も似ているから、私達『チマメ隊』の補助隊員だね」

メグは、チトは『チマメ隊』の補助隊員だと言いが、言われたチト本人はメグの言う『チマメ隊』が一体何なのか分からない。

「チマメ隊?なんだ?その痛そうな隊は?」

「私達の名前の頭文字をとった隊だよ」

マヤがチマメ隊の由来をチトに教える。

「そ、そうなんだ……」

その後、メグとマヤを含めたメンバーは屋台街を練り歩く。

「ちーちゃん、見て見て、雲が売っているよ!!」

綿あめを見て、興奮しているユーリ。

「た、確かに雲そっくりだ……食べ物……みたいだが……」

チトも綿あめを見るのはこれが初めてでコレが一体何なのか分からない。

「……食べてみようか？」

チトとユーリは綿あめを買った。

「……」

買った綿あめをジッと見つめる。

「綿あめを食べるのに何故そこまで緊張した面持ちになるんだ？」

リゼが綿あめをジッと見ているチトとユーリに疑問を抱くように呟く。

「じゃ、じゃあ……」

「う、うん……」

「あむ」

二人は綿あめにかぶりついた。

「おおー!!甘い!!」

「それに一瞬で溶けた……」

綿あめは口の中に入れると一瞬で消えてしまいが、そんな中でも甘みを残していく。それはまさしく雲を食べているかのようだった。

その後もユーリは屋台の食べ物是一片っ端から食べて歩いた。

彼女の食べっぷりにマヤやココアも競い合うかのように食べた。

そんな中、チョコバナナを買って食べた時、ユーリの食べ方がちよつとエロく見えた。ユーリの姿を見てリゼ達は顔を赤くするが、チノとチト、そしてユーリ本人は何故、リゼ達が顔を赤らめているのか理解出来なかった。

屋台街を進んで行くとリゼが射的の屋台を見つける。

(（食い意地が張っているって言うのは本当だった……))

両手いっぱい屋台の商品を抱えながら食べ物食べているユーリの姿を見てチトが言っていた事が事実だったと認識したココア達だった。

(（そう言えばチトがユーリは射撃が得意だと言っていたな……))

そしてリゼは、ユーリは射撃が得意だと言っていたチトの言葉を思い出し、

「な、なあ、ユーリ」

「ん？なに？」

「チトから聞いたんだが、ユーリは射撃が得意って聞いたんだが、その腕前を見せてくれないか？」

と、ユーリを射撃に誘った。

コルク銃に弾のコルクを込めると、ユーリは屋台の人に銃口を向ける。

「お、お嬢ちゃん、僕は景品じゃないから」

ユーリはなんか勘違いしていた。

気を取り直してユーリがコルク銃の銃口を景品に向ける。

そして引き金を引く。

すると、次々に景品はユーリの撃ったコルク弾に当たり倒れていく。

「ふむ、こんなモノかな？」

「凄いな……」

リゼもユーリの射撃の腕には脱帽だった。

「ちーちゃんも撃つかい？」

「いや、私はいい……」

「ちーちゃん、下手だもんね」

「うるさい」

続いては型抜き……此処ではチノとチトが物凄い集中力で型抜きを行った。

しかし、普段から落ち着きのないココアやマヤ、ユーリには不向きなモノだった。

更に屋台通りを進んで行くと、イベント用の舞台が設置されていた。

その舞台では、カラオケ大会が開かれていた。

「おおおスゲー!!チノ、マヤ、私達も参加しようぜ」

「えっ?」

メグはチノとマヤの手を引いて受付へと行き、舞台上がり歌を披露する。

それを見たユーリも、

「ねえ、ちーちゃん」

「なんだ?」

「私達も歌おうか?」

「えっ?で、でも……」

チトはあまり乗る気ではない様子。

実はチトはあまり歌が上手くない事をちよつとだけ気にしている。

「大丈夫だって、私がフォローしてあげるから」

「ちよ、ユーリ!!」

そう言つてユーリはチトの手を引つ張り舞台へと向かう。

「で、でも歌うつて何を歌うんだ?」

ユーリは演奏担当の人からオリジナルの歌を歌うのでアコースティックギターを借りて自らが演奏しながら歌うと言う。

「ほら、昔、ちーちゃんと雨宿りしながら一緒に歌をうたったじゃん」

「ああ、あの時か……」

確かにユーリの言う通り、まだ自分達があの世界に居た時、雨宿りしながら歌を歌った事がある。

「あの歌なら、ちーちゃんが歌がヘタでもそう言う歌なんだってみんなそう思ってくれるって」

「でも、ユー、お前ギターなんて弾けたのか？」

「うん、唯達に少し教わったから」

そう言いながらチユーニングしてギターの音を整えるユーリ。

「じゃあ、行こうか？」

ユーリがチトに手を伸ばす。

「……しようがない奴だな」

チトも覚悟を決めてユーリの手を握る。

そして、舞台へと上がり歌を歌う。

「今、世界が動き出したあゝあらゆる音楽と共にいっしょ」

歌い終わると、会場からは拍手が飛び交う。

「チトちゃんとユーリちゃん歌が上手いね」

「ほんとびつくりです……私も練習すれば出来るでしょうか……」

舞台から降りるとココア達からも褒められた二人だった。

お祭りを楽しんだチトとユーリ。

「そう言えば、ユーはどうやって帰るんだ？来た時の様に電車で帰るのか？」

「えっ？ちーちゃんと一緒に帰るつもりなのだが……」

チトはユーリに帰りの方法を尋ねる。

すると、ユーリはチトのバイクで帰るつもりでいるらしい。

「マジか……」

「いいじゃん、二人で一緒に旅をするのも久しぶりだし」

「……それもそうだな」

こうしてユーリはチトのバイクで帰る事になった。

予備のヘルメットはシートの下に収納スペースにあるので、問題はない。

お祭りから帰ると、ユーリはその日、チトと同じくラビットハウスに泊まった。

勿論、ココアやチノもチトとユーリも一緒に眠った。

流石にお風呂は四人では入れないので、チノとチト、ココアとユーリが一緒に入った。

そして、翌日：今日は学校なのでリゼはチトとユーリの見送りには参加できなかった。

た。

「それじゃあ、お世話になりました」

「どうも」

「いや、こちらも助かったよ」

「また来てくださいね」

「私はいつでも待っているからね」

ラビットハウスの皆はチトとユーリを見送ってくれた。

「それじゃあ」

「またね」

ユーリを後ろに乗せたチトのバイクは木組みの家と石畳の街を後にする。

そして街の外まで来ると、

「さて、どっちから行くかな？」

道の分かれ道まで来ると、どちらへ進むかチトが悩む。

どちらを通ってもねこやへ戻れる。

すると、

「ちよつと待って……」

ユーリは指を口の中に入れ、指を唾液で湿らせた後、風の流れを感じる。

「うーん……こつち」

「風の吹くまま……それも悪くはないな」

回り道をしながらもチトとユーリは店主が待つねこやを目指した。

腹ペコ王の異世界見聞 前編

某県冬木市にある衛宮家は、普段は女性の声が絶えないのだが、この日は静まり返っていた。

衛宮家にはこの家の住人である衛宮士郎、そしてある訳で士郎の下に厄介になっていくセイバーこと、アルトリア・ペンドラゴン。

衛宮家と古くからの縁がある藤村家の女性で、士郎が通う穂群原学園の教師、藤村大河。

士郎の後輩でよく衛宮家の家事を手伝ってくれている間桐桜。

そして、セイバー同様、ある訳で桜の下で厄介になっているライダー。

同じ学校の同級生である遠坂凜。

士郎の事を『お兄ちゃん』と呼ぶイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

彼女らは半ば下宿する様な形で衛宮家に居る事が多く、朝夕の食事も共にしていた。

しかしこの日、大河は職場の人達と一緒に飲み会へと行き、凜と桜は女子会に参加していた。

事の発端は、凧の友人であり、桜の部活の先輩である美綴綾子が突如、女子だけの食事会をやろうと言つて凧に声をかけ、凧が桜に声をかけた。

桜は『自分が行くなら』と、ライダーを誘つた。

そして、綾子と凧の話聞いた蒔寺楓が友人である氷室鐘と三枝由紀香を誘い、女子会へと参加して行つた。

凧はセイバーにも当然声をかけたのだが、そのセイバーが『私まで参加すると士郎が一人になってしまうので、今回は見送ります』と参加を断つたのだ。

もし、その場に士郎が居たら、『俺の事は気にしないで行つてこいよ、セイバー』と言つていただろう。

イリヤは、理由は不明だが、今日は何故か衛宮家に姿を見せなかつた。恐らくアインツベルン家のメイドにでも捕まつたのだろう。

アインツベルン家にはイリヤの世話係として二人のメイドが居る。

その中の一人、リーゼリットこと、リズはイリヤを喜ばせるものを好み、逆にイリヤを悲しませるものを嫌うイリヤ至上主義者でイリヤとは主人とメイドというよりも、友達か姉妹のような関係なので、イリヤの行動をそこまで制限したり注意したりはしない。

反対にもう一人のメイドのセラはイリヤに強い忠誠を誓っているが、教育係としてや

や口うるさく神経質な所があるので、イリヤに『下々の家に度々玉体を運ぶのはいかなものかと』などと言つてイリヤの衛宮家への外出を控えさせたのだろう。

セラは士郎に対して敵意があるので、自分の大切な主人がその毛嫌いしている家何度々出かける事に対してあまり好意を抱けないだろう。

よつて、今日の衛宮家にいるのは士郎とセイバーの二人だけだった。

「なんか、セイバーと二人だけつて言うのも随分と久しぶりな気がするな」
「そうですね」

台所で夕食の支度をしながら士郎はセイバーに声をかける。

声をかけられたセイバーは茶の間に座り、お茶の入った湯飲みを見ながらしみじみと
呟く。

皆でワイワイと楽しくするのもいいが、たまにはこうして静かに過ごすのも悪くない。

衛宮家の台所からはグツグツと鍋の煮える事がして、トントンとリズムよくまな板で
食材を切る音がする。

そんな中、

「あつ、そう言えば……」

「ん？どうかしまりましたか？士郎」

と、士郎は何かを思い出したかの様に声を上げる。

「いや、今日の朝の事なんだが……」

士郎はセイバーに今朝の事を話し始めた。

朝、士郎がいつもの様に自らの母校である穂群原学園へ登校している時、

「衛宮」

「あつ、一成か、おはよう」

「おはよう」

士郎に声をかけたのは士郎の同級生であり、穂群原学園の生徒会長を務める柳洞一成だった。

二人は世間話をしながら登校していると、

「時に衛宮」

「ん？なんだ？」

「衛宮はなかなかの食通だと思うのだが……」

「食通かどうかは分からないが、まあ、料理を作るのは好きな方だし、美味しい料理は自分の料理の良い参考になるからな、それでよく料理本や料理番組は見るけど……それがどうかしたのか？」

「い、いや……それで、衛宮は外食とかはするか？」

「外食？うーん……商店街にあるたい焼き屋とかにはよく行くけど、あまりレストランとかには行かないなあ……」

「そうか……」

「ん？どうかしたのか？」

「いや、先日の休みにちと、遠出をしてな、そこで食べたある店の料理がなかなかの美味であつたのだ。店主の料理の腕も勿論だが、あれは食材もかなりいいモノを使用していた。特に肉や乳製品はまさに一級品とも言える味だつたぞ」

一成は先日の旗日の休日に出かけ先で食べた店の料理が美味しかった事を士郎に話し始めた。

「へえ〜でも、そんなに良い食材を使っている店なら、値段もかなり高いんじゃないか？」

「いやいや、それがなかなかの食材であつたにもかかわらず、値段は良心的な値段であつた」

「それで、どんな店の料理なんだ？」

「洋食屋の『ねこや』と言う料理屋の料理だ」

「『ねこや』？」

「うむ、洋食屋なのだが、メニューの中には洋食以外のモノも数多くあつた一風変わった

店だな」

「へえ、そんな店があるんだ」

士郎は食事に関してややうるさい一成が褒めるその洋食屋に少し興味が湧いた。

「うむ、コレを見てくれ」

そう言つて一成は士郎にスマホを差し出す。

一成のスマホの画面にはねこやで撮影したと思われる写真が表示されていた。

その写真には数々の料理の写真や店内の写真があつたが、料理の写真に関しては確かに洋食以外の料理もあつた。

「確かに、いろんな料理があるな……それにどれも美味そうだ」

「だろう？ 衛宮も是非一度行つて見てくれ、きっと気に入る筈だ」

「ああ、そうだな」

「……つて、事が有つてな、洋食屋だけど、洋食以外のモノを出す店があるらしいんだが……」

「士郎!!」

士郎が一成の言つていたねこやについてセイバーに伝えると、さつきまで茶の間に居た筈のセイバーが一瞬の内で台所に居る士郎の下へ物凄い形相で迫つて来た。

「せ、セイバー?」

「そのねこやと言う洋食屋に行きましよう!!」

「はーっ。」

「洋食屋なのに様々な料理を提供する洋食屋：極上の肉……行きましよう!!ぜひ、行きましよう!!直ぐに行きましよう!!」

先程まで物凄い形相だったセイバーは一転し、目を輝かせて土郎に迫る。

「で、でも、こうしてもう夕食の準備が出来ちまったし、今からそのねこやがある街までいくのは時間がかかるから流石に今日は無理だ」

「そ、そんな……」

セイバーの背後に『ガン』と文字が浮かび上がり、目を見開き、顔色が悪くその場にorzzの姿勢で項垂れる。

「せ、セイバー……その今日は無理だけど、次の土曜は学校が休みだから、その日に行こう?なっ?」

「は、はい……」

セイバーは今日、ねこやに行けなかった事にショックを受けながらも今日の夕食に舌鼓をうち、機嫌はなおった。

そして、やって来た土曜日……

土郎はセイバーを連れて、ねこやのある街へと向かった。

セイバーと二人で行く約束？をしていたので、士郎はセイバーと二人つきりで行かかけた。

凜達は二人つきりで行かかける士郎とセイバーを不審がつていたが、セイバーが凜達に釘を刺して、士郎とセイバーは二人つきりで行かける事が出来た。

ねこやの場所は事前に一成から聞いていたので、士郎とセイバーは迷うことなくねこやに行く事が出来た。

行きの電車の中でセイバーはねこやの料理が待てないのかソワソワと落ち着きがなく、その姿は王様や騎士には見えず、ごくごく普通の女性らしく見えた。

士郎はその姿を見て思わず苦笑した。

しかし、セイバーはその期待を崩されることとなった。

「なっ!?!」

セイバーはねこやの扉の前で絶句した後、フラフラとした足取りでその場に or z の姿勢で倒れる。

「あら〜」

士郎は『やっちまったなあ〜』と言う顔をした。

ねこやの正面口の扉には『本日休業』と言う看板が立てられていた。

ねこやは月火水木金の旗日でも開いているが、土日は休みだったのだ。

流石の士郎もまさかねこやが今日は休業日だったとはりサーチ不足だった。

話を聞いた一成は旗日の休日とは言え、本来の日付は平日である日に来ていたからねこやが開店していたのだ。

「し、士郎……」

セイバーは俯きながら底冷えする様な声を出す。

「せ、セイバー……?」

「士郎……これはあまりにも無情です!!」

「あ、ああ……」

「お腹を空かせた私にこの仕打ちはあまりにも残酷です!!」

「あ、ああ……そうだな……」

「こうなれば、エクスカリバーを打ち込んで、ねこやの店主を叩き起こしてやりましょう!!」

「!!そして、私に料理を!!」

「せ、セイバー、流石にそれはやり過ぎだ!!」

士郎は慌ててセイバーを羽交い絞めにして、セイバーを止める。

セイバーがエクスカリバーを叩き込んだら、ねこやの入っている建物自体が崩壊してしまう。

「休みなのはどうしようもないだろう!!」

「し、しかし!!」

「お店は此処だけじゃないから、代わりに店で食事をしよう? なっ?」

「ううう……わ、わかりました」

士郎に言われ、セイバーは悔しさを滲ませながらねこやを後にし、別の料理屋を探しに行った。

その最中、路地裏から何やら揉める様な声が聞こえてきた。

ねこやは平日は開いているが、土日は休みであるが、土曜に限っては表向きの休日であり、土曜のねこやには異世界の住人たちがねこやの料理を食べにやって来る。

その日は平日よりも大変だ。

何せ、ねこやを訪れる異世界の住人達は、この世界の住人達と違って週に一度しかねこやの料理を食べる事が出来ないのだから……

その為、異世界の住人達はねこやに来るとねこやの料理を沢山食べていく。

通常は前日に沢山の食材と料理を仕込んでいるのだが、イレギュラーと言うのは突然にして起きる。

今日は何時にも増して思いの他、異世界の住人達の食が多く食材が尽きそうだったのだ。

そこで急遽、チトとユーリが買い出しに出掛ける事になった。

アレツタはやはり、頭の角があるし、クロは会話をするのにテレパシーを使用するので、異世界ではないこの世界の住人にとってはクロの会話方法は不味い。

そこで、異世界人ながらもこの世界に移り住んだチトとユーリが選ばれるのもごく自然なチョイスであつた。

「えつと……これで、買い出しは終わりかな？」

「ああ、急いで戻ろう。店主さんも待つているだろうからね」

「そうだね」

チトとユーリは買い出しのリストを確認しながら買い忘れが無いかをチェックしながらねこやへと戻って行く。

ねこやでは店主が今、自分達が持っている食材を待っているので、チトとユーリの二人はねこやまでの道のりをショートカットする為に普段は通らない路地裏を通った。

いや、通つてしまった。

チトとユーリの二人が路地裏を通つて行く姿をニヤついた男達が見ていた事を気づかず……

それからすぐにチトとユーリは怪しい男達に囲まれてしまった。

「お嬢ちゃん達、お兄さん達と一緒に遊ばない？」

「ゆ、ユー……」

チトとユーリはこれまでこの様な経験をした事がなかった。

元々、自分とユーリの人間以外、殆ど人が存在しない世界を旅して来て、ねこやの店主の好意でこの世界で住んでからも二人の周りの人々は暖かく優しい人ばかりだったのだが、大勢の人が存在していれば、優しい人も居れば、当然、悪い人も居る。

チトとユーリは今回初めて、悪い人とこうして出会ってしまったのだ。

二人には初めての経験であるが、チトは本能的に恐怖を感じて、小刻みに震えている。チトとユーリがまだおじいさんの所で世話になっていた頃、争いはあり、怖い人は居た。

二人の居た街は物資の奪いで滅んだ。

この物も食べ物も溢れている世界・正確にはこの日本では物資の取り合いで戦争になつたりはしていない。

それに男達の言葉から、この男達の目的は自分達の手の中にある食材ではなく、自分達の様だ。

ユーリは手に持っていた食材をチトに託し、彼女を守る様にチトの前に立ち、男達を睨んでいる。

しかし、ユーリだって内心は怖い。

だが、自分まで怖がってしまったのは、チトの恐怖心が大きくなってしまった。

チトを守るのは自分の役目だとユーリは自分を奮い立たせながら、男達と対峙する。

「ひゅ〜子兔みたい怯えちゃって可愛い〜」

「そんな格好しちやっってお兄さん達を誘っていたのかな〜？」

買い出しに行く際、私服に着替えて買い出しをして店に戻ってまたウェイトレス服に着替えるのでは時間がかかり過ぎるので、チトとユーリはねこやのウェイトレス服のままで買い出しに出ていた。

ねこやのウェイトレス服はメイド服風な制服だったので、そんな服で外へ出たので、見方によってはチトとユーリの二人はただのコスプレイヤーにしか見えなかった。

そんな格好の女の子達が人気にない裏路地に入り込んだのだ……社会不適合者にとつて今のチトとユーリは只の獲物にしか見えなかった。

「いいね〜いいね〜その衣装……そんなに俺達と一緒にコスプレプレイをやりたかったの〜？」

「よく見ると、そっちの黒髪の子、小っちゃいけど、なかなか可愛いじゃん」

「おい、お前ロリコンかよ。変態だなあお前。じゃあ、俺はこの金髪ちゃんを貰おうかな？目は死んだ魚みてえな目だが、胸や身体つきはなかなかのものじゃねえか」

ユーリは決して普段から死んだような魚の様な目をしている訳ではない。

これはユーリなりに相手を威嚇している目なのだ。

飛行機でチョコレート味のレーションをチトから奪った時もユーリは今回の様な目をして銃でチトを牽制し、チョコレート味のレーションを奪って食べた。

下世話な笑みを浮かべてじりじりとチトとユーリに近づいてくる男達。

反対に後退るチトとユーリの二人。

そして、次第に逃げ場は無くなっていく。

「ゆ、ユー……ど、どうしようお〜」

チトは怖いのか涙目になっている。

「ちーちゃん……此処は私が囷になるから、ちーちゃんは逃げて」

「ぞ、そんな……」

「その食材……急いでテンチョーの下に持って行かないといけないでしょう」

「で、でもユー……」

ユーリは自らが囷となるからチトには急いでねこやに戻れと言う。

でも、チトにユーリを見捨てるなんてマネは出来ない。

しかし、このままだとチトもユーリもこの男達の餌食になってしまう……

二人の絶体絶命のピンチ……

その時、

「待てーい!!」

裏路地に気高い女性の声がした。

此処で場面は変わり、少し時間を巻き戻す。

ねこやが休みだったので、目的の料理が食べる事が出来ず、代わりに料理屋を探している士郎とセイバー。

士郎がセイバーの様子をチラツと見ると、セイバーは目的の料理が食べる事が出来なかった落胆さと空腹でかなりいらついている様子。

(まずいなあ〜セイバーの奴、かなりイラついている……このままだと、腹ペコでセイバーがオルタ化しちまうかもしれない……)

早い所、別の料理屋を探さないと極度の空腹の影響でセイバーの性格が変わってしまう。

オルタ化したセイバーは食べ物に関しては雑になるので、そこら辺のファーストフード店でも満足するのだが、気難しい性格になるので士郎としてはオルタ化したセイバーの相手は極力したくない。

しかし、通常のセイバーはそれなりの食通なので、下手な料理は食べさせられない。

早く料理屋を見つけないければならない反面、セイバーが満足できる美味しい料理屋を探さなければならぬ。

そんな焦りの中、路地裏から人の声が聞こえた。

こんな路地裏から人の声が聞こえるなんて何か妙に感じた土郎。

「セイバー、ちよつと待ってくれ」

「なんですか？土郎。私は早く、何かを食べたいのですが？」

何か威圧感があるセイバー。

「うっ……なんか、この路地裏から声が聞こえたんだ」

「えっ?」

セイバーが耳を澄ますと確かに土郎の言う通り、路地裏から人の声が聞こえてきた。

しかも常人よりも耳の良いセイバーの耳には下世話な会話の内容が入って来た。

それを聞いたセイバーは裏路地へと走っていく。

「セイバー!?!」

突然走って行つたセイバーに土郎が慌てて声をかけるが、セイバーは振り向きもせず路地裏へと走っていく。

「待てーい!!」

裏路地に気高い女性の声があると、チトとユーリ、そして男達もビクツと体を震わせつつ、声が出た方を見ると、そこにはユーリと同じ金髪の女性が立っていた。

「なんでえ、ねえちゃん」

「ひよつとして、俺達の仲間に入れて欲しいの？」

「顔は上玉だが、ちよつと胸がちいせえなあ」

「あら〜ほんとだ〜折角の金髪美人なのに、ちよつと残念だあ〜」

「だったら、俺達がおねえちゃんのその残念なおっぱい、少しはマシにしてやるよ」

男達がへらへらと笑みを浮かべながらセイバーに近づくと、

「今の私はひじょくに機嫌が悪いから力加減が上手くできない……恨むのであれば、この場で私に見つかった己の不幸を恨むがいい!!」

セイバーは男達を物凄い形相で睨みつけ、物凄い勢いで男達へと迫っていく。

「はあああー!!」

セイバーは手に何も持っていない筈なのに、まるで剣を持っているかのような仕草で男達を伸していく。

男達の不幸はセイバーに見つかっただけではない。

そのセイバーが今現在、絶賛空腹中である事、

男達がセイバーの胸が無い事を指摘した事が男達の不幸だった。

腹ペコ王となつたセイバー相手に素人が勝てる筈もなく、男達はものの数秒でノックアウトされた。

いや、腹ペコでなくともセイバー相手に素人が勝てる筈が無かつた。

「セイバー!!」

セイバーが男達をノックアウトした後、士郎がセイバーに追いついた。

「……えつと……セイバー、一体何があつてこうなつた?」

士郎がノックアウトされている男達を見てセイバーに訳を尋ねる。

「あ、あの……」

其処にチトが士郎に声をかける。

「実は……」

チトが士郎に理由を話した。

倒れている男達がチトとユーリに何をしようとしたのか自分達には分からないが、それでもきつと、痛く、辛い事をしようとしていた事は何となくだが、本能的に分かつた。

「そうだったのか……」

チトから理由を聞いて納得した士郎。

「あれ? 君達は……」

士郎にはチトとユーリの着ている服に見覚えがあつた。

あれは、一成が士郎にねこやの写真を見せた時、彼のスマホの画像の中にチトとユリーの姿が映っていたのを思い出したのだ。

「もしかして、君達、ねこやのウエイトレスさん？」

「えっ？そうですけど……」

「お兄さん、よく分かったね」

士郎に尋ねられ、チトとユリーはあっさりと自分達がねこやのウエイトレスであることを認める。

「ねこや!？」

ねこやと言う単語に一番反応したのは他ならぬセイバーだった。

「それで、どうしてねこやの店員さんがこんな所に？確か今日、ねこやは休みの筈だけど……？」

士郎がチトとユリーに何故路地裏に居たのか疑問に思いチトとユリーに尋ねる。

「えつと……」

「それは……」

チトとユリーは互いに目を泳がせながら口ごもる。

ねこやは確かに土曜、日曜は休業だが、土曜は異世界からの住人が来ているなんて言ったところで信じる筈が無い。

「もしかして……」

「……」

「店員さんが料理の研究でもしているの？」

「そ、そうです。ねえ、ちーちゃん」

「えっ? う、うん」

ユーリは士郎の質問に咄嗟に嘘であるが、それを肯定し、チトにもそれを促し、チトもそれに同意する。

「それは妙ですね」

しかし、セイバーは不審がる。

「「えっ?」」

「休みならば、何故、貴女達は制服姿なのですか?」

「そ、それは……」

「ぬー……」

「それに貴女達は本当に人間なのですか?」

「「っ!?!」」

セイバーの質問にチトとユーリはビクツと体を震わせる。

「えっ? セイバー、それはどういう事だ?」

「この二人には少し妙な違和感の様なモノがあるのですが……」

「……」

セイバーが目を細めてチトとユーリを睨む。

（セイバー、違和感ってどんな？まさか、この子達は人間じゃなくて俺や遠坂みたいに魔術師なのか？それとも吸血鬼のような魔物とかなのか？）

（いえ、彼女達からは魔力の類はほとんど感じませんし、気配そのものは普通の人間です。ですが、この二人からは言葉には言い表せない妙な違和感があります）

セイバーと士郎は、セイバーがチトとユーリに感じたと言う妙な違和感について小声で話していると、

（ち、ちーちゃん、どうしようお〜）

（どうしようって言っても……）

（それにこの人、私達がこの世界の人じゃないって事知っているみたいだし……）

（もしかして、この人も私達と同じ、他の世界から来た人なのかも……）

チトとユーリも小声でひそひそ話をしながら、セイバーが自分らと同じ異世界人なのではないかと言う仮説を立てる。

（どうする？ちーちゃん）

（うーん……どうしよう……）

チトとしては助けてくれた人にお礼はしたいが……

「あの、実は今日、ねこやへ来たのですが、お店が休みでした」

「は、はい」

「まあ、そうだね」

「ですが、私はねこやの料理がどうしても食べたいのです!!」

セイバーはズイツとチトとユーリに迫る。

その姿はちよつと大人げないし、騎士にも王様にも見えない。

「で、でも……」

「今日は休みですし……また、日を改めて……」

「セイバー、あまり無理は言うな。ウエイトレスさん達も困っているだろう?」

チトとユーリ、士郎は、『今日は諦める』と言うが、セイバーの腹具合はイエローゾー

ンを突破しつつあった。

社会不適合者をのして、余計な体力を使ったことが影響していた様だ。

「ですが、私はもう……空腹で……ああ……なにか……なにかが……目覚めそうな……

気がして……」

セイバーはフラフラして倒れそうになるところを士郎が支える。

「ヤバッ!!」

セイバーの言葉から士郎は彼女が極度の空腹でオルタ化しかけている事に気づく。

(この人、お腹が減っているのか……)

セイバーの様子を見て、ユーリは、

(ねえ、ちーちゃん)

(なんだ？ユー)

(この人、お腹が物凄く減っているみたいだよ)

(ああ、そうみたいだな……)

(……ねえ、この人をねこやに連れて行ってあげようよ)

ユーリは何と、セイバーを今日、異世界食堂となっているねこやに連れて行ってあげ

ようと言う。

(なっ!?ユー、お前、本気で言っているのか!?今日、ねこやは……)

(知っているよ。でも、お腹が減る辛さはちーちゃんだって知っているでしょう?)

(……)

チトだってユーリの言っている事は理解できる。

あの何もない世界を自分達は上層部を目指すと同時に食糧を求めながら旅をしてい

た。

当然、その旅は常に空腹との闘いの日々だった。

だからこそ、チトは空腹の辛さは嫌と言う程知っている。

それに今自分の目の前に居る人は、自分達を助けてくれた上に、もしかしたら、自分達と同じ異世界の人のなのかもしれない。

それなら、この人も異世界食堂で食事をする権利はあるだろう。

(それにこの人は私達を助けてくれたんだよ。お腹が減っているにも関わらず……)

(ぬー……)

助けてもらったことを指摘されると痛い。

やむを得ず、チトは「ふう〜」と一息ついて、

「分かりました……最終的には店主さんの許可がいますが、私が店主さんと話してみます」

「えっ?」

チトはねこやに店主に事情を説明してセイバーを今日、異世界食堂となつているねこやで食事できるようにしてあげると言う。

「ほ、本当ですか!?!」

チトの言葉にセイバーはバツと顔を上げ、機体に満ちた目で見てくる。

「ぬー……で、でも決めるのは私ではなく、ねこやの店主さんなので……絶対に入れるとは限りませんからね」

チトは念の為、セイバーに今日のねこやに100%入れる保証は無いと注意を入れる。

「ああ、構わないよ……もし、セイバーがオルタ化したら、その時は俺がこの身をもって何とかするから……」

もし、セイバーがオルタ化してしまったら、士郎は玉碎覚悟で彼女の面倒を見るつもりで、チトに託した。

「これは責任重大だね、ちーちゃん」

ユーリが口元を緩めながらチトを茶化す。

「う、うるさい！」

チトはぶつきらぼうに言いながら、手の中にある食材の半分をユーリに持たせる。

士郎の言うオルタ化がどんな事なのか分からないが、士郎とセイバーの期待を背負わされたチトは気が重くなりながらも士郎とセイバーの二人をねこやに連れていく事になった。

腹ペコ王の異世界見聞 後編

学校の同級生である柳洞一成からの勧めでねこやと言う洋食屋に出掛けた士郎とセイバー。

しかし、いざねこやに来てみるとねこやは休業日だった。

ねこやが休みだった事に項垂れるセイバー。

だが、どう頑張っても目の前の現実を変える事は出来ない。

しかし、このままでは極度の空腹でセイバーがオルタ化してしまう。

士郎はセイバーの空腹を満足させる為、別の料理屋を探す事にした。

その最中、路地裏から人の声が聞こえてきた。

セイバーがいち早く現場に行くと其処には社会不適合者に絡まれている二人の少女が居た。

空腹の上、その社会不適合者から自らの胸がない事を指摘され、セイバーは一瞬の内社会不適合者をボコボコにした。

セイバーが助けた二人の少女はセイバーが目的にしていたねこやのウェイトレスだった。

セイバーがウエイトレスにねこやに連れて行つてくれと頼み込んで、ねこやに連れて行つてもらえる事になった。

ただし、100%ねこやで食事を摂れるかは分からない。

全てはねこやの店主さん次第である。

それでも、ねこやの料理を食べる事が出来るかもしれないと言う事で、ウエイトレスと一緒にねこやへと向かう士郎とセイバー。

ユーリは口下手なので、店主への事情説明はチトに任せて、セイバーと士郎と一緒に見せの外で待った。

「じゃあ、ちよつと待っていてください。店主さんに聞いてきますので」

「あ、ああ・頼むよ」

ねこやのウエイトレスの一人、チトが購入した食材を持って勝手口からねこやの中へと入って行く。

セイバーと士郎にしてみればまさに祈るような感じでチトを待った。

土曜日のねこやは地球とは異なる別の世界：異世界にねこやの正面口が出現し、そこから異世界の住人がねこやの料理を目的に訪れる異世界食堂となっている。

そして、今日の土曜も店内は異世界の住人達で盛況である。

「おう、おかえりチト」

「おかえりなさい」

(おかえり)

食材の入った袋を抱えたチトの姿を見て、ねこやの店主、自分と同じ、ねこやのウエイトレスであるアレツタ、クロが声をかける。

「ん？ユーリはどうした？」

チトと一緒に買い出しに出かけた筈のユーリの姿が無かった事に店主がユーリの事を尋ねてくる。

「それが……」

チトは店主に買い出しの時に起きた出来事を話した。

「えっー!!それで、大丈夫だったんですか!？」

チトの話を聞いてアレツタが思わずチトに安否を確認する。

「うん、襲われそうになった所がある人に助けてもらった。それで……」

チトは店主に自分達を助けてくれた人の事を話す。

「そうか……だが、今日は……」

店主もチトとユーリを助けてくれたその人には感謝したいが、今日のねこやは異世界食堂となっている。

その異世界食堂になっている状況下で、この世界の人を入れるのは……と戸惑いがあ

る。

だが、チトの次の言葉で店主は揺らぐことになる。

「分かっています・でも、私達を助けた人・もしかしたら、私達と同じ、異世界の人なの
かもしれません」

「なんだって?」

「その人、私とユーに本当に人間なのか?…とか、妙な違和感を感じるって言っています」

「ふむ、そうか…」

店主は顎に手をやり、暫し考え込み、決断を下す。

「チト、その人達を案内してやってくれ」

店主はチトとユーりを助けたその人を案内してやれと言う。

チトには理由が分からなかったが、店主が許可を出したのであれば、案内するだけだ。
彼女としても自分達の恩人の願いは叶えてやりたかったので、一安心した。

「わかりました」

チトは再び勝手口から外に出て、外で待たせている土郎とセイバーの下に向かう。

その頃、外で待っているセイバー達は…

「大丈夫か? セイバー」

お腹を押さえ唸っているセイバーに尋ねる土郎。

「うう〜……」

セイバーからは段々と覇気が無くなつて行くのが目に見えて分かる。

そして彼女のお腹からは雷鳴の様に『ぎゅるるる』と腹の虫がうなり声をあげている。

早く食事を摂らせろと抗議の声をあげていた。

「……」

その様子を見ていたユーリは、ポケットの中をゴソゴソとやり、

「コレ、足りないかもしれないけど……」

そう言つてチトが作ったさつま芋のレーションを手渡す。

すると、ユーリの手の中のレーションが一瞬の内で無くなる。

「はやつ!?!」

ユーリがセイバーの口元を見ると、彼女の口元にはレーションのカスがついており、口元をモグモグと動かしていた。

自分の食べるスピードよりも速いセイバーの行動には流石のユーリも目を白黒させて驚く。

そこへ、チトが店から戻ってきた。

「あつ、戻ってきた。それで、ちーちゃん、どうだった？テンチョー、OKしてくれた？」

「……ゴクツ」

「……」

ユーリがチトに店主の許可が下りたかを尋ねる。

セイバーはゴクリと生唾を飲んで、結果を待つ。

「……大丈夫です。店主さんからの許可が下りたので、お店にご案内します」

チトの結果にセイバーは体から力が抜ける思いだったが、心の中で思わずガツポーズをとった。

士郎の方も一安心した様子だ。

「では、ご案内します……ただ……」

チトは案内するがお茶を濁す様に口ごもる。

「ただ？」

士郎は何故チトがお茶を濁す様な事を言ったのか不思議に思う。

「……お店の中に入っても驚かないでくださいね」

「？」

チトの言葉に首を傾げるセイバーと士郎だった。

しかし、地球の人にとって土曜のこの日のねこやに入り、驚くなど言う方が無理なの

かもしれない。

チトの案内でねこやに一步入ったセイバーと士郎はまるで結界の中に入ったような感覚を感じる。

「っ!?!結界か!?!」

「士郎!!気を付けてください!!」

結界の中に入ったと言う事で警戒する士郎とセイバー。

(ま、まずい・空腹状態のこの身で士郎を守り切れるだろうか……?)

特に今のセイバーは空腹と言う最悪のコンディションだった。

「あれ?どうかしたの?」

ユーリは店に入っただけで何故そこまで警戒するのか、士郎とセイバーの行動を不思議に思っていた。

「い、いや・なんでもない」

士郎が無理に笑みを浮かべユーリに何事もなかったかのように振る舞う。

警戒しつつ店を進み、やがて飲食するスペースまで来た時、士郎とセイバーは目を見開く。

「っ!?!」

其処にはどうみても地球の人間ではない人達が食事をしていた。

ライオンの姿をした獣人。

トカゲの姿をしたリザードマン。

蝶の翼をもつフェアリー達。

鳥の翼と鳥の足を持つセイレーン。

尖った耳と強い魔力を持つ特徴のエルフ。

背が低くもがっしりとした筋肉を持つドアーフ達。

どれもこれも神話の世界かおとぎ話の本に登場する様な人達ばかりだ。

魔術師である士郎にとってはサーヴァントの類にも見える。

まあ、中には人の姿の客もいるが……

そして、給仕をしているのは頭に山羊の角を生やした少女であり、彼女からは微かに感じる魔族特有のその波動が感じられた。

「な、何なんだ？この人達は……」

「……」

（あの給仕……ただの給仕ではありませんね……もしかしたら誰かの使い魔なのかもしれない）
せんね）

結界を張っている様な店に、どうみても地球の人とは思えない店員と客達……

士郎とセイバーの警戒心のレベルは自然と高くなる。

「いらつしやい」

そこへ、ねこやの店主が士郎とセイバーに声をかける。

「えっ?」

店主の声を聞いて士郎は聞き慣れた声をする店主に驚く。

それはセイバーの方も同じで、

「アーチャー!!何故貴方が此処に!?!」

凜の所で厄介になっている人物と同じ声を持つ店主を睨みつけるセイバー。

「はい?」

一方、士郎とセイバーの態度に店主は首を傾げる。

そりやあいきなり睨みつけられても何故、睨みつけられるのか店主には分からなかった。

「あつ、いや、その・知り合いに声が似ていたので……あははは……」

士郎は店主に自分の知り合いに声が似ていると言いながら愛想笑いを浮かべて誤魔化する。

よくよく見ると店主と自分達が知っている人物とは声以外は似ても似つかない容姿をしていた。

「そうですか……でも今日は、うちのチトとユーリを助けてもらった様でありがとう」

ございました」

店主はセイバーに早速、チトとユーリを助けて貰った礼を言う。

「その声で礼を言われると、何故か寒気がするのですが……」

「お、俺も何か複雑な感じだ……」

「？」

礼を言われているのに何故か体に寒気が走るセイバー。

士郎の方も複雑そうな顔をしている。

だが、店主にしては何故、その様な態度を取られるのか分からなかった。

一方、ねこやに来ていたお客達もセイバーと士郎に様々な反応をした。

カウンター席に座っていたロースカツこと、常連客の一人、アルトリウスは、

（ふむ、あの小僧も儂やヴィクトリアと同じ、魔術師の様じゃな、だがあの娘は……なん

なんだ？騎士も見るが魔力も有しておる……）

セイバーと士郎の魔力を感じ取る。

同じくカウンター席に座っていた照り焼きチキンこと、常連客の一人のタツゴロウ

は、

（あの娘……なかなかの騎士と見える……一度、手合わせを願いたいものだ）

セイバーが纏う騎士としての腕前を感じ取る。

テーブル席に座っていたエビフライこと、常連客の一人であるハインリヒ・ゼーレマンは、

(あの気品……どこかの国の王族だろうか!?それに騎士としてもかなり腕の様だ……)

セイバーが纏う王として……そして騎士としての気品を感じ取る。

プリンアラモードこと、ヴィクトリアは、

(変わった魔力を持つ人達ね……)

アルトリウス同様、セイバーと士郎の魔力に反応した。

カウンタース席に座ってかつ丼をかつ込んでいたかつ丼こと、ライオネルは、

(へえ〜華奢な体つきだが、それなりの修羅場をくぐって来た感じだな)

士郎とセイバーが修羅場をくぐって来た雰囲気を感じ取った。

一方、ウエイトレスのアレッタは、

(綺麗な人……何処かの国の貴族様かな?)

魔導師でもなく、騎士でもないアレッタはセイバーや士郎が持つ魔力や騎士としての腕前を感じ取る事は出来なかったが、セイバーの整った顔立ちから彼女が平民ではなく、貴族なのではないかと思った。

同じくウエイトレスのクロは、

(この人……人間なのに私達と同じ気配を感じる……ううん、本当に人間なのかな?)

と、セイバーの中にある竜の因子に反応した。

それと同時にセイバーに妙な違和感を覚えたが、それが何なのかは分からなかった。

まあ、クロが疑問に思うのも当然で、今までの長い時間の中で流石のクロもサーヴァントと言う存在にはこれまで出会ったことが無かったからだ。

一方のセイバーも店主に次いで、ねこやの客達にも反応した。

(あの老人とエルフはキャスタークラスの凄腕の魔術師みたいですね……照り焼きチキンを食べているあの御仁はアサシン(佐々木小次郎)クラスの剣術士……)

セイバーはアルトリウス、ヴィクトリアをキャスタークラスの魔術師、タツゴロウはアサシン事、佐々木小次郎並みの剣士だと一目で感じた。

ただ、ヴィクトリアに関しては、エルフ耳と魔術師と言う共通点から柳洞寺に住み着き、何かと自分にゴスロリ衣装を着せたがる魔法使いを彷彿とさせるので、ちよつと苦手意識が芽生えた。

そして、ライオンの獣人であるライオネルに関しては、

(っ?! 士郎!! 士郎!!)

(なんだ? セイバー)

(ライオンです!! バースカーみたいなのライオンが居ます!!)

セイバーは目を輝かせながらライオネルを見つめる。

(そ、そうだな、セイバー)

(士郎!!あのライオン、お持ち帰りしてもいいですか?)

セイバーはなんと、ライオネルを持ち帰りたと言う。

(えっ!?)

(あのバーサーカーの様なライオンならば、私や士郎のいい訓練相手になりそうです。

それにペットとして愛玩する事も出来、まさに一石二鳥ではありませんか!!)

大好きなライオンを見て空腹を忘れるぐらい興奮している。

(さ、流石に獣人は不味いつて、あの獣人はサーヴァントじゃないから霊体化出来ないだろう?)

生きているライオネルはサーヴァントと違い霊体化して一般人の目を誤魔化す事は出来ない。

それに獣人はこの地球では存在していない種族な為、衛宮家には置いておけない。

(うう〜ですが……)

(セイバー、今日此処に来た目的は料理を食べに来た筈だろう?)

(は、はい……)

士郎に諭されてシユンとするセイバー。

余程ライオネルを連れて行けなかった事が悔しい様だ。

その件のライオネルは、

(何か、助かったような気がしたが一体……)

そんな事を思っていた。

いつまでもやって来たお客を立たせる訳にはいかなないので、セイバーに興味を持ったクロが二人の接客に向かう。

(いらつしやいませ)

「っ!?!」

脳内に直接言葉を送って来た漆黒のウェイトレスにビクツと体を震わせる士郎とセイバー。

ただ、二人が驚いたのはそれではなかった。

(な、なんなんだ!?!コイツは……それに脳内に直接言葉を……!!)

(この者……此処に居る誰よりも強い……それに私が此処まで近づかれるまで気づかなかった……まさか、アサシンのサーヴァントか!?!)

あのセイバーでさえ、クロが声をかけるまでクロの存在に気づかなかった。

クロはねこやで働いている時は『死』の気配を最小限まで控えているが分かるモノには分かる。

彼女が只モノではない事に……

それは魔術師である士郎と最良のサーヴァントであるセイバーにも分かったが、クロの正確な正体まではつかみ取れなかった。

(お席にご案内いたします)

クロの案内の下、警戒しながら席に着くセイバーと士郎。

(お客様、東大陸語は分かりますか?)

相変わらず脳内に直接言葉を送って来るクロに戸惑いを感じつつ、クロが言う東大陸語と言う言葉が分からない士郎は、

「いや、普段此処で使っているメニューでいいよ」

平日に使用しているメニューで構わないと言う。

と言うか、そうでないとなんて書いてあるか分からない。

(承知しました)

クロは士郎とセイバーに平日ねこやで使用しているメニュー表を手渡す。

(お待たせしました、メニューとお水とおしぼりです、どうぞ)

「あ、どうも」

(では、ご注文がお決まりになりましたら、お声がけください)

士郎とセイバーは早速手渡されたメニュー表を開くとそこには確かに一成の言う通り、洋食の他に和食、中華など多種多様な料理が掲載されていた。

「確かに一成の言っていた通り、色んなモノがあるな……」

（それに値段も確かに格安：ファミレス並みの値段だ……これでやっているのか？）

「ええ、どれもこれも美味しそうです」

士郎とセイバーは他のお客たちやあの黒い服のウエイトレスが自分達に危害を加える気配がないので、此処は本来の目的であるねこやの料理を食べることにした。

「うーん……」

しかし、洋食屋にも関わらず、こうして沢山の料理があると目移りしてしまう。

だが、それと同時にファミレス並みの値段で経営して行けるのかと疑問に思う士郎だった。

一方、セイバーの方はお腹が減っているにも関わらず、メニュー表と睨めっこをしている。

「セイバーは何か食べたいヤツはあるか？」

「カレーにオムライスにお好み焼きに……ああでもカツ丼も捨てがたいですね……そして、士郎の友が言っていた肉も……ハンバーグにするかステーキにするか……うーん……」

「せ、セイバー？」

士郎が声をかけてもセイバーはメニュー表から目を逸らさずにブツブツと何かを呟

いていた。

「まあ、いつか……」

士郎もメニュー表に目を移して、自分が食べたい料理を探した。

セイバーと士郎がメニュー表と睨めっこをしている間も厨房からはトントンと食材を刻み、グツグツと食材が煮込まれる音、お客たちの注文をする声、談笑する声、アレツタやチト、ユーリが注文を確認したり、注文された品を運ぶパタパタと運ぶ足音が聞こえるが、今のセイバーにはきつと、何も聞こえてはいないのだろう。

（よし、俺は肉じゃがにするか）

士郎は数あるメニューの中から肉じゃが定食を選択した。

勿論他の料理にも興味はあるが、まずは自分が得意な和食の味を確認したかった。

「俺は決まったけど、セイバーは……」

「士郎!!」

「は、はい」

「決まりました」

「そ、そうか……」

「ええ、本来ならば此処のメニューを全て食べたい所ですが、士郎の懐事情もありますから、数あるメニューの中から吟味しました」

セイバーはまるで、国の命運を決める重要な決断を下したかのような真剣な顔で食べる事が決まったと言う。

というか、士郎の懐事情を無視していたら、ねこやのメニュー全てを注文していたのだろうか？

もし今日、セイバーの連れが士郎ではなく、金ぴかの英雄王だったら遠慮なく、セイバーはこの店のメニューを全て注文していただろう。

「すみませーん!!」

（はい、ご注文はお決まりですか？）

「えっと、この肉じゃが定食をください」

（はい）

「私は、オムライスにお好み焼き、ピフテキ、カレーライス、かつ丼・いずれも大盛りを」（承知しました。ただ、お客さまのご注文が多いので、出来上がった順からお出ししてもよろしいでしょうか？）

クロはセイバーが頼んだ料理が多いので、一度に持つて来るのではなく、出来上がった順で出してもいいかと尋ねる。

「構いません」

（承知しました）

士郎とセイバーの注文を聞いたクロは店主へとオーダーを伝える。

(マスター、オーダーです。肉じゃが定食一つに大盛りでオムライス、好み焼き、ピフテキ、カレーライス、かつ丼をそれぞれ一つずつ)

「あいよ」

(物凄く食べるな……)

店主はクロからのオーダーを聞いてそのオーダー量に物凄く沢山食べる客だと思つた。

此処までの量を食べるのを見たのは、クロが初めてこのねこやに来た時以来だ。あの時も半日ずつとチキンカレーを食べていた。

そこまでの量ではないが、あのお客もかなり食べる客の様だ……

料理を注文した後、セイバーはメニュー表を見ていた時とは打つて変わつて集中力が完全にキレており、まだか、まだか、とソワソワしながら料理が来るのを待つていた。

セイバーにとってお腹が限界近くに減つており、更に美味しそうな料理の匂いがかがされてはまさに拷問に近い時間だった。

(お待たせしました、肉じゃが定食とオムライスです)

そこへセイバーが待ちに待ったねこやの料理がやってきた。

(ライスとスープ(お味噌汁)のおかわりは自由ですので、それではごゆっくり)

士郎が注文した肉じゃが定食は、お盆の上にはくはくとした白い湯気を放つ肉じゃがを中心に、その両サイドには茶碗に盛られたホカホカの白いご飯、お椀に入ったワカメとネギの味噌汁、そして付け合わせにはきゆうりの柴漬けと冷奴が入った小鉢が乗っていた。

一方、セイバーが頼んだオムライスは、ラグビーボールの様な綺麗な形で、輝かしい黄色に赤いケチャップがかかっている。

「いただきます」

セイバーが早速スプーンを手に取り、オムライスを割る。

すると、沈み込みそうなほどに柔らかな卵はあっさり切れ、中からたつぷりと詰まった赤い具が姿を見せる。

赤みを帯びたオレンジ色のチキンライス。

具は色鮮やかな緑色のピーマン、塩漬けにした鶏の肉の他にマッシュルーム、玉ねぎが入っている。

「はむっ……、これはっ!？」

セイバーがスプーンに盛られたオムライスを一口食べると、一気にオムライスの旨味が口の中に広がる。

まず、最初に来るのはもちろん、焼いた卵の味だ。

ふんわりとした絶妙の柔らかさに加え、ほのかに乳とバター風味がして、わずかに甘い。

そこへ、トマトケチャップによる酸味が合わさることで調和が生まれる。

その後には来るのは、塩漬けにした鶏肉の肉汁とマッシュルームの旨味、卵とは異なる玉ねぎの甘み、ピーマンのほのかな苦み、それらの具材の旨味をチキンライスの米が一粒一粒ふわりと受け止める。

一口目以降、セイバーの持つスプーンの速さは徐々に上がっていった。

一方、土郎の肉じゃがは、硬くもなくまた柔らかすぎず、適度な硬さで熱く、また醤油と出汁の味が染みだジャガイモの味わいが土郎の口一杯に広がる。

(ふむ、具材だけでなく、出汁にもいいモノを使っている……)

ゆっくりと味を確かめるかのように味わいながら咀嚼する。

白米も国産のコシヒカリを使い、柔らかくほんのりと甘い。

この米だけで何杯もいけそうだ。

味噌汁も丁寧に煮干しの腸を取り除いたモノを使用し、昆布とかつお節の合わせ出汁は絶妙で、味噌汁に肝心な味噌の方も国産の大豆を使用して作った味噌を使用している。

飲むだけで胃は勿論、心も温かくなるような味だ。

ただ、自分と相いれない考えの人物と似た声を持つ人が作った料理と言う事で何だかその人物に負けたような気がした為、若干の複雑さを覚える士郎だった。

「お待たせしました。ご注文のお好み焼きです。お皿は熱くなっているので気をつけてください」

続いてチトがセイバーの頼んだお好み焼きを持って来た。

その頃には最初のオムライスには既にセイバーの胃袋の中に消えていた。

チトはオムライスが乗っていた空の皿をさげ、代わりにお好み焼きが乗った皿をテーブルの上に置く。

セイバーが頼んだお好み焼きは熱い鉄の皿の上でジュ〜と言う音を立てており、ほんのりと白い湯気も出している。

上には黒いソースと黄白色のマヨネーズが網目状にかけられており、青緑色に輝く青海苔の他に踊るように揺れるかつお節がかかっている。

鉄の皿の熱さが加わって立ち上る匂いがセイバーの鼻腔を刺激する。

「いただきます」

お好み焼きを箸で切ると、上に掛けられたソースが皿の上に落ちて、かすかに焦げる匂いがする。

セイバーはお好み焼きの切れ端を箸で摘まみあげ、口の中へと放る。

「あつっ!!……ハフハフ……」

最初に感じるのは見ただ目からも分かるその熱さだ。

焼き立てで、冷めぬように敢えて鉄の皿の上に置かれたお好み焼きは当然ながら熱い。

しかし、歯で噛んでみると、カリッと香ばしく焼かれた表面とタコ焼きのようなトロっとした中の柔らかさ……さらにかみ締めると、口の中に渾然と様々な香りと味が広がる。

青海苔からは磯の香り、

かつお節からは魚の味と旨味、

脂が乗った豚肉の柔らかな味、

油をたっぷり含んだ小麦の香ばしい味とそれに混ざった卵の豊かな味、

シヤキシヤキとしたキャベツの味と歯ごたえ、

それらを全て包み込む、甘くて辛くて酸っぱいソースとねっとりとしつつも優しく包み込む様なマヨネーズの味、

お好み焼きはまさに鉄板の上で練り広げられる味の合唱とも言える料理だ。

それぞれがそれぞれの歌を……味を歌っている。

「すみません、……はんとお味噌汁、おかわりはいいですか？」

士郎もやはり、米と味噌汁の味には満足がいくものらしく、おかわりを頼む。

「はい」

アレツタが、士郎からお茶碗とお椀を受け取り、厨房へと向かいおかわりを用意して持ってくる。

「お待たせしました。ごはんとお味噌汁のおかわりです」

「ありがとう」

おかわりを受け取って早速士郎はホカホカの白いご飯、きゅうりの柴漬け、お味噌汁で食事を再開する。

「お待たせしましたー、カレーライスですー」

次にユーリがセイバーの頼んだカレーを運んできた。

常連客の一人であるアルフォンスの好物であるねこやのカレーライスは、大きな皿に山盛りの白いごはんの上に掛けられた大きな具材がゴロゴロと入ったカレーのルーに皿の隅の方で、小さいながらも自らの存在感を立派に主張している赤い福神漬けがあり、香辛料をたっぷり使った刺激的なカレーの香りがまたもやセイバーの鼻腔を刺激する。

セイバーは早速、ごはんとかレーのルーがかかった境界線辺りをスプーンで一掬いして、そのまま口へと運ぶ。

すると、まず最初に感じるのはカレーのルー：正確にはカレーのルーに使われている香辛料がもたらす辛味と香りだ。

セイバーはその辛味さえも楽しむかのようにじつくりと堪能しながら咀嚼すると辛み以外の味が次々とはじけて口の中で混ざり合っていく。

ごはん独特の甘みにじつくりと煮込んだ事でとろけるように柔らかくなった肉、カレールーにたっぷりと溶け込んだ玉ねぎ。

しかもそのカレーのルーには肉のエキスも混じっている。

その他の食材であるにんじんとじゃがいももたっぷりとカレーのルーが染み渡っており、辛みがあつて柔らかく美味しい。

それらが口の中で溶け合い、一つのハーモニーを：味を作り出していく。

食べていく内にセイバーの額には汗が浮かび上がり、やがて、一筋の航跡を描いて落ちていくが、セイバーの手は止まらない、止められない。

スプーンで掬って、口に運ぶことを延々と繰り返し返す。

セイバーが汗を拭いたのはカレーを全て完食してからだだった。

「お待たせしました。ご注文のビフテキです。鉄板は大変熱くなっていますのでお気をつけ下さい」

アレッタが次にビフテキをテーブルの上に置いた。

セイバーの前には木の枠に鉄の皿がはめ込まれたステーキ皿が置かれている。

ステーキ皿の上ではジュウジュウと脂とニンニクをベースとしたステーキソースが弾け、一口では食べきれない様な分厚い、赤みを帯びた肉の塊がそこにあつた。

そして、肉の周りには彩りよく添えられた温野菜がまるでステーキと言う主人に控える従者のように添えられている。

「ゴクツ……」

一目見ても分かるこのステーキの圧倒的な存在感と威圧感。

セイバーは思わず唾を飲み込んでしまう。

しかし、その表情はまるでこれから戦をするかのような真剣な顔だった。

「で、では……いや、勝負!!」

セイバーは丁寧にナイフとフォークを使い、肉を切り分け、一口、それを口に運んでみる。

「っ!」

その肉の味は決して美味しいと呼べる物ではなかった。

いや、「美味しい」などと言う浅はかな言葉では片付けられない程に、暴力的で、刺激的で、高貴な味だった。

最初に感じたのは、初めて感じた事が無い程の、強い塩と胡椒の味だった。

その塩の味に導かれるように、口の中を、肉と脂の味と食感が、縦横無尽に暴れ狂う。肝心の肉の味は狭い牛舎などではなく広大な牧場でのびのびとすこし、抗生物質などが配合された人工飼料ではなく、自然の青草を食べて育った牛の肉のそれだ。

ニンニクの効いたステーキソースは舌を、鼻を抜け、胃を刺激しセイバーに更なる肉を要求させる。

肉の従者たる温野菜達も主人には負けておらず、甘く、歯応えがあり、肉と脂に塗れた口内を優しく満たしてくれる。

そして付け合わせのごはんとスープもこれまた絶品だった。

ごはんは士郎が好評したように良い米を使用しており、口に含んだ時のほかほかとした暖かさ、噛めば噛むほどに僅かに甘さを感じられるその食感がセイバーの食欲を加速させる。

スープは鶏肉と玉ねぎ、ジャガイモ、にんじんをベースに長時間煮込んだそのスープは香りも良く、口に含めば含む程、鶏肉の脂と具材の旨味が口の中で踊り出す。

一口、二口、三口と料理が口に運ばれ、皿の上に料理が姿を消すまでそう時間はかからなかった。

「お待たせしました。ご注文のかつ丼です。以上で注文の品はよろしかったでしょうか？」

チトがかつ丼を運び、士郎とセイバーに注文した品が全て来たかを確認する。

「ああ、全部来た。ありがとう」

「では、ごゆっくり」

士郎の返答を聞き、チトは厨房へと帰って行った。

チトと士郎のやり取りの中、セイバーの視線は自分の目の前に置かれたかつ丼に向けられていた。

三切れのたくあんに味噌汁が入った蓋つきのお椀、青と白の縦縞模様の陶器の丼。

これぞ、ザ・かつ丼と言った風体でそのかつ丼はセイバーの目の前に鎮座している。

あのライオンの獣人が食べていたかつ丼が今まさにセイバーの目の前にある。

「で、では……はあく……」

セイバーがかつ丼の蓋を開けると、ふわっと辺りに漂う香ばしく、甘い香りと湯気にセイバーは思わず感嘆の声をあげる。

丼には鮮やかに明るい玉ねぎと衣を纏った分厚い肉の茶色、黄金色に近い卵の黄色、具の間からはチラツと見えるごはんの白。

その色合いと匂いが食欲をそそる。

「いただきます」

箸を持ち、手を合わせてセイバーはかつ丼の丼を持って食べ始める。

たとえ無作法だの女性らしくないだのと言われてもかまわぬとばかりに器を持ち上げて、直接口をつける。

「はむ、はむ、はむ……おおおお……こ、これは……」

カツとごはん、それら両方を同時に食べることで肉とメシが交じり合い、素晴らしい味となる。

上の肉からこぼれた汁の味を吸ったごはんとその肉汁を出すカツ肉が甘辛いハーモニーをセイバーの口の中で奏でている。

セイバーがかつ丼を完食するのにももの三分もかからなかった。

「ごちそうさまでした」

かつ丼を食べ終え、丼をお盆の上に置いたセイバーの口元には一粒のご飯粒がついていた。

「セイバー、ご飯粒、ついでにぞ」

士郎がジェスチャーを使ってセイバーに教える。

「あつ……」

セイバーは顔を赤くし、慌てて口元についていたご飯粒を取ると恥ずかしかったのか、俯いてしまう。

そんなセイバーの仕草が可愛かったのか、士郎は思わず苦笑してしまう。

「どうだった？セイバー、此処の料理は？」

そして士郎はセイバーにねこやの料理の感想を尋ねる。

「最高でした。まさに人類の宝とも言える至高の作品です」

「そ、そうか……」

セイバーのオーバーな表現にちよつと引いてしまう士郎。

「さて、それじゃあ……」

士郎がお会計を頼もうとして立ち上がるとうすると、

「ん？士郎？トイレですか？」

立ち上がりかけた士郎にセイバーは、トイレにも行くのかと尋ねる。

「えっ？あつ、いや、料理も食べたし、そろそろ帰ろうかと……」

「何を言っているのです。まだデザートが終わっていません」

「えっ？？」

セイバーはあくまでも今まで食べた料理はオードブル、メインディッシュであり、このあとはまだ、デザートがあると言う。

「……」

セイバーの発言でも思わず固まる士郎。

しかし、そんな士郎を尻目にセイバーは再びメニュー表を手に取り、デザートのパ-

ジを見ていた。

その後、セイバーはチョコレートパフェ、クレープ、プリンアラモードを注文してそれらのデザートをペロリと平らげてしまった。

セイバーの食欲を見た常連客達の反応は……

男性陣の反応は、

(女性なのにえらく沢山食べるな……)

女性陣の反応は、

(なんで、あんなに食べて太らないんだろう?)

だった。

セイバーが食事をしている間にも自分達の食事を終えたお客たちは次々と自分の世界へと帰って行く。

そして、漸くセイバーの食事は終わり、食器を片付けに来たユーリにセイバーは、

「すまないが……」

「はい?追加のご注文ですか?」

ユーリはまだセイバーが何かを注文するのかと思ったが、

「いや、店主と少し話がしたいのだが……」

セイバーとしては食事にも興味があつたが、この店に入った時に感じた結界の様なモ

ノ、そして地球上には居ない様な種族が居た事について店主に事情を聞きたかった。

「ぬーん……まだ、お客さんが残っているの、テンチョーも厨房からはなれられないので、今いるお客さんが帰ってからでもいいですか？」

「ああ、構わない」

「わかりました」

「セイバー……」

士郎自身もこの食堂に来ていた異世界の人達については聞きたかった。

でも、魔術師は基本、自らの魔術技術は秘匿するモノだ。

この食堂の魔法も本来ならば、秘匿するべきモノなのだろうが、セイバーも士郎も例え、禁忌を犯す行為でも聞きたかったのだ。

そして、お客の波も引き、後は夜に最後のお客である『赤』が来るまでのわずかな時間の合間に店主はセイバーと士郎の下にやって来た。

「それで、お客さん、私に用があると聞きましたけど……」

「早速だが、今日来ていたお客たち……あれはいつたい何なんだ？ どう見ても地球にいる種族には見えなかったが……」

「ああ、この店は週に……いや、七日に一度だけ、異世界と繋がる不思議な店なんですよ」「異世界？」

セイバーと士郎には一瞬信じがたい話であったが、現にさつきまでこの食堂には地球上に存在しない筈の種族達がおり、食事足していた事から店主の言っている事が現実なのだと無理矢理にでも理解させられた。

「ええ、それで今日来たお客さん達は皆、異世界の方々なんです」

「じゃあ、この店に貼られた結界は……？」

「結界？……ああ、多分それは魔法のベルの加護です」

「魔法のベル？」

「ええ、ほら、あのドアについているベル……あのベルのおかげで異世界の人の言葉が分かる様になってはいます。まあ、流石に文字の方は無理があったみたいなので、常連客の人に書いてもらいましたが……」

店主は正面口のドアについている小さなベルを指さす。

この店に貼られた結界の様なモノは士郎やセイバーの思っている様なものではなく、異世界の住人達の言語を日本語に訳す為のものだと店主は言う。

「お客さんはチトとユーリに何か違和感を覚えるって聞いたんですが、もしかしてお客さんも異世界の方なんですか？」

「えっ?」

「実は、私とちーちゃんは、この世界の人じゃないんだよね」

ユーリはセイバーと士郎に自分達の居た世界とこの世界に來た経緯を二人に語る。

「世界が終わった世界……そんな世界があるなんて……」

「それで、あの扉をもし、私かちーちゃんが開けたら、その世界に行ってしまうかもしれないから、私とちーちゃんはいつも勝手口を使っているんだよ」

「お客さんがもし、異世界の人で自分の居た世界に戻りたいのであれば、あの正面口を使えば元の世界に戻るかもしれない」

チトは自分達に違和感を覚えたと言っていた時のセイバーの態度から彼女も異世界の人の人なのだと思っていた為、元の世界に戻りたいのであれば、正面口のドアをくぐるといいと言う。

「元の……世界……」

チトの話聞いてセイバーの心は揺れた。

あの扉を開ければ自分は受肉したままで過去に……自分のやり直したい時代に帰れるかもしれない。

聖杯を使わなくとも「選定のやり直し」ができるかもしれない。

そんな考えが一瞬脳裏に浮かんだ。

「セイバー？」

そこへ心配そうに士郎が声をかける。

(つ!?何を考えているんだ私は……)

(今は、この世界が……土郎と共に生きているこの世界が今の私の居場所ではないか……)

セイバーは未練を振り切る様に今はこの世界で土郎と共に生きていこう……改めてセイバーはそう心の中で誓ったのであった。

「いえ、元の世界には未練はありません。お心遣い感謝します」

セイバーはチトに微笑みながら礼を言う。

「あつ……いえ……」

セイバーの微笑みを見て、思わずチトは顔を赤らめる。

「あれ?ちーちゃん、顔が赤いよ?」

「う、うるさい。なんでもないから」

ユーリに茶化される前にチトは皿洗いをする為に厨房へと向かう。

聞きたい事も聞け、美味しい料理も食べる事が出来たセイバーと土郎は帰ることにした。

ただ、ねこやの料理が良心的な値段だとしても注文した量が多かったのでそれなりの値段となり、土郎の財布から論吉さんが出ていく結果となった。

「毎度〜」

「またどうぞ〜」

店主たちから見送られ、チト達と同じように勝手口から外へ出る士郎とセイバー。

「なんか、夢を見ていた様な時間だったな」

士郎が歩きながら異世界食堂での出来事を振り返る。

「ええ・そうですね・でも、料理はおいしかったです」

「そうだな・あつ、でもセイバー」

「なんですか？」

「あの店の事は内緒にしような。異世界の人達が心休まる食事の場所を俺達が奪う権利なんてないのだから」

「そうですね」

士郎とセイバーは異世界食堂については秘密にすることにした。

一般人に行ったところで妄言としてとらえられる内容でも魔術師にとっては十分探りを入れる話になりそうだったからだ。

しかし、その夜……

「士郎!!」

「先輩!!」

「お兄ちゃん!!」

士郎は凜、桜、イリヤに詰め寄られていた。

「ど、どうしたんだよ? 皆……」

「セイバーに聞いたわよ!!」

「えっ?」

「今日、セイバーと一緒に美味しい料理屋に行ったって!! しかも衛宮君の奢りで!!」

「それに二人つきりでお出かけなんて……」

「ズルイ!!」

セイバーは異世界食堂の実態については詳しく語らず、ただ士郎と一緒に美味しい料理屋の料理を食べに行ったことだけを凜達に話し、それを聞いた凜達が羨んでこうして士郎に詰め寄って来たのだ。

「あつ、いや……これには訳が……」

「どういう訳なのよ!!」

「先輩、きつちりと説明してください!!」

「そうよ!! セイバーだけ、お兄ちゃんと食事だなんて!!」

「ちよ、みんな、落ち着いて……」

士郎は彼女達を納得させるのに苦労する事になった。

その頃、セイバーは、自室にて、

「今度はアレと、コレを食してみたいですね……」

と、ねこやのメニューを思い出しながら、ねこやの全メニューの制覇の計画を立てていた。

二つの異世界飲食店

此処で時系列は少し過去にさかのぼる。

「何を言っているのです。まだデザートが終わっていません」

「えっ?」

いつもの食堂から異世界食堂へと変わった土曜の日に店主の厚意からねこやへとやって来た冬木市の住人、衛宮士郎と士郎の下で厄介になっているセイバーは、ねこやの料理を堪能した。

特にセイバーは、オムライスにお好み焼き、ピフテキ、カレーライス、かつ丼を食べた。しかも全て大盛りで……この上更にデザートも注文すると言うのだから、士郎の目が点になるのも十分頷ける。

「すみません」

「はい」

そんな士郎を尻目にセイバーはウェイトレスを呼ぶ。

「追加の注文をしたいのだが」

「はい」

「チョコレートパフェとクレープ。それにプリンアラモードを頼む」

「承知しました。マスター、オーダーです」

ねこやのウェイトレスの一人、アレツタがオーダーを伝えに厨房の奥へと向かう。

「……」

士郎にセイバーを止める事は出来なかった。

デザートを待つセイバーの姿は王でも騎士でもなく、ごく普通の女子に見えたのだか

ら……

「お待たせしました。チョコレートパフェです」

まず最初にアレツタがセイバーの下に持って来たのはグラスに入ったチョコレート
の芸術品、チョコレートパフェ。

ねこやの常連客の一人、チョコレートパフェこと、異世界にある帝国の現皇帝の一人
娘、アーデルハイドのお気に入りメニューであり、チトとユウリがはじめてチョコ
レートと認識したデザートである。

二人はこの世界に来る前、世界が終わった世界にて、ドックに放置されたままの潜水
艦の艦内で非常食のチョコレートを食べた事があったが、本人達はそれがチョコレート
だと認識せずに、以前飛行機の中から見つけて食べたチョコレート味のレーションと同

じモノだと思っていた為、このねこやのチョコレートパフェが初めて口にした本物のチョコレートだと思っている。

そして今、セイバーの目の前にそのチョコレートパフェが静かに鎮座している。

一点の曇りの内ガラス製の器に盛られているのは、雪山のように白い生クリーム。

そのクリームの上にはチョコレートソースがかけられ、なだらかに流れて優美な模様を描いている。

白と黒で構成された山の縁には色とりどりの果物や焼き菓子。

しっかりと焼かれた小麦色の焼き菓子。

その焼き菓子にもチョコレートが掛けられており、その対比が美しい。

さらに半分に割られた赤いイチゴに黒い粒が散らされた緑のキウイなどスライスされた生色りの果実が飾り立てられ、山の裾に鮮やかな色を与えている。

そしてその下：山の下は白と茶：生クリームとアイスクリーム、チョコレート、そして小麦色の層：シリアルが敷き詰められており、その綺麗に3層に分かれた様子が、透明なグラスを通して見ることが出来る様も良い。

「では…いただきます」

良く磨かれた柄の長い銀の匙を手にしてセイバーはパフェを食べ始める。

まず食べるのは、山の頂：チョコレートソースがたっぷりとかけられた生クリーム

の山へ匙を潜り込ませる。

匙が入れられたパフェは、まるで雲のように抵抗なくすつと切れる。

「あむっ」

口に入れた瞬間、かすかにほろ苦くて甘いものがすつと口の中で溶けて消える。

甘いが甘すぎない。

生クリームの甘みとチョコレートソースの苦みが交じり合う美味の後に感じるのは、

濃厚なクリームの味と：：甘み。

一口、食べた後、セイバーの匙は自然と早くなつていく。

甘さが控えられているためか、甘味以外の味もしつかりと感じる。

クリームの甘みを苦みがあるチョコレートソースがほろ苦くてそれがまた甘味を引き立てる。

それが口の中で溶けて消える。

「この果実も瑞々しく、甘酸っぱい」

匙で掬い上げられるように一口大にカットされたキウイとイチゴ。

色味美しいこの２種類は、あえて余り熟していないものが使われていた。

甘味はあるが、しつかりと酸味も含んでいる。

だが、それが甘味に慣れた舌を休ませて、生クリームとチョコレートソースの美味し

さを引き立てる。

「この焼き菓子もサクサクしている」

焼き菓子は匙では掬えないので二本の指で摘み、かじりつく。

チョコレートが上に塗られ、更に器の中の生クリームがついた焼き菓子はやはり甘さが抑えられていて、パリツと碎ける香ばしきがある。

そしてパフェはアイスの層へと辿り着く。

アーデルハイドにとっては白い冬の雲を、チトとユーリにとっては甘い雪を連想させるアイスはひんやりと冷たいながらも濃厚な乳の味がした。

そして少し溶けてアイスがついたシリアルも焼き菓子同様、サクつとした歯ごたえがあった。

様々な味を堪能したチョコレートパフェはセイバーに少しの口惜しさと、たつぷりの満足感を与えて終了した。

「お待たせしました。クレープです」

続いてチトが持つて来たクレープ。

この異世界食堂の唯一の団体客であるフェアリー達の大好物のデザート……

布のような柔らかいクレープ生地の中にはイチゴ、キウイ、ミカンなどの瑞々しく果実にたつぷりの白い生クリームを使用したフルーツミックスクレープ。

バナナと生クリームとは異なり、チョコレートをを使用した薄茶色のチョコレートのクリームを使用したバナナチョコクレープ。

妖精の魔術の加護の前にはどんな毒も意味を成さないフェアリーの女王でさえも自らの腹を破裂させようという恐ろしい毒であったと思わせるねこやのクレープ。

「はむっ」

そのクレープをセイバーは満面の笑みを浮かべて頬張って食べている。

先程チョコレートパフェを食べたばかりにもかかわらず、甘さなど気にする様子もなく食べている。

（女の子が甘いもの好きって本当だったんだな……）

コーヒーを飲みながら土郎は幸せそうにクレープを食べているセイバーを見ながらそう思った。

（お待たせしました。ご注文のプリンアラモードです）

最後にクロがプリンアラモードを運んできた。

細い足と大きな目の器を持つ、硝子の杯。

真ん中にはカラメルソースがかかった鮮やかな黄色のプリン。

その周りには小さな生クリームの山々、バニラアイスの小さな山、そしてまるまる一個のイチゴが二つにさくらんぼが一つ。

スライスされたキウイが二切れにミカン、そしてウサギの形に切られたリンゴ。
「…いただきます」

セイバーはまず、プリンを周りを固めている生クリーム、アイス、果実を食べていく。先程から沢山食べている筈の生クリームの筈なのに飽きがこない。

ふわりと甘い、白い乳を使ったクリームを掬い上げて、文字通りの意味でとろけるような儚さを楽しむ。

ウサギの形に切られたリンゴはシャリシャリとした食感と爽やかな甘酸っぱさがある。

クレープにも使用されたシロップ漬けのミカンとチョコレートパフェで食べたバナナアイスはどれも甘みがあり、美味しい。

そして最後は本命とも言える真ん中に鎮座している黄色いプリン。

銀の匙の上に築かれた、茶色カラメルソースと黄色いプリンの丘

セイバーは匙でそっと掬ってプリンを一口、口へと運ぶ。

舌の上に広がるのはプリン独特の滑らかな食感と茶色いカラメルソースの少しだけ苦味を含んだはつきりとした甘さ、そしてプリン自体が持つ、濃厚な卵と乳の風味。

カラメルソースの味をプリン本体が柔らかく受け止め、プリンの味をソースが引き締める。

この、圧倒的な組み合わせはまさに人類が生み出した食べ物、の芸術品と言っても過言ではない。

現に衛宮家では、冷蔵庫にプリンがあればそれは弱肉強食な場面を生み出すことがある。

その場に居合わせなかったものは食することが出来ないのは当然のデザート、プリン。

セイバーは一匙、一匙を味わって食べていく。

慎重に、少しでも長くこのプリンを味わうために……

ただその最中、あることを思い出した。

それは先日、桜と大河が見ていたあるドラマのワンシーンであった場面……

ちやうどその場面と今の現状が似ているシーンだったので、セイバーはそれを実行に移した。

「し、士郎」

「ん？なんだ？セイバー」

「……こ、このプリンは、士郎の学友が言うようにまさに人類が生み出した至高の一品ともいえる品です」

「オーバーだな、セイバーは」

「で、ですが、この至高の一品をぜひとも士郎にも味わって頂きたい」
そういつてセイバーはプリンを匙に一掬いした後、士郎に差し出す。

「……」

士郎は思わずセイバーの行動に固まる。

これはいわゆる「あーん」と言う行為だ。

「せ、セイバー……？」

セイバーがただ単に自分にプリンの味を見てもらいたいという意図だけではないことは今の彼女を見れば一目瞭然だった。

何しろセイバーは顔を赤らめて匙を差し出しているのだから……

セイバーと士郎の行動を当然、店にいる全員が見ており、士郎の行動に自然と注目が集まる。

食べるのか？

食べないのか？

セイバーの様な女性から「あーん」をしてもらってそれを断ろうものなら、店の男性客を敵に回しかねない。

その反面、食べたらず食べたで、男性客からの嫉妬の視線にさらされそうな感じもする。なんでプリンを食べるだけでこんなにも緊張しなければならないのだろうか？

でも、セイバーも勇気を振りそぼって行動に移したのだ。

男として彼女の行動を無駄には出来ない。

士郎はゆっくりと動き、

「あ、あーん」

セイバーの差し出した匙に口をつけた。

「……ど、どうですか？士郎」

セイバーは緊張した面持ちで味を尋ねる。

正直、極度の緊張で味なんかわからない。

それでも士郎は集中して全神経を味覚へと注ぐ。

「う、うん……おいしいよ。セイバー」

「そ、そうですか!?それはよかった!!」

セイバーは緊張から解放された様子で言葉を発する。

店内も一瞬で緊張がゆるんだ雰囲気となる。

しかし、

「で、では……士郎……その……次は私にやってもらえないでしょうか?」

なんとセイバーは士郎に次は自分に「あーん」をやってくれと頼む。

しかも上目遣いで……

士郎の心臓がドキッと跳ね上がり、店内は再び緊張した雰囲気にも包まれる。此処で断つたら、ほかの男性客が名乗りを上げるかもしれない。

「よ、よし」

士郎はセイバーから匙を受け取り、プリンを掬うと、

「あ、あーん」

「あーん」

プリンをセイバーに食べさせた。

士郎とセイバーの行為にアレツタは顔を赤らめ、女性客の一部は羨ましいそうに見て、男性客は士郎に嫉妬の視線を向けていた。

そして、帰り間際、お会計の最中にユーリが、

「そういえばお客さん、同じスプーンで食べさせあっていたけど、あれってなんだっけ？
……えつと……そうだ、なんとかキスってヤツじゃない？」

「っ!？」

ユーリのこの一言で先ほど自分たちが行った行為をますます意識してしまい、顔を赤らめる両者だった。

色々ありながらもセイバーと士郎は家路へとついていった。

まさか、この後、士郎は家で女性らの厳しい尋問が待っているとは知る由もなく……

冬木市にある衛宮家に戻り、夕食の準備とそして夕食ののち、士郎はお風呂に入った。その間、女性陣はリビングでテレビとお茶でくつろいでいた。

そんな中、セイバーは今日食べたねこやの料理が忘れられずに思わずつい顔がにやけてしまう。

「あれ？セイバー、今日は随分と機嫌がよきそうじゃない」

セイバーの様子に気づいた凜が何か良い事でもあったのかとセイバーに問う。

「はい、今日は士郎と一緒に美味な料理を食べに行ってきました」

そして、セイバーはつい今日の事を話してしまった。

といつても異世界食堂については深く語らず、ねこやの料理についてのみ言及した。

セイバーのこの一言に、

「なんですって!？」

「ちよつとセイバー!!それどう言う事よ!？」

「詳しく聞かせてください!!」

セイバーに凜、桜、イリヤが詰め寄った。

そして話を聞いた三人は、

「士郎……」

「先輩……」

「お兄ちゃん……」

士郎に対する怒りのような感情が込み上げてきた。

そこにタイミングよく……いや、本人にとつては最悪なタイミングで士郎が風呂から出てきた。

「ふう〜いいお湯だった〜」

風呂から出てきてさっぱりとした気分の士郎に、

「士郎!!」

「先輩!!」

「お兄ちゃん!!」

三人が詰め寄ったのは言うまでもなかった。

場面は冬木市の衛宮家から本日異世界食堂となっているねこやへと移る。

異世界食堂最後のお客である『赤』がビーフシチューを食べ終え、食後のコーヒーを飲み終えた時、

(赤……)

クロが『赤』に脳内で声をかける。

(なんじゃ? クロ)

(実は今日……)

クロは今日、来店した人間なのに自分たちと同じ雰囲気を持つ奇妙な客について話した。

(ふむ、確かにそれは気になる客じゃな)

(うん……それにその人は私たちの世界とも、この世界とも違う人みたいだった……この世界や私たちの世界以外にもまだ私や赤が知らない世界が存在するのかな?)

(ない……とは言い切れんじやろう? 現にその娘二人の元々の世界も妾達が知らぬ世界からきたようじゃし)

『赤』が片づけをしているチトとユーリに視線をむけると自然にクロの視線も二人に向かう。

(まあ、いくつ世界が存在しても、此処は妾の縄張りであることは変わらず、お主は妾と共にこの店を守護することに変わらん)

(うん)

自分達の知らないまだ見ぬ世界……

そんな世界がまだまだあるのだろうか?

そして、その世界にもこのねこやの扉はいずれ出現するのだろうか？

今までそういったことに無頓着なクロがちよつとだけ、興味を抱いた瞬間でもあった。

彼女もこのねこやに働きの来から彼女自身にも心境の変化があつたみたいだ。

異世界へ続く扉……

それはこのねこやだけにしか存在しないのだろうか？

ある休日の日、ユーリは唯達とでかけ、チトは図書館へ、そしてねこやの店主も珍しく外出した。

とはいえ、どこか行く当ても予定もなかったので、適当にぶらりと街中をあるいていると、店主は見知った顔を見つけ思わず声をかけた。

「あれ？ノブじゃないか？」

「ん？もしかして、マコか？」

「やっぱり、ノブか!?!久しぶりだな」

「ああ」

ねこやの店主が声をかけたのはかつて自分と同じ、調理学校に通っていた同期の矢澤信之だった。

同じ調理学校の同期がこうして偶然にも街中で出会った。

久しぶりの再会に積もる話もあったのか二人は近くにある喫茶店に入った。

男二人がこうして出会ったのになぜ、居酒屋ではなく、喫茶店なのか？

それは、ねこやの店主が下戸だからだ。

「ほんと、久しぶりだな・学校を卒業してからだからこれ十年以上か？」

「ああ、そうなるな」

コーヒーを前の互いに再会を懐かしむ。

「そういえば、お前、卒業した後、京都の老舗料亭に就職したよな？今日はわざわざ東京へ買い出しか？」

「買い出しは買い出しだが、『ゆきつな』じゃなくて、俺の店の為の買い出しだ」

「俺の店？…料亭、辞めたのか？」

「ああ、京都の老舗料亭とはいえ、時代の波に乗れなくてな、経営が傾いてきて人員整理されるまえにこつちから辞表を出した」

「…そうか」

「そういうお前はどうかんだ？」

「俺か？俺は…まあ、変わらない。爺さんの店にそのまま入って、その爺さんが死んだ後も店を継いでいる。そういう点では、お前と同じ、一国一城の主だな」

「確かに……」

「でも、京都だと近くにライバル店が多くて大変じゃないか？現にお前さんが働いていたその老舗料亭も経営が危なくなっただらう？」

「まあ、最初の内は閑古鳥が鳴く有様だったが、最近じゃそうでもないさ」

「そうか……」

「お前さんのところはどうか？客、入っているのか？」

「ああ、それなりにな……それに最近、弟子も出来た」

「弟子？」

「ああ、家に住み込みで働いている子なんだけどな、料理に興味が沸いて、今修行中だ。いずれは、俺たちの通っていた料理学校にも通わせようと思っている」

「へえ、そいつは奇遇だな」

「ん？」

「実は、俺のところにも最近、俺の下で料理修行をしている人が居るんだ」

「ほお」

「最初は俺の店の常連客だったんだけど、突然、勤めていた仕事を辞めて料理人になるって言って、俺の下で修行の日々を送っている」

ねこやの店主と居酒屋のぶの店主である信之。

この二人にはこうした奇妙な共通点があった。

それは、今は互いに料理人であり自分の店を持っている事、

そして互いに弟子が居る事、

この二つならば、普通の料理人と変わらないが、ねこやは土曜の日には地球とは異なる異世界へと続く。

そして、信之の居酒屋のぶはなぜか表の入り口が異世界の古都につながっていた。

だが当然、互いにそんなことを言っても馬鹿にされるだろうと思いい口にはしないが、お互いの弟子も異世界人だった。

ねこやでは、世界が終わった世界出身のチト。

のぶは異世界の古都で衛兵を務めていたハンスが信之の下で修業している。

互いに似た環境の二人は、その後学校を卒業した後の思い出話や料理話に花を咲かせた後、ねこやの店主は信之の買い出しを手伝うため、共に市場へと向かった。

ねこやの店主がかつての調理学校の同期と偶然にも再会している頃、唯達桜が丘女子高校のけいおん部のメンバーと共に出かけたユーリは、千葉県の津田沼に来ていた。

今日は音楽のイベントをやりに来たのではなく、音楽のイベントにて演奏を見に来た

ユーリ達。

イベント終了後、会場を後にするユーリ達。

「いやあく面白かったなあ〜」

うーんと背伸びをしながらイベントについての感想を述べる律。

「うん、あのバンドのメンバーの演奏なんて独創的だったよねえ〜」

唯も見学したバンドの演奏についての感想を言う。

「歌詞づくりや作曲にも大変参考になりましたしね」

梓もバンドが歌った歌詞や曲についての感想を言う。

「うむ、充実した日だった」

軽音部にとって充実した日になった様で濡も満足そうだ。

「それより少しお腹が空かない?」

「そうね、お昼時間もずっとバンドの演奏を聴いていたし……」

お昼ご飯抜きでぶっ通しで音楽イベントを見学していた為、イベントが終わり、興奮が冷めるとけいおん部のメンバーとユーリは空腹を覚える。

「おっし、どこかで食べていこうぜ!!」

「賛成!!〜は〜ん〜!!」

地元に帰る前に此処で食事をして行こうと言う律の提案に皆は賛成し、ちよつと遅い

昼ご飯を食べに行くことにした。

そして、とある喫茶店を見つけ、そこに入った。

メニュー表を見る限りごく普通の喫茶店のだが、デザートのパージを見ると、そこにデカデカと貼られている写真に思わず釘付けになるユーリ。

そこにあつたのは……

『超無謀パフェ、制限時間内に食べければ無料』

と書かれていた。

「うわあ、何？このパフェ……」

「流石の私でもちよつと無理かも……」

「私やってみようかな？」

「やめとけ、律」

「そうですよ」

けいおん部のメンバーがこの超無謀パフェへのチャレンジに難色を示す中、

「ぬーん……じゃあ、私やってみる」

と、ユーリがチャレンジすると言う。

「「「えええーっ!!」「」」」

「マジか!?!」

「うん」

「大丈夫なんですか？写真を見る限り、結構なポリウムっぽいですよ」

「そ、そうだよお」

「うーん、多分大丈夫だから問題なし」

そう言つてユーリはメインの食事はサンドイッチのセットと軽めに頼み、デザートに超無謀パフェを注文した。

けいおん部のメンバーとユーリが食事をしていると、

「また超無謀パフェに挑戦だ！」

「また？」

「今度こそ勝つ！」

「おお、ヨーコが燃えてマース！」

「そもそも勝つって誰によ？」

「勿論、私自身に！」

「張り切っていますねー」

「こう言うの天井つていうんだっけ？」

「おい！」

「向こう側の人もこの超無謀パフェ、頼むみたいだな」

そこには自分らと同じ年ぐらいの少女達が居た。

彼女らの中で茶髪のショートヘアの少女がユーリが頼んだ超無謀パフェに挑戦するみたいだ。

ただ、その中のある少女をみたユーリは、

（あれ？なんで、此処にリゼがいるんだろう？）

と、以前チトと一緒にヘルプで働いたお店のバイトの子が居た事にちよつと驚いた。

「挑戦するのはいいけど、お金はちゃんとあるんでしょうね？」

「ないー！」

「……」

超無謀パフェに挑戦する女子高生の返答に絡まるリゼ？だった。

やがて、食事が終わり、ユーリの目の前に、

「お待たせしました。超無謀パフェです」

例の超無謀パフェが置かれた。

「こ、これは……」

「写真と現物とじゃ、やっぱり迫力が違うな……」

「見ているだけで辛いです」

「本当に食べられる？」

「無理しないでね」

けいおん部のメンバーが不安そうにユーリに声をかける。

超無謀パフエはねこやで提供しているパフエの五倍以上の大きさの器にクリームやアイス、果物、焼き菓子をこれでもかかっていうぐらい盛り付けている。

「まあ、何とかなるでしょう」

ユーリは恐れる様子もなく、普段と変わらない様子で匙を手にする。

「では、このタイマーが鳴る前までに食べきればチャレンジ成功です。準備はいいですか？」

「いつでもいいよ」

「それでは……スタート」

お店のウェイトレスがタイマーのスイッチを押すとカウントダウンが始まり、ユーリは超無謀パフエへと挑んだ。

「あつ、あの金髪の人もチャレンジしてマース」

「金髪!?!」

リゼ?がいる席に居た片言の日本語をしゃべる金髪少女が超無謀パフエに挑戦して

いるユーリに気づくと、彼女の言う『金髪』と言う単語にこけしのような少女が物凄い反応を示した。

「えっ？ ホントに？」

「あつ、ホントね」

「凄いなー」

超無謀パフエに挑戦しているユーリに自分らとあまり変わらない年で超無謀パフエに挑戦しているその姿を見て、思わず感嘆の声を漏らす女子高生達。

そんな女子高生達の前に、

「お待たせしました」

ユーリが挑戦しているモノと同じ、超無謀パフエが置かれた。

「おつ、来た来た」

「相変わらずすごいわね……」

「ううくやつぱり見ているだけでお腹いっぱいだよお」

「では、いぎ勝負!!」

超無謀パフエを注文した女子高生はユーリに少し遅れて超無謀パフエに挑戦した。

しかし、それから数分後……

「うっ……」

順調に進んでいたかと思われていた女子高生のスプーンの動きが次第に鈍くなり、そして等々止まってしまった。

「やっぱり……」

リゼ？は内心分かっていた結果に呆れた様子。

一方、同じ超無謀パフエに挑戦したユーリは、

「御馳走さま」

「た、食べちゃった……」

「すげえ、ユーリ、すげえ!!」

「罰金払わずに済む」

「アツチの人は完食したみたいデース」

「凄いなー」

「流石金髪です」

「いや、金髪は関係ないと思うが……」

「はあく……今日も罰金かあく……」

「もう陽子ったら、まあ仕方ないわね。私が立て替えてあげるわ」

「サンキュー!」

「ちよ、調子に乗らないでよ」

「アヤヤ照れてマース！」

「仲良しですねー」

「そうだねー」

超無謀パフエに挑戦した茶髪の少女は友人の助けもあり、無銭飲食にはならなかったみたいだ。

けいおん部のメンバーとユーリは超無謀パフエに敗北した女子高生達よりも先に食事が終わったので、

「よしっ、腹ごしらえも終わったし、そろそろ帰ろうぜ!!」

と律が声をかけ、帰ることにした。

律の声を聞いた少女達は、

「あれ？今、烏丸先生の声がしなかった？」

「確かに聞えました。あれは確かに烏丸先生の声デース」

「でも、いないよ」

律の声は彼女らの先生の声に似ているようだ。

そして、こけしのような少女はお店を出ていくユーリと袖に声をかけたかったように手を伸ばして「あああ〜」と残念そうに唸っていたが、席の両脇を金髪の少女二人に固められていた為、動けなかった。

そんな少女の視線や仕草に気づくことなく、けいおん部のメンバーとユーリは帰っていった。

なお、その日の夜、ユーリはリゼに電話を入れて今日千葉の津田沼に行かなかつたかを尋ねると、リゼからの返答は当然、行っていないと言う返答がきた。

一方、図書館へ行ったチトは、ライトノベルのコーナーにて気になる題名のライトノベルを見つけ、手に取った。

そのタイトルは……

「オオカミと調味料？」

オオカミは兎も角、調味料と言う事は料理系の内容なのだろうか？

読んでみると内容は、旅の青年行商人が商取引のために訪れた村を後にした夜、荷馬車の覆いの下に眠る一人の密行者を見付ける。その密行者は賢狼と呼ばれる狼の化身である少女だった。

彼女を旅の供に迎えた青年行商人は、行商の途中で、様々な騒動に巻き込まれながら、彼女の故郷を目指して旅をすることになると言う内容だった。

(二人つきりで旅か……)

あの終末世界をユーリと二人で旅をしていた頃を思い出したチトはその本を借りた。

その他にコーヒーの名前みたいなペンネームの小説家が書いた作品：「少女終末旅行」「異世界食堂」の内容が自分とユーリが旅をしてきたあの世界の内容に似ている事や、異世界食堂の内容・週に一回とある食堂が地球とは異なる異世界に繋がり、その異世界の住人達が食事をしに来るなど、まさにねこやの状況そのままの内容だった。

「一体、この小説家はどこで……」

偶然と言えるレベルを超えている内容に驚愕するチト。

まさか、自分の相棒が以前、この小説家にネタを提供していたとは知る由もないチトだった。

後日、チトが借りたライトノベルがアニメ化していた事を知りユーリと一緒に見てみると、

「ねえ、ちーちゃん」

「なんだ？」

「この桃のはちみつ漬けてってヤツを作って!!」

とユーリがアニメの話の中に出てきた桃のはちみつ漬けを作ってくれと頼んできた。

「いや、アニメの中の話だけじゃ情報が少なすぎるし、第一材料がない」

「がーん」

とこの時チトは無理だと言った。

後日、ユーリは桃のはちみつ漬けが諦めきれないのか、ねこやにやって来たけいおん部のメンバーに桃のはちみつ漬けについて何か知っているか尋ねた。

「……桃のはちみつ漬け?」

「うん。アニメで見たんだけど、作り方とか知っている?」

「うーん：レモンのはちみつ漬けとかなら聞いた事が有るが桃は……」

「ムギ先輩は知っていますか?」

「ああ、ムギなら知っていそうだな、金持ちだし、いろんなお菓子を貰っているし」

「ムギちゃん、教えて!!」

皆の注目が紬に集まる。

「うーん……ごめんなさい、私も桃のはちみつ漬けは食べた事が無いわ」

「そっか、ムギも知らないか……」

「桃のはちみつ漬け……食べてみたかった」

「私もだよ」

「まだ、言っているのか?」

余程桃のはちみつ漬けが食べたかったのか、情報が無かった事に落胆する唯とユーリ。

「ぬー……」

「おおおー」

チトは精々、自分らとけいおん部のメンバーの量ぐらいかと思つたら、箱で送つて来た。

「紬：一体、何人分用意させるつもりだったんだ？金持ちは加減を知らないのか？」

「まあ、沢山食べられるからいいじゃない」

「お前ってヤツは……これだけの量なんだ。お前も手伝えよ」

「OK」

さこうしてチトとユーリはこの大量の桃に挑んだ。

賢狼が求めし黄金の果実

「……」

その日、チトとユーリは緊張した面持ちで冷蔵庫の中からガラス製の密封瓶を取り出す。

其処には金色のはちみつにとっぷりと漬けられた桃の果肉がぎっしりと詰められていた。

事の発端は約一ヶ月ほど前に遡る。

ユーリがとあるアニメの話の中に登場した桃のはちみつ漬けを食べてみたいと言う発言から始まり、チトが作り方を調べたのだが、肝心の材料が手に入らなかった。

そんな時、ユーリの友達の一人、琴吹紬が材料を揃えてくれると言う事になり、それからすぐに紬はねこやに桃のはちみつ漬けに必要な材料と密封瓶を送ってくれた。

しかし、チトにとつての誤算は紬が大量の材料を送って来た事だった。

だが、紬の行為はユーリに関して、これは嬉しい誤算だった。

何しろたくさんさんの桃のはちみつ漬けを食べる事が出来るのだから……

季節感を無視したこの大量の桃の山……

一体何処から手に入れてきたのだろうか？

まあ、今更そんな事を考えても仕方がない。

折角こうして細が材料を揃えてくれたのだ。

ちゃんと作らなければ食材を用意してくれた細にも用意された食材にも失礼だ。

「さて、それじゃあ、やるか」

「おぉー!!」

チトはユーリにも手伝ってもらい、桃のはちみつ漬けの製作に取り掛かった。

「ユー、大鍋に水を入れて沸かして」

「ん？いいけど、お湯なんて何に使うの？」

「桃と蜂蜜を入れる密封瓶を消毒する為に使うんだよ」

「消毒？お湯で？」

「そう、はちみつに漬けるとはいえ、れっきとした漬物だからね、このあと数週間の間、冷蔵庫の中に桃を漬けるんだ。もし、瓶の中に細菌が入っていたら、瓶の中の桃が腐って食べられなくなるぞ」

「そ、それは大変だ」

チトの説明を聞いてユーリは大鍋に水をはって火にかける。

折角楽しみにしていた桃のはちみつ漬けが食べる事無く腐るのはユーリにとっては死活問題だった。

お湯が沸く間、チトは具材の準備に入る。

まず、水洗いをした桃の割れ目に包丁の刃を入れて、桃の実を回しながら切る。

切り込みを入れたら、両側をねじると簡単に二つに分ける事が出来た。

種はスプーンでほじくって取り出す。

そして、手で桃の皮を剥く。

桃の皮を剥いた後、食べやすい大きさに桃をスライスする。

そんな中、チトはスライスした桃を一切れ味見する。

季節外れとは言え、桃の味は噛みしめると口の中には甘い果肉、そして「こんなにも」と思うくらい甘い桃の果汁が、口一杯に広がり、桃独特の甘い香りが鼻腔に抜ける。

「はむっ……モグモグ……うむ、美味しい」

「ああっー!!ちーちゃん、ズルイよ!!」

チトが桃を味見したのを見たユーリが自分も食べたと言う。

「ぬー…仕方がないな……でも、あまり食べ過ぎるなよ」

「大丈夫、大丈夫」

「いや、お前のお前のはあまりあてにならないんだが……」

そう言つてチトはユーリに桃を手渡す。

チトはユーリにあまり桃を食べるなど言つたが、ユーリはその後、桃を三つまるまる食べた。

だが、これだけの沢山の桃：三つぐらい大した影響はなかった。

続いて桃と一緒に漬けるイチジクの皮を剥きスライスする。

勿論、イチジクもスライスした後、チトとユーリは味見をした。

桃同様、イチジクも口の中に入れて、とろりとしたジューシーな果肉と果汁がした。

ただ、イチジクは桃よりも数が少なかったので、ユーリに食べさせるのは一つまでにさせた。

桃とイチジクの準備が出来、次は風味を際立たせる為の生姜の皮を剥いて、摩り下ろす。

「ちーちゃん」

「ん？」

「生姜は味見しないの？」

「……いや、そこまではしなくてもいいだろう」

辛味のある生の生姜は流石のチトも食べる気にはなれなかった。

「……もしかして、ちーちゃん。辛いのが苦手？」

「……」

ユーリの指摘にチトはプイッと視線を逸らす。

「しょうがないなあ〜じゃあ、代わりに私が……」

そう言つてユーリは生の摩り下ろした生姜を一つまみして口の中へ入れる。

「っ!？」

生の生姜のすり身を口に入れた途端、ユーリは水道へと走り、水を大量に飲んでい

「……」

ユーリでも生の生姜はきつかったみたいだ。

次に桃を漬ける為のはちみつ味の見をするチト。

紬が用意したのはちみつは、琴吹家の経営する養蜂場で取れた上質なはちみつで、癖がなく上品なコクがありソフトでまろやかな舌ざわり、ほんのりと酸味があり、フローラルな香りがした。

そして、あと味がスツキリして喉がやける様なハチミツ特有のドロツとした甘さは感じさせなかった。

先程、生の生姜をダイレクトに食べたユーリは、はちみつを食べて生姜の辛さを中和させた。

そして沸いた鍋のお湯の中に密封瓶を入れて瓶を煮沸消毒して瓶を清潔にする。

消毒した密封瓶にスライスした桃を入れ、次にイチジクを入れ、その次に少量のアーモンド、その順番を繰り返して瓶が一杯になるまで詰めていく。

最後に生姜を入れた後、はちみつをたっぷりと上からかけて密封瓶をはちみつで満たし、蓋をする。

「さあ、これで後は冷蔵庫に入れるだけだ」

「おおおお……」

出来上がった桃のはちみつ漬けを見てユーリは感嘆の声をあげる。

でも、これはあくまで最初の一つ……

まだまだ桃やイチジクは沢山残っている……

「さて、次を作ろう」

「おおー!!」

こうしてチトとユーリは二つ目の作業に取り掛かった。

そして時間は流れ……

「い、い、これで……」

「最後……」

あれだけ沢山あった桃のはちみつ漬けの材料をすべてはちみつ漬けにしたのは始めてから三時間経ってからだった。

「ぬー……手がいつてえ……」

桃とイチジクを沢山切ったチトの手はプルプルと痙攣していた。

そりや、三時間ぶつ通しで果実を切っていたら痙攣を起こすのも当然だ。

「うお、なんだ？こりや？」

そこへねこやの店主が厨房に所狭しと並べられた桃のはちみつ漬けの量に驚く。

「あつ、テンチョー」

「聞いてはいたが、凄い量だな」

ねこやの店主は、チトとユーリが桃のはちみつ漬けを作ると聞いていたが、まさか此処までの量を作るとは予想外だった。

「アニメでは二ヶ月漬けるって言っていたけど、念の為、一ヶ月にしてみよう」

チトが桃のはちみつ漬けの熟成期間を一ヶ月と決めた。

ねこやは料理屋なので、冷蔵庫は大きなモノがあるので、この大量の桃のはちみつ漬けを保存するには問題はなかった。

それから一ヶ月の月日が過ぎ……

「ねえ、ちーちゃん」

「ん？なんだ？ユーリ」

「そろそろ、アレ出来たんじゃない？」

「アレ？」

チトはユーリの言う「アレ」について心当たりがなく首を傾げる。

「忘れたの？ほら、桃のはちみつ漬けだよ」

「ああ〜」

チトは忘れかけていたが、食べ物に関しては何れも良いユーリは忘れておらず、そろそろ漬けて一ヶ月になる桃のはちみつ漬けの様子を見てみようと言うのだ。

そして、場面は冒頭に移る。

「……」

そしてチトとユーリは緊張した面持ちで冷蔵庫の中からガラス製の密封瓶を取り出す。

「出来ているかな？」

「ぬー…どうだろう？」

瓶を一つ取り出して、恐る恐る蓋を開けてみる。

煮沸消毒が行き届いている為、中身は無事な様で腐ったような臭いはしなかった。

「……」

瓶の中に入っている桃は切る前の薄黄白色だった果肉は、はちみつで一ヶ月漬けたこ

とにより、桃の実は全体が金色に染まっていた。

皿の上に、はちみつに一ヶ月どっぷりと漬かった桃を一切れ乗せる。

「それじゃあ……」

「あ、ああ……」

いよいよ桃のはちみつ漬けの試食をする事になった。

フォークで刺して、桃を恐る恐る口へと運ぶ。

「あーむ……」

まずはユーリが桃のはちみつ漬けを口の中に入れる。

「モグモグ……」

「どう?」

「モグモグ……ゴクン……」

咀嚼した後、ユーリは桃を胃袋へと落とす。

「ぬーん……あまーい……それに美味しい〜」

ユーリは顔の筋肉を緩めて桃のはちみつ漬けが美味かった事をチトに伝える。

「……」

ユーリの感想を聞いてチトも桃のはちみつ漬けを口の中へと運ぶ。

はちみつに漬けていただけあって味はかなり甘めであったが、桃の風味をしつかり残

し、後からはちみつの味と甘さがやってくる。

「うーん……確かに美味しいけど、ちょっと甘すぎるな……」

チトは桃のはちみつ漬け単品だけでは甘すぎると感じ、冷蔵庫からプレーンヨーグルトを持って来た。

元々ヨーグルトとはちみつの相性は良かったので、はちみつに漬けたこの桃もヨーグルトに合うのではないかと思っただのだ。

ヨーグルトの甘酸っぱい酸味とはちみつに漬けた桃との相性はやはり抜群だった。

「はあ〜美味しい〜」

「……はあ〜」

桃のはちみつ漬けヨーグルトを堪能したチトとユーリ。

その後、二人はねこやの店主にも桃のはちみつ漬けの味を見てもらい、お墨付きをもらった。

桃のはちみつ漬けを取り出してから初めての異世界食堂となりアレツタとクロが来た時も二人に桃のはちみつ漬けを出した。

アレツタは桃を食べるのは、これが初めてなのか、大変桃を気に入り、ユーリ並みに食べていた。

反対にクロは甘いものがちよつと苦手なのかユーリやアレツタほど食べるはしなかつ

た。

ユーリは別の日にけいおん部のメンバーを呼んで出来上がったばかりの桃のはちみつ漬けを提供した。

桃のはちみつ漬けを楽しみにしていた唯や律は満面の笑みで桃のはちみつ漬けを食べた。

「うめえ!!」

「うん、美味しい!!」

「桃のはちみつ漬け：初めて食べましたけど、美味しいですね」

「うむ、そのまま食べてもいいし、ヨーグルトに混ぜても美味しいな」

「ホント、美味しいわ。それに紅茶ともよく合うわね」

けいおん部のメンバーにも桃のはちみつ漬けは好評であり、作った数が多いので一人一瓶お土産として持って帰ってもらった。

その他にもチトは暁の所とチノの所にもクール宅急便で桃のはちみつ漬けを送った。

く木組みの家と石畳の街 ラビットハウス Side へ

「ありがとうございました」

「ご苦勞様です」

その日、チノは宅急便の業者から荷物を受け取った。

「宅急便？」

「どこからだ？」

「えつと……チトさんからです」

伝票の送り主はチトからだった。

「えっ!? チトちゃんから!？」

意外な人からの宅配便にちよつと驚いているココア。

「はい」

「何を送って来たんだ？」

リゼはチトが何を送って来たのかを尋ねる。

「えつと……伝票では、漬物って書かれています」

「漬物？」

「チトの居る店は確か洋食のお店だから、ピクルスでも送ってきたのかな？」

伝票に『漬物』と書かれていた事、

チトが洋食屋で働いている事から彼女が送って来た漬物がピクルスかと思ったチノ達。

しかし箱を開けてみると、そこには予想に反して密封瓶に入った何かが入っていた。

形状から言っても瓶の中身はどうみてもピクルスではなかった。

「なんだ？それは……？」

「ピクルスじゃないね」

今までで見た事もない形状の漬物に首を傾げるリゼとココア。

「手紙には『桃のはちみつ漬け』って書いてあります」

「桃の!？」

「はちみつ漬け!？」

聞いた事の無い漬物に驚くリゼとココア。

「ねえ、ねえ、早速食べてみようよ!!」

「そうだな、どんな味がするのか気になる」

「そうですね。手紙にはヨーグルトと一緒に食べるといって書いてあります」

「じゃあ、早速ヨーグルトを持って来るね」

「では、私は皿とスプーンを用意しよう」

リゼが皿とスプーンを用意し、ココアが皿の中にヨーグルトを入れる。

そしてチノが桃のはちみつ漬けを瓶から出してヨーグルトの上に乗せる。

「それじゃあ……」

「「いただきます」」

桃のはちみつ漬けをヨーグルトに混ぜて食べるチノ達。

「美味しい!!」

「はい：桃にはちみつ：ヨーグルトの味がマッチしてこれは：美味しいです」

「うむ、確かにうまいな」

「ねえ、チノちゃん。今度、チトちゃんにコレの作り方を教わろうか?」

「そうですね」

チノ達は桃のはちみつ漬けヨーグルトを堪能した。

桃のはちみつ漬けヨーグルトを食べ終えた後、チノは何かを思い出した様子で、顎に手を当てて考え込む。

「うーん……」

「どうしたの?チノちゃん」

ココアが気になって声をかけると、

「あつ、いえ……」

「どうした?何か悩み事か?」

「そうではなく：チトさんの事で思い出した事があつて……」

チノはチトからの贈り物でチトの事を思い出した。

「なにになに?」

「チトさん：毎日、日記を書いていて、私が聞いたら、日記を書く理由が、『自分が生き残す為』って言っていました」

「……」

チノから聞いたチトが日記を書く理由に対して固まるココアとリゼ。

「ココアさん、リゼさん」

「なに？チノちゃん」

「なんだ？チノ」

「人は何故生きるんでしょうね？」

「……」

「……」

チノの疑問に答える事が出来ないココアとリゼだった。

チノ達ラビットハウスの他にチトは暁の下にも送り、物はちゃんと暁達が居る学生寮に届いた。

「チトから宅配便ですって」

「それで、チトは何を送って来たんだい？」

「伝票には漬物って書いてあるわね」

「漬物：なのです？」

「あまり臭いがきついのはちよつと勘弁してほしいわね」

チノ達は最初、チトが送ってきた漬物をピクルスだと思っていたが、曉達は漬物と聞いて、よく和食の膳に添えられている野菜の塩漬けや酢漬けの漬物かと思っていた。

そして、箱を開けてみると其処に入っていたのは、密封瓶に入っただけのはちみつに漬かった黄金色の果実だった。

「ん？何かしらコレ？」

「チトからの手紙には桃のはちみつ漬けと書いてある」

「桃の!？」

「はちみつ漬けなのです!？」

漬物と言うと真つ先に思いつくのが野菜の塩漬け、酢漬けの印象が強かった曉達にとつて果実・しかもはちみつで漬けるなんて前代未聞の代物であった。

「美味しそうですね」

「そうね、夕食の後のデザートで食べましょう」

「手紙にはヨーグルトに混ぜると美味しいって書いてある」

「ヨーグルトあったかしら？」

雷が食堂の冷蔵庫に行き、ヨーグルトの在庫があるかを確認する。

「大丈夫、あったわ、ヨーグルト」

「じゃあ、今日の夕食のデザートに食べましょう」

暁達はチトから送られた桃のはちみつ漬けをその日の夕食のデザートに食べることにした。

そして、夕食を食べ、いよいよ桃のはちみつ漬けを食べる時間となり、チトの手紙に書いてある通り、ヨーグルトに混ぜて桃のはちみつ漬けを食べた。

勿論、最初はヨーグルトに混ぜる前に桃のはちみつ漬けを食べてみた。

「「甘い（なのです）」」

はちみちと桃の甘さに思わず声をあげる暁達。

そして、次にチトの手紙の通りヨーグルトに混ぜて食べてみる。

「そのままでも美味しいけど、ヨーグルトをかけて食べるとより一層美味しいわね」

「B K Y C H O (ワクウースナ)！」

「これなら何杯もいけちゃうわ!!」

「なのです!!」

ヨーグルトの酸味と桃とはちみつの甘みが混ざった桃とはちみつヨーグルトは、とてもおいしく、暁達は次々とおかわりを繰り返した。

一瓶あった桃のはちみつ漬けはあっという間に無くなった。

「はあく美味しかった」

「なのです」

桃のはちみつ漬けヨーグルトを食べ終え余韻に浸っている暁達。

そこへ、

「あら？ 暁さん達」

「いつも四人一緒に仲良しさんですね」

食堂に誰か来た。

「あら？ 赤城さんに加賀さん」

食堂に来たのは暁達の先輩で弓道部に所属する赤城と加賀だった。

「なんだか、甘い匂いがします」

「あら？ そうね」

加賀が食堂からほのかに漂う桃のはちみつ漬けの甘い匂いを感じとる。

「暁さん達の方から匂いますけど……」

「今日のデザートですか？」

「いえ、これは私達の友達からの贈り物です」

「美味しそうな匂いです」

「それは何なんですか？」

「桃のはちみつ漬けなのです」

「桃の!?!」

「はちみつ漬け!?!」

電からこの甘い匂いの正体を聞いて衝撃を受ける赤城と加賀。

「あの・・それってまだ残っていますか!?!」

赤城が暁達にズイツと顔を寄せてまだ桃のはちみつ漬けが残っているかを尋ねる。

暁達に頼んで桃のはちみつ漬けを食べたいみたいだ。

赤城の他に加賀も食べたいのだろう。

表情は変わらないがうずうずとちよつと落ち着かない様子だ。

しかし、彼女達の希望は打ち碎かれる事になる。

「す、すみません」

「もう残っていないのです」

「「ガーン!!」」

既に桃のはちみつ漬けが売り切れと言う事実に大きなショックを受ける赤城と加賀。

よほどショックだったのか、二人とも後輩の目の前にも関わらず、床にor zの姿勢

で項垂れている。

「え、えつと・・・」

「ど、どうしよう……」

「先輩達、元気を出すのです」

項垂れている先輩達の姿を見てどうしたものかとオロオロする暁達。

赤城と加賀はこれでも学校では『頼れる先輩』『学園のお姉様』と言うイメージで通っていたのだが、目の前で桃のはちみつ漬けを食べられなかつた事でシヨックを受けて項垂れている赤城と加賀の姿を見て狼狽えない方がおかしい。

「先輩、必ず貰える保証はないけど、桃のはちみつ漬けを作った友人にまた送ってくれるように頼んでみるよ」

響が赤城と加賀の二人にチトに追加の桃のはちみつ漬けを送ってくれるように頼んでみると言うと、二人はバツと顔をあげて、

「本当ですか!？」

「ぜひお願いします!!」

響の手を握りしめ、お願いした。

「D、D a (ダー)」

赤城と加賀のあまりの食いつきぶりに普段は冷静沈着な響もこの時ばかりはちよつと引いた。

流星に夜の時間帯に電話を入れるのも気が引けたので、響は次の日に早速チトの居る

ねこやに電話を入れた。

「それで、学校の先輩がチトの作った桃のはちみつ漬けを食べたがっていて、よければ、追加で送ってくれないかい？」

「まあ、まだ沢山あるから構わないけど……」

チトは響にまだ桃のはちみつ漬けは沢山あるので追加で送っても構わないと答える。

「Спасибо! (スパシーバ)」

(響は時々ロシア語が混ざる時があるんだけど、何を言っているのかわらない)

チトが響きと電話をし終えると、

「ん？ちーちゃん、誰かと電話していたの？」

そこにユーリがやって来た。

「この前一緒にカレーを作った私の友達」

「へえうちーちゃんに友達がいたのか……」

「悪いか？」

「いやいや、ちーちゃんが私以外に友人が出来た事は実に喜ばしい事だよ」

ニヤニヤした顔でチトを褒めるユーリ。

「何か、その顔ムカつく……」

「それで、何の話をしているの？」

「ああ、友人の学校の先輩が桃のはちみつ漬けを食べたいみたいだから、追加で送ってくれってさ」

「えええーっ、そんな!?! 私の食べる分が減るじゃん!!」

「あれだけ沢山あるし、いいだろう。早く食べちゃわないと腐るから勿体ないし」

「ぬー…：それでその先輩さんってよく食べる人なの?」

「まあ、響が言うには見かけによらず食べる方らしい…お前や以前お店に来たあのセイバーさんみたいに」

「へー…：あつ、それなら、私がお店の人に良いお店を紹介してあげよう」

「いいお店?」

「うん。ちーちゃん、もう一回さっきの人に電話して」

ユーリに促されるまま、チトは響に折り返し電話を入れた。

「あつ、響? ゴメンね、ついさっき電話貰ったばかりなのに」

「いや、気にしていないよ。それで、どうしたんだい?」

「私の…友達? でユーリってヤツが居るんだけど、そのユーリがさっき言っていた先輩さん達に紹介したいお店があるって言うんだけど、その先輩さん達の予定で都合のいい日とかを聞いておいてくれる?」

「わかった」

「あつ、あと、その先輩さん達は食べ物で何か嫌いなモノとかつてある？」

「いや、先輩達は基本なんでも食べるよ」

「わかった。それじゃあ、日程の方は任せるよ」

「うん」

チトと電話を終えた響は早速赤城と加賀の下に向かい、桃のはちみつ漬けが貰える事を伝えると、二人は物凄く喜んでいた。

そしてもう一つ……

「あつ、先輩達」

「なんですか？」

「なんででしょう？」

「それで、桃のはちみつ漬けをくれる人の友達が先輩達に紹介したいお店があるって言うんだけど、都合のいい日を教えてもらえませんか？」

「それなら……」

赤城は響に部活の休みの日を伝えた。

響はチトに赤城達の所属する弓道部の休みの日を伝え、その日を迎えた。

「はじめまして、ユーリです」

「チトです」

「お話は響さんから聞いています。赤城です。よろしく」
「加賀です」

ユーリとチトは千葉県の津田沼駅で赤城と加賀の二人と出会い、以前ユーリが超無謀パフェに挑戦したあの喫茶店に向かった。

その喫茶店では、

「うっ……だ、だめ……ギブアップ……」

あの時、超無謀パフェに挑戦した女子高生がおり、また超無謀パフェに挑戦してまたもや敗北した。

「まったく、毎度、毎度、懲りずによく挑戦するわね」

リゼ？に似た女子高生が呆れた様子で言う。

「だつてえゝこの前、目の前ですんなりとクリアーされたんだぞゝそれなら、自分もいけるって思うじゃん!!」

「はあくあの時は、あの金髪の子達に声をかけたかったですゝ」

こけしのような少女はあの時、ユーリと紬に声をかける事が出来なかった事を残念がっている。

「もう、シノつたら、金髪なら私がいるじゃない!!」

「そ、そうですね、アリスゝ!!」

「シノ〜!!」

アリスと呼ばれた小柄な金髪とシノと呼ばれたこけしのような少女は和気あいあいと抱き合つて百合百合しい空気を出している。

その時、お店の来客を知らせる扉に設置されたベルが鳴る。

「此処がこの前、唯達と来た喫茶店」

入ってきたのは先日、このお店で超無謀パフエに挑戦して見事クリアしたあの金髪の少女だった。

「あつ、あの人は……」

金髪の少女を見てシノが目を輝かせる。

「むう〜」

そんな、シノの様子を見て面白くないのか頬を膨らませるアリス。

店員の案内の下、テーブル席に案内されてメニュー表を見る。

「超無謀パフエ……チャレンジさせていただきます」

「負ける気がしません」

赤城と加賀はやる気満々だった。

「すみませーん」

ユーリが店員を呼ぶ。

「はい」

ユーリに呼ばれ店員がユーリ達の居るテーブル席にやって来る。

「お待たせしました。ご注文はお決まりでしょうか？」

「この、超無謀パフェを三つ下さい」

「はい」

「それとホットコーヒーを一つ」

「はい」

赤城、加賀、ユーリの三人組は超無謀パフェを注文し、チトはホットコーヒーを注文した。

赤城と加賀の二人はメニュー表を見た超無謀パフェの実物が来るのをワクワクしながら待っていた。

やがて、

「お待たせしました。超無謀パフェです」

「うおっ!!なんだ!!?その化け物パフェは!!?」

チトはねこやでも提供していない程の大きさを誇る超無謀パフェを見てその大きさと圧倒感に思わず声をあげる。

「美味しそう」

「負けません」

「いただきます」

前回同様、タイマーのカウントダウンが始まり、三人は匙を手にして超無謀パフェへと挑んでいた。

（本当に食べきれるのか？）

チトは三人が挑んでいる超無謀パフェの量に制限時間内に食べきれるとか懐疑的だった。

しかし、

「「ズ」ちそうさまでした」

制限時間内に三人は超無謀パフェを食べてしまった。

「あの人、また完食しちゃった……」

「凄いデース！」

「流石金髪です」

「だから金髪は関係ないじゃん」

「他の二人の人も完食しちゃっている」

「完食出来ない私が変なの？」

「いえ、普通は逆だから」

「はあく……今日もまた罰金かあ〜」

超無謀パフエに挑戦し、敗北した女子高生が項垂れる。

そこへ、

「あ、あの……」

「あ、完食した人！」

女子高生らのテーブルに先程、超無謀パフエを完食した黒髪の女性が声をかける。

「ちよつ、陽子、失礼でしょう！」

「いえいえ、あの、よろしければそれもいただいてもよろしいですか？」

「えっ、いいの!?!」

「でもさつき食べたばかりでは……?」

「大丈夫ですよ」

そう言つて彼女は二個目の超無謀パフエに挑戦し、

数分後……

「ごちそうさまでした」

少し減つていたとはいえ、二個目の超無謀パフエを完食してしまった。

「ホ、ホントに食べちゃった……」

「まさにブラックホールネ!!」

「あ、ありがとうございます！」

「あのまま残すのは勿体なかったのですね」

「本当に助かったよ！ありがとうございます！」

「申し遅れました、私は赤城といいます」

「私、猪熊陽子！よろしく！」

「小路綾です。この度はどうも……」

（やっぱり、リゼじゃなかったのか……）

「私は大宮忍です。」

「あ、アリス・カータレットです」

「ハイ！九条カレンダンス！ヨロシクダンス！」

（金剛さんではありませんでしたか……）

女子高生らの自己紹介の中でユーリは綾と名乗る女子高生がリゼでは無かった事、赤城はカレンが自分の学校に居る同級生と違っていた事にちよつと驚いていた。

何しろリゼと綾は外見も声も似ており、カレンと赤城の同級生は片言の日本語発音と声が物凄く似ていたからだ。

「赤城さん」

「あつ、加賀さん」

「お友達? : : : ですか?」

「はい、私の学校の同級生の加賀さんです」

「どうも」

「ヨロシクデース!」

(物静かな人 : : : でも、この人も赤城さんと同じく超無謀パフエを完食した人よね)

「赤城さん、ズルイなくもう一個食べちゃうなんて」

そこへ、ユーリが赤城に声をかける。

「っ!?!」

すると、こけしのような少女、しのこと、忍は徐に席を立つと、

「シ、シノ?」

「ん? どうしたの?」

「行けませーん!! 逃げてくだサイ!」

「えっ?」

「うきやー!!!」

「うわっ!?!」

忍はユーリに抱き付いた。

「ユー!?!」

「ああ……何という抱き心地……」

ギユウウ……

「ちよつ……何だ？コイツ……苦しい……」

「ああ、シノの持病が発動シテしまいマシタか……」

カレンは『あちや』といった仕草で忍とユーリのやり取りを見る。

(シノオ……)

アリスは自分以外の金髪の女の子に抱き付いている忍に対して嫉妬心を露わにしている。

「アリスも何かヤバくなってマス！」

「いやーそれにしても御三方、見事な食べっぷりでした！師匠と呼ばせてください！」

「えっ？」

「師匠……ですか……？」

「ちーちゃん、私にも弟子が出来たよ」

「いや、違うだろう。あつ、申し遅れました。私はチトと言います」

(もう、何よ。陽子ったら……初対面の人にあんなに……)

(なんか、リゼっぽい人が怒っている様な気もする……)

「あ、アヤヤどうかしましたか？」

カレンが声をかけるが、綾にはその声は届いておらず、

(いやいや待て……大丈夫よ……一緒にいる時間はこっちの方が上なんだから、それをアドバンテージにして……)

「ちよつと陽子！赤城さんも加賀さんもユーリさんも困って……」

「ん？」

「はい？」

「えっ？」

ポヨーン

(完全に負けたー！)

一緒に居る時間は長くても綾と赤城、加賀、ユーリの三人に比べて女性の象徴の部分
は完全に敗北している綾だった。

(な、何よ、アレ……下手すると陽子より大きいかも……やっぱりよく食べる方がいいの
かしら……?)

「あ、綾？」

「私もあのパフェ挑戦しようかな……？」

「どういう心境の変化だよ？」

綾の言動に戸惑う陽子だった。

一方、忍に抱き付かれていたユーリは何とか開放してもらった。

「す、すみません。つい興奮してしまつて……」

忍は申し訳なきようにユーリに頭を下げる。

「ハハハハ……まつたく、シノはしようがないデスねー」

「……」

カレンは忍の癖を笑いながら言うが、アリスはユーリの事をジツと睨んでいる。

「ん？どうしたの？お腹でも減つたの？」

ユーリは何故アリスが自分の事を睨むのか見当もつかなかったので、彼女に空腹なのかと問う。

すると、

『初めまして、私はアリスといいます、あなたの名前は？』

アリスは英語でユーリに自己紹介をして尚且つ、ユーリの名前を尋ねる。

『私の名前はユーリだよ』

すると、ユーリは英語で返答した。

「っ!？」

「ユー、お前、英語が分かるのか!？」

ユーリの返答にアリスも驚いたが、一番驚いたのは彼女と一緒に居る時間が長いチト

だった。

「ぬーん・英語の歌を覚える為、ラジオの英会話教室や洋楽を沢山聞いて、洋画をたくさん見ていたら自然に覚えた」

相変わらず自分が興味を持ったものに関しては何も覚えが良くユーリ。

「ガーン……ゆ、ユーに……ユーに知識で負けた……」

「ちーちゃん、さりげに酷いことを言うね」

チトでさえ、まだ英語は完全にマスターしていないのに、自分よりも先にユーリに英語で負けた事実にはチトは少なからずショックを受ける。

「むう〜」

予想外のユーリの英語の知識に出鼻をくじかれたアリスはますます頬を膨らませる。

「ユーリさん、凄いです!」

再び忍がユーリに抱き付く。

「これからは是非、師匠と呼ばせてください!」

「ちーちゃん、また弟子が増えた」

「だから、違うだろう」

「さあ、これから私に英語のご教授を……」

「い、いや、私、ちーちゃんと違って人に教えるのはちよつと苦手で……」

「そう言わずに〜」

「ぬいー、は、離せ〜」

「ま、またシノに……」

忍に抱き付かれているユーリに対しまた嫉妬の炎を燃やすアリス。

「師匠〜」

「えつと……」

「何故この様な事に……」

陽子に抱き付かれている赤城と加賀は困惑する。

もし、この場に赤城の後輩の一人である、吹雪が居たら、きっと彼女もアリスの様に嫉妬の炎に身を焦がしていたに違いない。

「ユー師匠〜」

「ぬー……困った……」

「どうすればイイデスカー!?!」

「はあ〜」

一方、ユーリは忍に抱き付かれ、アリスからにらまれ続けられる。

カレンは事態の收拾がつかずにオロオロ。

綾とチトは溜息をつく。

チトはユーリに英語の知識で負けた事、

綾は赤城、加賀、ユーリの三人に胸の大きさを負けた事がショックだった。

店の中がカオスな空気となり、この混乱を沈めるにはもう少し時間が必要となった。

わたしたちののんのな夏休み

暁達の学校の先輩、赤城と加賀の二人を連れて津田沼のとある喫茶店へとやって来たチトとユーリ。

そこで、ユーリ、赤城、加賀はその喫茶店の名物と言える超無謀パフェにチャレンジをし、見事三人は超無謀パフェを完食した。

その際、偶然この店に来ていた女子高生達に絡まれて店は一時カオスな空間となった。

それを収めたのはこの店のウェイトレスの松原穂乃花だった。

この喫茶店は彼女の実家であり、更に穂乃花は店に来ていた女子高生達の一人、九条カレンと友人だった。

チトとユーリは赤城、加賀の二人の他に穂乃花やカレン達と連絡先を交わした。この世界に来てからチトとユーリの交友の輪は着実に広がっていった。

ドツ、ドツ、ドツ

「あっ」

雪道の中に埋まっていた鉄パイプがケツテンクラーの履帯に絡まり履帯が破損してしまった。

チトはケツテンクラーを止めて、損害状況を確認する。

「履帯が切れたの……？」

「うん……それだけならいいんだけど……」

「？」

「嫌な予感がする……」

ここ最近、ケツテンクラーのエンジンのかかりがどうも悪かった。

当初は寒さの影響かと思っていたチトであったが、今回履帯が切れた事も重なって嫌な予感がした。

チトはキーを差し込んでエンジンを再始動させるが、鈍い音と共にエンジンはかからない。

「やっぱり……エンジンもかからない」

「え？直せるの……？」

「わからん……まず、エンジンを見てみないと……」

以前にもエンジン内のシリンダーが割れてケツテンクラーが壊れた事があった。

あの時、チトは最初一人で修理に取り掛かったが、結局直す事が出来ず、たまたま近くの空軍基地で飛行機を製作していたイシイに出会い、その基地にあつた部品とイシイの手を借りてケツテンクラートを直す事が出来た。

しかし、この場に居るのはチトとユーリの二人だけ……

しかもあの時と違い、周りには修理に役立ちそうな部品もない。

あの時とは状況が全く違う。

「私に何か手伝えることある?」

「ない」

「……」

手伝いを買って出てくれたユーリの行為をバツサリと切るチト。

チトのそんな態度にユーリは少なからずショックを受けた様子。

イシイと出会つた時は雪も降っておらず短い春の季節だったので、あの時ユーリは、「絶望と仲良くなるう」と言つて板金をしゃぶつていたが、今は冬で一刻も早くこの場から移動しなければ、生命の危険にもつながらる。

その為、今回はユーリもケツテンクラートの修理を買つて出たのだ。

「…冗談だよ。じゃあ、カバー外すから手伝つて」

ショックを受けたユーリを見て、チトは彼女にも出来そうなることを言つてそれをやつ

てもらおう。

「私に出来る事なら何でも言つてね」

カバーを外した後もユーリにしては珍しく積極的に手伝いを買つて出ていた。

(……とは言つたけど……蓋を外したらもうやる事が無くなった……)

(見守ろう……)

射撃は上手くてもこうした機械の修理には全く知識がないユーリは何もやる事がなく、ユーリが出来たのはチトを見守る事だけだった。

「……」

工具を使いチトはエンジンをバラしながら故障の原因を探る。

その間、ユーリはチトを見守るのが飽きたのか、近くのパイプに座り、歌を歌いだす。

「これでどうだー!」

故障の箇所と思つた所を弄つてみるがやはりケツテンクラートのエンジンは動かない。

その間、ユーリは歌を歌い続けている。

そんなユーリに対してチトは、

「歌つてんじゃね——!」

声を荒げユーリにスパナを投げつける。

チトの投げたスパナはユーリの頭に当たるが、ヘルメットをかぶっていたおかげで怪我をしなくて済んだ。

もし、ヘルメットを被っていないかつたら大怪我をしていたかもしれない。

「ごめん・私何もできないから・せめて歌を……」

ユーリはユーリなりにチトを励まそうとしていたのだが、それが裏目に出てしまった。

チトがケツテンクラートの修理を続けていると段々と日が傾いて来て辺りは暗くなり始めた。

（暗くなってきたな……）

出来れば日がある内に直したかったが此処で止める訳にはいかない。

そんな中、突然、チトの手元が明るくなる。

「灯りがあつたので、持ってきました」

ユーリがどこからかスタンドを調達してきた。

「ありがとう」

（一度エンジンを外に出すか……）

ユーリが調達してきたスタンドの明かりを頼りにチトはケツテンクラートの修理を

続けた。

そして、辺りが再び日の光に包まれた頃……

「……」

顔をエンジンオイル塗れにしたチトはエンジンが剥き出しになったケツテンクラートをジツと見つめていたが突然、

「ねえ……お風呂に入りたくない？」

ユーリに風呂に入りたくないかと尋ねた。

「えっ？……入りたいけど……」

「こうしてみるとお風呂みたいだね」

「……」

チトの言動の意味をユーリは何となくだが、察した。

「これをお風呂にしようと思って」

「えっ？……エンジンはいいの？」

「……」

ユーリは自分の考えが正しいのかそれとも取り越し苦労だったのかチトに尋ねる。

すると、

「シリンダーはひび割れてシャフトはぐにやぐにや。あつちを直してもこつちが壊れる

…もう、寿命だよ」

チトの嫌な予感、そしてユーリが思っていた通り、一晩中チトが修理を行ったが、ケツテンクラートは結局直らなかつた。

自分達を此処まで連れてきてくれたもう一人の仲間とも言えるケツテンクラートは今日、此処で、死んだ…

「…分かつた。どうすればいい？」

「じゃあ、ユーはまずこの中に雪を集めて…」

チトはユーリにシャベルを手渡し、ユーリはチトの指示通り、ケツテンクラートの荷台に周辺の雪を入れ始めた。

「燃料はもうほとんどないから抜いて…いらぬ布に染み込ませる」

燃料が染み込んだ布をケツテンクラートの下に置き、其処に火をかける。

「穴を塞ぐ接着剤も板もあるし…」

ユーリがシャベルを使って荷台に雪を乗せている間、チトはお湯が漏れないように穴を金属板と接着剤で埋める。

やがてケツテンクラートが火で温まり、荷台の雪が解けてお湯となる。

「…あつたまつてきた」

「おおうすい」

「この板を沈めて入るんだよ」

直接火を通してあるケツテンクラートの荷台の床に足をつけると火傷をするかもしれないので、余った金属板を浮かべてソレを足場にして入る様に言うチト。

日本で言う五右衛門風呂と同じ形式である。

「は〜」

チトとユーリは服を脱いでケツテンクラート風呂に入る。

「やっぱ、ちーちゃんは天才だね……」

「……」

「ちーちゃん?」

ユーリがチラツとチトの様子を窺うと、

ポチャ……

「…っ……うっ……ぶづ……っ……っ……あゝあゝ——」

チトは声をあげて泣いた。

これまでの旅の中でチトが涙を流す事は何度かあった。

ユーリが廃材と間違えてチトの大切な本を焚火の中に入れてしまった時、

チトが突然変な事を言ったので、ユーリはチトが可笑しくなったのかと思つて銃床で

チトの頭を叩いた時、

地下鉄の駅から地上に上がるエレベーターに乗った時、物凄いスピードで地上に放り出されて肘を擦りむいた時、

これまでの旅の中で何度かチトが涙を流したことはあつたが、ユーリが声をあげて大泣きしたチトの姿を見たのはこれが初めてだった。

「ひつく……う……っ……う……」

涙を流すチトをユーリは後ろからそつと抱きしめる。

「……そうだ、アレを飲もうと思つていたんだつた」

ユーリはカバンの中から一本のガラス瓶を取り出す。

「これ、残りの一本」

それはいつぞやの廃墟の中で見つけた『びう』の入った瓶だった。

「ねえ、ユー……アレ歌つてよ。さっきの歌」

「歌? いいけど」

「おいしく」

ユーリの歌を聞きながらびうをそのままラツパ飲みするチト。

「今までありがとう……」

此処まで自分達を運んでくれたケツテンクラートにチトは別れを告げた。

最後にその感触を確かめ、忘れないように味わうかのように運転席にある速度メー

ターに手を添え、目を閉じて頬ずりをした……

「っ!？」

次にチトが目を開けた時、彼女の目に映っていたのは雪景色の廃墟の町でも、ケッテンクラートの運転席でもなく、自分達がお世話になっているねこやの自分達の部屋の天井だった。

隣の布団の中にはユーリが大口を開け、ヨダレを垂らしながら眠っていた。

(どうして今になってあの時の夢を……)

チトは何故、今になってケッテンクラートを失った日の出来事を夢に見たのか分からなかったが、やはりあの日の、あの時の出来事はチトにとって悲しい出来事であり、目には涙が浮かんでいた。

ケッテンクラートがこの世界でも昔に存在し、一部の外国では今でも農業用の機械として使用されていることは本やテレビで見た事がある。

でも、今の生活の中でケッテンクラートの必要性はない……その筈なのに……

それなのになんで今になって……

今でも自分はケッテンクラートに対する未練があるのだろうか？

それとも自分達だけこうして暖かな日常を送っている事に対するケツテンクラートからの恨みなのだろうか？

兎も角、チトは自分が泣き寝入りしていた事をユーリに知られないために急いで洗面所で顔を洗った。

朝食の席でテレビではニュースのお天気キャスターがある地方のロケで辺り一面山と田んぼが広がるのどかな田園風景の田舎から中継していた。

季節は夏真っ盛りで、世間では夏休みの時期となり、外からはやかましい程に自己主張しているセミの声も聞こえて来た。

チトとユーリにとっては初めてセミの声を聞いた夏となった。

また、この夏と言う季節も二人にとっては初めての経験となる。

このジメつと湿気を帯びている日本特有の夏は二人にとって少々堪える季節である。

「山か……」

テレビを見ていたユーリはポツリと呟いた。

前の世界では自然なんて雪ぐらいで海や山なんて見た事もなかった。

この世界に来てユーリはねこやの店主と一緒に海に釣りに出かけに行つたが、山にはまだ行つた事がなかった。

「ん？なんだ？ユーリ、お前さん、山に行つてみたいのか？」

「ぬー：前の世界じゃ、山って言ってもコンクリートや建物で出来た山ばかりで、テレビみたいな自然の山って行ったことがないんだよね」

「チトも・・・そうだよな？」

「は、はい」

ユーリとほとんど行動を共にしていたチトも当然、自然の山と言うのを見た事があるわけがなかった。

「それじゃあ、俺の知り合いで田舎に住んでいる人の所に行くのはどうだ？あそこは田舎だが、自然豊かな場所で空気もうまいぞ」

「えっ？で、でもお店の方は!？」

「まあ、この時期平日は学生を短期バイトで雇えばいいし、土曜の日もアレツタさんとク口の二人でなんとかなるだろう。行くなら、その人に電話をして二人を泊めてもらえるように頼んでみるぞ」

「ちーちゃん、折角だから行こうよ」

「で、でも・・・」

「まあ、俺の事や店の事は気にするな。あつちの世界では見る事の出来なかつたモノをこつち世界で見えてくるのも社会勉強の一環だ。それにこの暑さだ：二人にとっては初めての夏で大変だろう？」

「確かにこの夏って季節は初めての経験だから色々疲れれるよお……物凄く暑いし……」

「向こうの方は少し涼しいだろうから、避暑がてら行つてこい、身体を壊されちゃ、それこそ大変だからな」

「は、はい」

こうしてねこやの店主の勧めでチトとユーリは店主の知り合いがいる田舎に行くことにした。

後は、その知り合いの人が二人を泊めてくれればいいのだが……

お店が始まる少し前に店主はその知り合いの家に電話をかけた。

「はい、越谷でございます」

「あつ、雪子さん？お久しぶりです」

「その声はマコちゃん!? いやあく本当に久しぶり〜元気してたあ?」

「はい……あの、実は雪子さんにお問い合わせまして……」

「ん? なんだい?」

ねこやの店主は知り合いである越谷雪子にチトとユーリの二人を暫く泊めてくれな
いかと頼んだ。

「あら? そんな事? いいわよ。それでいつからいつまで来るんだい?」

「そうですね……」

雪子とねこやの店主はそれぞれ都合のいい日程を相談しあつた。

そして、日程が決まつた。

ねこやの店主はその事をチトとユーリの二人に伝えた。

ユーリは山に行けると言う事に喜んでいたが、チトの方はあの夢やお店の事が気になる様子でちよつと乗り気ではなかつた。

それは、ユーリと共に山へ行く日もチトの気分はあまり優れなかつた。

それでも折角ねこやの店主が頼んでくれたので、チトはユーリと共に山へ出かけることにした。

実際、チト自身も自然に囲まれた山と言うのに全く興味が無いと言えば、それは嘘になるからだ。

そして、山へと出かける当日、二人の姿は空港にあつた。

ねこやの店主の知り合いの居る町は飛行機か新幹線で行き、その後は地方のローカル線でいかなければならない程遠い町にある。

「おおう飛んでいる」

「……」

窓の外で空へと飛び立っていく飛行機を見てユーリは興奮しているが、チトは顔色が

悪い。

「ん？どうしたの？ちーちゃん」

「い、いや：別に……」

チトはユーリに顔色が悪いのを悟られないようにプイツとユーリから顔を背ける。

「そう……あつ、そうだ。向こうの人にお世話になる訳だし、何かお土産でも買って行く？」

飛行機の搭乗時間までまだ時間があるのでユーリはこれからお世話になる家の人の為に空港土産を買って行こうと言う。

「お前も少しはこの世界の常識を身に付けてきた様だな？」

「ちよつ、ちーちゃん、それは酷いよ」

と言う訳で、空港内の土産物店へとやって来たチトとユーリ。

やはり東京の空の玄関口だけあって、土産物店には色々な土産物が売っている。

「何を買って行こうか？」

「やっぱり、食べ物がいいんじゃない？食べ物なら貰って嬉しいだろうし」

「それはお前だろう？」

とは言え、これからお世話になる家の家族は多いとねこやの店主から聞いており、置き物とかよりもユーリの言う食べ物系の方が喜ばれるだろうと思ったチトとユーリは

食べ物系のお土産に焦点を絞った。

だが、食べ物系のお土産もかなりの種類がある。

大きく分けて洋菓子、和菓子。

そのどちらも細かいジャンルも数が多い。

そこで、チトとユーリは待ち合わせ場所を決めた後、二手に別れてそれぞれ一つずつ買うことにした。

(お菓子としても結構種類があるな……なにが喜ばれるかな……?)

(向こうの家の人は女性が多いと聞いたから、やっぱり甘いものかな……洋菓子、和菓子、どちらの方がいいかな?)

チトとユーリがそれぞれ分かれてお土産を探している中、ユーリの目にとまったのは、空港限定のまるごとプリンロールケーキだった。

(ケーキとプリン……これだ!!)

ケーキとプリンのロールケーキ……ケーキとプリンと言う二大スイーツの融合とも言えるこのスイーツにビビッと来るもの感じたユーリはこのプリンのロールケーキをお土産の品として購入を考えた。

プリンと言う生ものを使っているので、此処から目的地の田舎まで悪くならないかとおもったが、保冷バッグと保冷剤のおかげで何とかなる事をお店の人から聞いたので、

購入した。

一方、チトの方は……

(甘いものと言えばチョコだけど……)

チトは甘いお菓子でまっさきに思いついたのが、チョコレートだった。

(それとケーキ……だけど、生クリームとかを使っていると長旅にはあまり不向きかな?)

チトはユーリと違いケーキ系などのお土産は長旅には不向きだと思った。

そんな中、チトの目に飛び込んできたのは、しよこらミルフィユと言う香り高い焼きシヨコラを、サクサクのチョコレートパイでサンドのチョコレート菓子だった。

(これなら……)

チヨコレートとサクサクのパイ生地のお菓子なら、長旅でも大丈夫だろうと判断したチトはこのお菓子を買った。

やはり、チトにとってチヨコレートは特別なお菓子だったのだ。

そして、待ち合わせ場所で合流した。

「あつ、ちーちゃん」

「ユー。早いな」

先に待ち合わせ場所に居たのはユーリだった。

チトとユーリが合流すると丁度二人が乗る飛行機の搭乗手続きが始まったので、二人は搭乗口へと向かった。

その途中で、

「ところで、ユーは何を買ったの？」

「私はプリンのロールケーキ」

「ちよつ、プリンつて、生モノだろう!?大丈夫なのか!？」

「お店の人に聞いたら、この保冷バッグと保冷剤があれば大丈夫だつて」

「保冷剤……そうか、その手があったか……」

ユーリに保冷剤の存在を言われてその存在を見落としていたチト。

「それで、ちーちゃんは、何を買ったの?」

「私はチョコレートのお菓子」

「チョコ?ちーちゃんこそ、そんなのを買って大丈夫なの?途中で溶けない?」

「……」

「私の保冷バッグに入れていく?」

「そうしてくれ」

チトは万が一の事を考えて自分の買ったしよこらミルフィユをユーリの保冷バッグの中に入れた。

そして、二人は飛行機の搭乗口へと向かうのだが、この時チトの足は僅かに震えていた。

此処で時系列は今朝まで巻き戻し、視点もチトとユーリがこれからお世話になる某地方の田舎にある越谷家へと移る。

夏休みの為、学校は休みであるが、夏休みと言えば定番と言える朝一でのラジオ体操がある。

神社にはこの田舎の分校に通う学生たちが集まりラジオ体操をする。

ラジオのスピーカーからはラジオ体操の音声が流れる。

「カラダを横に曲げる運動ー いっちー、にー、さん、しー、ごー、ろく、しっち、はちー」
「次にカラダを前後ろに曲げる運動ー」

皆がラジオ体操をしている中、一人だけ独特な動きをしている子が居た。

やがて、ラジオ体操が終わると、

「どうですか？ウチのダンスはー」

と、これまでの謎の動きはダンスだった様で、その感想を尋ねる。

「これダンスじゃなくて体操だけだね」

とツツコミ返されてしまった。

「ハンコ押すからこっちおいで」

ラジオ体操の後は、体操に参加しましたと言う証明になるハンコを押してもらうのだが、

「こういうのはかずちゃんの役目だと思っただけどねえ」

「ねえねえは今日も寝てるのん」

「今度ビシツと言つてやらないかんね」

「言つてやつて欲しいのん」

ラジオ体操が終わわり、ハンコを押してもらうと皆はそれぞれ家に帰る。

それはこの越谷家も例外ではなく、ラジオ体操が終わわり家に戻ると朝食となる。

その朝食の席にて、

「ああ、そうだ」

越谷家の肝つ玉母さん、雪子が思い出したかのように朝食の席にて声をあげる。

「なに？お母さん」

「なんかあつたの？」

越谷家の長女、越谷小鞠と次女、越谷夏海が反応し、長男、越谷卓は我関さずと言つた様子で味噌汁をすすっている。

「今日、東京から私の知り合いの家に居る子らが来るんだよ」

「東京!？」

小鞠は東京と言う言葉に敏感に反応する。

「へえ、ほたるんの古巣から」

「それで、少しの間、家に泊まっていくからアンタ達、仲良くしてあげてね」

「そう言えば、お母さんこの前からお布団とか用意していたもんね」

「それで、どんな子が来るの？」

「富士宮さんの所のこのみちちゃんより一つか二つ年下の女の子達だった」

「達って事は一人じゃないの？」

「二人だったさ」

「どんな子なの？」

「金髪で背の高い子と黒い髪で背の小さな子だった」

「へえ、背が小さいねえ」

夏海はチラッと姉である小鞠を見る。

「な、なによ。夏海」

「いや、小さいって言ってもこまちゃんほどではないかなーと思って」

「なっ!？」

夏海の一言にショックを受ける小鞠だった。

そんなやり取りが有りながらも越谷家の皆は今日来るお客さんを待つのであった。

そして、時系列を戻し、視点も越谷家に向かっているチトとユーリに戻す。

段々と飛行機の搭乗口が近づいてくると、チトの足取りが重くなっていく。

「ん？どうしたの？ちーちゃん。トイレにでも行きたいの？」

「あつ、いや、なんでもない」

「じゃあ、急ごう」

「あつ、ちよつと、ユー……」

チトの手をとってユーリは飛行機の搭乗口へと向かう。

「うう〜」

その間にもチトの顔は青白くなっていく。

やがて、二人を乗せた飛行機は離陸した。

「おおー凄い、凄い、雲の上を飛んでいるよ、ちーちゃん」

ユーリは飛行機の窓の外の景色に感動している。

前の世界ではスクラップになった飛行機に乗ってそこでチョコレート味のレーシオンを見つけた事があったが、こうして動いている飛行機に乗ったのはこれが初めてである。

「ん？ちーちゃん？」

ユーリは何の返答もないチトの様子が気になり、隣の座席に座っているチトを見ると、チトは頭を抱えてガタガタと震えていた。

「ちーちゃん、どうしたのさ」

「ゆ、ユー：お前は怖くないのか？」

「えっ？」

「私達は今、飛行機に乗っているんだぞ」

「うん、そうだね」

「その飛行機は雲の上を飛んでいるんだぞ」

「そうだね」

「物凄く高い所なんだぞ」

「それぐらいは分かっているよ」

「お前はイシイの事を忘れたのか？」

「一応、ぼんやりとだけと覚えているよ。あの人でしょう？飛行機を作っていてその飛行機が落っこちた……」

「そうだ。あのイシイの飛行機みたく、もしかしてこの飛行機も……私達はパラシュートを身に着けていないんだぞ、もし、落っこちたら……」

チトは元々高所恐怖症であった。

ユーリが大きなヌコに食べられた時、チトは自分が高所恐怖症である事を忘れて潜水艦の梯子を登りユーリを助け出そうとしてから少しだけ克服しそこまで怖がることはなくなったが今回は雲の上と言う物凄く高い場所とかつてイシイの造った飛行機が墜落したのを目の当たりにした為、チトはこの飛行機もイシイの造った飛行機同様墜落するのではないかと不安だったのだ。

「ちーちゃん、あまり大きな声で落ちるとか言わないでよ」

チトの声は思ったよりも大きかったのか、周辺の人が不安そうな顔をしていた。

「あつ、どうもすみません。この子、飛行機が初めてなんで……」

普段とは逆にユーリが周りの人に謝っていた。

やがて、無事にチトとユーリの乗る飛行機は空港に到着した。

飛行機から降りてもチトの顔色はまだ悪く、息遣いも荒かった。

「ゆ、ユー……」

「なに、ちーちゃん」

「帰りは絶対に新幹線で帰るぞ」

と、復路は飛行機ではなく新幹線で帰ると決めたチトだった。

その後、空港からバスで駅に行き、そこから電車を乗り継いで目的地へと向かう。

そしてやっと着いた目的地の田舎の地……

「あつつう〜」

「ぬ〜ん……」

二人の額には汗が浮かび、その汗は頬を伝い、顎へと延び、手でその汗を拭う。

一応、チトは縁の広い麦わら帽子、ユーリは野球帽を被っているが、この真夏の暑さの前では帽子など気休め程度にしかない。

しかも背中には着替えなどを詰めた背嚢を背負っているので、背中が蒸れて汗びっしりとなり不快な感覚である。

目的地の駅で電車を降り、その後は徒歩でお世話になる越谷家へと向かう。

陽炎が揺らめいている真夏の田舎道を歩いているチトとユーリ。

「……静かだね」

「そうだな」

「それに水も綺麗だね」

ねこやの周りは車や大勢の人の声などいろいろな音が聞こえるが、此处は風がそよぐ音と小川のせせらぎ、鳥とセミの声ぐらいしか聞こえない。

近くを流れている小川の水は綺麗で透き通っている。

東京の薄汚れた川と大違いだ。

(そう言えば、前の世界でも水だけは綺麗だったな……)

文明は滅んで、廃墟が広がるだけで周りには木などの自然は一切なかった世界であったが、水だけは澄んで綺麗だった。

だからこそ、水はその辺の川で汲んだモノを飲めたのだ。

「それに人が全然いないね」

「ああ、そうだな」

周りを見渡しても田んぼと畑だけで人の姿は見えないし、車は一台も通らない。

「こうして二人つきりで歩いていると前の世界の旅を思い出すね」

「あの時は此処まで暑くはなかったけどな」

二人で歩いているとケツテンクラートを失い、ねこやに着いた時までの道中の旅を思い出す。

しかし、あの時は雪が降る程の寒い道りであったが、今は照りつける太陽の下、暑い道のりとなっている。

「お店もないね……コンビニも……それにねこやみたいな食べ物のお店も……」

東京では数百メートルおきに見かけるコンビニも此処では見当たらないし、飲食店も見当たらない。

「此処の人達、買い物はどうしているんだろう？」

「さあな……ん？あれ？どっちに行けばいいんだろう？」

「えっ？もしかして道に迷ったの？」

チトは地図を見ながら顔を顰める。

「でもまあ、私達、普段から迷っているようなもんじゃん。前の世界でも……」

「二応、お土産もあるし、それにお世話になる家の人も待っているだろうから、あまり迷っている時間はないんだけどな……」

いくら保冷剤を入れたとはいえ、半永久的に保つわけではないので、なるべく早く目的地である越谷家に行きたいチトとユーリ。

すると、二人の目の前に銀色の長い髪を黄色いリボンで結び、ツインテールにしている女の子がやってきた。

その子はチトとユーリに気づくと、警戒しているのか二人の事をジッと見ている。

「あつ、ちーちゃん。見て、見て、やっと人が居たよ」

ユーリは銀髪ツインテールの女の子に気づいた。

「おーい、ちよつとそこの人」

ユーリが銀髪ツインテールの女の子に声をかけると、その子はユーリと同じ垂れ目をした女の子であった。

そしてその女の子はチトとユーリの二人に対して、

「にゃんぱすー」

と、
一言呟いた。

わたしたちののんのんな夏休み 2

山に行ってみたいと言う事で、ねこやの店主の知り合いが居る田舎へとやって来たチトとユージ。

飛行機と地方のローカル線を乗り継いでやつと目的地に着いた二人。

しかし、そこからお世話になる越谷家の場所が分からず、途方に暮れていると、この田舎に住む一人の女の子と出会う。

その子は出会い頭に、

「にゃんばすー」

と変わった挨拶をしてきた。

「えっ？」

その挨拶を聞いた後、二人は固まる。

(えっ? ええええー)

(ち、ちーちゃん、にゃんばすーってなに?)

(わ、分からん、この地方独特の挨拶なのかもしれん)

聞き慣れない挨拶に戸惑う二人。

(私達もした方がいいのかな?)

(郷に入つては郷に従えつて言葉があるからな、そうしたほうがいいかもしれない)

(それつてどう言う意味?)

(その土地やその環境に入ったならば、そこでの習慣ややり方に従うのが賢い生き方つて意味だよ)

(?)

チトが『郷に入つては郷に従え』の言葉の意味をユーリに教えたが、彼女はまいち意味が分からないのか首を傾げた。

(とりあえず、同じように挨拶すればいいんだね)

(まあ、そうなるな)

とりあえず、この地方では先程の『にゃんぱすー』が地方独特の挨拶なのかもしれないと思つた二人は、

「にゃ、にゃんぱすー」

「にゃんぱすー」

と、女の子に挨拶をした。

「おお、まさか、にゃんぱすーと言つてくれるとは思わなかつたん」

にゃんぱすーと返されて何だが嬉しそうな様子の女の子。

「ふうくそれにしても暑いや〜」

ユーリが野球帽を脱ぎ、手で額の汗を拭う。

すると、

「あれ？駄菓子屋だったん？」

女の子はユーリの姿を見て意外そうに言う。

「駄菓子屋？いや、私は料理屋のウエイトレスなのだが……」

「そう言われてみれば、ちよつと駄菓子屋と比べると小さいなん」

女の子はユーリと駄菓子屋と呼ばれる人物と間違えた様だ。

「それで、二人はどちらさまなん？」

「私達は東京から来たんだけど……」

「トウキョウ!? ひか姉とほたるんが居たところなん!？」

女の子の言う『ひか姉』と『ほたるん』が何を意味しているのかは不明だが、一人は

『姉』がついているので、この子のお姉ちゃんでもう一人も恐らく知り合いなのだろう。

「それで、越谷さんの家に行きたいんだけど、道に迷っちゃって……」

「知っているなら教えてくれるかな？」

「こしがや?……こしがや……どこかで聞いた事のある言葉なん……んく……此処まで

出かかっているんですけど、なかなか思い出せないん……うくん……」

そう言いながら女の子は額に手をやる。

「いや、そこだともう口を越えているじゃん」

珍しくユーリがツツコミを入れる。

「う〜ん・・・あつ、思い出したん!!」

女の子は手をポンと叩いて声をあげる。

どうやら越谷家を思い出したみたいだ。

(まさか、この子の家でしたなんてオチはないよな・・・)

女の子の言動からちよつと不安になるチトとユーリ。

「こしがやと言えばなつつんとこまちゃんの家だったん」

『私の家』と言わない所を見ると、越谷家はこの子の家ではなく、知り合いの家みたいだ。

「こまちゃんの家に何か用なん?」

「私達、暫くその家にお泊りするんだよ」

「お泊り：随分と苦労されたんな・・・」

「?」

越谷家に泊まるだけなのに何故、苦労したのか意味が分からず首を傾げる。

「それで、その越谷さんの家、知っているなら案内して欲しいんだけど」

「りよーかい。ウチにまかせるん!!」

チトとユーリの二人は女の子の案内の下、お世話になる越谷家へと向かう事になった。

「そういえば、まだ名前言ってなかったん、ウチ、れんげっていのん。おふたりはなんて名前なん？」

「私はユーリ」

「私はチト」

女の子：もとい、れんげが自己紹介してきたので、こちらも自己紹介をするチトとユーリ。

この田舎で少しの間、世話になるのだからこの先、れんげとも顔を合わせる事もあるだろう。

「るったん♪くるったん♪」

れんげは木の枝を手に鼻歌を歌いながらチトとユーリの二人を越谷家へと案内する。すると、道端の雑草の中で何かを見つける。

「!?」

「こんなところにいたんな…ウチの因縁の敵…いつもウチの服についてくるオナモミ!!」

「オナモミ?」

そこにはトゲトゲした実の様なモノをつけている植物があった。

「今日こそは思い通りにさせないん!! 覚悟!!」

そう言つてれんげは手にした木の枝でオナモミを叩く。

そして、オナモミの実をとると、

「これあげますん。お近づきのしるしなん」

「えっ? あ、ありがとう・・・」

「ありがとう」

れんげからオナモミの実をもらいそれを手に取るチトとユーリ。

二人はオナモミの実の感触を確かめるように触る。

「棘がいつばいあるけど、触つてもそんなに痛くはないね」

「そうだな」

「それ、服に着くから気を付けてなん」

「えっ? 服に?」

れんげから注意を受けるとユーリは早速オナモミの実をチトの服につける。

「おおー本当に服にくっついたよ!! ちーちゃん!!」

オナモミの実が本当に服についた事に興奮するユーリ。

そんなユーリに対してチトは、

「自分の服でやれよ」

ツツコミを入れて自分が持つオナモミの実をユーリの服にくつつけた。

そして再び越谷家を目指し歩く三人。

「るるん♪るるんたっ♪」

れんげは相変わらず変な鼻歌を歌いながら歩いている。

すると、再び何かを見つけ歩みを止め、しゃがみ込む。

「ん？どうかしたの？」

ユーリがれんげに訊ねると、

「カエル」

れんげが答える。

どうやられんげは、カエルを見つけようだ。

チトとユーリはオナモミの実はさつき初めて見たが、カエルはテレビの動物や自然を特集する番組、本などで知っていた。

ただし、二人が知っているのはアマガエルなどの体が小さなカエルであり、れんげが見つけたのは……

「ん」

両手がかっしりとつかんだウシガエルだった。

初めて大きなカエルを見たチトとユーリのリアクションはと言うと……
「うわああー!!」

チトはウシガエルを見て大声をあげて後ずさりをして、

「おおー!!でけえ!!」

反対にユーリは興味津々と言った様子でウシガエルをジッと見る。

そしてウシガエルの体をつんつんと指で突つつく。

「おおお、ヌコみたいにプニプニしている。ちーちゃんも触ってみなよ」
「い、いいよ。私は……」

チトは初めて見るウシガエルにすっかりビビり気味だ。

「大丈夫だよ。コイツ、大人しいし」

「うう〜」

ユーリにそう言われ、恐る恐るチトはウシガエルへ手を伸ばす。

ただ、ビビっている為か、チトの指は小刻みにプルプルと震えている。

そして、チトの指がウシガエルへ触れようとしたその時、

カプっ

チトの指をウシガエルが口へと入れた。

「くあwse d r f t g y ふじこーpー!!」

突然ウシガエルに指を咥えられたチトは軽いパニックを起こす。

カエルは普段、ジツとしてエサとなる獲物を待つ習性がある。

動く昆虫などをエサとして判断し、舌を伸ばして捕食している。

反対に動かない者は獲物として判断しない習性がある。

カエルを飼育している中で、例えばエサをあげようとして指先にのせて動かすと、指をエサと一緒に間違えて噛む習性がある。

この時、チトは指をプルプルと震わせていた為、カエルはチトの指をエサと間違えてチトの指を噛んだのだ。

慌ててチトはカエルの口から指を出す。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

「大丈夫？ちーちゃん」

「だ、大丈夫に見えるのか？お前は？」

「このウシガエルもいりますか？」

れんげはチトにウシガエルをいるかと訊ねる。

「知らない、知らない！そのカエル下に置いて!!」

チトがカエルを置くようにれんげに言うと、

「じゃあ、下に置いてこのままあんよは上手ごっこするん。あるくーん」

れんげはウシガエルの両手を握り、足を地面につかせてカエルを歩かせようとす。
「待つて、待つて！歩かせないで！向こうに逃がして！」

チトは迫りくるウシガエルにパニック状態となる。

「わわわ！そのままこつちに来ないで！！ストップ、ストップ！！」

「こいつの名前はウシダミンなん」

「名前なんかいいよ〜！！」

ウシガエルを手にしたれんげに追いかけてまわされるチトだった。

「ぜえ…ぜえ…ぜえ…ぜえ…」

ただでさえ、暑いのに追いかけてまわされて更に体が暑くなるわ、汗をかいて体中がベタベタと気持ち悪くなるわ、体力を奪われるチト。

息も荒く、汗びっしょりとなる。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

「ちーちゃん、大丈夫？」

「む、無駄に体力を消耗した…汗もかいて体中がベタベタだ…」

体力を消耗して更にこの暑さで今にもぶつ倒れそうなチト。

「流石に暑いのかな……」

れんげも少々この暑さにバテてきた様子。

「そうだね、どこかで休憩した方がいいかもね」

ユーリは顔には出さないけど、彼女も汗をかきまくっている。

そんな中、三人の耳に、

ザー：ジョボジョボジョボ……

水の流れる音がした。

三人の目の前には山の湧水をパイプで引いた水飲み場があった。

「おお、パイプから水が……」

「山の上から水を引いているのか……」

「此処の水、飲めるん」

れんげは手で湧水を掬って飲む。

「おお冷たくて美味しいん」

「どれどれ……冷たっ!?!」

恐る恐るパイプから流れる水に手を伸ばすと、水はとても冷たかった。

ユーリもパイプから流れ出ている水に口をつける。

そして、チトは……

ゴシゴシ……

先程指をウシガエルに唾えられたので、手を念入りに洗う。

「ユー、お前もさつきカエルを触ったんだから、手を洗っておけよ」

ユーリに手を洗うように言うと、ユーリは帽子を脱いでパイプから出ている水に頭から突っ込む。

「あーつめてー」

「なにやってんの……」

「……」

ユーリは首を振って濡れた髪についた水を弾き飛ばす。

「つめて」

ユーリが弾いた水をモロに浴びるチト。

「ちーちゃんもやってみなよ。冷たくて気持ちいいよ」

「……」

この暑さからの回避と言う現実逃避の誘惑に勝てずチトも被っていた麦わら帽子を脱いでパイプから流れ出ている水に頭を突っ込む。

「はあく……気持ちいい……」

火照った頭に冷たい水は気持ち良かった。

「……今の二人、ほたるんと同じ都会っ子のかけらが無いん
れんげがちよつと呆れた感じで二人を見る。

「まあ、私達は東京から来たと言つても東京で生まれた訳じゃないからね」

「東京から来たのに東京で生まれたんじゃないん？それつてどう言う事なん？」

「別の場所で生まれたつて事。その後で東京に住んでいるんだよ」

「なるほど」

チトがれんげの疑問に答える。

そしてチトとユーリはようやく目的地である越谷家へと到着した。

「此処が、なつつんとこまちゃんのお家なん」

「やつと着いた……」

「な、長かった……」

朝早くねこやを出て目的地である越谷家に到着したのはお昼をちよつと過ぎていた。

「ごめんください」

「はい」

チトが玄関口で声をかけると奥の方から一人の女性が玄関口へと歩いてきた。

「あ……」

「どうも、東京のねこやから来ましたチトです」

「ユーリです」

「いらつしやい。話はマコちゃんから聞いているわ。大変だったでしょう？東京から此処まで来るのは」

「は、はい」

玄関口でチトとユーリを出迎えたのは越谷家の肝つ玉母さん、越谷雪子だった。

「かあーちゃん、誰か来たの？」

そこへ越谷家の次女、越谷夏海が通りかかった。

「ほら、朝言つたでしょう？東京からのお客さんだよ。挨拶しなさい」

「へーい、どうもーウチ、越谷夏海ーよろしくー」

（家の姉ちゃんと同じくらいに小さい人だな……）

夏海はチトを見て自らの姉並みに身長が低い人だと心の中で思った。

また、一方で、

（この人の声、どこかで聞いた事が有るような気がする……）

と、チトとユーリは夏海の声はどこかで聞いた事のあるような声だと思った。

チトとユーリが夏海の声をどこかで聞いた事があるなあーと思つていたその頃、木組みの家と石畳の街にあるラビットハウスでは、

「クシユン!!」

「ココアさん、風邪ですか？」

「ううん、私は元気だよ」

「そうですか」

「きつと誰かが私の噂をしているんだよお」

と、ココアとチノの間でこのようなやりとりがあつた。

「ん？夏海、何をしているの？」

更に越谷家の長女、越谷小鞠も来た。

「あつ、姉ちゃん。ほら朝、母ちゃんが言つてた東京からのお客さん」

「あつ、どうも。越谷小鞠です」

小鞠はチトとユーリに挨拶をする。

「ん？もう一人の方はもしかして外国人？」

小鞠はユーリの青い瞳、金髪を見て彼女が日本人ではなく、外国人だと思つた。

それを聞いたユーリは口元を小さくニヤツとして、

『はじめまして、私の名前はユーリです。どうぞよろしくお願いします』

と流暢な英語で話し始めた。

「！？」

突然の英語にビクツと体を震わせる越谷姉妹。

「ね、姉ちゃん、英語だ：：やっぱりこの人、外国の人だ」

「う、うん：：そうみたいだね」

「ほら、姉ちゃん、英語で挨拶しないと」

「う、うん：：ハ、ハロー！」

「コマちゃんすごいのん！ 英語話せるのんなー」

「あ、あつたりまえでしょう！」

小鞠はれんげから『すごい』と言われてご満悦の様子。

しかし、

「でも、ユーリは日本語も話せるん」

と、ユーリが日本語を話せる事をあつさりバラした。

「えええー！ そうなの!？」

「さつきまで、ウチと話してたん」

「本当に日本語を話せるの？」

「話せるよ」

小鞠がユーリに日本語が話せるのかと問うとユーリは日本語で返答する。

「なあ〜んだ、日本語、普通に話せるんじゃない、焦つて損した」

「ま、まあ私は英語も話せるから大丈夫だけどね」

(発音はダメダメだったけどね……)

ユーリが日本語を話せると言う事で一安心した様子の越谷姉妹。

一方、ユーリは小鞠の英語の発音が駄目な事を口にせず心の中で思った。

「あつ、これ、お土産です。空港土産ですけど……」

チトとユーリが空港で買ったお土産を雪子に手渡す。

「お土産!? 何々?」

お土産と言う言葉に食いついた夏海。

「こ、こら、夏海」

グイグイと食いつく夏海を窘める雪子。

「えつと私はチョココレートのパイ菓子を……」

「私はプリンのロールケーキ」

「「チョココレートパイにケーキ!!」」

チトとユーリが買って来た土産の内容に思わず声をあげる越谷姉妹とれんげ。

「ケーキなんて誰かの誕生日でなければ食べられないご馳走だよ!!」

「しかも東京のケーキ!!」

「ご馳走なーん!!」

あまりのありがたみにお土産の箱を拝んでいる三人。

「それじゃあ、折角だし、食べようか？ れんげちゃんも食べていく？」

「食べるのーん!!」

チトとユーリも自分らで買ったけれど、土産のプリンのロールケーキとチョコレートのパイ菓子の味が気になってはいたので、ご相伴預かることにした。

その前に荷物を置かなければならないので、まずは部屋に案内された。

「この部屋を使ってね、お布団とかも用意してあるから」

「はい。ありがとうございます」

「どうも」

荷物を置いた後、居間へと向かうチトとユーリ。

越谷姉妹とれんげも居り、お土産のお菓子が来るのを待っていた。

「……」

「あ、あの……」

「ん？ なに？」

チトは小鞆に恐る恐る声をかける。

「あそこに居る人は……？」

上座には眼鏡をかけた少年がまるで置き物の様にジッと座っていた。

「お兄ちゃんだけけど」

「へ、へえ〜」

（ちよつと雰囲気がカナザワに似ているな……）

そこに居たのは越谷家の長男、越谷卓だった。

「あつれー。言つてなかったつけー」

「まあ、あの時玄関に居なかったからね」

「ほら、お兄ちゃん、挨拶、挨拶」

小鞠に促され、卓はチトとユーリに一礼しながら、

「……………」ボソツ

と挨拶をした。

「えっ今、あの人喋つたの？」

「よく聞こえんかった……」

卓は一応自己紹介をしたのだが、チトとユーリには聞こえず、小鞠が卓の名前をチトとユーリに教えた。

「おまたせ」

そこへ、雪子がケーキを切り分け居間に持つて来た。

ケーキの他にグラスに入った麦茶もある。

「おおーっ美味そう」

夏海が皿の上に鎮座しているケーキを見て思わず興奮気味の声を出す。

「それじゃあ……」

「「「「いただきます」」」」

皆はフォークでプリンのロールケーキを食べ始める。

プリンのロールケーキはソフトな口当たりになふわふわのスポンジとクリームと相性がよく、表面のキャラメリゼの香りとパリパリとした食感が絶妙なハーモニーを醸し出す。

「うめえ!!」

「ほんと、美味しい」

「グルメのウチも納得なのん!」

「……」

越谷姉妹、れんげは満面の笑みでプリンのロールケーキを食べ、卓は無表情、無言のまま食べている。

でもその食べているスピードが速い事から彼もこのプリンのロールケーキは気に入っている様だ。

「はあく美味しかった」

「満足なん」

プリンのロールケーキを堪能した夏海とれんげはお腹をさすりながら満足そうだ。

チトの買ってきたチョコレートのパイは夕食のあとのデザートで食べることにした。

沢山あるので、れんげにもいくつか分けてあげるつもりだ。

おやつ時間がおわり、雪子はおやつに使用した食器を洗いに行き、チトと小鞠は麦

茶を飲みながら談笑し、夏海とれんげはテレビゲームを興じている。

卓はいつの間にか部屋から消えていた。

みんなで待ったりとしている中、ユーリは越谷家にある池が気になって見てみた。

池はそれなりの広さがあるのだが、その池に居るのは大きな鯉が一匹だけだった。

れんげ曰く、この鯉の名前は『ひかりもの親方』らしい。

(池の中に居る一匹だけの魚……)

ユーリは池の中を泳いでいる鯉をじっと見ていると、ある事を思い出す。

(そう言えばあの魚や小さいヤツ、元気にしているかな……)

ユーリは前の世界に居た自分達二人の人間とヌコとその仲間達以外の生き物はもう

絶滅したと思ったら、昔の養殖施設に最後の魚が一匹生き残っており、その魚を管理す

る為のロボットが居た。

ユーリは当初、その最後の魚を食べたがっていたが、その魚と管理ロボットと時間を

共にする事で共感を得た。

しかし、その魚の施設を壊そうとした大きな作業ロボをチトとユーリは魚と小さな管理ロボを守る為に破壊した。

大きな作業ロボは小さな管理ロボの仲間であり、その仲間を破壊：つまり殺したのだが、小さな管理ロボはチトとユーリの事を恨む事はせずに、

『私も魚もこれでもう少し長く生きられそうです』

と、逆に感謝していた。

ユーリが池の中の鯉をジツと見ていると、

「ごめんください」

越谷家にまた別の来客者がやって来た。

「あら？ かずちゃん、いらっしやい」

越谷家にやって来たのはれんげの姉である宮内一穂だった。

「どうしたの？」

「知り合いから沢山の鶏肉をもらったので、お裾分けに来ました」

一穂はビニール袋に入った鶏肉を見せる。

「あら、わざわざありがとう」

一穂から鶏肉を受け取る雪子。

その後、れんげはチョコレートのパイを持って一穂と一緒に帰って行った。
「かずちゃんから沢山の鶏肉をもらったわよ」

雪子が先程一穂から貰った鶏肉を見せる。

「今日はチトちゃんとユーリちゃんの歓迎も兼ねて鶏肉を使った料理にしましょう」
雪子が今日の夕食のおかずを告げると、

「あつ、それなら私が今日の夕食を用意します」

と、チトが今日の夕食を作ると言う。

「えっ？チト、料理できるの？」

チトが料理できると言う事に驚愕する小鞠。

「ちーちゃんはコック見習いだから料理の腕はそれなりに出来るよ」

「そういえば、マコちゃんの実家は料理屋だったねえ」

「えっ？コックさん!？」

「その年でもう働いているの？」

「う、うん……」

越谷姉妹はチトが見習いとは言え、コックとして働いている事に驚いている。

「でも、今日は二人の歓迎も兼ねているし、悪いわよ」

雪子は東京から此処までの長旅で疲れている中、お客人であるチトに夕食の準備をさ

せるのは忍びない様子。

「大丈夫です。それに暫くお世話になるので……」

チトとしては越谷家にお世話になるほかに大好きな鶏肉を料理したかったと言う点があった。

「ユー、お前も手伝え」

「えっ!?!私もっ!?!」

「当然だ、お前もお世話になるんだからな」

「ぬー、分かったよ」

ユーリとしては断りたかったが、流石に家主たちの前で堂々と『やだ』と言えるほど、無神経ではなかった。

「そう?それじゃあ、お願いしてもいいかしら?」

「ええ、任せてください」

こうしてチトとユーリはその日の夕食を作る事になった。

夕方、越谷家の台所にはエプロンを身に着けたチトとユーリの姿があった。

「よし、私は鶏肉を捌くから、ユーはご飯の用意をお願い」

「ラジャー」

チトに言われ、ユーリはご飯の用意をし、チトはメインとなる鶏肉の用意をする。

「……いい鶏肉だ」

チトは手慣れた手つきで鶏肉を包丁で捌いていく。

「へえ、随分と手慣れているねえ」

気になった雪子はチトの包丁捌きに感心する様に呟く。

「日々、包丁を振っていますから」

チトは二つと笑みを浮かべ、鶏肉を捌いていく。

チトの様子を見て大丈夫だろうと判断した雪子は居間へと戻って行く。

「母ちゃん、どうだった？」

夏海が雪子に台所のチト達の様子を訊ねる。

「心配ないみたい」

「へえ、それなら今日の晩御飯は期待できるかもねえ」

「まったく、殆ど年齢が変わらないのに、あの子達と比べて家の子はねえ」

雪子がやれやれと言った様子で呆れた目で夏海を見る。

「ちよつ、なんで、ウチだけのさっ!?!」

自分だけ呆れた目で見られた事に不満そうな様子の夏海だった。

「わ、私もちよつと見てこようかな？」

小鞠も気になった様で台所へと向かった。

彼女が台所へと行くと、チトが鶏肉を油で揚げていた。

どうやら唐揚げを作っている様だ。

チトは鍋の中にある鶏肉を取り出ししたかと思つたら、再び鍋の中に入れた。

「あれ？どうして戻すの？揚げたりなかったの？」

「ん？ああ、これは二度揚げっていう調理法で、一度目よりも高い温度で揚げることで外側がサクッと揚がるんだよ」

「？」

チトは鍋から取り出した鶏肉を再び鍋の中に入れた訳を話す。

「あ、あの……？」

「ん？」

「私も何か手伝おうか？」

小鞠はチトに何か手伝う事はないかと訊ねる。

「それじゃあ、其処にゆで卵があるから殻を剥いて貰つてもいいかな？」

「えっ？あ、うん。分かった」

小鞠にゆで卵の殻をむいて貰う。

「このゆで卵、どうするの？」

小鞠はゆで卵の使い道を訊ねる。

「ゆで卵を細かく切って……」

チトは次にまな板の上でゆで卵を細かく切る。

「そんなに細かく斬っちゃって食べにくくない？」

「このゆで卵はソースに使うんだよ」

「ソース？」

チトは細かく切ったゆで卵をボウルの中に入れ、そこにマヨネーズを入れる。

次にそのボウルに同じく細かく切ったらつきようを入れる。

「小鞠、そのボウルの中身をかき混ぜてくれる？」

「う、うん」

「ユー、甘酢あんは出来た？」

「うん、ばっちりだよ」

チトはユーリに頼んでおいた甘酢あんが出来たかを訊ねるとあんは出来たみたいだ。

「チト、ボウルの中、これぐらいでいい？」

「うん、完璧、あとは……」

チトは出来上がった唐揚げの内、半分をユーリが作った甘酢あんをかけ、更にその上に小鞠が作ったボウルの中身・タルタルソースをかける。

「よし、唐揚げとチキン南蛮の完成だ」

「おおーっ、美味しそう」

出来上がった唐揚げとチキン南蛮をみて思わず声を揃えてその出来栄えを漏らすユーリと小鞠。

「あと、サラダはこれ、ササミを使った棒棒鶏風サラダ……さっ、持って行こう」
「うん」

「そうだね」

三人は出来上がった料理を居間に持って行く。

今日の越谷家の夕食は、メインは唐揚げとチキン南蛮。

サラダが棒棒鶏風サラダ。

汁物は鶏団子のすまし汁。

「……いただきます」

夕食が始まった。

「おお、この唐揚げ美味しい」

「ほんと、外はカリっとして中はジュわつとジューシーで柔らかい」

「……」

越谷姉妹と雪子は「美味しい」と言って食べているが、相変わらず卓は無表情・無口で食べている。

チトの作った料理は越谷家の舌を満足させるには十分なレベルであった。こうしてチトとユーリの田舎生活は始まったのだった。

わたしたちののんのんな夏休み 3

く越谷小鞠sideく

その日、ラジオ体操が終わって家に帰って、朝ご飯を食べていたらお母さんが、
「ああ、そうだ」

何かを思い出したかのように声をあげた。

「なに？お母さん」

「なんかあったの？」

「今日、東京から私の知り合いの家に居る子らが来るんだよ」

「東京!？」

東京と言う単語に思わず声が出してしまった。

「へえくほたるんの古巣からく」

「それで、少しの間、家に泊まっていくからアンタ達、仲良くしてあげてね」

「そう言えば、お母さんこの前からお布団とか用意していたもんね」

「それで、どんな子が来るの？」

「富士宮さんの所のこのみちちゃんより一つか二つ年下の女の子達だって」

「達って事は一人じゃないの？」

「二人だつてさ」

「どんな子なの？」

「金髪で背の高い子と黒い髪で背の小さな子だつて」

「へえ〜背が小さいねえ〜」

背が小さいと言う特徴を聞いて妹の夏海が私を見てくる。

なんだ？その目は!!

「な、なによ。夏海」

「いや、小さいつて言つてもこまちゃんほどではないかな〜と思つて」

「なっ!!」

夏海の発言に思わず絶句してしまふ。

お兄ちゃんも夏海も私と互いに一年、生まれが違うだけなのにどうしてこうも身長差が出てしまったのだろうか？

やっぱり小さい頃、ミルクを飲んでいない事、お昼寝をしていなかった事が影響しているのか!?

それでもこの差は酷い!!

「私はお前の姉だぞ!!少しは敬え!!」

夏海の発言に対して私は思わず朝から声を荒げてしまった。

それから昼過ぎに東京からのお客さんが家にやってきた。

途中、駅から家までの道で迷ってしまっただけで、れんげが案内してきた。

「あつ、姉ちゃん。ほら朝、母ちゃんが言ってた東京からのお客さん」

「あつ、どうも。越谷小鞠です」

やっぱり初対面の人なんだから挨拶はちゃんとしないとね。

「ん?もう一人の方はもしかして外国人?」

私は二人のお客さんの内、身長が大きな方のお客さんの髪の毛と目の色が日本人の様

な黒髪、黒い目ではない事から外国人の人だと思った。

もう一人の小さいほうのお客さんは黒髪に黒い目をしている。

確かに小さいけど、私よりも少しだけ身長が大きい……

くっ、ま、負けた……

私が心の中で敗北感を感じているともう一人の外国人さんの人は英語でペラペラと何かを喋ってきた。

英語は学校でやっているけど、こうして本物の外国人さんと出会ったのはコレが初めてだからなんて言ったのか上手く聞き取れなかった。

金髪の人って聞いた時、私はつきり駄菓子屋みたいに髪の毛を金色に染めている人だと思ったのだが、地毛でしかも外国人さんなんて思ってもみなかった。

「ね、姉ちゃん、英語だ……やっぱりこの人、外国の人だ」

「う、うん……そうみたいだね」

「ほら、姉ちゃん、英語で挨拶しないと」

夏海も初めて見た外国人さんに慌てている。

そして、私に英語で話せと言ってきた。

しかし、これは姉としての威厳を見せるチャンス!!

此処で、この外国人さんと英語で話せれば夏海も私の事を偉大な姉として見るだろう。

「う、うん……ハ、ハロー!!」

私はまず英語で挨拶を試してみた。

「コマちゃんすごいのん! 英語話せるのんなー」

「あ、あつたりまえでしょう!」

れんげも英語を話せる私の姿を見て目を輝かせている。

これが姉の……上級生の威厳なのだ。

そう思っていたら、

「でも、ユーリは日本語も話せるん」

と、れんげはユーリが日本語を話せることを言ってきた。

「えええー！ そうなの!？」

「さつきまで、ウチと話してたん」

「本当に日本語を話せるの?」

私がユーリさんに日本語が話せるのかを聞いてみると、

「話せるよ」

ユーリさんは普通に日本語を話して来た。

日本語が話せるなら、最初から話してよね!!

その後、ユーリさんとチトさんが東京の空港で買ったお土産のお菓子を食べた。

二人が買ってきたお菓子の内、その中にはケーキがあった。

まさか、誕生日でもない普通の日にケーキを食べられるなんて思わなかった。

やっぱり東京のケーキだ：味はとっても美味しかった。

そして、その日の夕食はチトさんが作る事になった。

チトさんは東京でコックさんの見習いをしているらしく、料理が上手だと言う。

お母さんが一度、台所を見に行ったら、

「母ちゃん、どうだった?」

「心配ないみたい」

「へえ、それなら今日の晩御飯は期待できるかもねえ」

「まったく、殆ど年齢が変わらないのに、あの子達と比べて家の子はねえ」

「ちよつ、なんで、ウチだけなのさっ!？」

夏海は声をあげるが、それはきつと日頃の行いだと思うぞ。

「わ、私もちよつと見てこようかな？」

私もちよつと気になったので台所へ様子を見に行つた。

台所のコンロの前ではチトさんが鶏肉を油に入れている。

ジュツ、という音を立て、鶏肉が油の中に沈められる。

小気味の良い音が台所に響く。

それと同時に台所に良い匂いがする。

油で鶏肉を揚げるこの音と香り、たまに油の爆ぜる音：これを見て嗅いでいるだけで

お腹が空いてくる。

チトさんは鶏肉を油から取り出し始めたけど、お皿に盛らない。

何だろうと見ていると、もう一度油に入れ始めた。

「あれ?どうして戻すの?揚げたりなかつたの?」

「ん?ああ、これは二度揚げっていう調理法で、一度目よりも高い温度で揚げることで外

側がサクツと揚がるんだよ」

「？」

二度揚げ……聞いた事の無い方法だ。

お母さんも唐揚げを作る時にはやっているのかな？

「あ、あの……？」

「ん？」

「私も何か手伝おうか？」

なんだか見ているだけだと悪い気がしてきたので、私はチトさんを手伝う事にした。

「それじゃあ、其処にゆで卵があるから殻を剥いて貰ってもいいかな？」

「えっ？あ、うん。分かった」

チトさんに言われた通り、私は茹で卵の殻を取る。

そして、チトさんは殻を剥き終わった茹で卵を包丁で細かく切り始めた。

「そんなに細かく斬つちやって食べにくくない？」

「このゆで卵はソースに使うんだよ」

「ソース？」

茹で卵をソースに？

一体どんなソースを作るんだろう？

チトさんは茹で卵とマヨネーズを混ぜてタルタルソースを作った。
へえ、タルタルソースってあんな風に作るんだ……

そして出来上がった唐揚げとユウリさんが作った甘酢あんとなるたるソースを混ぜてチキン南蛮が出来上がった。

出来上がった唐揚げにチキン南蛮、棒棒鶏風サラダ、鶏肉のお吸い物が今日の夕飯のメニューだ。

箸で唐揚げを摘まむと、カラリと揚がった衣からジワリと肉汁が溢れ出てきた。

私はそのまま唐揚げを口へと運ぶ。

サクツ

一口齧った瞬間、外はサクツと、中はふんわりと溢れ出て来る肉汁は濃厚で、鶏の旨みを余すことなく含んでいる。

美味しい……

学校の給食やお母さんが作る料理も美味しいけど、チトさんが作った料理も美味しかった。

流石、東京でコックさんの見習いをやっているだけの事はある。

夕食後のデザートはチトさんが空港で買ってきたチョコレート菓子を食べた。

あのプリンのロールケーキも美味しかったけど、このチョコレート菓子も美味しかった。

た。

チトさんとユーリさんはその後、一緒にお風呂に入っていった。

あの二人は本当に仲がよさそうだ。

「あつ、明日の朝、ラジオ体操があるんだけど、二人も一緒にどう?」

私は二人を明日の朝のラジオ体操に誘った。

「そうそう、その後、海に行くんだけど、二人も来ない?」

夏海が二人を海に誘う。

「いいわね。二人とも一緒に行くこう」

「えっ? ああ、うん……」

「勿論行くよ!! そう言えばちーちゃん、海初めてだったよね?」

「う、うん」

二人も明日の海水浴に参加する事になった。

へえ、チトさん海に行ったことがないんだ……

このみちやんとほとんど同じ年なのに珍しい。

夜、寝る前にチトさんは何かを書いていた。

「あれ? チトさん、それ何を書いているんですか?」

「これ? これは、日記だよ」

「日記？学校の宿題で書いているの？」

私はチトさんが日記を書いているのは学校の夏休みの宿題かと思った。

「いや、違うよ。これは私の趣味で書いているんだ」

「へえ」

宿題でもないのに日記を趣味で書くななんてチトさんはやっぱり大人だな……

そして翌朝、

「ユー!!ほら、起きろ!!」

「うううあと五時間……」

「ラジオ体操に行くんだらう?!ホラ、起きろ!!」

チトとユーリの泊っている部屋からはチトの大声が響き、

「夏海!!ほら、起きなよ!!ラジオ体操に遅れるよ!!」

「うん……ねむいねえちゃん、代わりに行ってきてよお」

「何言っているの?どうせ、かず姉は今日も寝坊で来ないからハンコを押すのはお母さんでしょう?行かないと怒られるよ」

「ああそうだった……いいなあかず姉は」

寝ぼけ眼を手で擦りながら、ふらつく足取りで小鞠が手を引いて洗面所へと夏海を連れて行く。

その途中で、チトとユーリの二人に出会う。

ユーリも夏海同様、寝ぼけ眼で足取りがおぼつかない。

そんなユーリをチトは手を引いていた。

「……」

チトと小鞠の目線が合う。

そこで二人はシンパシーを感じた。

身長もさることながら、お互いに手のかかる者が近くに居ると苦勞する。

「おはよう、チトさん、ユーリさん。昨日はよく眠れた？」

人によつては枕が変わると眠れない人も居るので、心配になった。

「大丈夫だよ。私もユーリも大抵の所で眠れるから」

前の世界での経験上、二人は枕が変わる程度で眠れなくなると言う事はなかった。

そしてラジオ体操の会場である村の神社には昨日、自分達を案内してくれたれんげの他にもう一人、背の高い女の子が居た。

「おつ、れんちよう。おはよう」

「にゃんぱすー」

「おはようございます。小鞠先輩……えつと……後ろの人は一体……」

小鞠の後ろに居るチトとユーリに気づいたその子は小鞠に誰なのかを訊ねる。

「あつ、この二人は昨日、東京から来たチトさんとユーリさん」

「どうも、チトです」

「ユーリです」

「一条蛍です。よろしくお願いします」

れんげの近くの女の子、一条蛍はペコツと一礼し、チトとユーリに自己紹介をする。

（あれ？この人の声、何処かで聞いた事が有るような気がする）

蛍の声を聞いて、昨日夏海の声聞いた時と同じように彼女の声も何処かで聞いた覚えがあるチトとユーリだった。

「……」

すると、チトと蛍をジッと見ていた夏海が、

「なんか、チトとほたるんの二人つてウチとこまちゃんみたいに姉妹みたいだね。身長で言うとはたるんがお姉さんかな？」

と、チトと蛍の二人が姉妹の様だと言う。

それは蛍とチトの身長さと黒髪、黒い目と言う共通点から姉妹に見えた。

すると、

「あら、聞きました？ 姉様。おかしなことを言っていますわ」

「ええ、聞いたわよ、チト。頭が残念な発言が出ているわね」

「ほ、ほたるん？」

「ちーちゃん、どうしたの？ まだ寝ぼけているの？」

急に態度と言葉遣いが豹変した蛍とチト。

「大変ですわ。今、皆さんの頭の中でひわいな辱めを受けています、姉様が……」

「大変だわ。今、皆の頭の中で恥辱の限りを受けているよ。チトが……」

「ちーちゃん、いい加減に戻ってきなよ」

「ほたるんも何言っているのさ？」

ユーリがチトの頭にチョップを入れ、小鞠が蛍の頬をペチペチと叩くと二人は何か腫物が取れたかのように正気に戻った。

「っ!?! 私達は……」

「一体何を……?」

二人は先程自分達が何を言っていたのかを覚えていない様だ。

「それにしてもほたるん……だっけ？」

「えっ？ あっ、はい」

「小鞠を先輩って呼ぶって事は、蛍は中学一年なの？」

「いえ、小学五年です」

「えっ？うそっ!？」

蛭が中学生ではなくまだ小学生と言う事実には驚く。

そしてユーリが蛭をジツと見ると、

「小学生？オオツ、ホントにでけえな！オオツ、ホントにでけえな！」

ユーリは蛭の身長が大きな事に思わず声をあげる。

「なんで二度も言うんだよ？」

「言つてないよ。二度目は木霊だよ。ほら、私達は山に居るんだから」

「ああ、そう……」

こんなやり取りをしている間にラジオ体操の時間となり、皆はラジオ体操を始める。

今回、ラジオ体操初体験のチトとユーリは小鞠達の動きを見様見真似でやり、れんげ

は独創的なダンスをしていた。

ラジオ体操が終わわり、出欠のハンコを押す事になる。

ハンコを押すのは卓、小鞠、夏海の母親の雪子だった。

本当ならば、ハンコを押すのはれんげの姉の一穂の仕事なのだが、彼女は今も自分の

家の布団の中で高いびきを書いてまだ眠っていた。

「そう言えば、れんげちゃんの所、御両親は朝から畑仕事だったっけ？かずちゃんは寝て

いるから家で朝ご飯、家で食べていくかい？」

「食べるん」

雪子がれんげを朝ご飯に誘う。

すると、れんげは雪子のお誘いを受ける。

「蛭ちゃんも食べていく？」

「えっ？ いいんですか？」

「いいよ、人が多い方が楽しいしね」

雪子はれんげの他に蛭も誘った。

帰り道、小鞠と蛭は無人販売所へミニトマトを買いに行き、他の皆は越谷家に戻り朝食の準備をした。

準備をしている間、ミニトマトを買いに行った小鞠と蛭が戻ってくると、雪子は小鞠達を買ってきたミニトマトを味噌汁の具材として味噌汁の中に入れた。

「……」

ミニトマトを味噌汁の具材にした雪子の姿を見たチトとユウリはギョツとする。

「ちーちゃん、トマトって味噌汁の具材になるの？」

「わ、分からない……でも、店長は味噌汁の具材は各家庭それぞれだと言っていたから、多分トマトも……」

「美味しいのかな？」

「それは食べてみないと分からない」

そして朝食の準備が整い朝食となる。

蛭は自分の家以外の家でご飯を食べるのは初めてらしくソワソワしている。

朝食が進む中、蛭が味噌汁の中に入っているミニトマトを見つけた。

「?…あの…お味噌汁にトマトが…」

蛭の家でも味噌汁の中にトマトを入れるのは珍しい様だったが、

「?入っているよ」

「蛭ちゃんのところは入れないのかい？」

越谷家では味噌汁にトマトを入れるのは当たり前の様だった。

「チトさんの所も入れないの？」

「え、ええ…家もトマトを味噌汁の具材にはしないかな…ねえ」

「うん」

「まあ、独特かもしれないけど、少し酸っぱいだけでおいしいよ」

小鞠に言われ、蛭、チト、ユーリはトマト入りの味噌汁を飲んでみる。

確かに小鞠の言う通り、トマト入りの味噌汁には独特の酸味があった。

朝食が終わった後、この後海へ行く為、れんげと蛭は荷物を取りに戻り、駅で待合わ

せをする事になった。

そして、駅に着くと今日の海水浴の引率者でありれんげの姉、この村の唯一の学校の教師をしている宮内一穂と出会った。

「どうも、今日の引率をします、宮内一穂です。二人は東京から来たお客さんだね。話はれんちゃんや雪子さんから聞いているよ。今日はよろしく」

「はじめまして、チトです。今日はよろしくお願いします」

「ユーリです。よろしく」

一穂を見た二人の印象はと言うと……

(大丈夫かな? ちよつと頼りなさそう……)

(ボオ〜としてそうな所がイシイに似ているなあ……)

であった。

互いに自己紹介を終えて一行は海へと出かける。

だが、此処は山の中の田舎、海への道のりは遠く、電車を乗り継いでやつとこさ、田舎ではあるが、海水浴へと到着した。

山へ行くが一応泳げる川もあると言う事でチトとユーリは今回の旅行前に唯達と共に水着を買いに出していた。

当初、チトはシンプルなデザインと言う事でスク水を買おうとしていたが、唯達に止

められて、白いワンピースタイプの水着を購入した。

更衣室で着替え海へと行くのだが、蛍とユーリの二人が着替えに手間取る。

二人は他の皆に先に行つてと言つたので、皆は先に海へと行つた。

「これが……海……」

チトにとつては初めての海……

釣りに海へ行つたことのあるユーリやねこやの店主の話では潮の香りがすると言つていたが、砂浜に立つと波の音と共に潮の香りがした。

チャプツと波間に立つと程よい冷たさの海水がチトの足を濡らす。

「つめたっ」

「おーい、チト!!海来たんだから泳ごうぜ!!」

「えっ?あつ、ちよつ……」

夏海がチトの手を引いて海へと入るが、足がつかなくなると……

「あぶつ……がぶつ……おっぶ……」

チトは溺れた。

ユーリはあの魚と小さなロボットと出会つた時、養殖用の水槽ですぐに泳げたが、チトはあの水槽で溺れた。

それ以降、泳ぐほどの大きな水のある環境に接しなかつたので、チトのカナヅチは未

だに直っていないかった。

溺れたチトを卓がライフセーバーの如く助けた。

「あ、ありがとうございます」

「……」

「にーちゃんすげえな!!」

卓はチトにサムズアップをして去って行く。

その後、夏海とれんげはビーチバレーをして、チト、小鞠、一穂はビーチパラソルの下で海を眺めていた。

一穂が持つて来たクーラーボックスの中には飲み物ではなく大量のきゅうりとトマトが入っていた。

一穂と小鞠はきゅうりを齧り、チトはトマトを食べながら海を見ている。

「海……だね……」

「海……ですね……」

「海……」

「てか、田舎だったのになんで海はこんなに人が多いの?」

「確かに多いですね」

（多いかな?）

東京に住んでいるチトにとってこの海水浴場に居る人は多い部類には入らない。

しかし、あの村の人口から考えると確かに今、海水浴に居る人は多いかもしれない。

「こんな田舎の海に来てても何にもないのにねえ……」

「里帰りの人とかじゃないんですか」

「……そういや、こまちちゃん。泳がんの？」

一穂は小鞠に泳がないのかを問う。

小鞠は水着に着替えていない。

反対にチトは海で溺れたのでもう泳がないかもしれない。

「まだいいです」

「水着忘れたとか？」

「こうして海を眺めているのが好きなんです」

「チトちゃんは泳がないの？」

「もう十分海は堪能しましたから……」

「まあ、あんなことがあれば海に入りたがらないのも分かるか……でも、こまちは水着着ると中学生に見えないから嫌なんですよ？」

一穂が小鞠に海に入りたがらない訳を聞くと、

ガリッ

小鞠がきゅうりを力強く噛む。

そして、

「そうですよ!!せっかく海満喫して忘れようとしていたのにいっ!!」

きゅうりをやけ食いする小鞠。

一穂の問いは小鞠にとって地雷だったらしい。

「あつ…ごめんね…つてか、こまちゃんつて身長幾つだっけ?」

「140無いくらいです…」

小鞠はしょんぼりとした感じで自分の身長を答える。

身長に関して、チトも他人事ではないので、やや意気消沈している。

「まあまあ、周りに同い年がいなくても、みんなそんなもんじゃないの?たしか、14歳の平均身長はだいたい140センチって聞いたことあるし…」

「っ!!本当ですか!」

「そうなのか!」

一穂の一言で目を輝かせる小鞠とチト。

しかし、

「う、うん…ヤバッ、流石にこれは明治時代のデータだとは言えないな…」

この一言で二人はさらなる絶望へと落とされた。

「明治?!」

「あつ、口に出していた?」

「私って明治の人よりちっちゃいんですか?! 140でもかなりサバ読んでいたのに!!」

「私は平成ではなく明治時代の女子の平均身長なの!?!」

そこへ二人に追い打ちをかけるかのように、

「すいませ〜ん、水着着るの手間取って遅くなりました〜!」

「いや〜着慣れないとなかなか手間取るもんだね〜」

着替えが終わった蛍とユーリがやって来た。

蛍の水着は、胸元をリング状の金具で繋いだとても大胆なデザインの青いビキニの水着でユーリも大人っぽいデザインの黒いビキニの水着を着ていた。

一穂は咄嗟に小鞠の目を両手で覆ったが、チトは蛍とユーリの水着姿を直視した。

(ユーリの奴、前々から胸が大きいと思っていたけど、まさか小学生の蛍に負けるなんて……)

「どう? ちーちゃん? 似合う?」

ユーリはポーキングをして水着が似合っているかを問う。

すると、チトは、

「ふん、ふん、ふん、ふん、」

「ちよつ、ちーちゃん。ソフトに腹パンはやめて〜」

ユーリのお腹に拳をぶつけていた。

一方、蛭は小鞠の目を隠している一穗の行動に首を傾げ、

「?何しているんですか?」

「いや、ちよつとしたゲームと言うか…ハハハハ…いない、いなーい…」

そう言いながらゆっくり小鞠の目を隠していた手をどける一穗。

そして、小鞠の視界に水着姿の蛭が入る。

「ヴアアアアア〜」

蛭の水着姿を見て改めて格差社会を目の当たりにした小鞠は、「ジュース買って来る」

と言ってとぼとぼと歩いていった。

「私も…」

チトもユーリのお腹に散々腹パンをやったチトも小鞠の後を追ってジュースを買いに行った。

「二人とも…どうしたんでしょうか?」

蛭は何故チトと小鞠がどうして元気がないのか分からず、首を傾げて二人の背中を見ていた。

「それは自分の胸に聞きなよ…しかし君は本当に小五かね?」

一穂にしては珍しく蛍にツツコミをいれた。

なお、砂浜でその様な出来事があった頃、夏海とれんげは卓を浜辺に横たえて顔を砂で埋めて遊んでいた。

シユノーケルのおかげで呼吸は出来たので、卓は窒息を免れた。

小鞠とチトがジユースを買いに行つた後、ユーリは一穂が持つて来たきゆうりとトマトを食べて二人が買って来るジユースを待つていた。

しかし、何時まで待つても二人は戻つてこない。

ジユースのある自販機は目と鼻の先のはず、迷うことはまず無い。

「まさか誘拐されていたりして〜」

夏海が冗談を言つた。瞬間、蛍の顔が凍りついた。

「ゆ…誘拐…?」

「や、やだなあ、冗談だつて…あはは…」

「でも、ありえなくはないじゃないですか!!先輩可愛いですし!!ちつちやいですし!!持ち運びやすいですし!!」

「た、確かにちーちゃんも小さいし持ち運びやすいし…」

ユーリも夏海の冗談を真に受け始めた。

「うわああああん!!先輩が誘拐されちゃつたああ!!」

「ちーちゃんが!! どうしよう〜テンチョーになんて言おう!!」

「やばい…すごい心配になって来た……」

誘拐と冗談をほのめかした夏海自身もとうとう本当に心配になって来た。

「お、落ち着いて、まずは状況を整理しよう」

一穂がみんなをなだめ始めた。

「こほん、あのね? 私はね、今日は友達として来ているから、あなた達を見守る責任は無くてね…だからその…ね?」

一穂は大人として、教師としての責任を放棄した。

（(だめだこりや、(私/ウチ) たちがなんとかしないと…」）

「と、とにかく二手に分かれて探そう!! れんちよんはウチと、ユーリはほたるんと探して!!」

こうして行方不明になった小鞠とチトの搜索が始まった。

「先輩〜どこですか〜!?!」

「ちーちゃん!!」

ユーリと蛍は一緒にチトと小鞠を探した。

トイレ近くや売店、ゴミ箱の中から自販機の中まで…

(蛍、流石にそんな所には居ないと思うけど……)

後半における蛍の行動を見てユーリは半ば呆れていた。

「ほたるくん、ユーリ」

そして、別の方面を探していた夏海達と合流する。

「そつちはどうだった？」

「だめ、どこにもいない……」

これだけ探しても見つからない。

夏海たちに焦りの色が見え始め、蛍も今にも泣きそうになった。

その時、

ピーンポーンポーン——ン

『迷子センターからのお知らせです。身長130センチ程度、ロングの髪の毛、お名前越

谷 小鞠ちゃんというお子様を『お子様じゃないって言ってんじやん!!』』

迷子センターからの放送のバックから小鞠の怒声が聞こえてきた。

チトの名前は呼ばれなかったが、小鞠と行動を共にしている筈なのできつとチトも小

鞠と一緒に迷子センターに居る筈だ。

一行は一穂と共に迷子センターへと向かった。

「迷子じゃないのに迷子センターに連れていかれた……」

チトは不機嫌オーラ全開で連れて行かれた経緯を説明する。

『お母さんどこ?』って聞かれた!!なんだ!?!これ!?!』

一方、小鞠は大号泣しながら迷子に間違われた事に怒りをあらわにしていた。

「いやあく無事に見つかってよかったねえく迷子ちゃん」

「迷子じゃない!!」

「ちーちゃん、いくら私達が普段から迷っているからつてなにも海に来てまで迷うことないじゃん」

「だから、今回のは違うつて」

夏海とユーリが小鞠とチトをからかい、二人の不機嫌さのボルテージは更に上がる。

「そーいやナニカ忘れてるような…」

此処で夏海がなにか忘れてるのに気づいた。

「あれ?そう言えば、卓は?」

ユーリはこの場に居ない卓に気づいた。

「「「「あっ!?!」」」」」

砂浜に行つてみると、微動だせずに砂浜で顔の部分に変な顔で出来た砂山の下に居る卓が居り、彼の周りには野次馬とライフセーバーの人がおり、おおごとになりかけていた。

その後の昼食は海の家にて食べた。

なお、その時、ユーリは海の家で行われていたチャレンジ、『5人前ラーメンを時間内で食べきったら無料』『ジャンボかき氷、時間内に食べきったら無料』と言うチャレンジに挑戦し、見事両方とも時間内で食べきった。

ユーリの見かけによらず沢山食べるその姿に夏海達は啞然としていた。

そして、泳げないチトの為にユーリと夏海がチトの手を引いて泳ぎの訓練をした。

楽しい時間と言うのは直ぐ終わり、一行は帰路についていた。

往路は電車を乗り継いできたのだから、当然復路も同じである。

電車を乗り継いで、午後8時にようやく最後の乗換駅までやって来た。

時間は既に夕食時を過ぎており、一穂を除く皆は線路わきにみかんが落ちて見ているのを見てすっかりお腹が空いてしまったので、丁度降りた場所から近くにあった立ち食いそば屋に入ることにした。

終電は20分後なのでかなり急がないといけませんが、普通に食べれば何とか間に合うだろう。

「うちは先に反対路線行つとくけど、次が最終つてこと忘れんなよ。遅れたら置いてくぞ」

「「「「「は〜い」」」」」

こうして一穂以外のメンバーは駅構内にある立ち食いそばの店に入った。

「ここも都会だけあって、駅に店あるなんてスゴイよな〜」

「そうそう、駅員も居るって知った時はビックリしたよ」

「結構郊外のような…」

「確かに…」

駅の構内に立ち食いそばの店があり、駅員が居る事に驚いている越谷姉妹に対して、蛭、チト、ユーリの三人は此処も十分田舎であると呟く。

「子供用の椅子は一つで大丈夫ですか？」

「あ、どもー」

「ウチだけ椅子ー」

れんげの為の椅子が用意されて後はうどんを食べるだけなのだが、

「……さっきの椅子一つで大丈夫ってさ、2つか一つで迷ったってことかな？」

小鞠は海水浴での迷子騒動以降、かなりそういう話に敏感になってきているようだ。

蛭はそんな事はないと言うが、小鞠の疑心は深まるばかり……

そんな二人を尻目に夏海は自分のうどんに七味唐辛子をかけている。

チトとユーリ、卓とれんげは無言のままうどんをすすっている。

チトとユーリは、やはり食べ物に困った生活をしていたので、目の前に食べ物があったらすぐに食べてしまう癖はどうしても直らないようだ。

「とうがらしいゝ、フフンフフフン♪」

シャツ、シャツ、ドサッ！

すると夏海が振りかけていた唐辛子のフタが取れて、中身が全部お揚げの上に乗っかり、赤い山を形成している。

「……」

大ピンチを迎えてしまった夏海は顔を強張らせて一瞬だけ固まった後に左隣にいる小鞠を見る。

「いやだって疑問形だったってことはさー」

小鞠は蛍との会話に夢中で全くの無防備であった。

夏海は唐辛子の山をおあげで隠して、自分のうどんと小鞠のうどんとすり替えた。

「お店の人もただ普通に聞いただけだと思いますよ？」

「そうかなあ……」

蛍が小鞠を宥めると、小鞠はうどんを口にした。

その途端に小鞠は動きを止め、しばらくすると無言で箸を落としてペタリと座り込んでしまった。

「小鞠先輩?」

「く……くひがかりや……あ……つ……ありゃんりゃこりゃー!!!」

「小鞠先輩!!」

小鞠は口の中に広がる唐辛子の突然の辛味に苦しむ。

「ははっ、どんまいどんまい……」

笑いながら夏海は誤魔化していると、不意に隣から視線を感じたのでふり向くと、れんげが自分の事をじっと見つめていた。

まっすぐに純真無垢なれんげの瞳は、夏海の良心に訴えかけてくるようだった。

「もしかして、れんちゃん見てた?」

「……」

れんげは、夏海の問いに対して何も答えず、ただ見上げてくるばかり。

まるで自分のやってしまったことに対して、何でそんなことをしたのと逆に問いかけてくるようだ。

流星にいたらずら好きの夏海でも、罪悪感を感じたのか、

「ああ、姉ちゃん。それ辛いならウチが食べようか?」

「ほんひよ? なふみ、いいやひゆだったんひやな」

「礼とかいいから心が痛む」

夏海は意を決して赤いうどんへ箸を伸ばし、そしてうどんをすすする。

「なーんだ。思ったより辛くないじゃん！こんなんで辛いとか言ってるようじゃあ、姉ちゃんもまだまだだだねー！」

「だ、大丈夫？」

チトが心配になり夏海に聞いてみると、

「ん、なにになに!?ウチが無理してるように見えるの!？」

「いや、かなり……無理しているように見えるが……」

夏海は顔を真っ赤にして目から涙を流していた。

「う、うめ〜！ これちよ〜うめ〜!!」

夏海は無理してまたもや赤いうどんをすすする。

すると、蛭はあることに気づいた

「れんちゃんさつきから何見てるの?」

「天井の電気に虫飛んでるのん」

「うあつ本当だねー」

れんげが見ていたのは夏海の犯行ではなく電灯の傍に居た虫だった。

「ウチ無視して、虫見てたってか！ ははは……」

「なつつん、なんで泣いてるのん?よくわからないけど、なつつんドンマイなのん」

「はは、良きに計らえ……」

「そのうどん、そんなに辛いのか？」

「そう言うなら、ユーリ、食べてみな」

ユーリは既に自分の分のうどんを食い終えており、夏海の赤いうどんが気になり声をかけると、夏海はユーリに丼を差し出す。

「それじゃあ……」

「おい、止めておいた方が……」

チトが止めるのも聞かず、ユーリは赤いうどんをすすする。

「……」

夏海とチトはユーリの様子を窺う。

「……むぐむぐ……くん……そんなに辛いかな？これ？」

ユーリは平気な様子で赤いうどんを食べた。

「ユー、お前平気なのか？」

「うん。別に食べられなくはないよ。ちーちゃんもどう？」

「……」

ユーリに促され、チトも赤いうどんに箸を伸ばす。

そして、うどんをすすすると、忽ちチトの顔は赤くなる。

「ぐはっ!! な、なにこれ!!」

ユーリは平気で食べていたが、チトのリアクションからやはり辛かったようだ。

「ユー!! お前、よく平気で食べられるな!!」

「そう?」

「ユーリ、食べられるなら食べていいよ。ソレ」

夏海もギブアップして赤いうどんをユーリへと譲り、彼女は赤いうどんを平然とした様子で食べた。

皆がうどんを食べ終えたと同時に隣のホームに電車が入ってきたことを知らせるベルが聞こえてきた。

「あつ、電車来た!!」

「うわ! コレ逃したら電車ないじゃん! れんちよんも早く準備して!」

乗り遅れないように夏海はれんげを、蛭は小鞠を抱いて隣のホームに向かう。

「急げ急げ!!」

素早く階段を駆けて最寄の出入り口に全員が飛び込むと、その直後にドアが閉まった。

まさに間一髪である。

「何とか間に合った」

「ですね〜」

（良かったら、先輩持ち運びしやすくして〜）

蛭は抱っこしていた小鞠に対してそんな事を思っていた。

「兄ちゃんも来てたんだ。こういうときは素早いよね。いつ乗ったんだろう?」

電車の座席にはいつの間にか卓の姿もあった。

夏海がふと窓の外を見ると、ホームのベンチに座って熟睡している一穂の姿があった。

そして、無情にも彼女を置いて電車は走り出す……。

「ねえねえ、乗り遅れたん?」

「終電は確かこの電車だよね……?」

電車の中は静かになった。

「えー……どんまい……れんちよんどんまい!」

「どんまいれんげ」

「ど……どんまい……」

れんげ以外の皆はれんげにどんまいコールをした。

「ウチどんまいん!!」

れんげは力強く答えた。

(やっぱり頼りない人だったか……)

(イシイ同様、あの人もボオ〜つとしていた人だったな……)

段々遠ざかる駅を見ながらチトとユーリはそんな風に思っていた。

こうして波乱万丈な海水浴はまさかの引率者の乗り遅れと言う形で幕を下ろした。

明日はどんな事があるのか？

それはまだ誰にも分からない。

でも、きつと楽しい事だろうとチトもユーリもそう思った。

わたしたちののんのな夏休み 4

生まれて初めて海に行き、海水浴と言うモノを体験したチトは何と小鞠と共に迷子に間違えられた。

チトにとって迷子と言うモノがどんなモノなのかよく分からなかったが、小鞠の様子を見る限り恥ずかしいモノだと分かった。

もつとも前の世界でもユーリは「私達は常に迷っているようなもの」と言っていたが、あの世界では、二人つきりだったので、特に気にした事もなかったが、この大勢の人が居る世界では迷子は恥ずかしいモノなのだ。チトは体験をして学んだ。

その帰り、夏海の失敗によって唐辛子うどんとなったうどんを小鞠が食べて一時、立ち食いそば屋は騒然となった。

夏海は責任を感じ、自分の手で唐辛子うどんを食べたが、夏海自身もギブアップ。

その唐辛子うどんはユーリが食べた。

唐辛子で真っ赤になったうどんをユーリは平然とした様子で食べていた。

チトも一口食べたが、とても食べられるようなものではなかった。

うどんを食べた直後に帰りの電車が来て、皆は慌てて飛び乗ったのだが、れんげの姉

でその日の海水浴の引率者だった一穂が駅に取り残されると言うアクシデントがあった。

そして今日、チト達は山へと来ていた。

山に行く前、お菓子を買う事になり、小鞠達が鼻唄と言うか、この村で唯一の店である駄菓子屋へとやって来た。

「ここが、ウチらがよく行く駄菓子屋」

東京の下町に有るような佇まいの木造建築の駄菓子屋。

その姿はこの田舎の風景にも十分にマッチしている。

ガラガラとガラス戸をあげると、

「いらつしやーい」

店の中のレジ台に座っている金髪の若い女の人が声をあげる。

(そう言えばレンげが最初にユーリを見た時、『駄菓子屋』って言っていたけど、この人の事だったのか……でも、ユーリとこの人の共通点って、髪の毛の色だけだ……)

チトは駄菓子屋の店主を見ながらそう思った。

「ああ、お前らか……ん？その二人は見ない顔だな。誰だ？」

駄菓子屋の店主、加賀山楓がチトとユーリに視線を向ける。

「お母さんの知り合いの人で東京から来た……」

「チトです」

「ユーリです」

小鞠がチトとユーリを紹介し、二人は楓にペコツと一礼し、自己紹介をする。

「ほお、東京から……私はこの駄菓子屋の店主の加賀山楓、よろしく。それで今日は、何を買いに来た？」

「これから山の秘密基地に行くから、腹ごしらえのおやつを買いに来たんだよ」

夏海が来店目的を楓に伝え、お菓子を買う。

「駄菓子屋ってテレビとかで見たけど、こうして実際に来てみると、不思議とワクワクするねえ、ちーちゃん」

駄菓子子を選んでいる中、ユーリが駄菓子屋の店内を見渡しながらポツリと呟く。

「そうだな……ねこやの近くにも前の世界にもこういったお店はないからなく」

チトもユーリの言う通りだなと納得した様子で店内の様子を見ていた。

それから駄菓子子を購入し、夏海の言う秘密基地とやらへと向かう一同。

そこへ行くには徒歩では遠い様でバスで向かった。

バスの外には自然豊かな風景が広がっている。

周りは皆、木々の緑一色。

前の世界のコンクリートの廃墟と雪の灰色と白の寂しい色合いとは大違いである。

そして着いた秘密基地はブルーシート、ロープ、木箱、トタンなどで作られたモノで、その造りは……

(川原のホームレスの家みたい……)

例えは悪いが、東京に住んでいる二人にはそう見えた。

しかし、中は意外にも広い造りとなっていた。

駄菓子屋で買ってきたお菓子を置いて、山の中へと向かう。

れんげが虫取りをしたいと言うので、辺りでやかましく自己主張をしているセミを捕まえることにした。

「網が無いのに捕まえられるのん？」

秘密基地には虫取り網が無いのだが、夏海は、ちよつと変わった方法で捕まえると言う。

そして木の根元にある小さな穴を見つけると、

水筒の水をその穴の中に入れる。

「せ、セミ……」

穴の中に水を流し込み水攻めをされたセミに同情するれんげ。

「溺れちゃうんじゃない……」

「大丈夫だよ」

「でも、夏海。セミって木の上で鳴いているあの虫じゃないの？」

ユーリは木の上で鳴いているセミを指さしながら夏海に質問する。

「まあ、あれもセミだけど、今から出てくるのは……」

夏海がもつたいぶつた様に言うと、穴の中から一匹の虫が出てきた。

「なんか、出てきたの!?!……どなたですのん?」

れんげは穴から出てきた虫に対して一体何の虫なのかを虫自身に訊ねる。

「それ、セミの幼虫だよ」

「セミって成長するの?」

「するよ、えつと……」

夏海は辺りを見回し、何かを取って来る。

それはセミの抜け殻だった。

「ほら……コイツが脱皮してセミの成虫になるんだよ」

夏海がセミについてチトとユーリに教える。

「……ちーちゃんも脱皮したら大きくなるかもね」

「ムツ……」

ペチペチペチペチペチペチペチペチ……

「ドウウウウウ……」

チトは前の世界にてイシイから教えてもらった食糧精製プラントにて、ユーリのせいで粉々になりそうになった時の様にユーリの頬を高速でペチペチと叩く。

海水浴場で迷子になったのも自分の身長が小さかった事が原因だったので、ユーリに小さいと言われてムカツと来たのだ。

そんなチトとユーリの尻目にれんげは、

「コイツの名前は『そのひぐらし』にするん」

「セミにその名前は止めてあげて……」

セミの幼虫に名前を付けるのだが、れんげがつけた名前はセミにつけた名前にしてはあまりにも不憫な名前の為、夏海は止めてやれと言う。

虫取りをした一同は、今度はこの近くの川へと向かう。

なんでも納涼にもってこいの場所だと言うのだ。

確かに山の中はセミの声、時々吹く風は木々の葉を揺らし、森林浴効果があるが、それでも暑い。

そしてやって来た川にて……

「おーし、行くぞー!!」

夏海は橋の上から川にダイブした。

「ぶはっ!!気持ちいい〜」

「じゃあ、次は私がいけますね」

夏海に続いて蛸も橋の上から川へとダイブした。

「次、ユーリとチト、どっちから行く?」

川に浮かべてある浮き輪に捕まりながら夏海が次にどちらが飛び込むかを訊ねる。

「うう〜……ちよ、ちよつと高くないか?」

「大丈夫だよ。浮き輪もあるし、ちゃんと飛び込める深さになっているから!! 姉ちゃんやほたるんでも出来るんだし」

「うう……」

「行こうよ、ちーちゃん」

「で、でも……」

「……」

チトは元々高所恐怖症である。

潜水艦でユーリがヌコの仲間に食べられた時、ユーリを助けなければならぬと思う一心で、潜水艦の長い梯子を登り、潜水艦の甲板に立った。

でも、あの時と今は状況が違う。

ユーリは隣にちゃんという。

だからこそ、本来の高所恐怖症が戻って来たチト。

此処に来る前も飛行機で震えていた。

横で震えているチトの手を取り、ユーリは……

「えっ?」

「いくよ、ちーちゃん」

「ちよっ……」

「ぬーん……」

「うわああああああー!!」

チト共に川へとダイブした。

ドゥプーン!!

「アハハハハ……ああ〜気持ちいい〜」

「ぬー……」

海で夏海とユーリから泳ぎを教わっていたので、溺れる事は無かったが、それでも納得がいかない様子のチトだった。

来ていた服のまま川に飛び込んだが、帰りのバスを待っている間に服は乾いた。

バスに乗っている中、

「あつ、そう言えば今日、家のパパとママがデパートに買い物に行ってお土産に花火を買ってきてもらう事になっているんです。今日の夜、皆でやりませんか?」

蛍が今日の夜、一緒に花火をやらないかと誘ってきたので、皆は今日の夜、蛍の家に花火をしに出掛ける事になった。

夕食を食べ終えて皆で蛍の家に行く事になり、途中でれんげと一穂と合流し、蛍の家に行くところ……

「ぐす……」

皆を出迎えた蛍は何故か涙目だった。

「ど、どうしたの？ ほたるん」

出迎えた蛍がいきなり涙目だった事に驚く一同。

「そ、それが……買い物に行ったデパートに花火が売り切れていて……ほとんど買えなくて……」

『えっ?』

「すみませーん!! 皆さん楽しみにしていたのにー!!」

お目当ての花火を買えなかった事でその罪悪感から思わず号泣してしまう蛍。

「えっ?! 全然大丈夫だよ。ほたるん」

夏海がすかさず蛍にフオローを入れる。

「そ、それにほとんどってことは、何かは買えたんじゃないの?」

「この筒状のモノは買えたんですけど……」

「おっ？なかなか、豪華なヤツじゃん。それやろうよ」

「は、はい……」

「じゃあ、火をつけるよ」

夏海がチャツカマンで花火に火をつける。

当初、夏海はこの筒状の花火が打ち上げ花火かと思ったのだが……

ヒュー……ポン

火花は現れず、ポンと音がしたと思つたら、何かが落ちてきた。

それはパラシュートをつけたピンク色の熊の様な人形だった。

「……えーと……蛍、他の花火はないの？」

小鞠は蛍に他の花火は無いのかと訊ねる。

「その一本だけで……」

蛍はこのパラシュート花火以外の花火は無いと言う。

『……』

気まずい空気が流れ、鈴虫の鳴き声だけがこの空間に虚しく響いている。

「ユー、余計な事は言うなよ」

チトはユーリが何かを言う前に釘をさす。

ユーリは何でもかんでも思つた事を口にする事がある。

この白けた空気の中、蛍はかなりの罪悪感を感じている筈だ。

そんな中、ユーリの率直な意見は蛍の心に大きな傷をつけかねない。

「わ、分かっているよ……」

ユーリは心外だと言わんばかりに言うが、

「本当に分かっているのか？」

チトにはいまいち信じられなかった。

そんな二人を尻目に、

「あつ、いや、でも、思ったよりも楽しかったよ……」

小鞠が蛍にフォローを入れ、『次、夏海、お前を何か蛍にフォローを入れろ』とアイコンタクトを取る。

「うん、すつごく楽しかった。そ……そうそう、パラシユート花火なんて久しぶりだから超面白かったよ」

「わ、私達も初めて見たから、なかなか貴重な体験だったよ……な、なあ、ユー」

「う、うん。花火なんてテレビの中しか見たことがなかったから……そ、その……とつても面白かったよ」

夏海に続いてチトとユーリも蛍にフォローを入れる。

「う、ウチも！ウチも楽しかったのん!!花火物凄く楽しみにしていたのん!!聞いた時は

ワクワクだったのん!!だから、今日皆で花火ができて……楽……し……かつ……た……ほたるんは何も悪くないのん……」

れんげも何とか蛍をフォローしようとするが、結局最後は本音が出てしまった。年下のれんげにまでもフォローと同情をされてしまった蛍は等々我慢できずに、

「ごめんなさーいっ!!皆さん、ごめんなさーい!!」

大号泣してしまう。

泣いている蛍にもはやどんなフォローも無駄であり、皆はどうしたものかと思つていと、

「えっと……なんか思ったより早く終わったみたいだね……」

一穂が気まずそうに声をかけ、腕時計を見ると、

「んーまだ時間あるし、散歩でもするかあ」

そう言つて一穂は突然歩き出す。

「ん?かず姉、どこいくの?」

「ちよつとそこらへん」

「まつ、待つてよ、かず姉」

「このまま此処に居てもすることがないので、一同は一穂についていった。

「かず姉、どこ行くのさ?そつちは森だよ」

「どこ行くんだらう?」

「さあ?」

一穂は行先をつけずに森の中を歩いて行くと、

「おっ、あつた、あつた、ここー」

やがて一穂は森の中にある小さな川辺で足を止める。

川辺にはいくつもの小さな発光体が飛んでいた。

「人魂だ!!」先祖様だ!!」

それを見て小鞠は思わず身体を震わせて声をあげる。

「ちーちゃん、アレなに?」

「な、なんだらう?」

チトもユーリも目の前で光り、飛んでいる発光体には見当もつかなかった。

「蛍だ!!」

夏海は小さな発光体を見て声をあげる。

「えっ? 蛍? 夏海、蛍に何か用なの?」

ユーリが蛍の名前を声に出した夏海に訊ねる。

「違うよ、あの光っている虫の事だよ」

「虫っ!?!あの光っているの、虫なの!?!」

「虫が光るなんて……」

夏海から発光体の正体が蛍と言う虫だと聞いて驚くチトとユウリ。

「かず姉、なんでこんな所を知っているの？」

「あれ？知っていると聞いていたけど……あつ、でも、夜こんな所には来ないか」
皆は蛍をもつと近くで見ようと川辺に近づく。

「おーい、これとつてきた」

夏海が歪曲している草木を持って来た。

「この葉っぱを川の水に浸して持っていたら、蛍が水を飲みに来るかもよ」

夏海から葉っぱを受けとり、川に浸し、葉っぱに水が僅かに残した状態で手に持っている。と蛍が葉っぱに寄つてきた。

「本当に虫だ……」

「キレイ……」

月や星の夜景は同じでも生物が悉く絶滅した前の世界では決して見られない幻想的な光景……

「ちーちゃん」

「なんだ？」

「……ここにきてよかったね」

「……ああ、そうだな」

葉っぱに止まった蛍を見ながら呟くチト。

「花火できなかつたけど、花火できたんなんー」

「うん、蛍の花火だね」

花火の一件で意気消沈していた蛍も川辺に飛んでいる蛍を見て元気を取り戻した様子だった。

初めての海、初めての蛍、此処の来て初めての体験ばかりのチトとユーリであったが、二人は翌日、ある再会をする事となった。

翌日の早朝。

この日の天気も雲一つない晴天に恵まれ、その日も朝からラジオ体操があった。

眠そうな目のユーリをチトが手を引いて、夏海を小鞠が連れて、ラジオ体操の会場である神社へと向かい、そこでラジオ体操をする。

相変わらずラジオ体操の監督をする筈だった一穂は寝坊の為、来ていない。

そして、体操が終わった時、

「今日、ねえねえがなつつん達に家に来て欲しいって言ってたん」

れんげが夏海達に今日、宮内家に来て欲しいと言う。

「かず姉が？」

「一体何の用でしよう？」

「また、変な事じゃなければいいけど……」

「前に何かあったの？」

以前、遠足と言う名の田植えを手伝わされた事があるので、一穂の招集に対して何やら嫌な予感がする夏海達だった。

チトとユーリは当然、そんな事を知らないので、夏海達が何故、不安そうな顔しているのか首を傾げている。

「それが……」

小鞠がチトとユーリに以前、田植えを手伝わされた話をする。

「ぬー…田植え……」

「何か大変そうだね……逃げる？」

「そうしたいけど、ウチらは逃げたら学校の成績に影響するからな……」

一穂が学校の先生と言う事でその学校の生徒である夏海達には今回の招集に応じなければ成績に影響が出るかもしれないので、夏海達には拒否権がなかった。

「大変そうだし、私達も手伝おうか？」

「ええー!? ちーちゃんマジで!？」

「お世話になつてゐる夏海達が困つてゐるんだから、協力するのは当たり前だろう」
「ぬ……」

田植えの話を書いてユーリも夏海達同様、不安そうな顔をした。

朝食を食べた後、チト、ユーリ、夏海、小鞠、卓はれんげと一穂の家、宮内家へと向かった。

宮内家では蛍も来て、一穂が今日、皆を集めた目的を話す。

それによると、今日、宮内家の敷地内にある蔵の整理をしたいので、人手の確保として皆を呼んだらしい。

田植えとは異なるが、蔵の整理も大変そうだと。

やれやれ、と思いつつ夏海達は手に軍手をつけて宮内家の蔵の整理をする事になった。

ただ、自分の生徒らが蔵の整理をしている中、一穂は縁側で呑気に茶を啜っていた。

夏海達は蔵から出された荷物を一穂に捨てるのか取っておくのかを訊ねる。

それを繰り返して蔵の中の荷物を出していくと、宮内家の庭には蔵の中に放り込まれていた色んなものが溢れかえる。

夏海、小鞠、れんげ、蛍、チト、ユーリの六人で蔵の整理をしたが、まだ中学生に小学生、高校生ぐらいの年代の少女達ばかりなので、作業はまだ終わらない。

それでも最初はブツブツ文句を言っていた夏海達はいつの間にか宝探しをしている気分となり、なんやかんやで楽しくやっていた。

昼近くになり、ようやく蔵の中の物をほぼ出し切った所で、蔵の奥へと入って行っただれんげは慌てた様子で戻って来た。

「おっ? れんちよう、そんな慌てた様子でどうしたの?」

「なつつん、戦車!! 蔵の奥に戦車があつたん!!」

「戦車? 戦車の玩具でもあつたの?」

「ちがうん!! 本物の戦車なん!!」

「いやいや、いくらなんでも戦車はこの蔵には入らないだろう」

「本当なん!!」

「どうしたの? 何騒いでいるの?」

「何かあつたの?」

れんげが声をあげていたので、小鞠達が集まって来た。

「れんちよんが蔵の中に戦車があつたって言っているんだよ」

「戦車?!」

「いくらなんでも戦車は……」

「本当なん!!」

そう言っつてれんげは蔵の中へと入っつて行く。

れんげが嘘をつくとは思えないので、夏海達もれんげの後を追っつて蔵の奥に入っつて行く。

「これなん」

れんげは蔵の奥で見つけた戦車を指さす。

「なんだ？こりゃ？」

「戦車の様にも見えませうけど……」

「でも、運転席はバイクみたいじゃん」

夏海、小鞠、蛭はれんげの言う戦車と言うモノに対して一概に戦車とは言い切れない様子。

「……」

一方、チトとユーリは啞然とした様子で眼前の戦車らしきモノを見ている。

「ちーちゃん・アレっつて……」

「……」

ユーリが声をかけてもチトはジツと視線をそらさずに見ている。

「ちーちゃん？」

ユーリが再び声をかけてもチトはただ黙っつているだけ……

そして、ふらふらと眼前の戦車と呼ばれるモノに近づく。

「チト?」

「これは……」

「えっ? チト、コレが何か知っているの?」

小鞠の問いにチトは一度頷く。

「これは……これは……」

チトは恐る恐るソレに近づき、小さく震える手でソレに触る。

「間違いない……これは……ケツテンクラートだ……」

皆の眼前にあるのはかつて、廃墟の世界でチトとユーリの足でもあり、仲間とも言える車輛、ケツテンクラートだった。

「けってん?」

「クラート?」

「これ、戦車じゃないん?」

「キャタピラーがあるけど、これは戦車じゃないよ。でも、このキャタピラーのおかげで悪路でも進む事が出来るんだよ」

ユーリが小鞠達にケツテンクラートの大まかな説明をする。

チトはジッとケツテンクラートを見て触っているだけだ。

「これ、動かせるの?」

「分らない……キイーは……さきさきっている……でも、燃料がはいっていないし、ずっと此処に放置されていたみたいだから、メンテナンスをしないと……」

「メンテナンスすればコレ、動くん?」

「多分……」

「ケツテンの動くところ見てみたいん」

「そう……だね……見てみたいね……」

「後ろにも乗れそうだしね」

「ちーちゃん……」

ケツテンクラートを動かす為にはひとまず、メンテナンスをして燃料を補給する必要がある。

その為、一先ず一穂を連れて、これが動かせそうか?メンテナンスが出来そうな人に心当たりがないかを訊ねる。

一穂によるとこのケツテンクラートは一穂とれんげの祖父がどこからか仕入れてきたものらしいが、運転が難しいと言う事で蔵の奥に仕舞われていた。

メンテナンスに関しては、お隣の爺さんがよく、農業で使用する重機のメンテナンスを自分でしているので、その人なら出来るかもしれないと言う。

早速、そのお爺さんを連れてきてケツテンクラートをメンテナンスしてもらおう。機械油を差し、エンジンオイル、燃料を入れる。

そしてキーを回すとケツテンクラートは起動し、そのエンジンを稼働させる。

トトトトトト……と唸るケツテンクラートのエンジン音はチトとユーリにとって懐かしい音でもあつた。

「直したけど、これ誰か動かせるのか？」

メンテナンスをしたお爺さんは、メンテナンスは出来たけど、ケツテンクラートを動かせないみたいだ。

「ねえねえは出来ないん？」

「流石にねーちゃんもこれは動かせないなあ〜」

田植え機や自動車の運転は出来てもケツテンクラートの運転は一穂も出来なかつた。

「私・出来るよ」

「えっ？チトが？」

「動かせるん？」

「うん」

「じゃあ、動かしてほしいん!!」

「わかつた」

チトがケツテンクラートの運転が出来ると言う。

そこで、チトがケツテンクラートを蔵から出す為、運転席に座る。

(懐かしいな……)

あのケツテンクラートを乗り捨ててから今日までかなりの日数が経っていたが、身体が覚えている。

此処に来る前、ケツテンクラートを失ったあの日の事を夢に見た事、

そして此処に来て、こうしてケツテンクラートと再会できたことに運命的なモノを感じるチト。

チトは慣れた手つきでケツテンクラートを運転し、蔵から出す。

「おおー動いたん!!」

「スゲー!!」

初めてケツテンクラートが動いている所を見たれんげと夏海は興奮している。

「ねえ、チト。之つて後ろに乗れるの?」

夏海は後ろの荷台を指さし、乗れるのかと問う。

「うん、乗れるよ」

「じゃあ、乗ってみて良い!?!」

「いいよ」

「うわーい!!」

「ウチも乗るん!!」

「わ、私も乗ってみたいです」

「えっ? 蛸も? じゃ、じゃあ、私も……」

れんげ達はケツテンクラートの後ろの荷台へと飛び乗る。

勿論、ユーリも荷台に乗る。

定員オーバーの様な気もするが、れんげと小鞠が小柄なので、ギリギリ乗る事が出来た。

「スピードをあげるとエンジンの音が大きくなって五月蠅くなるから、速度はある程度絞らせるね」

「OK」

チトはあの世界をユーリと共に旅して居た時と同じ、速度でケツテンクラートを運転し、周辺の散歩に出かけた。

ただ宮内家の庭にはまだ蔵から出された荷物がそのままの状態に残されていた。

「……あぁ……皆行っちゃったよ……どうしよう……これ?」

一穗が庭に残された荷物を見て途方に暮れていると、お菓子を携えた楓がやって来た。

ライトを借りることにした。

午後は宮内家でお昼ご飯のそうめんを食べた皆はケツテンクライトに乗り、山へと出かけた。

そこで、写生をした。

小鞠曰く、れんげは物凄く絵が上手いらしい。

ただし、れんげは気まぐれなので、変なアレンジを加える所があるらしい。

「チト、ユーリ、二人をモデルにウチが絵を描いてあげるん!!」

「そう?それじゃ・・・」

「お願いしようかな?」

れんげはチトとユーリをモデルに絵を描き始めた。

夏海はケツテンクライトを描き、小鞠と螢は互いにモデルをしながら絵を描く。

「ねえ、螢」

「なんでしよう?」

「今日の夜、一緒に星を見に行かない?」

小鞠は螢を天体観測に誘う。

「はい!!ぜひ!!行きましょう!!」

小鞠loveな所がある螢にとって、小鞠からの誘いを断ると言う選択肢はなく、即

決で今夜の天体観測に行くことにした。

「できたーん!!」

やがて、れんげが出来上がった絵をチトとユーリの二人に見せる。

「どれどれ？」

「ぬーん……」

二人はれんげが描いたとされる絵を見る。

「!?!」

れんげの描いた絵を見て二人は固まる。

確かにれんげが描いた絵は小鞠の言う通り、上手かった。

だが、彼女が描いた絵は、チトとユーリの二人が雪と廃墟をバックに描いたもので、絵の中の自分達が来ている服は今着ている私服ではなく、あの世界を旅していた時の衣装だった。

何故、れんげがあの世界の事を知っているのか分からないが、チトとユーリの二人にとってこの絵は見ていてあまりいい気分のモノではない。

「また、れんげは変なモノを描いて……」

「今は夏だよ。どうして雪なの？しかもバックの町がなんか壊れていて怖いと言うか寂しい感じがするよ」

越谷姉妹はれんげの描いた絵にツツコミを入れる。

「でも、二人を見ながら絵を描いていると、こんな風景が目には浮かびましたん」

絵を描いている時、れんげの目にはこの絵の風景が蘇ってきたみたいで、彼女はその風景をそのまま画用紙に描いたみたいだ。

「ごめん…れんげ…」

「この絵はちよつと…」

チトとユーリにとつてはあまり思い出したくない過去を思い出す様な絵なので、折角描いてもらったのだが、受け取れなかった。

「そうなん？じゃあ、描き直しますのん」

そう言つて最初に描いた絵を破き、また絵を描き始めた。

「出来たん!!」

次に出来た絵はケツテンクラートと緑の山をバックに描かれており、来ている服も今着ている私服となっている。

チトもユーリもこの絵ならばと…れんげの描いた絵を貰った。

その後、ユーリも写生に挑戦したが、お世辞にも上手いとは言えなかった。

チトは写生ではなく、写生しているユーリ達の姿や夏の山々、ケツテンクラートの姿をカメラで撮り続けていた。

そして夕方になり、チトは皆をケツテンクラートに乗せて家へと送る。

最後にケツテンクラートで越谷家に戻って来た時、見慣れない乗り物で帰って来たチト達の姿に雪子は驚いていたが、チトが事情を説明すると、庭先の隅にケツテンクラートを置かせてくれた。

夕食が終わった頃、小鞠は懐中電灯片手に何処かに出かける様子だった。

「小鞠、こんな時間に何処かに出掛けるの？」

「萤と一緒に星を見に行くんだけど、チトとユーリも一緒に行く？」

「いや、私達はこれからお風呂だから、また次の機会にするよ」

「そう？それじゃあ、いつてくるね」

「うん、気を付けてね」

「大丈夫だって、ちよつと星を見るだけだから」

そう言って小鞠は出掛けて行った。

しかし、夜の8時を過ぎても小鞠は帰ってこなかった……。

わたしたちののんのんな夏休み5

れんげの家にある蔵の中で、チトとユーリは少し前の自分たちの仲間と言えたケツテ
ンクラートと再び出会った。

懐かしいケツテンクラートのエンジン音とその振動は、二人で何もなかった廃墟の街
を旅した思いを出すきっかけとなった。

その日、小鞠は蛍に夜、星を見に行かないかと言うと、小鞠ラブな蛍が彼女からの誘
いを断る理由もなく、小鞠と共に夜の天体観測へ行くこととなった。

夜になり出かける際、小鞠はチトとユーリも誘うが、ちようどその時、二人はお風呂
に入るところだったので、夜の天体観測は断った。

「寄り道せずにまっすぐ帰って来なさいよ」

小鞠の母である雪子は夜なので、なるべく早く帰ってくるようにと小鞠たちへと言
う。

「はい、星見るだけだからすぐに帰ってくるって」

小鞠はほんのちよつと星を見るだけなので、そこまで遅くはならないと言う。

「蛍ちゃん小鞠が寄り道しないように見張っておいてね」

雪子は同行者である蛍に小鞠の見張り役を頼んだ。

「あつ、はい……」

「もう、私の方が年上なのにー!!」

小鞠は年下の蛍が自分の監視役であることに不満をぶちまける。

「はいはい、気を付けていつてきなよ」

雪子に見送られ、小鞠と蛍は星を見に行つた。

夜の田んぼ道では沢山の虫たちが鳴いていた。

蛍と小鞠は懐中電灯の明かりを頼りに夜の田んぼ道を歩いていく。

「夜に大人の付き添いなしで外出なんてはじめてー蛍はある?」

小鞠は夜間、こうして大人の付き添いなしで子供だけで出歩くことは今日が初めての経験でなんか新鮮さを感じている。

ただ、この時は蛍と一緒にいるから恐怖は一切感じておらず、もし、一人で夜、買い物などを頼まれたらきつと、怖くて家から出ることは出来ないだろう。

「私も初めてです。天体観測もしたことないですし」

(センパイと天体観測……わーい!!)

小鞠の問いに対して、蛍もこうして夜の大人の付き添いなしでの外出は今日がはじめだと言う。

体つきは大きくてもやはり、小学生なのだろう。

そして、夜とはいえ、こうして小鞠と二人っきりの時間に関しても感激している虫だった。

「あつ、虫。お金持ってきた？」

「はい。センパイが言っていたので、持ってきました」

「じゃあ、ジュース買おう」

二人は星を眺めながら、飲むためのジュースを自動販売機で買うことにした。

ちやうど、歩いている道の前方に自動販売機を見つけた。

「あそこの自販機で買おっか。夜に物を買うのってなんか大人っぽいよねー」

「ですわねー」

二人がジュースを買うため、自動販売機に近寄ると……

ブーン

ブーン

都会と違い、夜の田舎には光源は少なく、外灯やこうした電気の明かりがついている自動販売機には沢山の虫が寄ってくる。

案の定、二人がジュースを買おうとした自動販売機にも小ささまざまな大きさの虫が自動販売機にへばりついていた。

「……」

虫だらけの自動販売機を見て、しばし沈黙し固まる小鞠と蛍。

「まあ……そうだよね……普通夜の自販機なんてムシムシパラダイスだよね……」

「ふ……普通……なんですか……?」

虫を払いのけ、お金を入れる小鞠。

「さ、さすがに中の商品にまでは虫はいないと思いますけど……」

「う……うん……」

表面上に虫がいてもジュースの中にまで虫がいるわけがないと蛍は言う。

小鞠が欲しいジュースのボタンを押すと取り出し口に選んだジュースが落ちてくる。

「ん……」

しかし、小鞠はなかなか取り出し口へ手を入れてジュースを取り出そうとはしない。

「?どうかしましたか?」

なかなかジュースを取り出さない小鞠の態度に蛍は頭の上に?マークを浮かべ、何

故、ジュースを取り出さないのかを訊ねる。

「えっ?あつ、いや……別に……なんか中に虫とかカエルとかいそうじゃない?」

小鞠がジュースを取り出さない理由は取り出し口の中に虫やカエルがいるかもしれないという理由からだった。

しかし、いつまでもこのままの状態にいるわけにはいかない。

小鞠は恐る恐る取り出し口の中に手を入れる。

取り出し口の中は真つ暗でそこにジュース以外にも何かいそうだった。

すると、小鞠の手になにやら冷たいモノが触れる。

「うわわわわっ!!?何かいた!!濡れていて冷たいの!!」

小鞠は少しパニック状態となるが、

「それ、ジュースなんじゃないですか?」

蛭は冷静に小鞠が触れたモノは、彼女自身が買ったジュースなのではないかと言う。

案の定、小鞠が触れた冷たいモノはジュースだった。

「……」

「ジュースでしたね」

その後、蛭も無事にジュースを買い、天体観測する場所へと向かう。

緊張してのどが渴いたのか?

それともこの日本特有のジメジメした夏の夜の熱気のためか、小鞠は買ったばかりのペットボトルジュースの蓋を開けて、中身を飲み始める。

「はージュースおいしー」

「虫がついてなくて、よかったですね」

自動販売機の取り出し口の中に虫は居なかったの、小鞠が買ったジュースのペットボトルには虫はついていなかった。

「あつ、ジュース買ったのお母さんに言っちゃだめだよ。夜に買い食いしたのがバレると怒られちゃう。夏海にも内緒だよ」

「はい、二人だけの秘密にします」

小鞠と自分だけ……二人だけの秘密……その言葉と事実が蛭に幸福感を抱かせる。

「それにしても外灯が全然ないところまできましたけど、どこまで行くんですか？」

蛭が小鞠に天体観測の場所を訊ねる。

周囲は外灯もなく、夜の闇が支配し始める暗闇の空間……

星明かりはあるが、それでも暗くて不気味だ。

「ちよつと怖……くないけど、光がないほうが星はきれいって言うし、もうちよつと向こうまで行こうか」

言葉を濁す小鞠。

そして、折角星を見るのだから、外灯の明かりに邪魔されずに見たいということから小鞠と蛭は更に暗闇の奥深くへと入っていく。

やがて、二人は小高い開けた場所へと到着するとその場で星を見ることにした。

「……とかどう？あつ、懐中電灯をもつて逃げたらだめだよ……別に懐中電灯なくても

大丈夫だけど、逃げている蛍がこけるかもしれないし」

「えーと……お気遣いありがとうございます」

蛍はそう言うが小鞠の本音としては、懐中電灯を持つている蛍が逃げると自分はこの暗闇の中で一人ぼっちで取り残されることが嫌だったのだ。

幸い蛍は小鞠の本心に気づいている様子はなかった。

二人は草むらに座り、満天の星空を見上げる。

都会と違い、夜をライトアップする邪魔な光は一切なく、星の明かりのみが輝く夏の夜空。

「ねえねえ、星座分かる?」

「わかんないです」

夜空の星を見上げながら小鞠は蛍に『星座が分かるかと』と言う。

しかし、蛍も星座には詳しくない様子。

二人はしばし、先程買ったジュースを飲みながら夜の星空を見上げるが、

「あれってオリオン座?」

小鞠が夜空の星を指さしながらオリオン座なのかと問うと、

「オリオン座って冬の星座じゃなかったですっけ?」

星座を詳しく知らない蛍もオリオン座が冬の星座であることは知っていた。

「じゃあ、アンドロメダってどれ？」

「……わかんないです」

二人はもう、知られている星座ではなく、オリジナル：自分たちで星と星をつないで星座を作り始めた。

「あの星と星をつなげてラーメンの麵座」

「じゃあ、むこうの星をつないで、そうめん座ですね」

二人はしばしの間、そうしたオリジナルの星座を作つて天体観測をしたが、

「……つと、いけない。そろそろ帰らないとお母さんに怒られちゃう」

雪子から早く帰つてくるようにと言われていたので、そろそろお開きにして戻ることにした。

「名残惜しいですけどまた来ましょう」

蛭としては小鞠と二人っきりの時間……至福の時間であったが、小鞠の言う通り、いつまでも夜の時間を子供二人でいるわけにはいかない。

「おつけくじゃあ、戻ろうか」

「あつ、足元照らしますね」

蛭が懐中電灯を点けるのだが、何故か懐中電灯の明かりは点いたと思つたらフツと消えた。

「うわわわわわわ!! 蛍なんで明かりを消すの!」

「えっ? えっ? 消してないでよ!! 勝手に消えて……」

「貸して、貸して!! 早くスイッチを!! 明かりを!!」

「だ、ダメです!! 点きません!! 電池がなくなっちゃったみたいです!!」

「ええええええー!!」

突然明かりが点かなくなり、しかも電池が原因となると、今の自分たちでは完全に
手上げだ。

代わりの電池なんて持っていないし……

頼りとなる明かりを失いパニックとなる小鞠と蛍。

「どどど、どうするのっ 周り暗くてなにも見えないんだけど!!」

「えっと、えっと、……ど、どうしましょう」

「ほ、ほたる、泣いているの! こ、こ、これくらいで泣いちゃだめだよ!!」

「うううす、すみません……」

体つきは大きくても蛍はなんだかんだ言っても小学五年生の女の子。

自分たちが遭難したかもしれないと言う事実不安となり泣き出してしまうのも無理はない。

「で、でも暗すぎて帰り道わかんないですよ……」

「そ、そんなの周りを見渡せば……」

小鞠は周囲を見渡し、帰り道を探すが、蛍の言う通り暗すぎて自分たちがどこから来たのかさえも分からなかった。

暗くて周りの木々が同じように見えてしまい、より一層、自分たちがどの道からきたのか分からなかった。

その頃、越谷家ではまだ戻らない小鞠の事を心配していた。

「もう、八時になるのにまだ帰ってこないねえ小鞠」

ユーリが時計を見ながら、まだ小鞠が戻らないことをつぶやく。

今の柱時計は八時の時報を知らせるベルが鳴っている。

「確かにいくらなんでも遅いな……」

チトもユーリ同様、小鞠の帰りが遅いことを心配する。

小鞠と蛍が出かける所を見送ったのを目撃したからこそ、心配になる。

小鞠も蛍も携帯を持っていないので、今どこにいるのか、何をしているのか、連絡が取れない。

もつともこの村では携帯が使える場所が限られているので、例えば携帯を持っていてもあまり意味がない。

「小鞠もしかして迷子になってるかもしれないね」

「ああ、それあり得るかも、姉ちゃん、海でも迷子になっていたし」

夏海も小鞠が迷子になってるかもしれないことを肯定する。

「ねえ、ちーちゃん。小鞠を探しに行こうよ。ケツテンクラートに乗って」

ユーリがチトに小鞠を探しに行こうと提案する。

「……しようがない」

チトはユーリの提案に乗り、小鞠を探しに行くことにした。

彼女自身、ケツテンクラートを乗り回せる機会なので、行くことにしたのだ。

「それじゃあ、行つてきますね」

「すまないね、チトちゃん。小鞠たちの事、よろしくね」

「はい」

雪子が見送り、チトはユーリを後ろの荷台に乗せ、小鞠と蛍を探しに行くことにした。

当初は夏海も行こうとしたのだが、夏休みの宿題をまだやっていないので、雪子からその点を突かれて、夏海は今頃、テキストとにらめっこをしているだろう。

ドッ、ドッ、ドッ

ドドドドドドドドドドド

ドドドドドドドドドドド

似ている状況でも前の世界と比べるもなく、今の状況の方が断然良い。

チトとユーリがケツテンクラートに乗って小鞠と蛍を探している頃、

その捜し人である小鞠と蛍は更に山奥まで迷い込んでいた。

「ううぐすつ……」

蛍は声を上げて泣いてはいないが、涙をポロポロと流している。

小鞠も蛍と同じく泣き出したいが、今、自分が泣けば、事態はより一層、悪化するし、蛍をますます不安にさせてしまう。

（わ、私はお姉さんなんだから、何とかしないと……）

「蛍、大丈夫だからね。わ、私はお姉さんだもの。絶対に蛍を家まで送るからね。離れちゃダメだよ」

「せ、センパイ、道、わかるんですか？」

「わからないけど、ここで座っていてもどうにもならないし」

小鞠は蛍の手をギュッと握り、彼女を先導する。

「蛍、足元に気を付けて、こけないようにね」

「は、はい……」

「えっと……たしかこつちから来たよね？」

「わ、私はこつちから来たような気が……」

「周りが木ぼうっかりで、どっちを向いても同じに見える」

「も、もし、反対に行つてたら、余計に迷いますよ」

蛍の意見の通り、今自分たちが進んでいる道が来た道と反対側だったら、自分たちは今よりも更に山奥へと進むことになる。

「だ、大丈夫だって、段々目も慣れてきたし……深呼吸して落ち着けば絶対道わかるから」

小鞠は蛍を安心させようとするが、

リーン!!

「ぼやー!!」

小鞠の足元で鈴虫が突然鳴きだし、その声を聞いて思わず小鞠は変な声を上げてしま
う。

「せ、センパイ……!?!」

「な、なに……さっきの……」

「鈴虫みたいです」

蛍が謎の鳴き声をだした正体を小鞠に伝える。

「私たちどうなるんでしょう?」

「……」

すし……」

昼間、二人はチトの運転するケツテンクラートに乗ったにもかかわらず、そのエンジン音をすっかり忘れているみたいだった。

まあ、この状況ではパニックを起こしているのです、昼間、わずかな時間乗っただけのケツテンクラートのエンジン音なんて覚えていた筈もなかった。

その間にも謎の音（ケツテンクラートのエンジン音）は自分たちに近づいてくる。

小鞠も蛍もお互いに体を抱き合っている。

すると、森の奥から明かりが見えると、

「こまりー!!」

「ほたるー!!」

自分たちの名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「あつ、ちーちゃん。小鞠と蛍が居たよ!!」

音の正体、明かりの正体は自分たちを探しに来たチトとユーリが乗ったケツテンクラートだった。

「チト・ユーリ……」

知り合いがこうして迎えに来てくれたことに小鞠も蛍も安心感からか、腰を抜かしてしまう。

「大丈夫？」

「その……安心したら腰が抜けちゃって……」

「わ、私も……」

チトとユーリは小鞠と蛍をケツテンクラートの荷台に乗せて、家路へと戻ることにした。

まず最初に同行者である蛍の家に行き、彼女をそこで降ろしたのち、三人は越谷家へと戻った。

「チト……ユーリ……」

「ん？」

「なに？」

越谷家に戻る中、小鞠はチトとユーリに、

「その……私が腰を抜かしたこと、夏海には内緒にして」

小鞠は先程、腰を抜かしたことに関して、チトとユーリに妹の夏海には黙っていてくれと頼む。

「あつ、うん……」

「わかった」

「それと、れんげにも言っちゃダメだからね」

小鞠はついでに夏海の他にれんげにも黙っていてくれと頼む。
年上としてのプライドがあるのだろう。

こうして、ケツテンクラートと再会した日のドタバタな出来事は幕を閉じた。

翌日、チトとユーリは庭でケツテンクラートの整備をしている中、夏海は雪子から一学期の成績についてお説教を受けていた。

「ちーちゃん」

「ん？」

「夏海はどうして怒られているの？」

ユーリはチトになぜ、夏海が怒られているのかを聞いてきた。

彼女にしてみれば、夏海が怒られている理由が分からないのだ。

「どうやら、成績が悪かったみたいだ」

「せいせき？」

「休みの前の勉強の結果が悪かったみたいだ」

「へえ、夏海は勉強が苦手なのか……分かるなあ……私だつてこの世界の文字を覚えるのに結構苦労したからねえ」

ユーリはこの世界で暮らし始めたばかりのころを思い出すかのように真夏の空を遠

目で見ている。

「うわああー!!」

「っ!?!」

突然、夏海の悲鳴みたいな大声が聞こえてきたので、チトとユーリがビクツと体を震わせて見てみると、そこには雪子に羽交い締めされながらも足を柱に絡ませて必死に抵抗している夏海の姿があった。

「なに、逃げているの？話はまだ終わってないよ!!」

雪子のいない隙について逃げ出そうとしたのだが、失敗して見つかったようだ。

「ああああー蝉が呼んでいるうゝ体が勝手にいゝ……」

「往生際悪いよ夏海!!」

「いやだあー!!」

しかし、雪子の力には勝てず、そのまま居間へと引きずられていった。

「……」

チトとユーリは啞然としてその様子を見ていた。

夏海のお説教が終わり、今日は蛍の家に行くことにした。

ケツテンクラートでれんげの家に行き、彼女を迎えに行った後、昨日行った蛍の家に行く。

蛍の家はれんげの家や越谷家とは違い、建築されたばかりの家で構造も越谷家やれんげの家のような和風の建築ではなく都内にあるフローリングタイプの家だった。

突然の訪問は蛍には寝耳に水だったようで、何故か彼女は当初、自分の部屋に皆を招き入れることに対して拒絶しているようだった。

そして蛍は『掃除するので待っていて』と言い残して部屋の中に消えていく。

部屋の中ではドツタン、バツタン　と言う音や蛍の悲鳴みたいな声があった。

しばらくしてから蛍が部屋を開けると今どきの女子と言った部屋があった。

本間に部屋が散らかっていたのかは疑問だったが、招き入れられたので、みんなは蛍の部屋に入る。

小鞠がアルバムを見つけ、見せてもらうと、そこには今よりも背が小さな蛍の姿が移された写真があった。

小鞠が小学校一年生の時の写真かと訊ねると、

「それは去年の写真です」

「去年？」

背が小さな小鞠とチトはたった一年で人はここまで身長が伸びるのかと顔をひきつらせた。

一方、夏海は最新機種のゲーム機をみつけ、ユーリを誘ってゲーム機で遊んでいる。

れんげはゲーム機にもアルバムにも興味を示さずおもちゃを探していた。

そして部屋の中にあるクローゼットの中におもちやがあると思ひ込んでいた。

おそらく彼女の家ではおもちゃを押し入れにでも閉まっっているから、おもちゃはこういったところにしまっただと想像しているのだろう。

蛸はなぜか必死にれんげを止めていた。

なにか変なモノでも入っているのだろうか？

しかし、結局、クローゼットの扉は混乱した蛸自身の手によって開けられてしまった。

その中からたくさんのおもちの模した人形が出てきた。

しかもすべて蛸のお手製……

(ねえ、ちーちゃん……)

(なんだ?)

(蛸って意外とやばい子なのかな?)

(……ノーコメントで……)

チトとユーリは蛸の将来が少し心配になったが、れんげたちはこの沢山の小鞠の人形は夏休みの工作だと思ひ、みんなで人形を作ることになった。

夏海はれんげの人形を作り、小鞠は猫の人形、れんげは庭によく来る狸の人形をつくった。

「ちーちゃんは何を作ったの?」

「……又コ:ユー、お前は?」

「私はねえ……」

ユーリは自分の作った人形を見る。

「これがおじいさん、カナザワ、イシイ、てんちよー、わたし、そしてちーちゃん」

いつぞやイシイから聞いた食糧製造プラントでパンを作ったようなユーリがこれまで知り合った人の顔の人形をチトに見せた。

「……」

チトはユーリが作った自分の顔を見て、複雑そうな顔をする。

その日の夜、夏海の提案で肝試しをする事になった。

村の神社には越谷兄妹の三人、チトとユーリ、れんげ、蛭、一穂の姿があった。

「夜に呼ばれたので花火をするのかと思つて花火を持って来たんですけど……」

蛭とれんげの手には紙袋いっぱいに入った花火があった。

先日、蛭は皆を花火に誘つたのだが、肝心の花火が手に入らなかつたことがあり、そのリベンジをするためにこうして花火を持参してきたのだ。

肝試しのルールは神社の賽銭箱に五円玉を置いてくるのだが、小鞠はなぜか反対の姿勢……

本人は怖くないと言うが、顔色はなんだか悪い。

昨日、蛭と一緒に山で遭難しかけたことをまだ引きずっているのかもしれない。

「チトやユーリもこんなつまらないよね？ 暗いし危ないし……」

小鞠はチトとユーリに賛同を求めるが、

「うーん……別に私は暗いところは慣れてるし……」

「私も暗いところは苦手だけど、皆や明かりがあるから平気だよ。それに肝試しなんて初めてだからやってみよう」

あの世界では暗いことなんて日常茶飯事だし、肝試しというイベントはチトとユーリは今回初体験なので、二人はむしろやってみようかと推進している。

結局肝試しをやることになり、小鞠が脅かし役となった。

そして順番は卓が一番となり、夏海が二番となった。

卓はルール通り、賽銭箱に五円玉を置いてきたのだが、奇跡のようなすれ違いで小鞠は卓の姿を見ることなく、本物のお化けが参加しているモノと錯覚し、パニックをおこした。

夏海が境内へといくと、シートをかぶり、神社の鐘を鳴らしている小鞠の姿があり、もうグダグダだった。

肝試しの後は、境内で蛭とれんげが持ってきた花火をした。

楽しかった日々はあつという間に終わり、いよいよチトとユーリが東京に帰る日が来た。

二人の見送りには夏海、れんげ、小鞠、卓、蛍らが見送りに来てくれた。

「お世話になりました」

「それじゃあ、皆、元気でね」

「また、来てくださいね」

「来るときはまた、お土産よろしく」

「……」

「バイバイなん」

「あのケツテンクラート？は一姉えが、手入れしておくからまた来たときはいつでも乗れるようにしておくってさ」

「ありがとう」

やがて、電車が来て、チトとユーリは電車へと乗り込む。

そして発車時刻となり、扉が閉まり、電車が動き出す。

皆はホームで電車が見えなくなるまで見送ってくれた。

「ちーちゃん」

「ん？」

「山……楽しかったね……」

ユーリは満面の笑みを浮かべてチトに山での出来事が楽しかった感想を述べる。

「……そうだな」

チトもフツと笑みをこぼし、あの田舎の村での一夏の出来事が楽しかったことを振り返る。

チトもユーリもきつとあの夏に起こった出来事、そして日々をいつまでも決して忘れないだろう………

肉まんおばけとの遭遇

とある休日、東京の某所の駅の近くの公園……

「はあ……」

その公園のベンチにて途方に暮れている一人の少女が居た。

彼女はウエーブのかかった赤く長い髪で前髪の一部が長く後ろに伸びて、両方のもみあげの部分には星形の髪飾りをつけており、頭のとっぺんからはぴよこんと立ったアホ毛が生えている。

スタイルは女性の象徴である胸は大きく、容姿もそれなりに整っている。

公園に来た周囲の人も気になるのかチラツと見るが声をかける勇気がないのか、仕事などの事情があるのか、声をかけず、少女の前の素通りしていく。

彼女は何故、こんなにも途方に暮れているのか？

それは今朝まで、時間を戻す。

「ねえ、今日はみんなでおでかけしない？」

朝食の席にて、一人の少女が提案をする。

「いいわね、今日はアイツも家庭教師に来ないし」

「ううう……なんかめんどい」

「ええー!!一緒に行こうよ!!」

「外でお昼と言うのであれば、昼食はバイキングがいいです」

朝食の席には五人の少女たちがおり、彼女たちは髪型などの大きな違いはあるが、容姿は五人ともそっくりな顔立ちをしていた。

そう、彼女たちは世にも珍しい五つ子だったのだ。

今日、出かけようと提案したのは、アシンメトリーのショートヘアをした五つ子の中で最も短い髪の長女で、右耳にピアスがついている。

長女の提案にいの一番に賛成したのは次女で、髪型で五つ子の中で最も長い姫カットの前髪とロングヘアを、左右に着けた特徴的な黒い蝶の髪飾りでツーサイドアップにしている。

反対にあまり外出に興味なさそうなのは、セミロングで右側が隠れるような前髪になっっている三女。

そんな三女を強引に連れていこうとしているのはボブカットで緑のうさ耳リボンをつけている四女。

そして、冒頭にて、公園のベンチで途方に暮れているのは五女だった。

彼女たちはそれぞれの名前を、長女は中野一花、次女は中野二乃、三女は中野三玖、四女は中野四葉、五女は中野五月と言う。

彼女たちはある事情から、同じ学校の男子高校生から家庭教師をしてもらっているのだが、今日はその家庭教師が休み、ついでに学校も休みなで、折角の休日を姉妹揃ってシヨツピングへ出かけることにしたのだ。

そして、出かけた先にて……

「みんな!!おつそーい!!」

五つ子の中でも体力がある四女の四葉はスタスタと先に行ってしまう。

「あつ、ちよつと!!待ちなさいよ!!四葉!!」

そんな四女を次女の二乃は慌てて追いかける。

「ハア……ハア……ハア……」

五つ子の中で、一番体力がない三女の三玖は先に行ってしまう次女と四女に着いているのにも一苦労の様子。

「三玖、大丈夫?」

そんな三女に声をかける長女の一花。

「だ、大丈夫……」

三玖は大丈夫と言うが、息を切らし、顔中汗まみれ……

彼女が休日に出したくないと言った理由として、自分は五つ子の中で一番体力がな
い事、

そして、休日の外は混むからだった。

「うーん……それにしても凄い人混みだね……五月ちゃんは大丈夫？」

一花は、末っ子の五月に声をかけるが……

「あ、あれ？五月ちゃん？」

そこに五月の姿はなかった。

彼女は人の波にのまれ、はぐれてしまったのだ。

「一花!!二乃!!三玖!!四葉!!どこですか!？」

人波にのまれ、他の姉妹たちと離れ離れになってしまった五月は必死に姉たちの名前
を呼ぶが、姉たちの姿も声も聞こえない。

「こういう時は、おちついて、みんなと連絡をとって……」

五月はショルダーバッグから携帯を取り出し、姉たちと連絡をとろうとするが、

「あ、あれ？携帯……携帯が……あつ!!確か……部屋の充電器に……」

五月は自分の家に携帯を忘れてしまった。

しかも……

「あ、あれ？財布……財布……」

彼女は自らの財布も家のリビングのテーブルに忘れていた。

ここに来るときは一花が切符代をおごってくれたので、お金を使うことなくここまで来ることが出来たのだが、姉妹とはぐれ携帯も財布もない状態となり、五月はまさに孤立無援の状態となった。

そして、場面は冒頭に戻る。

孤立無援となった五月。

運よく、ここに居るのを他の姉たちが見つ付けてくれればいいのだが、この広い街中で、人一人を見つけるのはなかなか難しい。

交番へ行けば一番手っ取り早いのだが、迷子となり、孤立無援状態となっている五月にそこまでの冷静な判断が出来ず、こうして公園のベンチで項垂れていたのだ。

しかも、事態は悪化し……

ぐうぐう……

「ううぐお腹が空きました……」

五月は五人の姉妹の中で一番食べる子だった。

朝から平然とカツ丼をペロリ、学校の食堂では、うどんの大盛りにとツピングの天ぷらを三つ以上、デザート付きで、その値段は平均で一食1000円を軽く超える。

さらに放課後はコンビニで肉まんを三個は平気でペロリ。

ここで食べて夜ご飯を食べられるのかと思いきや、夜ご飯も五人の姉妹の中で一番た
くさん食べる。

四葉ほど運動はしていないのに、燃費だけは五つ子の中で一番悪い。

財布が無ければ切符どころかコンビニで食べ物さえ買うことはできない。

空腹と孤立無援な状況に高校生ながらも泣きたくなる心境な五月。

そんな五月の鼻孔を美味しそうな匂いがした。

「ユー、お前、食べ過ぎだぞ……さつき肉まんとピザまんを食べたばかりじゃないか。こ
の後、お昼ご飯もあるのに、今からそんなに食べて大丈夫なのか？」

なんだか聞き覚えのある様な声……と言うか、「肉まん、ピザまん」の単語に反応して
五月がふと、顔を上げると、そこには自分よりも少し年下の少女が二人居た。

そして、二人の少女の内、一人の少女の手には紙に包まれた美味しそうなメンチカツ
があつた。

「へーきだよ、ちーちゃん。お昼ご飯は別腹だから」

そう言つて、メンチカツを持った少女はおいしそうにメンチカツを口へと運ぶ。

「ちーちゃんも食べてみる？あのお肉屋さんのメンチカツ、とつてもおいしんだから」

そう言つて、ユーと呼ばれた少女は二つ目のメンチカツをもう一人のちーちゃんと呼
ばれていた少女に食べさせようとする。

五月は無意識の内にベンチからゆらりと立つと、自然と彼女の足は、二人の少女の下へと向かっていた。

「じゃ、じゃあ……あー……」

ちーちゃんと呼ばれていた少女がメンチカツを食べる前に……

「あむっ……」

五月はそのメンチカツにかみついていた。

「っ!?!」

突然、横からフツと出てきた五月の姿にびっくりする二人の少女。

しかし、そんな少女たちの様子を気にすることなく、メンチカツを咀嚼する五月。

一口噛んだ時にサクリと音を立てて、そこからじゅわりと肉汁が溢れる。

口の中に広がるのは、たっぷりとした肉汁。

軽い食感の衣と混ざり合い、口の中でほどけていく。

塩と胡椒が利いた、けれど決して利き過ぎていない絶妙な加減の肉。

コンビニで売っている様なものではなく、肉屋で売っているだけあって、良い肉を使っているためか、肉汁もコンビニのメンチカツと比べると一味違い、物凄い旨味を舌に感じる。

空腹となった五月の胃に生気を戻す様な……

生きているという実感を覚えさせてくれそうな感覚になる。

「ちよつ、あんた誰!」

「ああ〜っ!!…わ、わ、わ、私のメンチカツが〜あ〜!!」

なんだかんだ言つてちーちゃんと呼ばれていた少女もメンチカツを食べたかつたよ
うだ。

その証拠にちーちゃんの目は五月にメンチカツを食われて涙目になっている。

「えっ?」

メンチカツを食べてほんのわずかであるが食欲を満たしたことにより、五月に理性が
戻る。

そして、自分が今、何をしてしまったのかを自覚する。

「あつ、す、すみません!!」

五月は慌てて二人の少女に頭を下げて謝る。

「お、お腹が空いてつい…」

『『つい』じゃない!!』

ちーちゃんは、五月に詰め寄る。

「ほ、ほんとうにごめんなさい!!」

「まあ、まあ、ちーちゃん、許してあげたら?それにこの人、なんかちーちゃんと声が似

ていない?」

「ぬうく……そんなわけがない!!それにお前は良いよな!メンチカツを食べることが出来たんだからさあ……!!」

ちーちゃん自分と五月の声が似ていることを認めてはいないが、ユーにはこの二人の声がそっくりに聞こえた。

「それで、アンタは一体誰なのさ?」

ユーは五月に名前を訊ねる。

「人の名前を訊ねるのであれば、まずは自分の方から先に名前を言うのが礼儀ですよ」
五月は、ユーとちーちゃんに自分の名前から名乗るのが礼儀だという。

「メンチカツ泥棒のくせに偉そうだな」

ユーとちーちゃんは呆れる感じで、五月を見ている。

「私はチト。それで、こっちが……」

「ユーリです。それで、アンタは?」

「私は中野五月です」

三人の少女は互いに自己紹介をする。

(ナカノ?アズサと同じ苗字だ……もしかして知り合いかな?)

ユーは、自分の知り合いに同じ「中野」と言う名字の知り合いが居ることから、眼前

に居る五月は知り合いかと思つた。

この時、まだユーは知らなかつたが、自分の知る中野梓と五月の姉であり、中野家の次女の声がそっくりだった。

「それで、中野さんは何故、私のメンチカツを食べたんですか？」

ちーちゃんこと、チトはジト目で五月にどんな理由があつて、見ず知らずの筈の自分のメンチカツを横から食べたのかを訊ねる。

「じ、実は……」

五月はチトとユーリに事情を話す。

自分は姉妹たちと共に çık かけてきたのだが、人波に吞まれてその姉妹たちとはぐれてしまつた事、

携帯と財布を家に忘れてしまつた事、

更にお腹が空いて動けなくなつてしまつた事、

そんな中、チトとユーリの二人が自分の目の前でメンチカツを食べており、その匂いを嗅いで思わず我慢できずにチトのメンチカツを食べてしまつた事、

それらを聞いて、二人は……

「イツキ、いくつなのさ？」

「子供か？」

「うう……返す言葉もありません」

事情はなんであれ、五月がチトのメンチカツを食べてしまった事には変わりはない。

「で、迷子なら、交番に行けばいいでしょう?」

「交番なら、駅の反対側にあるよ」

チトとユーリが迷子になったのであれば、交番で保護してもらえと伝え、その交番の場所も五月に教える。

「そ、そうですか……で、ですが……」

「ん?」

「どうしたの?」

「その……お腹が減って……力が出ません……」

「……」

五月はお腹が減って動けないという。

しかも彼女のお腹は盛大に空腹であると言わんばかりに腹の虫が鳴いている。

「さっき私のメンチカツを食べたばかりじゃないか!!」

「あ、あれだけでは全然足りません!!」

メンチカツ一つでは五月の胃袋を満たすほどではなかった。

そりゃあ普段から、朝からカツ丼をペロリ、昼食もうどんの大盛り+トッピングの具

材三つ以上＋デザート、放課後は肉まん三つ、夜はご飯の大盛り＋おかずを平らげる五月の空腹時の胃袋にメンチカツ一つでは焼け石に水である。

(ユーみみたいな奴だな……)

声はチトに似ているが燃費の悪さ＋食べる量はユーリみみたいな五月だった。

チトとユーリ……二人がもしも合体したら、それこそ五月二号になるのではないだろうか？

彼女の家庭教師がこの現場を見たら、きつとそう思うに違いない。

「そういえば、ちーちゃん。私もお腹が空いたのだ」

五月の話聞いてユーリも今は空腹だと言う。

時間帯も昼に近い時間……

五月ではないが、お腹が減る時間帯でもあった。

チト自身もお腹が減っていた。

だからこそ、五月にメンチカツを食べられたことに対してあそこまで怒ったのだ。

「……それじゃあ、帰ろう……お店でお昼ご飯を何か作ってやるから。私もお腹減った

し……」

「おおい！」

チトがお昼ご飯を作ってやると言うと、ユーリは目を輝かせる。

反対に……

「……」

五月はまるで捨てられた子犬の様な視線をチトとユーリの二人に向けている。

『お昼ご飯』と言う単語を聞いて五月の胃は空腹度を増し、

「早く何か食べさせてくれ!!」

と、食べ物強請っている。

「……」

当然、その視線に二人は気づいている。

(ねえ、ちーちゃん)

(なんだ?)

(あの人、こつちを見ているよ)

(気にするな……交番の場所は教えたし、はぐれたのであれば、あの人姉妹も探している筈だ。きつとあの人姉妹がすぐに見つけてくれるはずだ)

(でも、空腹の中、イツキは、ずっとここで待っているんだよね?)

(まあ、そうなるな)

(……空腹の辛さは、ちーちゃんも知っているでしょう?)

(……)

確かにユーリの言うとおり、チトも空腹の辛さは嫌と言うほど経験がある。

この世界に来てでもそれを忘れることなく、一つの教訓としている。

それは、

食べ物を粗末にするな!!

である。

(ねえ、ちーちゃん……)

(はあ……わかったよ……)

ユーリの説得と自身の空腹体験から、チトは等々折れて、

「貴女も来ますか?」

チトが誘うと。五月は先程まで捨てられていた子犬の様な絶望感が漂う顔から
パアッと輝く顔になる。

それはまさしく、砂漠のど真ん中でオアシスを見つけたかの様な心境だっただろう。

「い、いいんですか!?!」

「まあ、ここで見捨てるのも寝覚めが悪いので……」

「あ、ありがとうございます!!」

「ただ、今日は店長さんが不在なので、そこまで多くのメニューは作れませんけど……」
本日、日曜日は、ねこやは定休日であり、店長も久しぶりの休日なので、朝からどこ

かに出かけている。

よって、今日の調理担当は、必然的にチトになる。

なので、そこまで手の込んだ料理はチトにはまだ出来ない。

だが、ユーリも五月も質よりも量なので、問題はなさそうだ。

そして、やってきたねこや。

「……洋食レストラン、ねこや？」

「そう、ここが私たちの家であり、お世話になっているお店」

「家？……お二人は姉妹なのですか？でも、あまり似ていない様な……」

「物心がついた時には二人で暮らしていたけど、実際に私とユーは、血は繋がっていない

……でも、私もユーも互いに家族だと思っている」

「……」

自分や家庭教師兼同級生の男子高校生の家も事情を抱えていたが、この二人も家庭には何か事情があるのだろうかとうと五月は察した。

今日は店が休みと言うことで、店の正面口には『本日休業』と書かれた札がかけられていた。

もつともチトとユーリはある事情から、この正面口を使用することはない。

よって、いつもの通り、裏の勝手口から入る。

カギを開け、ノブを回して、

「どうぞ!」

五月を招く。

「ん? そういえば、お腹が空いていたのに、無事にここまで来れたね?」

ユーリが五月に店まで来れたことに疑問を感じ、空腹で交番に行けなかったのに、ねこやにはこうして来れたことを五月に訊ねる。

すると、五月は、

「ご飯のためならば、多少の空腹は問題ありません!!」

「……」

超ドヤ顔で五月はそう言うが、チトもユーリもリアクションに困る反応だった。

「それで、何が食べたい?」

チトは手を洗いながらユーリと五月に何が食べたいかを訊ねる。

「私はなんでも結構です!!」

「何でもって……それが一番困るんだけどなあ……」

「じゃあ、ちーちゃん。私はチャーハンが食べたい!!」

「チャーハン……あれは結構力を使うんだよなあ……」

ユーリからのリクエストを聞いて、面倒そうに言いながらもチトは厨房の冷蔵庫から

チャーハンに必要な素材を出していく。

ユーリと五月は適当なところに座り、料理が出てくるのを待っている。

「えつと……チャーシューは確か作り置きモノがあつたから、それを使うか……あとは野菜と卵と、ご飯と……付け合わせは、ワカメと卵の中華スープでいいか……となる」と、ワカメと……」

厨房の台に食材が置かれる。

「さてと……」

チトはまず、付け合わせのスープから作る。

乾燥わかめを水に戻し、鍋に水を入れて湯を沸かす。

鍋の水が沸騰したら、鶏ガラスープの素、酒、塩を入れひと煮立ちする。

そして、沸騰したら、わかめを入れ、溶いた卵を少しずつ入れ、最後にごま油と白ゴマを入れて出来上がり。

次ぎはメインのチャーハンを作る。

チトは腕まくりをして、まな板と包丁を取り出す。

そして、まず、チャーシューを食べやすく、火の通りも早い大きさにスライスする。

次に長ねぎは横に切れ目を入れてみじん切りにする。

同様にピーマンも種を取り除き、細かく切る。

中華鍋に火を入れ、油を敷き、鍋が温まつてきた時に片手で卵を割り、お玉で崩して、大きく混ぜ合わせる。

そして、半熟の状態一度鍋から取り出す。

鍋をそのままの状態野菜とチャーシューを入れて炒める。

具材が炒め上げるとご飯と卵を入れると、

「っ!？」

チトは鍋を大きく揺らしながらご飯を炒める。

鍋の中のご飯は大きく揺らされるたび、宙に舞い上がる。

これがチトの言う『力を使う』を意味していた。

「凄い……ご飯が宙に浮いています……」

五月はその光景を見て、思わず声を漏らす。

「鍋から放り上げられたご飯が、空中で炎の上を通り抜ける……その時、ご飯と具材は直に炎にあぶられる。それによって、余分な油が飛んで、ご飯がパリリとなり香ばしくなる。鍋の中でいじいじとかき混ぜているだけだと、油でベタベタしたモノしか出来ない……」

チトは中華鍋を大きく揺らしながら、何故こんなに大きな動作なのかを説明する。

「そういえば、ちーちゃんが作った最初の頃のチャーハンはベチャベチャしていたもん

ねえく……」

「うん、うん」

最初に店主から教わりながら作ったチャーハンはチャーハンもどきと言う失敗料理だった。

その頃から見ると、チトの料理の腕は確実に上がっていた。

チトは頃合いを見て塩、コシヨウ、オイスターソースを少量入れてまた大きく中華鍋を揺らす。

出来上がったチャーハンをチトは皿へと盛る。

五月の前には皿に盛られた黄金色の山が聳え立っていた。

香ばしい香りが漂っており所々に細かく刻んだ肉と野菜が鉾物のように存在している。

「いっく……」

五月はそのメニューを見て思わず唾を飲み込む。

「では、いただきます……」

手に取ったレンジでこんもりと山になった料理を掬い上げ、それを口に運ぶ。

五月は空腹ながらもそれを味わうかのように口の中で転がし咀嚼する。

「……」

その後は、ひたすらに無言：ただ無言で食べ進めて行く。

(い、これ、おいしい！)

香ばしい油と甘辛く味付けがされた肉と少し癖の強い野菜の旨みをたっぷりと吸い、素晴らしい味となった熱々の米。

口の中でパリリとほぐれ、舌の上で踊るように旨みを炸裂させ、噛み締めるとさらに旨みを吐き出す。

そして、その味を柔らかく包み込む卵。

肉、野菜、コメ、そして卵。

一匙、一匙が素晴らしい味の連続で手が止まらない。

ひたすらにチャーハンを食べ、時折スープを飲む。

スープはあっさりとした薄味に仕上げてあるので、チャーハンの味を惑わすことはなかった。

朝、姉である次女が作った朝食を姉妹の中で一番多く食べたにも関わらず空っぽになった胃袋が満たされていく。

チトやユーリともどもひたすらに無言でチャーハンを掻き込んでいく昼の時間……

五月にとつては、静かな……だが確かに幸福な時間であった。

「どうかな？ 味は？」

チトが五月にチャーハンの感想を訊ねる。

「ほんつとうに美味しいです!!」

チャーハンを平らげた後、五月はチトに感想を述べる。

「このチャーシュー、独特の肉の味がしましたが、使っているのはどんな豚なんですか？」

「それは豚じゃなくて、イノシシのチャーシュー」

「へえ……どうりで、独特の風味を感じました」

異世界食堂の常連の一人から普段の食事のお礼で以前、立派なイノシシを貰った。

店主はそのイノシシの肉を使って、チャーシューを作ってみたのだ。

大きなイノシシだったので、作り置きの方もあった。

今回のチャーハンにはそのチャーシューを使用したのだ。

「それで……その……」

五月はなんか気まずそうな顔をする。

「ん? どうしたの?」

「その……お、おかわりを……してもいいですか?」

五月はチャーハン一皿ではまだ足りないようで、おかわりを頼んだ。

(ちーちゃんも初めて此処に来た時もパンとスープをおかわりしたけど、その時のちー

ちゃんとイツキのリアクションがそっくり……)

声も似ていれば、おかわりを頼んだ時のリアクションもチトと五月は似ていた。

「……ま、まあ・ユーが居るから沢山作ったけど……」

ユーリが居るので、チトはそれなりの量を作っていたので、おかわりをしても問題ないと言う。

五月から皿を受け取り、おかわりのチャーハンを出す。

「ちーちゃん!!私もおかわり!!」

予想通り、ユーリもおかわりを頼んだ。

それからユーリと五月は争うかのようにチャーハンをおかわりした。

五月がねこやで昼食を摂っている頃、五月の他の姉妹はと言うと……

「どう?!居た?!」

「ううん、こつちにはいない!」

他に姉妹たちが、五月が居ないことに気づいたのは、お昼の時間よりもかなり前で、その後、姉妹たちは買い物をそつちのけで自分たちの末っ子を捜しまわっていた。

そもそも、五月がはぐれてしまったのは、人ごみの他に五月がお昼ご飯は何にしよう?
?

最初は五月の携帯に電話をかけたが、彼女は自宅に携帯を忘れて出てきているので、

当然出るわけがない。

「フードコートやレストランを見てきたけど、居ないよお」

「全く、どこに行つたのよお」

「一人で帰っちゃつたのかな？」

「……でも、五月、財布を忘れているかもしれない」

「「えっ？」」

三女、三玖のつぶやきに固まる残り三人の姉妹たち。

「三玖、それってどういう事？」

「……見間違いかもしれないけど、リビングのテーブルに五月の財布を見たような気がして……」

「「……」」

三玖の話の聞いて、他の三人の姉妹たちは、表情が固まる。

「あつ、で、でも……私の見間違えかもしれないし……」

三玖もリビングのテーブルに置いてあつたのが、本当に五月の財布だつたのか自信がなかった。

財布なんて出かける際の必須アイテムだし、それを忘れるなんてありえない事だ。

でも、もし、本当に財布を忘れているのだとしたら……

「一応、交番に行ってみましょう」

「そうだね」

「そうね、もしかしたら、交番に居るかもしれないし……」

「えっと、ここから一番近い交番は……」

迷子になったのだから、五月もきつと交番に居るのではないかと思い、五月を除く姉妹たちは交番へと向かった。

その捜し人である五月はと言うと……

「う〜ん……この杏仁豆腐もなかなかの絶品です〜」

ねこやにてデザートの中の杏仁豆腐を食べていた。

匙で掬い口の中に入れると、つるんとした食感と杏仁豆腐独特のさわやかな味わいが口の中に広がる。

「ねえ……」

満面の笑みを浮かべながら杏仁豆腐を食べている五月にユーリが声をかける。

「なんですか?」

「いや、『なんですか?』じゃなくて、お昼ご飯食べて、デザートまで食べたんだからさあ、もう、お腹いっぱいになっただんじやない?」

「はい!!どうもありがとうございます!!」

「そうじゃなくて、他の姉妹の人、探さなくていいの？」

「……あっ!？」

ユーリの指摘を受けて、今自分が迷子になっていることを思い出した五月。

(ほんとうに大丈夫かな？この人……)

(この人もイシイみたいにポケつとしているなあ……)

「お昼ご飯、どうもありがとうございます!!」

「交番の場所わかる？」

「はい、大丈夫です!!」

そう言って、五月はねこやを後にした。

そして、チラッとねこやのあるビルを見ると、

(近くにはケーキ屋さんもあるみたいですから、今度はちゃんと財布を持って、来てみましょう)

五月は、今度ちゃんと財布を持参して、ねこやの料理と近くのケーキ屋も入ってみようと思った。

そして、チトとユーリから聞いた交番へと向かうと、

「あっ!!見つけたよ!!五月!!」

「えっ?ほんとだ!!五月ちゃんだ!!」

「もう、心配したんだからね」

「まったく、高校生にもなって迷子になるなんて……」

「ご、ごめんなさい。みんなには心配をかけたみたいで……」

「まあ、こうして無事に見つかったから良かったけど……」

「五月、あんた携帯はどうしたの？」

「そ、それが、家に忘れてきたみたいで……」

「三玖が、リビングのテーブルに五月の財布を見たって言っていたけど……」

「ああ……三玖が見たのは間違いなく、私の財布です」

「はあっ!? あんた、携帯も財布も忘れていたの!?!」

次女の二乃は、五月が財布も携帯も忘れていたことに呆れる。

「は、はい」

「五月ちゃん、それまでどこにいたの?」

「そうだよ!! もうお昼の時間過ぎているんだよ!?! 五月、お腹空いてないの!?!」

五月の燃費の悪さは、当然他の姉妹も知っている。

朝食を食べた時間から、かなりの時間が経っている。

普段の五月ならば、もうとっくに胃の中は空になっている筈だ。

しかし、眼前の五月は空腹を訴えている様子は全くない。

「あつ、実は親切な方が、お昼ご飯を作ってくれまして……それとデザートで杏仁豆腐も食べました!!」

五月は馬鹿正直にねこやでお昼ご飯を食べたことを話した。

まあ、真面目な五月らしいと言えば、五月らしい。

そんな五月に対して、

「はあつ?! あんた、私たちが必死に探している中、食事をしていたの?!」

次女の二乃が五月に詰め寄る。

「えっ? は、はい……」

「……」

五月の言動に呆れる他の姉妹たち。

「裁判長、五月には今度、パフェでもおごってもらいたいと思います」

二乃が一花に今回の騒動の罰として、五月に今度、パフェでもおごってもらおうと進言する。

「採用」

「えっ?! ちよつと……」

「じゃあ、私、プリンアラモード!!」

四葉は五月にプリンアラモードをおごってもらおうことにして、

「私は抹茶パフェ」

三玖は戦国武将が好きな一面があり、それと同時に和風なモノを好み抹茶ソーダなるものを愛飲している。

「私はチョココレートパフェね」

提案した二乃はチョココレートパフェをおごってもらおうつもりで、

「じゃあ、お姉さんはフルーツパフェをおごってもらおうかな？」

「えっ？ええええー!!」

有無を言わず、姉たちにパフェをおごる羽目になった五月であった……

後日、五月は姉たちにパフェをおごることになり、その姿を見た彼女たちの家庭教師である男子高校生はその光景に首を傾げていた。

さらに後日……ハンドルネーム『M・A・Y』と言う人物が、ねこや、そしてねこやの近くのケーキ屋に現れ、口コミサイトに高評価をつけたことで、ねこやと近くのケーキ屋にお客が殺到した。

さらにまた後日……

「二乃、チャーハンを作ってください!!」

五月は中野家の厨房担当である二乃にチャーハンを作ってくれと頼む。

「チャーハン？まあ、いいけど……」

二乃は五月に頼まれたとおり、チャーハンを作る。

二乃が作ったチャーハンを食べた五月であるが、

「なんか違う……」

「何が違うの？」

「以前、ねこやで食べたチャーハンは、もつとパラつとして、お米がほんのりとこんがりとしていました!!」

「……あんた、人に作らせておいて、随分な意見ね」

「二乃もねこやのチャーハンを食べればわかります!!あそこのチャーハンは……」

と、二乃にグダグダとチャーハンとは何ぞやの講義をし始めた。

「そうだ!!今度、二乃もねこやに行きましょう!!そうしましょう!!そうすれば、チャーハンのなんとるかが分かるはずです!!」

「えっ?ちよっ……」

「いいですね?二乃」

有無を言わず、五月は今度、二乃を連れてねこやに行くことにした。

後日、ねこやに二乃と共に来た五月であったが、チトの声が五月に似ていることに驚くと同時に、ユーリは、二乃の声が中野と言う名字の知り合いの声に似ていることに驚いた。

四女に關しても以前、木組みの家と石畳の街とあの田舎の町で出会った少女たちと声が似ていることにも驚愕した。